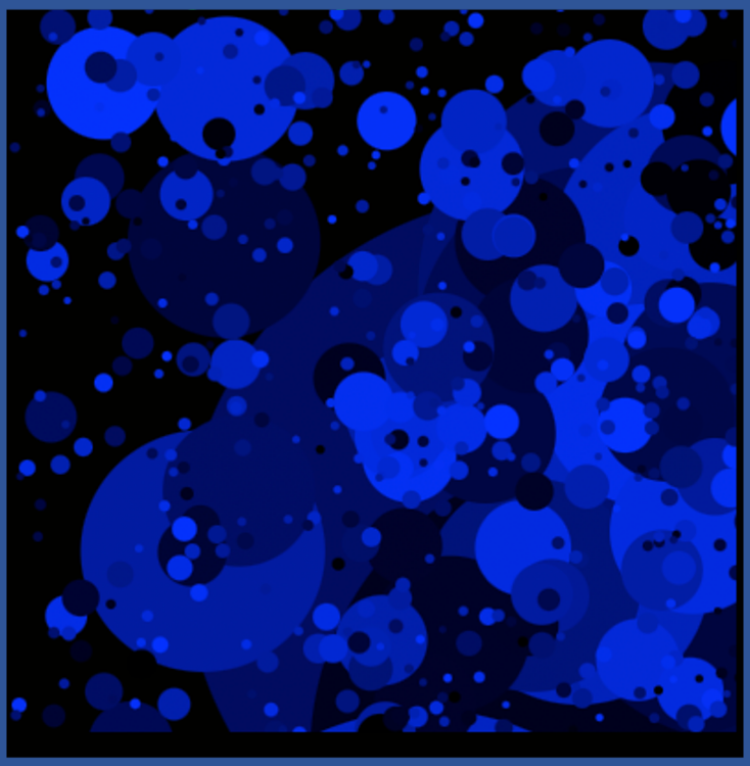
アルセーヌ・ポルゴ



夏木康志　著

目次

プロローグ

プロローグ 2

登場人物紹介 3

第一部　CYBER 探偵物語

第 1 章 エリンギ 8

第 2 章 カラス 11

第 3 章アイウォッチ 15

第 4 章 情報兵器 20

第 5 章地球崩壊 23

第 6 章火星突入 27

第 7 章 誘拐 29

第 8 章 再会 31

第 9 章 過去 35

第 10 章 皇帝 37

第二部　キングオヴギャラクシー

第 11 章金星フロンティア 42

第 12 章銀河の呼び声 44

第 13 章 刺客 45

第 14 章量子宇宙船 47

第 15 章キングオヴギャラクシー 49

第 16 章グレート・アジア 51

第 17 章銀河の大王 54

第 18 章 招待 56

第 19 章 黒幕 58

第 20 章さらば太陽系 59

第三部　火星皇帝の野望

第 21 章銀河世界 64

第 22 章 師 66

第 23 章 養殖 68

第 24 章 依頼 69

第 25 章堕ちた不死鳥 70
第 26 章 奪還 73
第 27 章 帰還 76
第 28 章 逆襲 79
第 29 章 問題 84
第 30 章 予兆 86

第四部　復活の鷹
第 31 章沈黙の惑星 90
第 32 章 裏 97
第 33 章 エリカ 100
第 34 章 西郷 102
第 35 章決戦前夜 103
第 36 章復活の鷹 106
第 37 章新生ヘルリベンジャーズ 109
第 38 章ブラックホールズ 112
第 39 章初めての敗北 115
第 40 章　宿命の闘い 119

第五部　過去世界
第 41 章現在・過去・未来 130
第 42 章謎の新人 137
第 43 章最後の調整 139
第 44 章沈黙のギャラクシー 142
第 45 章実力者登場！ 147
第 46 章ビックマウス 151
第 47 章隠された真実 153
第 48 章 絆 160
第 49 章暗殺依頼 165
第 50 章未来への帰還 172

第六部　VS 太陽系帝国
第 51 章アフター・ワールド 184
第 52 章地獄からの使者 189
第 53 章最強の挑戦者 193
第 54 章憤怒の皇帝 196
第 55 章最強タッグ 199
第 56 章ある火星人の最期 202
第 57 章西郷去る！ 205
第 58 章 マリア 206
第 59 章 KOG 開催！ 209

第 60 章予選開幕 214

第七部　地獄からの使者

第 61 章ネオ・ファルコンズ初戦 218
第 62 章王子登場！ 221
第 63 章ゴールデンシューターズ 226
第 64 章隠された力 228
第 65 章 本道 234
第 66 章最終決戦！ 237
第 67 章運命の日 245
第 68 章 ポルゴ 246
第 69 章これから 249
第７０章決着（ ケリ ） 252

第八部　パープルパンサー

第 71 章 紫の豹 258
第 72 章 400% の勝率 262
第 73 章究極の依頼 267
第 74 章仮面の中の真実 269
第 75 章究極の絶滅危惧種 271
第 76 章究極の必殺技 273
第 77 章 切り札 275
第 78 章 嵐 278
第 79 章 冥王拳 282
第 80 章 無言 285

第九部　月世界教徒の反乱

第 81 章沈黙の月世界教徒 292
第 82 章最悪の将軍 294
第 83 章 蛇の穴 295
第 84 章崩壊の序曲 296
第 85 章将軍の陰謀 298
第 86 章偽りの招待状 299
第 87 章邪悪なる儀式 300
第 88 章謎の実力 306
第 89 章 死闘 307
第 90 章 混迷 314
第 91 章 欲望 317
第 92 章 葛藤 319
第 93 章決戦開幕！ 321
第 94 章法皇の罠 325

第 95 章 妖術 331
第 96 章 逆襲 335
第 97 章 雲隠 337
第 98 章 講和 340
第 99 章 再び 341
第 100 章 命 342

エピローグ
エピローグ 346
あとがき 349

プロローグ

プロローグ

－ワカマツっー！

－ポルゴ、妹を、ユメミを頼む！

嫌な悪夢が脳裏をよぎる。忘れることも出来ないあの日、俺たちは火星人たちと戦っていた。何度となく地球侵略戦争を仕掛けてくる連中。パルチザン運動。火星人一個小隊に囲まれた俺とワカマツ。生命の杖という強力な武器を持っている火星人たちに勝てる術はなかった。

かつての親友ワカマツは、楯になって俺をかばってくれた。一瞬のスキを突いて、俺は窮地を脱した。いや、俺だけは、と言い直すべきか...

あの明るかったワカマツの妹は、事実を告げると、ただ押し黙っていた。気が済むまで俺を殴ると、泣きながら「わかったワ。こんなことしても、もう兄貴は二度と帰って来ないのね...」と言った。その後、「兄貴の人生の責任取ってくれる？」と言って、俺の家に転がり込んで来た。

ただひたすらに、あてになるのはカネが全てとオンラインビジネスに打ち込む彼女。俺は戦争で友人や家族を全て失っていた。そして彼女もそうだった。ふと気付くと俺は地球圏でサイバー探偵の仕事を生業としていた。ネット上の雑用屋だ。

俺のせいで天涯孤独となった彼女。俺たちはふと気付くと、生活のためならあの火星人とすら取引をしていた。プライドは捨てていた。戦争で失った友人たちの顔がよぎる。しかし、一方で守らなければならないひとがいる。

本当は今の生活や柵をすべて捨てて鳥にでも生まれ変わってみたかった。一瞬を謳歌しているかに見える瞬間（ いま ）も俺たちは過去の記憶や火星皇帝の野望に縛られていた。全てが無に帰するあの瞬間、それは、きっと俺にもいつかやってくるはずだ。

飛び立つことは出来ない。人間は鳥にはなれないし、翼はそこにはなかった。クールに金が全てと言いつつ、俺たちのそばには重い枷があった。歴史はどこにある？ と聞かれたら、俺たちの両肩に今も重くのしかかっていると答えるだろう。

今から話す物語が、俺の知っている全てだ。火星人が侵略をあきらめた今も、失った人々の命は帰っては来ない。俺もいずれは死に行く定めだ。全てを語ることは出来ないかもしれないが、俺が生きた証拠は、ここに残しておきたいと思う。

ARSENE PORUGO

登場人物紹介

アルセーヌ・ポルゴ：地球圏で活躍する腕利きの CYBER 探偵。主人公

ミス・ワカマツ：ハッキングを得意とするエージェント。ポルゴのパートナー

火星皇帝：火星帝国の支配者。火星帝国建国者の直系の子孫

オータニ：ポルゴのライバルを自称する探偵、凶器攻撃もいとわない

ジョー・ヨージ 12 世：仕事成功率 200 %を誇るインテリジェントガイ、法学部出身のプロフェッショナル・レスラー、U スタイルの使い手

グレート・アジア 13 世：地球最強のプロレスラー、性別は女性

銀河の大王：銀河帝国議会議長。初代の大王から数えて三代目にあたる。龍族

ミスター東郷：ポルゴの古武術の師匠

レイナ東郷：ミスター東郷の一人娘

ジュン・バード：メキシコ流空手の達人。クールガイ

エリカ：プロレスラー、グレート・アジア 13 世の良きライバル

西郷詩郎：合気柔術の使い手、柔道も極めている

グレート・アジア２世：伝説の女子プロレスラー

タビト大伴：CYBER 探偵の草分け的存在。グレート・アジア２世の父

キラー・L: 超一流の暗殺者

ジャック・ハロルド：タビト大伴の一番弟子

イザベラ・ハロルド：ジャックの妻。惑星間航空工学を専門とするエンジニア

G’（ ジー・ダッシュ ）：最強の強化人間

ギャラクティカ・ジュニア：銀河帝国の王子

ニコラス・トルーマン：王子の教育係

マリア・ハロルド：古武術の達人、高校生

ジェラール・ボルドー：月面人を率いる将軍、極東流カラテの使い手

ビリー・ローレンス：レスリングジム会長

ネオ・ルヴェルチュール：月世界教会法皇

ライアン・ヤマモト：謎のジパング人格闘家、ファイトスタイル高専柔道＋サバット

ソレイユ・シャノワール：伝説の黒猫、ネコ流カラテの達人

ジュンコ・ホシノ：マッドサイエンティスト

リアル・パンサー：最強のキマイラ

プリンス・ネコマタ：元ネコ族最強の男（ 白猫 ）、元伝説の殺し屋

第一部　CYBER 探偵物語

第１章 エリンギ

「もうそいつは死んでいる！」

　そう言ってやつらを追い払う。

　そこには死にかけた火星人がいた。キノコ状のアタマから緑色の血を流して倒れている。

「火星皇帝閣下万歳！　ごふっ。」

　火星人は最後の言葉を吐いた。地球連合政府へのスパイの末路は虚しい。

　義手が両方とも空に向かって伸びている。硬直が始まったようだ。

「火星皇帝？　まだ地球に未練があるのか。」

　火星人と地球人は表面上和平を保っている。表面上は、だ。

第３次地球侵略戦争が終わってもう５年になる。火星人はずっと地球の重力に惹かれていた。

地球を侵略して軽重力病を克服することが火星人の野望だった。軽重力病？ 地球人とは縁がない病気だったな。これが理由で地球と火星は戦ったのだ。

地球から火星へ人々が移り住むようになって２００年が経過した。

最初の内は科学の力を地球の１００億の民は礼賛した。２１００年のアジア人口戦争以来、過剰な人口を地球外に押し出す移民政策が機能し続けた。大インドと中国連邦が和解の条件に決定したのが、火星への移民政策だった。しかし火星移民第４世の時代になって人類は火星の軽重力に耐えられなくなった。遺伝子レベルでの異常が発生し、火星人の頭はキノコ状に変形し、血液は緑色に変わり、不要になっていた両手は退化しはじめた。それだけなら良かった。火星に住んでいると寿命が地球暦で４０歳を越えることが出来なくなった。

そうして火星人は地球を恋しがった。

俺はトキオで探偵をやっている。

たまたま場末の酒場を出たところで火星人がリンチにあっているのを目撃したってわけだ。

だいたい地球の中を火星人が歩いているのがめずらしい。上手く義手を使い、キノコ状の頭をメットで隠していたようだったが、運が悪かった。チンピラに見つかって殴られたのだろう。地球人の反火星感情は激しい。かつてのジャパンとチャイナの関係のように。

　俺は火星人の死体を無視して歩きはじめた。

　こういうことはよくある。それに俺たちツチブタから見れば、火星人はキノコだった。どうってことはない。同じ起源をもつ人間同士にはとても思えなかった。

　そう、月面人は地球連合政府が水爆ミサイルを発射して絶滅させた。

　仲良くやろうじゃないか。残った者どうし。だがそうはいかない。ふっかけてきたのはキノコの側だ。まあ、月を殺ったのは俺たち地球人の都合だったが...

「そう、ずいぶんとエゲツないもの見たんじゃない。当分椎茸は食べられないね。まあ、エリンギもだけど。」

　エージェントのミス・ワカマツは俺の目撃談をこう総括した。

「ところでポルゴさん、またメールで依頼が来ていたよ。」

「どこからだ？」

「東方商会だって。聞いたことある？ 報酬は３億リラ。」

「さ、３億か。うん、引き受けよう。東方商会は火星との裏貿易で儲けたダミー会社だ。アイウォッチで情報を収集してくれ。」

　実際、ふところはちょっと寒かった。３億リラという大金に裏がないと言えない事は知っていたが、俺達にはそのリスクに打ち勝つ自信があった。

第２章 カラス

　電線の上ではよく肥えたカラスがこちらを睨んでいた。

　ああ、アイウォッチにメールがきた。依頼の件だったな。なになに、マーシャンポリスからだ。

　火星の都だ。例の東方商会からの依頼だ。１０時にシンジュクの劇場前で待ち合わせだと！

　馬鹿げた場所だ。まあ、いい。地下鉄を使って３０分だな。未来に地下鉄があるのは意外かもしれない。しかし、いつになっても大都会の地価は高いため、仕方がなかったのだ。

　９時５５分だ。劇場の看板の前でポスターに目もくれずに周囲を見渡す俺。

「ポルゴさんか？」

「ああ。あんたは？」

「東方商会の対地球支部のナニオだ。依頼の件だが。その前に...」

　俺の周りにサングラスを掛けた男が取り囲んだ。４人だ。

「テストといこうか？」

　いきなり殴り掛かってくる男たち。仕方ない。

俺は４人の男のパンチを上手くパリングして、かわした。迷わずナニオの方へ突進した。

　フロント・スリーパーでナニオを絞め上げる。

「ボスの首はとったぜ。まだヤル気か？」

　４人の男はボスのナニオの安全を無視して俺に襲いかかってきた。

　仕方ない。俺はふところの「武器」を使って 4 人に応対した。

「武器」は銃刀法違反スレスレの俺のオリジナルの兵器だ。

　危うく１番背の高い男を切りつけるところだった。客をヤったら、まずいよな。

「もういいぞ！　ミスター・ポルゴ、君の実力はわかった。依頼の話と行こう。」

４人の男は車に乗って去って行った。ナニオは俺を劇場の中に案内する。

　暗がりの中ナニオは仕事の話を持ち出した。

「実は金星にウチの会社から新商品を輸出することになったのだが。屈強な君にボディガードを依頼したい。報酬は例の額だ。」

「か、火星から金星までの直通航路は現在航行不能じゃないか。そこを。」

「火星皇帝閣下は外貨を欲しておられるのだよ。金星フロンティアの開拓団たちは火星の美味な食料を求めている。皇帝は火星の食料と引き換えに軍備を増強するつもりだ。３角貿易だ。金星には火星から食料を輸出し、火星は地球から兵器を買う。もちろん全て裏貿易だがな。」

「俺はパイロットじゃない！　火星も金星も嫌いだ！」

「安心したまえ。ミスター・ポルゴ。君の任務はボディガードだ。地球から火星に兵器を輸出する際の。」

「なるほど。兵器と行ってもおそらく情報兵器か、新型の核兵器だろうな。」

　ナニオの目が光ったのが暗闇の中でもわかった。

「いい読みだな。ただ全ては、ビジネスだよ。第４次地球侵略戦争が始まっても、我々には関係ない。もちろん倫理的な話だが。」

　利潤が生まれるところには積極的に関係してゆくのが我々探偵のビジネスだ。

「俺も探偵をビジネスでやっている。依頼は引き受けよう。」

「で、その兵器はどこから宇宙（ そら ）へ上げるのだ？」

「宇宙だと？ 我々が欲しているのは兵器の権利のみだ。ある研究所の情報兵器を秘密裏に我々は買い受ける。そのとき邪魔が入らないよう君は見張っていてくれればいい。」

「研究所はどこだ？」

「あとの詳細はメールでだ。君は年増には興味がないのかね？」

　ナニオはスクリーンにまだ未練があるようだ。

　俺は劇場を後にした。１０時３０分だ。

目の前のゴミ置き場には残飯をあさるカラスが群れていた。

シンジュクは飲食店の残飯が多い。オバチャンが石を投げると一目散に逃げて行った。

ふてぶてしいカラスは電線の上から人間の行動をずっと観察していた。

そしてオバチャンがいなくなるとまたゴミをあさり出した。見張り番だ。

第3章アイウォッチ

俺はナニオの依頼を受けて、正確には東方商会からの依頼を受けて国際情報研究所に向かった。国際情報とは名ばかりでハッキングや惑星間スパイ活動を専門に行っている研究所、いや古臭い言葉で言えばアジトだ。

火星から金星に食料を密輸する計画は上手くいっている。

金星フロンティアの開拓団は火星の低重力で育った植物を好んで食べる。

現在の技術では金星では温度が高過ぎて美味い植物は育たないのだ。

　ああ、植物繊維。

　これがなければ生けてはゆけまい。また金星の鉱物資源は地球に輸出されている。

　これは余分かな。そんなわけで、火星は金星から大金をせしめ、その金で地球から情報兵器を購入する計画だ。

　国際情報研究所にノートパソコン、いや今の時代にそんなものは存在しない。

　俺はウェアラブルコンピュータ、つまり腕時計に小型のコンピュータを搭載したものを身に付けて自動ドアを通った。

　商品名アイウォッチ。

「私はポルゴだ。東方商会から紹介されているはずだ。」

「はい。お待ちしておりました。例の商品は地下２階の応接室で受け取って下さい。」

「わかった。ありがとう。」

　ナニオは事務所に電話で既に情報兵器の支払いは済んでいると言った。

俺はそれを受け取ればいい。これで３億リラ。裏がなかったら、表を見てみたい。

地下２階、応接室に入る。

「私は当研究所特別研究員、ドクター・カレーです。例の商品ですが、既にインターネット上にセットアップしてあります。あとはサイトにパスワードを入力すれば機能します。メールで御送信するのはあまりに危険ですのでポルゴさんにお願いする次第です。ちょうどいい、そのアイウォッチにパスワードと匿名の URL を転送しましょう。」

「ああ、頼む。」

俺は腕を伸ばして、左の手首にライトの赤外線に当てる。これで完了だ。

「あとは東方商会まで出向くだけだ。ありがとう。」

楽な仕事だ。もちろん、邪魔が入らなければの話だが。

研究所を出る。富士山の麓にある。樹海の中だ。

後を付いてくる影がある。やはりか。まさか幽霊ではないよな。

「お前は、オータニだな。」

同業者だ。俺のアイウォッチの通話内容を盗聴してこの仕事を嗅ぎ付けたらしい。

番号換えないと。奴は鎖鎌を持って俺の左手を狙っている。

手首ごとかっさらうつもりだ。

「ポルゴっ、３億リラは俺が頂く。」

オータニは鎖鎌を右手に持ち、大上段から振りかぶる。

俺は咄嗟にビッグファイヤーで応戦した。つまり、口から火をはいた。

オータニの顔面をライターの強烈な炎が捉える。これだけでは相手は怯まない。

「アイウォッチを寄越せ。命だけは助けてやる。」

嘘だろう。奴の気配には殺気が満ち溢れている。俺は迷わず素手でオータニに殴りかかった。うまくかわされた。

オータニはまた大上段から振りかぶった。こんどは左手を上に挙げて、いわゆる空手の上段挙げ受けの形で鎖鎌の柄を受けた。

「甘いな。」

　オータニは鎖を右手で俺の首めがけて投げ付けた。俺の首にチェーンが巻き付く。

　さらに首をチェーンで締め上げながら、鎌を遮二無二振り回す。

　しかし、長いチェーンだ。しかも近寄りがたい。さらに危険だ。

「うごっ。」

「くたばれっ、ポルゴっ。」

　俺はついに背中に隠していた「武器」を使ってオータニに強烈な１撃を加えた。

　そのままチェーンをひっぱり、鎌を奪い取る。

　鎌で攻撃する。いや「武器」の方が軽快だ。ステンレス製で、軽い。

　もちろん芯には鉛が入っているし、切れ味もいい。俺はオータニを「武器」でKOした。

　とどめにビックファイヤーだ。俺の口から吹いた炎が上手く奴の体に燃え移る。どうせ俺を相手にするために中に防火服を着込んでいるのだろう。

俺は燃えているオータニを後にした。これが俺の仕事、サイバー探偵だ。

危険はいつも背中合わせだ。リスクをマネーに換えるのが俺達の商売だ

第 4 章 情報兵器

「それで、例の兵器は手に入ったのかね？」

「はい、火星皇帝閣下。ポルゴと申す探偵が無事にパスワードを届けてくれました。あとは地球のネットワーク上にパスワードを入力するだけです。」

「ち、地球か。地球のネットワークを全て破壊すれば、我々の悲願も叶う。軽重力病を克服するためには地球のネットワークを根底から揺さぶり、食糧危機を引き起こす必要がある。ミサイル投下と地上軍の突入はそれからだ。ところで、月は手に入るのかね。もちろんテラ（ 地球 ）の月だが。」

「はい、皇帝閣下。月は地球の水爆ミサイルによって廃墟と化しております。秘密裏に地球へのミサイル発射基地を月面地下 500 メートルのところに着工、完了いたしました。」

こんな会話が火星帝国の首都マーシャンポリスで行われていた。火星皇帝は地球のインターネットをコンピュータウイルスの力でダウンさせ、さらに月から地球へミサイルを発射して人口を半減、残った 50 億人を地上軍の投入で侵略しようという計画を立てていた。

　必要な兵器は地球のネットワークをクラッシュする過程で手に入れる。北米大陸や欧州共同体、そして大インドと中国連邦の保持する核兵器をそれぞれ暴発させ地球上の各都市を混乱に陥れるという作戦だった。そしてトドメの月からのミサイル投下。重力エネルギーの爆発は凄まじい。

「わかった。ではさっそく、パスワードを入力させよう。」

　第 4 次地球侵略戦争の開始の合図だった。

　俺はトキオの事務所でミス・ワカマツとコーヒーを飲んでいた。俺たちの仕事にモラルはない。地球と火星の間で戦争が始まったところで関係はない。それに地球と火星の戦争はたいてい外交決着に終わる。地球の一部の大都市が攻撃を受けて、宙軍の衝突が起こり、あとは地球連合政府と火星帝国議会との折衝になるのだ。

　だが、ここに金星フロンティアが介入すると話は大きく異なる。地球は挟撃されるし、全面戦争がぼっ発する。

「それで、パスワードは正しかったんですか？」

　ミス・ワカマツは言った。

「まあな。」

　俺はカップに口を付けた。苦い。

「同業者のオータニが狙っていた。間違いなく本物だ。」

「また戦争が始まるんですか。私たちにとってはビジネスですけど。」

　デスクトップの画面が揺れはじめた。インターネットが攻撃（ クラック ）されている余波だ。

「そうだ。ビジネスだ。企業のコンピュータをクラックして、ゆすりをかける。」

　混乱に乗じて利潤をあげる。それが俺たちサイバー探偵だ。

「でも、ウチのデスクトップもやられちゃったみたいですけど。」

「そのためのアイウォッチだ。ハーフキーボードと特製アンテナを接続すれば、立派なワークステーションだ。」

「なるほど。では、ワタシも手始めにマイクロハード社へ侵入しましょう。」

　アイウォッチの画面には衛星放送が映っていた。オールド・ホンコンやニューヨークはさっそくミサイルの暴発の犠牲になっていた。火星皇帝のしたり顔が浮かぶ。ミス・ワカマツは北米大陸の大企業マイクロハード社にハッキングを仕掛けていた。世界情勢などいっさい気にせずに。さすが、仕事師（ マスター ）だ。

「ミス・ワカマツ、俺たちも核シェルターに避難した方がいい。」

　無視された。物凄い集中力だ。

「おい、聞いているのか。トキオも空爆の対象に入っているようだ。ここはまずシェルターに。」

　ついに俺は仕事に熱中しているミス・ワカマツの右手を無理やり取り上げて、地下のシェルターに向かった。事務所の地下の核シェルターには 10 年分の食糧とバストイレ、2 段ベッドが完備されていた。俺は左手のアイウォッチでひたすら情報収集をした。小さな画面には地球上の各都市の無惨な姿が映し出されていた。

「地球も今回は負けるかもしれないな。水爆ミサイルの射程範囲から火星は大きく離れているし。宙軍（ 地球宙域防衛隊 ）も自由落下に耐えるのがやっとだろう。」

　金星フロンティアでは地球への独立戦争の機会を狙っていたところだった。ヴェヌスブルグ（ 金星の首都 ）では金星宙軍が地球に向けて発進していた。

第５章地球崩壊

　金星宙軍は地球宙域防衛隊に猛攻を仕掛けた。自由落下に慣れていない地球防衛隊は次々と宇宙の塵と化していった。そして月からのミサイル発射が行われた。月の射出機（ カタパルト ）からは核廃棄物を搭載した巨大な岩盤が地球の大都市目掛けて発射された。火星皇帝直属の親衛隊が地球に降り立った。火星帝国の地上軍だ。地球連合政府の議会（ 旧国連議会 ）があるニューヨークは２週間で制圧された。

「これ以上の戦争はビジネスにならないんじゃない？」

　ミス・ワカマツが 2 段ベッドの上でアイウォッチを見つめながら言った。

「ああ、このままだと火星皇帝が地球に上陸する日も近いな。地球の通貨も既に使えなくなっている。地球（ テラ ）の市場で流通するのは火星のマーズマネーだけだからな。銀行システムを落とされたのは痛かったな。」

「このままだと私達火星皇帝の奴隷にされるんじゃない？ ねぇ、ポルゴさん。」

「まあ、俺たちは何とか生き延びるし、火星の支配には屈しない。ビジネスも続ける。密かに土星と連絡を取っている最中だ。」

「ど、土星。ちょっと遠すぎるんじゃない。せめて木星にしたら。」

　土星と木星には衛星軌道上に国際宇宙ステーションがあった。俺は土星から火星を攻撃するための薬品を密かに輸入しようとしていた。火星人はマーズアタックという薬物を嗅ぐと一瞬の内に狂気と快楽のどん底に陥り、気絶してしまうのだ。土星の宙域には大量に存在している。太陽系連合条約では禁輸になっているのだが...

「火星皇帝の親衛隊が地球に上陸した今、火星皇帝は裸の王様同然だ。そこを突く。火星皇帝を愛人もろとも人質にとってカネもうけをする。」

「どうやって火星に向かうの？」

「マーズアタックで火星人スパイの宇宙船をハイジャックする。」

　無茶苦茶な計画だった。それ以上に地球は無茶苦茶だった。そして俺はマーズアタックがあと１週間で手に入ることを知っていた。

「オータニだが、ジパング首相のムドーはどこにいる？」

　オータニはトキオの首相公邸に侵入していた。得意の鎖鎌攻撃で SP を８人倒していた。

　相棒のゴトーは首相の秘書を人質に取り、首を締め上げていた。

「それは言えない！」

「役立たずめ！」

　首相の秘書を失神させたゴトーは不必要に暴れ回っていた。

「ゴトー、その辺にしておけっ！」

　既にムドーはシェルターに避難してロックしていた。無政府状態だ。秘書が首相代理を執行していた。その秘書も今は意識がない。

「ファイヤーじゃ。俺はジパング首相に会うのじゃ。そしてジパングを乗っ取る！」

　オータニは完全に自分の世界に入っていた。トキオの首相公邸が既にキノコ頭の火星皇帝親衛隊に取り囲まれているとも知らずに。

「中にいるのはこれだけか。お前は、地球国際テロリストのオータニだな。一体何人倒したんだ。」

　入ってきた火星人はキノコ頭から青い汗をかきながら、オータニにたずねた。

「俺はサイバー探偵じゃ。国際テロリストではない。」

　オータニが言い終えるやいなや、すかさずゴトーはオータニに襲いかかった。

「オータニっ、くたばれ。」

　ゴトーの裏切りに焦るオータニ。鎖鎌を遮二無二振り回す。

「邪魔者は皆タイホする。」

　火星人は麻酔銃でゴトーを撃とうとした。ゴトーはオータニを盾にした。

「ワシは国際テロリストのオータニを逮捕した。ワシはジパング首相官邸の職員でゴワす。」

「そうか。ご苦労。だが、お前も逮捕する。」

　ゴトーもオータニも拘束された。これが２流のサイバー探偵の運命だ。ジパング地方も火星帝国の軍門に下った。残っているのは大インドと中国連邦だ。

第６章火星突入

　俺は無事マーズアタックを手に入れた。北米大陸連合の基地があるヨコスカまで単車を飛ばした。高速道路は使えなかったが、一般道は無傷だ。今回の攻撃でトキオは、そしてジパングは積極的には狙われなかった。政治的目的のため占領された。将来火星人が移住するため核兵器で汚染することを避けた。

　ヨコスカには火星人スパイの秘密基地がある。火星皇帝から特命を受けた腕利きのスパイたちが何人か住んでいた。金属の反射がまぶしいビルの地下では火星人たちが屯している。ヨコスカは北米大陸連合が火星と密約を結んだ時に火星人スパイを密かに受け入れていた。

　俺はキノコ頭の火星人が秘密基地に入るのを確認した。ここだ。俺はドアを蹴り上げた。

「キノコ（ 火星人 ）どもっ、マーズアタックを吸いたくなかったら、お前らの宇宙船に案内しろっ。」

「マ、マーズアタック！？ お前はヤクの売人か。俺たちはマーズアタックなど不要だ。さっさと帰るんだ。」

「宇宙船だ。宇宙船はどこだ！」

火星人は５人がかかりで俺を取り囲んだ。生命の杖を持っている。俺を焼き殺すつもりだ。「武器」では対応できない。

　仕方なく俺はマーズアタックをバラ撒いた。火星人たちは狂喜のあまり踊り出す。その隙に一人の火星人に体当たりする。同体になって倒れる。生命の杖を奪った。

「まだ十分マーズアタックはある。廃人になりたくなかったら宇宙船まで案内しろ。」

「ひっ、し仕方ない。ついてこい。」

　地下室には射出機が埋め込まれていた。中のポットに宇宙船が入っていた。旧式だ。だが出力は十分。火星まで行ける。

「キーを寄越せっ。」

　俺はマーズアタックを嗅ぎフラフラになっている火星人からキーを奪った。エアロックを開け中に入るとお決まりのコックピットだ。旧式宇宙船の操作方法は地球でも必修だ。高校で習った。核エンジンにスイッチを入れると俺は目的地がマーシャンポリスに設定されていることを確認してコールドスリープに入った。あとは寝ているだけで火星に着く。

　火星に着いた。俺はアイウォッチの地図機能を頼りにマーシャンポリスを彷徨った。

　マーシャンポリスはターミナルに入ると調整大気があり、酸素の心配もない。

　ターミナルの職員にはマーズアタックを嗅がせた。地下街道を彷徨うこと半日、火星皇帝の宮殿が見えてきた。

　火星皇帝が女帝だということはあまり知られていない事実だ。火星皇帝は宮殿に美女を数名侍らせていた。皇帝の愛人だ。地球人から見れば火星人の女性はエリンギに見える。火星皇帝はエリンギに義肢が生えている。どの火星人も同じだが。そして火星皇帝は特権として生命の杖のスイッチをオンにしてマーシャンポリスを闊歩するのだった。建国の父の直系の子孫にして、帝国の最高権力者、それが火星皇帝だ。愛人を抱きながら火星皇帝は生命の杖も持たずしたり顔でベッドに寝ていた。

　地球侵略に駆り立てられ残りわずかな火星皇帝親衛隊を俺はマーズアタックで突破すると、火星皇帝の宮殿の中に侵入した。地下 150 メートルの宮殿の内部はシャンデリアに彩られていた。

　俺は生命の杖で執事を脅して火星皇帝の寝室を聞き出した。

「無礼者！ ノックをせい。」

　これが火星皇帝の声だ。

第 7 章 誘拐

　俺は火星皇帝の寝室に生命の杖のスイッチをオンにして侵入した。火星皇帝の愛人たちは恐怖のあまり火星皇帝に抱きついて離れなかった。

「俺は地球人のポルゴだ！ 火星皇帝、死にたくなければおとなしく投降しろっ。」

「ポ、ポルゴか。私もその名は聞いたことがあるぞ。しかし、私の寝室に侵入するからにはそれなりの覚悟があるのだな。今は私の軍隊が地球すら配下に治めているのだぞ。」

「地球から撤退しろ。それが俺の目的だ。生命の杖で焼き殺されたくなかったらな。」

「いつから一探偵が惑星政治にまで介入するようになったのだ。」

「今日からだよ。地球植民地化はビジネスに差し支える。」

「我らは軽重力病から逃れるために地球が必要なのだ。ポルゴよ、命だけは助けてやってもいい。生命の杖をこちらに寄越せ。私の命令が聞けないのかな？」

「その手には乗れない。主導権を握っているのはこっちだ。それにマーズアタックもある。」

　火星皇帝の愛人たちは恐怖のあまり義肢を硬直させていた。エリンギ状の頭は収縮しはじめていた。生命の杖の恐ろしさは火星人たちが一番良く知っている。俺はマーズアタックを火星皇帝の愛人の一人に嗅がせた。喜びのあまりそいつは踊りだした。

「マーズアタックか。皇帝である私が人格を崩壊させられてはひとたまりもない。相談に乗ってやらんこともないぞ。」

　ついに火星皇帝は折れた。俺は地球から火星軍を追放するよう生命の杖を片手に要求した。

「それから火星皇帝の命と引き換えに身代金を要求する！」

「金か。マーズマネーだな。キャッシュで支払おうか。」

　俺は残った火星皇帝の愛人の内一人が皇帝から離れ逃げ出そうとするのを見逃さなかった。迷わず生命の杖の柄の部分で相手をしたたか殴打した。炎の部分で叩かなかったのは俺にも良心があるからだ。相手がキノコ頭であっても、緑の血液を持っていても、人間は人間だ。

　殺しはよくない。

　火星皇帝は俺の条件を全て飲んだ。火星軍をいったん地球から撤退させることを誓った。

　キャッシュで身代金を寄越したのも意外だった。俺は火星皇帝のみを人質に取り、皇帝の愛人たちを解放した。それから火星皇帝専用の宇宙船で皇帝もろとも地球に向けて出発した。火星皇帝誘拐のニュースは太陽系全土に知れわたった。

第 8 章 再会

　地球に降りた。トキオに着いた。火星皇帝を解放した。火星皇帝は直ちに地球侵略を停止する演説を行った。全てが上手く行く。

　はずだった。

　火星皇帝親衛隊が俺達を襲撃した。俺は事務所に帰ってくつろいでいた。寝込みをかかれてしまった。持っていた生命の杖をオンにして立ち向かった。何とか残りのマーズアタックを使い急場はしのげた。しかし、ミス・ワカマツを人質に取られてしまった。俺は仕方なく奴らに生命の杖を渡して投降した。収容所に連行された。

「皇帝閣下がお呼びだ。」

「居ないと言ってくれ。」

「たわ言を。着いて来い。」

　俺は火星皇帝の前に再び立った。そこにはオータニが居た。

「ポルゴよ。今度は立場が逆になったな。しかしお前ほどの男も居まい。私はお前の勇気に惚れた。実際、私は約束どおり地球侵略を中止した。そこでだ。お前たちの命を救ってやらんこともない。その代わりショーを演じてもらおう。ここにいるオータニと闘って勝てれば、ワカマツもろとも解放してやろう。」

「そんな簡単な条件か。面白い。」

　オータニは得意の鎖鎌を持ってスタンバイしていた。

「ゴングは私が鳴らそう。そえでは、ファイトッ。」

　ゴングが鳴った。オータニは鎖鎌を振り回しながら言った。

「ワシはもうオータニではない。グレート・タニじゃ。」

　オータニはいきなり俺に火炎攻撃を仕掛けた。両手でガードする。ガードの上から鎖鎌で強引に叩きつける。

「つうっ。」

　あまりの痛みのあまり俺はかがみこんだ。その頭をつかんでオータニは DDT を仕掛ける。

「DDO じゃ。いや、やはり DDT じゃ。」

　馬鹿さ加減は変わっていない。俺はそのままダウンした。

　ダウンした俺の頭を両足ではさんでオータニは俺を抱え上げた。逆立ちの状態で俺は抱えあげられた。そのままカナディアンバックブリーカーの姿勢で俺を頭上高く抱え上げる。

　そして俺を頭から地面に叩き落とした。サンダーファイヤーパワーボムだ。

　すさまじいパワーだ。おそらくネオ・ステロイドを注射されたのだろう。俺は２度目のダウンを喫した。

「ポルゴよ。降参か？　ワカマツという女の命はないぞ。」

　火星皇帝は言った。

　手元に「武器」はなかった。俺は立ち上がるとオータニにタックルをかました。

　そのままマウントポジションに移行した。そして鎖鎌を奪った。

　オータニは強烈な力で俺を跳ね除けようとあがいた。その隙に俺はオータニの首に鎖を巻きつけた。

「ファイヤーじゃ。俺は負けん。」

　俺はオータニをチェーン絞首刑にして KO した。

「ミス・ワカマツを解放してもらおう。約束どおり俺が勝ったぜ。」

「火星皇帝が嘘をつくわけにはいかんな。約束を守ろう。」

こうして俺たちは解放された。ミス・ワカマツは元気だ。

第９章 過去

俺はパートナーのミス・ワカマツを取り戻すことが出来た。ミス・ワカマツは俺の死んだ親友ワカマツの妹だ。紆余曲折を経て、今は一緒に探偵の仕事をして暮らしている。

「ポルゴさん。あの時は、私のために闘ってくれて、ありがとう。」

「パートナーを守るのは、プロの責務だ。気にするな。」

実際、俺に油断があったのは事実だ。惑星元首である火星皇帝にケンカを売って、無傷で済むほど、世の中は甘くなかった。俺は、有能なパートナー、つまりミス・ワカマツをどこかにかくまっておくべきだった。

ありし日の友人ワカマツは、俺と同じ探偵だった。そう、第３次地球侵略戦争の時、ワカマツは死んだ。火星人、いやキノコたちに殺されたのだった。生命の杖の炎で体を貫かれてだ。俺達は、火星人達の秘密基地に潜入していた。俺がヘマをやらかして、火星帝国親衛隊の１個小隊に囲まれてしまった。頼みの綱の、マーズアタック－つまり火星人によく効くヤクだ－も使い切ってしまい、絶体絶命のピンチになってしまった。俺が親衛隊の隊長に生命の杖で襲われそうになった時、ワカマツは盾になって俺をかばってくれた。俺は、ワカマツを生命の杖が貫いている隙に、隊長にタックルをかまし、そのままナイフを隊長の首に当てて、人質にとって窮地を脱した。

要するに、ミス・ワカマツは親友の妹であり、命の恩人の唯一の肉親だった。

第三次地球侵略戦争の嫌な記憶を思い出してしまった。誰にでもつらい過去はある。あの戦争は、地球人の中の隠れ火星シンパ、つまり太陽教の信者達の内乱が引き金になっていた。太陽教は人類が宇宙に出てから起こった宗教で、同じ一つの太陽を神として崇め、全ての太陽系惑星に住む人類の平等を唱えるという教義だった。その平等というところが大問題だった。月にしろ、火星にしろ、金星フロンティアにしろ、環境条件は大きく異なり、そこに住む人類ももはや同じ種族とは認めがたかった。それを全て平等の条件で扱うという思想は、地球人の俺には理解しがたい。キノコ星人の姿にまで遺伝子レベルで変異した火星人は、地球人とは全く異なるように思えた。

さらにだ、太陽教はその教義の必然として、１つの統一国家の存在を導いている。それが、未だかつて実現したことのない太陽系統一国家構想であり、通常のところ太陽系帝国構想と呼ばれている。火星帝国皇帝は来るべき太陽系帝国皇帝の座を虎視眈々と狙っており、自由主義を基本として皇帝の存在を認めない地球連合政府の壊滅を常に目指していた。

同時に金星フロンティアの問題もある。金星は未だに地球の植民地だ。当然、火星帝国の地球侵略と同時に、独立戦争を引き起こすことを狙っている。これは、今も変わらない。

第三次地球侵略戦争は、火星皇帝が太陽系帝国皇帝の座を手に入れるために、地球の太陽教徒を扇動し、金星フロンティアも巻き込むことで起こった大戦争だった。

俺達は探偵だったが、抗火星勢力（ パルチザン ）としてあの戦争を闘った。そして、友人を殺された復讐を兼ねたのが、俺がやった火星皇帝の誘拐だった。結果、友人の妹を危険な目に遭わせてしまい、後悔している。

確かに信教の自由の問題があり、一探偵の俺に、太陽教の信者のことを論じる資格はないだろう。しかし、いつの時代にも宗教をもととするイデオロギー紛争や、新興宗教の世直しと自称するテロは絶えない。俺は紛争やテロを憎んでいた。そして、同じ太陽

を共有する惑星連合としての太陽系帝国構想を、ブチのめすつもりだった。一つの皇帝、あるいは独裁者を頂点とする世界には、自由は存在しない。そして俺は、自由と孤独を愛する職業である一人の探偵だった。

俺に言わせれば、火星帝国から皇帝を取り除かない限り、この太陽系に平和と自由は永遠に訪れることはない。火星皇帝誘拐は、これから俺が始めるスペースオペラの序章であり、ボクシングに例えれば、ジャブだ。

地球侵略を企み、太陽系帝国樹立を目指す火星皇帝の権威を失墜させ、自由な世界を実現する。

それが、俺の目的の一つだ。

第 10 章 皇帝

まだ俺達の住んでいるこの世界の歴史を話してなかったな。そう、地球から宇宙へ人類が植民をはじめて、200 年後の世界だ。最初、人類は実験的に月にホテルを作って、観光都市を作った。月への移住に成功し、人類は今からちょうど 200 年前に火星に植民を行った。

火星皇帝は火星帝国建国の英雄の直系の子孫だった。火星人は、前も話したよな。キノコ頭で血色の悪い肌で、そして義肢をはやしている。一般には、火星人たちは、移民した地球人の子孫が重力の小さな火星の環境に適応した結果、今の容姿に変異したとされている。

それは違う、と俺は睨んでいる。おそらく、あのキノコ姿は遺伝子レベルで人種改良を行った結果だろうことは想像に難くない。たった 200 年で人類があそこまで自然に変

異を重ねて進化するとはとても考えられない。火星人の遺伝子は、人間ベースだが、その構成のすべてが人類の遺伝子のみからではないだろう。おそらく、火星に適応するのが比較的素早かったとされる、菌類や植物、そして、火星人が好んでペットにしている宇宙ウツボの遺伝子を取り込んでいるはずだ。

俺に言わせれば、火星人は地球人と同じ遺伝子を保有しているという意味では、既に「人類ではない」という結論になる。

このような神をも恐れない人種改良、いや遺伝子操作は、火星皇帝の極端なエリート主義にその原因をもっている。

火星人を俺が許せないのは、火星人が地球人を組織的に誘拐しては、奴隷として強制労働をさせているところだ。最初は、地球と同じハウスロボットを導入して、火星人たちは余暇を楽しんでいた。しかし、ハウスロボットの原料となる特殊な鉱物資源が地球でしか生産されないことに火星人が気付いた時、火星人は高価な惑星間貿易を行う代わりに、地球人を奴隷として強制労働させることを考え出したのだった。

全てが、火星皇帝を頂点とする極端なエリート主義―それは皇帝主義というべきものだったが―に原因を持っていた。

火星人たちは、無批判に火星皇帝を崇拝し、太陽教という新たな宗教を生み出すことで、地球人の一部をも取り込んで、太陽系惑星を全て支配しようとしていた。

そして皇帝は、愛人を囲んでいる女帝だった。地球人の俺から見れば、火星人の性別は判断しかねるのだが。そして地球を征服し、太陽系帝国を樹立することで、この世界から自由と民主主義を奪い去ろうとしている張本人だった。

まあ、未だに帝国主義を地でいっている火星の話はこれ位にして、俺達の惑星、つまり地球の歴史をおさらいしておこう。

かつて、地球は国際連盟や国際連合といった、地球国家連合型の機関で国際調停を行っていた。かつてのアメリカ主義（ いやグローバリズムと言い換えたほうがいいかな ）の

ように、実際に機能していたのは覇権主義や勢力の力学（ パワーポリティクス ）だった。つまり、１つの地球政府を作って、地球規模での平和と繁栄を実現することは非常に難しかった。

そこで人類は、欧州統合をモデルケースとして、地域レベルでの国家統合からはじめた。東南アジア連合やラテンアメリカ連合、ロシアを中心とする独立国家共同体といったところから地域レベルで、市場統合、通貨統合、政治統合が行われていった。もちろん、ロシアをはじめとする独立国家共同体は後で欧州連合に統合されたのだが。

こういった流れに逆行し、アメリカや中国、インドといった大国は、地域統合に参加せず、独立国家の状態を維持し、時には、近隣諸国と領土紛争を繰り返しながら、存続していた。

国境紛争がもとで始まった中国・インド間の戦争を調停する際、欧州連合議会代表が提案したのが、旧国際連合の発展的解体と地域連合と一部の大国を機軸単位とする地球連合政府の樹立だった。地域統合という基盤が成立してはじめて、地球は一つの政府を持つことが可能になり、かつての大国や地域連合は地球連合政府の下部機構として格下げされた。

地球 1 つの軍隊としての地球連合軍が創立した際、わずかな大国は、密かに核兵器の開発を続けていた。しかし、俺に言わせれば、民主主義と自由の発展形態であり、地域統合に機軸を据えている地球連合政府は、22 世紀の人類最大の遺産だった。

もちろん、地球連合政府成立の背景には、21 世紀の人類が苦しめられた地球温暖化やそれにともなう異常気象・食糧危機、さらには石油資源の枯渇による資源争奪戦争といったグローバルな問題に対する当然の対策という前提があった。

火星皇帝の話題から外れてしまったな。最後にまとめておこう。地球は民主主義の伝統を維持している。一方、火星は帝国主義の下、太陽教という宗教を利用することで、人類がフロンティアを拡大しつつあるこの太陽系惑星を全て支配下にいれようとしている。そして、俺は火星皇帝の支配に抵抗するレジスタンスであり、自由を愛する探偵だ。

俺の目的は、火星皇帝の太陽系侵略の野望を打ち砕き、「皇帝」のエゴから始まった太

陽系帝国構想を危機に陥れることだ。そのために、俺は火星人達の最大の弱点、マーズアタックを土星宙域から大量に密輸していた。

第二部　キングオヴギャラクシー

第 11 章金星フロンティア

人類誕生の星である地球、そして今は核戦争によって既に廃墟と化している地球の月（ ルナ ）、皇帝が帝国主義国家を樹立している火星、現在人類が開拓中のいわくつきの惑星（ ほし ）が金星だった。一応、人類の勢力範囲は木星や土星の宙域にも広がっている。しかし、太陽からの距離を考えると、人類の最後のフロンティアと呼ばれているのが、金星だ。

金星は未だ地球からの独立を勝ち得てはいない。地球連合政府は、金星の鉱物資源に目をつけている。さらに、火星との関係で、金星を独立させることは得策ではないと考えられている。独立戦争を仕掛けられる可能性は常にあったが、地球連合政府の為政者は、独立後の金星が火星帝国と同盟を結ぶことを恐れていた。

かつて硫酸の雨が降るといわれていた金星の環境を、人類が生息可能なレベルまで改良するには数世紀以上の莫大な年月がかかると言われている。火星の例を挙げれば容易に想像はつくかも知れないが、遺伝子改良を行うことで、人類を含めた生物種を金星の環境に最適化することも実験されている。

金星帰りの科学者達が生み出した生物が、銀河ワニだ。

銀河ワニは、地球のワニの遺伝子をもとに改良を重ね、地球の大型自動車のサイズまで巨大化させた生物だ。こいつらが恐ろしいのは、銀河のどんな環境にも適応できるというしぶとさと持ち前の凶暴性だ。

金星帰りの分子生物学者が研究費を稼ぐために地球各地で行った銀河ワニ展では、その神秘のワニ皮をぜひハンドバックやベルトにしたいという女性達で大盛況だ。そして、

銀河ワニは夜行性という性質をもっていたため、ワニ展が行われる日中は、サイやカバなどの大型動物のようにおおらかに過ごしていた。これはビジネスになるかもしれない。銀河ワニを生み出した生物学者達は、ワニ展の最中、皮革製品業者と密かに連絡をとっていた。

しかし、平和な昼が終わると、銀河ワニ達は暴れだした。彼らは、近隣の住民に襲いかった。地球連合軍が戦車を数台出したが、大砲ごときに倒されるほど、彼らの皮はヤワじゃなかった。騒ぎに駆けつけた某生物学者が特殊なフェロモンをばら撒くと、彼らは心地よい眠りについた。

俺がこんなくだらない話をしたのは、その銀河ワニが金星フロンティアには人間の倍以上も棲息しているという事実があるからだ。金星を完全征服することは、今の地球人にとって、逆立ちして縄跳びすることよりも難しかった。そんな金星が地球の植民地という中途半端な地位で満足しているのは、食糧問題が原因だった。金星フロンティアはその限られた食糧生産能力の関係上、地球（ あるいは火星 ）に食料資源を圧倒的に依存していた。

金星人（ もちろん彼らは地球人とまだ外見的には大差ない ）を地球人類が影で恐れているのは、彼らが太陽系惑星のキャスティングボードを完全に握っていることだ。彼らが本気になれば、火星と食料資源条約を結んだ上で、最強の生物である銀河ワニを地球に送り込むことで、生物テロを行うことも出来るからだ。

地球人は、かつて地球に生息していたという恐竜の化石を見るたびにある種の郷愁を感じるかもしれない。しかし、彼らの世界と人類の世界が一定の距離を持っているからこそ、我々は安心して恐竜の存在する世界を想像することが出来る。仮に、最大の肉食獣であると同時に凶暴な爬虫類であるような生き物が地球に大量に現れたら、世界はパニックに陥るだろう。そんなことを可能にするドラマチックな生きものが、金星で開発された銀河ワニだ。

金星の歴史と今後を考える際、無視できないのが食料問題だった。そして、地球人や火星人が金星のことを考える際、無視できないことは、銀河ワニの存在だ。

第 12 章銀河の呼び声

今まで太陽系の話しかしてこなかったが、実はこの広い銀河には生物のすむ惑星は他にも多数存在する。地球人類が宇宙で生活を始めてから公式に明らかにされたのだが、銀河には銀河帝国というものが存在し、数世紀前から密かに使者が地球に訪れていた。

銀河帝国の政治システムは、銀河帝国議会を中心とする民主帝国主義だった。銀河帝国のトップは皇帝でも大統領でも総理大臣でもなく、銀河帝国議会議長だった。彼は通常、銀河の大王と呼ばれている。銀河帝国議会をまとめる議長というと、何かあまり権限がないように思われるかもしれないが、彼は銀河帝国の政治的な代表権と軍事的な統括権を信任されていた。

俺は２代前の銀河の大王の映像を見たことがある。２代前の銀河の大王は、頭はワニやトカゲのような爬虫類で２足歩行が可能だった。背中には翼まで生えていた。自らキングオヴギャラクシーというタッグ格闘大会を開催し、決勝戦の常連だった。俺の記憶が正しければ、銀河の大王がキングオヴギャラクシーで優勝したことは、一度もなかった。銀河の大王の得意技、銀河最強の光線技ギャラクシーウェーブは、惑星の１つや２つ位は簡単に破壊できる威力らしい。その２代前の銀河の大王の直系の孫が、今の銀河の大王だ。

地球も含まれる太陽系惑星連合は銀河帝国議会に代表を送り出してはいない。つまり、我々は銀河帝国の版図に含まれない勢力だった。銀河帝国議会議長は、基本的には我々の太陽系に干渉はしない。しかし、例外もある。

銀河帝国の市民は、核汚染を含む環境破壊を非常に嫌う。かつて地球連合政府が樹立され、核兵器の宇宙空間への全面廃棄が決定された際、銀河帝国議会は議長を通じて、宇宙汚染の元となる核の宇宙へのポイ捨て止めるように依頼してきた。さらに、地球が抵抗する月世界に水爆ミサイルを使った際も、銀河帝国議会議長（ ２代目 ）が直々に抗議に地球へ訪れていた。

俺は一度でいいから、銀河帝国へ訪れてみたいと思っていた。既に地球人類の子孫は土星圏で生活するまでになっている。しかし、その何億光年先には、未知の帝国が存在している。そして、銀河帝国への移動を可能にする量子宇宙船というものが、金星フロンティアに存在しているという噂を俺は聞きつけていた。

第 13 章 刺客

火星帝国の首都マーシャンポリスの地下 150 メートルにある火星皇帝の宮殿に一人の地球人が呼び出されていた。

「おお、ジョー・ヨージ 12 世か。よく火星まで来たな。お主の名前はこの火星まで届いているぞ。」

「皇帝閣下、お目通りがかない光栄です。私になんなりと仰せ付けください。どんな仕事でも 200 %成功させて見せます。」

「そうか、それは頼もしい。実は、お主にある人物を合法的に処分してほしいのだが...地球の探偵のアルセーヌ・ポルゴという奴じゃ。」

「お安い御用です。私にかかれば、たいていの地球人はイチコロです。私が苦手なのは、金星に生息しているという銀河ワニくらいのもので。時間と場所はいかがなさいますか？」

「実はワシは近々、現在廃墟となっている地球の月（ ルナ ）で格闘大会を開くのじゃが、その席でお主にポルゴを完膚なきまでに叩きのめして欲しいのだ。報酬は、そうだな、マーズマネーで４億じゃ。もちろんキャッシュで。しかしこれは成功報酬だぞ。本日の交通費と慰労金は別に用意してある。」

「お安い御用です。」

ジョー・ヨージ 12 世（ 通称ヨージ・トゥウェルブ ）は、地球の格闘家ジョー・ヨージの 12 代目の子孫だ。初代ジョー・ヨージは蛇の穴という伝説のジムでレスリングの修行をし、そのレスリングスタイルは他のいかなる格闘技にも普遍的（ ユニバーサル ）に対応し、最も進化したスタイルであるとされ、通常はUW（ ユニバーサル・レスリング ）と呼ばれていた。初代ジョー・ヨージは当時流行していた柔術をはじめとする格闘技の道場に殴りこみにいったりもした。もちろん、現代にはその成否までは伝えられていない。

ヨージ 12 世は、どんな仕事でも 200 %こなす男として業界では知られていた。ヨージにかかれば、倒せない男はいなかった。それはおそらく、あのポルゴであってもだ。他の格闘家とヨージが決定的に異なるところは、その正統的な格闘スタイルのUW（ ユニバーサル・レスリング ）ではなく、彼が地球の大学の法学部を首席で卒業していることだ。

ヨージは法学部で惑星間法を専攻していた。つまり彼は法律に人一倍詳しかった。このため、リングの中での格闘ではとても勝てない強敵も、「こんなヘボい相手、ボクは 200 %勝てマース」という挑発を繰り返すことで、路上の決闘に誘い込んでいた。そして顔面をボコボコにされ、後から傷害罪で訴えるという手段で、ありとあらゆる格闘家に社会的に勝利してきた。彼の得意なセリフは「実際に路上でボクを殴るなんて、社会人としてとても考えられまシェーン。絶対裁判所に訴えてやりマース」だった。法廷での勝率 200 %、まさに最強の頭脳をもったレスラーだった。

火星皇帝は側近に言った。

「ジョー・ヨージ 12 世という男、本当に信用できるのか？ 格闘家としての実力はいぶし銀だが、トップクラスというにはちょっと努力と練習量が足りないように見受けられる。」

「皇帝閣下。ヨージ 12 世はどんな相手にも 200 %勝つと豪語していると聞きます。彼の格闘家としての実力を 75 %としますと、彼の頭脳は 125 %、つまり合わせて 200 %の確

率で、どんな相手でも倒すのです。彼の所属しているジムはあの蛇の穴です。地球のポルゴがいかに生半可に総合格闘技をかじっていようと、UW（ ユニバーサル・レスリング ）の正統継承者にかなう実力があると思えません。」

「そうか、それは安心した。あとは、ポルゴのやつを我々の格闘大会におびきよせる手段をみつけないといかんな。またポルゴのパートナーのミス・ワカマツとやらを誘拐するわけにはいかないだろう。何かいいエサはないかな。奴には、太陽系惑星全ての公衆の面前で恥をかかせてやろう。ポルゴとヨージ 12 世の他にも大会参加者リストを用意してもらいたい。」

火星皇帝の側近が用意した格闘大会参加者リストには、2 人の大物が参戦することになっていた。一人は、銀河帝国議会議長である３代目の銀河の大王であり、もう 1 人は、蛇の穴と並ぶ地球３大レスリングジムの１つであるウェヌスジムの代表であり、地球の５大陸のプロレスのベルトを全て手中に収めているというグレート・アジア 13 世だ。

これから地球暦で半年後にルナで予定されている太陽系最大のイベント、いかなる武器の使用も認められた伝説の格闘大会、それはかつて初代の銀河の大王が開催したというキングオヴギャラクシーだ。

第 14 章量子宇宙船

銀河帝国への移動を可能にする量子宇宙船の往復運賃はマーズマネーで 50 億だ。これは北米大陸の地域連合政府の予算と同じだ。

「50 億だぜ。いくらなんでも無理だろ。激的に危ない仕事を 10 以上引き受けて、さらに俺が生きてれば、なんとかなるとは思うが。」

「ポルゴさん、大丈夫よ。量子宇宙船なんて、ハイジャックしちゃえばいいじゃない。」

「それじゃあ、片道切符になるだろ、ミス・ワカマツ。銀河帝国に上手いメシと美人がいるとは限らないのだから。」

「いまメールが届いたわ。ルナで行われるキングオヴギャラクシーの賞金がちょうどマーズマネーで 50 億よ。一発挑戦してみたら？」

「それだ！」

　俺は半年後のキングオヴギャラクシーに備えて修行を始めた。キングオヴギャラクシーは武器の使用が認められている。しかし、俺はもう「武器」には頼らないつもりだ。人間の体の中には、武器以上の力が眠っている。それが、気という存在だ。

　素人の格闘家は気を具現化して飛び道具の形にして飛ばすことや、あるいは気を武器の姿に変えて闘うことが一番効果的であると信じている。俺は、もっといい方法を知っていた。それはかつて発頸と呼ばれていた技であり、打撃と同時に気を爆発させる最も危険な技の１つだった。打撃が当たる瞬間、敵の体の中で気を爆発させる。この技を使えば、あの硬い装甲で知られている銀河ワニであっても、急所を突いて倒せるはずだ。

「ねえ、ポルゴさん。もしキングオヴギャラクシーで賞金をゲットした時、私を置いて銀河帝国にトリップするつもりなの？」

「いや、トト・ギャラクティカ（ キングオヴギャラクシーの優勝者を当てる賭け ）に俺達が探偵業で稼いだ全財産を掛けて、２人で行こう。」

「さすがポルゴさん。そう来なくっちゃ。」

　ミス・ワカマツは住居を兼ねた事務所の権利書と一年分の生活費以外の財産は全て処分してトト・ギャラクティカにポルゴの名前を書いて早速購入した。ポルゴがギャラク

シーで優勝すれば、銀河帝国に二人で往復して豪遊しても、おつりがくるはずだ。

第 15 章キングオヴギャラクシー

あれから半年が経過して、遂に廃墟となっている地球の月（ ルナ ）でキングオヴギャラクシーが開催された。主催者は火星皇帝、いわくつきの人物だ。賞金の 50 億M（ マーズマネー ）に目がくらんで、俺も参加することにした。

パートナーのミス・ワカマツには俺達が探偵をやって稼いだ財産のほぼ全額をポルゴの名前を書いて、トト・ギャラクティカに賭けてくれるよう頼んでおいた。倍率は 1000 倍だ。何を隠そう、俺が一番キリ人気だった。トトの一番人気は、やっぱり 3 代目の銀河の大王だ。

俺はまだ銀河帝国をまとめている伝説の顔役のあの男に会った事はない。自家用の量子宇宙船で、銀河帝国の議長官邸から直行するらしい。

要注意なのことは、火星帝国が作り出したキラーマシンや遺伝子操作によって生み出された強化人間も参戦していることだった。数世紀前と同じで、ギャラクシーは太陽系、いや銀河全体の欲望と野望が交錯する一大イベントだ。

この大会では武器を持参することが認められており、さっきすれ違った参加者と思われるヒゲ面の大男は鉄球とこん棒、さらに腰元には凶器のナイフを持参していた。俺はこのレベルの戦いで武器を持参するのはずぶの素人だと認識していた。なぜなら、優勝候補の銀河の大王を筆頭として、主力選手は「気」を武器にして闘うことが明白だったからだ。

ギャラクシーは太陽系惑星全てと銀河帝国に生中継されていた。ここで見苦しい敗北を喫することは、プロの CYBER 探偵としての俺の死を意味していた。

決勝戦第一試合の相手は、地球のジム「蛇の穴」出身のジョー・ヨージ 12 世だった。ヨージはリング上でおだやかな笑みを浮かべていた。その笑みの影には余裕と冷徹なまでの自信が見え隠れしていた。俺は４角いジャングルの金網をまたぐと軽くアップライトに構え、左手の掌を軽く開き、右手は拳を硬く握って顎の前に構えていた。俺の構えはボクシングで言う所のオーソドックスだった。レフリーのボディチェックが終わると、冷徹なゴングが会場に響き渡った。

ヨージはリングと同時にタックルに入ってきた。俺はすかさず両足を背後に引いて、タックルをつぶしにかかった。攻防はグラウンドに移行した。右手でヨージの頭を制して、俺はフロントスリーパーを狙った。ヨージは俺の胴に抱きついて、そのまま背後にまわる。

バックをとられた。そのまま右手で俺の右手を羽交い絞めにして、左手を俺の顎にガッチリと巻きつけた。古典的なチキンウィングフェースロックという技だ。俺は自由になっている左腕で相手の左腕をなぎ払うと、そのまま両足でヨージの顔面を蹴り上げ、反動でスタンドポジションに移行した。ヨージは戸惑うこともなく、笑顔で立ち上がり、俺達は構えたまま向き合った。

シュッという音と共にヨージのハイキックが空をきった。俺は一歩後退して今の蹴りをかわした。寝て良し、立って良し、これがUW（ ユニバーサル・レスリング ）というものかという思念が脳裏を過ぎる。だが、いくら相手がいぶし銀のレスリングスタイルで攻撃してきても、第一回戦で気の技術を使い、他の有力参戦者に手の内をさらすことを俺は非常に嫌っていた。

仕方ない。打撃で勝負するか. . . 俺の右肘がヨージのこめかみをかすめた。そのまま体の回転を利用して、左のソバット（ 踵後ろ回し蹴り ）を俺は放った。ヨージは俺のソバットにニールキックをあわせてきた。相打ちだった。まさしく、相手は蛇のような相手だった。

両者はいったん間合いを広く取った。ヨージは再び低い姿勢のタックルに来た。俺はタックルを全身で受け止めると、左腕でヨージの頭をキャッチしていた。大きく左脇にヨージの頭を抱え込み、フロント・スリーパーの姿勢で締め上げた。相手の体を引き上げ、スリーパーの体勢のまま強引に抱え挙げると、俺はそのまま体を後方に捨て、垂直

落下式ＤＤＴの体勢でヨージをマットにしたたか打ちつけ、その間、なおも両腕でヨージの首を締め上げた。レフリーが駆けつけ、ヨージの顔面が青白くなり気絶していることを確認すると、彼は両手を大きく掲げ、ゴングを要請した。

レフリーストップによるＴＫＯだ。

リングサイドではミス・ワカマツがトトの紙を握り締め、右手を大きく突き上げていた。

第 16 章グレート・アジア

決勝戦第２回戦の相手はグレート・アジア 13 世だった。初代グレート・アジアは地球のプロレスメジャー５冠王に君臨したササキ・ウォーリアーにバーリ・トゥード系の２つのベルトをエサに統一戦を挑み、地球の７色のベルト全てを手中に収めた最強の女子プロレスラーであった。彼女は夫と共に、数世紀前の初期のキングオヴギャラクシーに挑戦したが、その頂点を極めることはあと一歩で叶わなかった。

２代目のグレート・アジアは初代の娘で、女性ではじめてキングオヴギャラクシーを制覇した猛者だった。13 代目のグレート・アジアは繊細な美貌と強さを合わせもった二代目ではなく、プロレス最強の強さと野生のパワーを秘めた初代の血を色濃く継承していると噂されていた。

ラテン系の入場曲が鳴り響くと、顔面に歌舞伎をモチーフにした隈取のペイントをし、上半身にパンクな釘を打ち付けられた情熱の赤のヘビーアーマーを身に着けたグレート・アジア 13 世が、有刺鉄線バットをフルスイングしながら入場してきた。グレート・アジア１３世は女性ならではのしなやかな体つきの曲線美と実用的な筋肉が織り成す重厚感が全身に強烈なオーラを醸し出していた。

俺はアジアの有刺鉄線バットを目にすると、アルバイトで学生プロレスに参加して、デスマッチを引き受けざるを得ないハメになったあの時の嫌な思い出が脳裏によぎった。アジアはコールを受けるとマイクを手に取り、月面コロシアムの大観衆に向かって、絶叫した。

「ミスター・ポルゴ。この勝負はフェアに行いたいと思う。ワタシもバットをセコンドに渡すから、お互い素手で勝負しない？ あのヨージに勝ったあなたにレスリングで勝負を挑みたい。」

俺はアジアがセコンドにバットを渡すのを見届けると、両手を天に向かって掲げて、こう言った。

「俺は元からギャラクシーに武器を持ち込むつもりはないぜ。望むところだ。クリーンファイトで行こう！」

レフリーが俺のボディチェックを済ませると、大観衆のコールが鳴り響く中、したたかにゴングが打ち鳴らされた。

俺はレスリングスタイルの低い姿勢で両手を前にだらりと伸ばすと、アジアは呼応するかのように手の取り合いになった。そのままお互いの両手を合わせて力比べをすると、パワーファイトで知られるグレート・アジアは優位に立った。思わず、俺は片膝をついてしまった。俺は相手のプレッシャーに打ち勝つかのように立ち上がると、右足で前蹴りを放ち、両者は再び距離をとって睨み合った。物は試しと俺は不用意に右ハイキックを放つと、アジアは左の２腕でガッチリ俺の右足を抱え込み、そのまま右手で俺の頭を抱え込むと、後方に大きく反り返った。キャプチュードだった。

頭をしたたかに打ち付けられ、俺の眼前で火花が散っていると、アジアはすかさず金網のコーナーサイドに駆け上がり、空中できれいな弧を描いて俺に覆いかぶさってきた。ムーンサルトだ。このままマウントをとられてしまった俺は、パンチの嵐をひたすら両腕でガードすることで手一杯だ。賞金目当てでロクな修行もしないでギャラクシーに参加したことを俺は早くも後悔し始めていた。俺はなんとか体をブリッジして、この苦境を抜け出すことを考えていた。

突如、マウントポジションで俺をタコ殴りにしているグレート・アジアの両の掌が青く光っていた。俺の顔面をガードしている両腕をその青く光る掌で押さえつけると、グレート・アジアは全身の気を爆発させた。俺達の体の周りを青い光の柱が鳥篭のように包むと、俺の全身に激痛が走った。サンダーストームという気の嵐を生み出すグレート・アジアの得意技を俺は真に受けてしまった。俺は全身の気を解放しているグレート・アジアの一瞬の隙をついて、ブリッジからマウントを跳ね除けることに成功した。今の強烈な気を使った技をまともにくらいながら、なんとかマウントから逃げ出した。まさに肉を切らして骨を断つ闘いを俺は強いられていた。

リングインした際、アジアが「お互い素手で勝負しない？」といってわざわざ有刺鉄線バットをセコンドに渡した理由にうすうす俺も気付いていた。つまり、相手も「気」が使えたのだ。

俺はまだ手の内を誰にも見せてはいなかった。打撃もレスリングも全ての格闘技術で俺を上回る相手を目の前にして、俺は一瞬絶望感に襲われた。「気」さえ使いこなす最強のレスラーにいったい、一探偵がどう立ち向かうべきだろうか？

俺は、リングサイドに陣取っているミス・ワカマツに一瞥すると、覚悟を決めた。奥の手を使うしかなかった。両手のガードを軽く下げてバックステップを踏むと、そのままリングの金網に体が当たった。その反動を利用して、俺は渾身のラリアットの体勢に入った。

グレート・アジアの黒く縁取られた両目に光が宿った。アジアは右腕をくの字に曲げると、アックスボンバーの体制で俺のラリアットを迎撃した。相打ちかと観客がざわめいた瞬間、アックスボンバーで俺の顎を打ち抜いたアジアはそのまま右腕を俺の首に巻きつけて、バックに回った。

チョークスリーパーだ。レフリーが試合を独自の判断でストップしないかと思って一瞬俺は焦ったが、この試合はどちらかが気絶するか戦闘不能になるかまで戦うデスマッチであることを俺は思い出していた。背後にはグレート・アジアの４ＷＤの肉体が俺を圧迫していた。

グレート・アジアを含めた会場に居合わせた全ての人々は、彼女の勝利を確信していた。俺は意識が遠のく中で、右の肘に全身の全ての気を集中した。最後の力を振り絞っ

て、背後のグレート・アジアの鳩尾めがけて、肘をぶつけた。ミィーティングの瞬間に俺は全ての気を解放させ、アジアの体の中で爆発させた。アジアは金網までぶっ飛ぶと、立ったままで気絶した。

決勝の相手となるべき三代目の銀河の大王に俺の奥の手を見られてしまったかもしれない。俺はコールを受けながら、ちょっと反省していた。

第 17 章銀河の大王

キングオヴギャラクシーの決勝戦の相手は、やはり一番人気の銀河の大王だ。かつて数世紀前にギャラクシーを主催した初代の銀河の大王の孫であり、３代目の銀河の大王だ。太陽系惑星連合と銀河帝国は今世紀になっても、正式な国交がなかった。銀河の大王は、数世紀前の伝説には存在していても、その姿を生でお目にかかるのは、会場に居合わせた全ての観衆がおそらく初めてだったことだろう。銀河の大王はその持ち前の龍の気と爆発的なパワーを利用した試合で、全ての試合を一分以内にＫＯでストレート勝ちしていた。

地球の名曲 GLORIA（ 栄光 ）と共に、俺は青コーナーにリングインした。赤コーナーには既に銀河の大王が陣取っていた。銀河の大王は恐竜の容姿で翼が背中から生えていた。その姿はこの世のものとは思えないくらい美しく、凛としていた。恐竜というと重厚なイメージがするが、重厚なのは皮膚だけで、体型はマラソンランナーのようにスマートで背が高い。そうして腕や足には地球の人類の 10 倍の機能は持つとされる強烈な筋肉が自己主張していた。

銀河の大王はその右腕を天高く掲げると、俺の方を指差した。その指の形はシュート（ 殺し合い ）を意味していた。そして人差し指を突き出すと、指で１の字をサインしていた。一分以内に決めると宣言だ。それから、なんのためらいもなく首を切るジェスチャーをした。

俺は銀河の大王が勝利予告のアピールをしている瞬間、リングサイドにいるミス・ワカマツに目をやった。ミス・ワカマツの黒い澄んだ瞳は、マーズマネーのMの字を描いているようだった。トトの券を両手に握り締めて、俺の勝利を一身に期待していた。

会場の緊張感が頂点に高まった瞬間、ゴングは鳴り響いた。俺は顔面の前に両腕を掲げると、ガードの姿勢を固めた。俺は両腕のまわりに体の全ての気を集中していた。

銀河の大王は、全身の気を両の掌に集めると、そのまま黒い気が火花を散らして円の形に集まっていた。大王は両腕をグッと前に突き出すと、一気に俺に向かって開放した。銀河の大王の得意技、地球クラスの惑星も一瞬で消滅させるという伝説の必殺の光線技、ギャラクシーウェーブだ。

俺の両腕に熱い衝撃が走る。反撃の余裕すら与えない、強力な一撃だ。あと一発この技を食らったら、地球人のか弱い俺は間違いなくアウトだ。ギャラクシーウェーブの気の軌跡を追って、今度は銀河の大王が拳の先に龍の形の気を作って、ガードの上から右のアッパーで強引に殴りかかってくる。かつて、初代銀河の大王が得意としたという真・龍拳だ。

ガードしていたおかげで、俺は金網まで飛ばされただけで済んだ。

「銀河の大王、あんたの必殺技は全部受けきったぜ。もう一発、今度はまともに真・龍拳とやらを食らってやってもいいぜ。もう、アンタの技は全部見切った。気とパワーに頼っているだけで、スキがバカでか過ぎるんだ。ここだよ、ここ。俺の鳩尾を狙って、真・龍拳を打って来いよ！」

俺はイチかバチかの賭けに出た。次の技がギャラクシーウェーブだったら、俺は今度こそブチのめされるだろう。全身の気を高めて、俺は拳の先に集中した。銀河の大王の真・龍拳にカウンターで発頸をお見舞いするつもりだ。

俺は自分の鳩尾を指差して、大王を挑発した。銀河の大王は腰を低くし右の拳をグッと引いた。テレフォンパンチってやつだ。沖縄の伝統空手のように拳を腰の位置まで溜めると、全身の気を龍の形に変えて、大王は得意の真・龍拳を放ってきた。俺は右にサイ

ドステップして、大王のパンチをかわすと、そのまま右の拳でフックを打った。大王のワニのような顔面に俺の拳が当たった瞬間、大王の体の中で俺の気が爆発した。大王は大きく左によろめいた。俺はすかさず左足で踏み込んで、こんどは左フックをかました。

さすがの大王がうつむき加減にへたりこんだ。俺はすかさず首相撲の体勢に入って、大王の顎に膝蹴りを連打した。俺は膝蹴りが当たる瞬間に、気を爆発させていた。1 発、２発、３発、面白いように大王の顔に膝が入る。

リングアナがワンミニッツパースト（ 一分経過 ）のコールを行った。会場は大きくどよめいていた。なおも俺は膝蹴りを緩めない。その一瞬、リングサイドからミス・ワカマツの悲鳴が上がった。

一瞬、俺はミス・ワカマツの方に目をやると、ミス・ワカマツは俺の決勝一回戦の相手ヨージ 12 世に頚動脈へナイフを突きつけられていた。

銀河の大王は俺がそっぽを向いて、攻撃の手を緩めた一瞬を見逃さなかった。膝蹴りを食らい続けて前のめりになってかがんでいる姿勢のまま、拳の先に龍の気を集中していた。龍の気を溜めた拳で俺の鳩尾を強烈に打ち付けると、そのまま２段式アッパーカットの体勢で俺の顎を打ち抜いた。それから先は、もう俺は意識がとんでいて何も覚えてはいない。後でビデオアーカイブを見た時にわかったのだが、銀河の大王は背中の翼から生み出される浮力を利用して、跳ね上がり気味に俺にアッパーを見舞っていた。強烈なパワーの前に、俺はリングを囲っている金網を越えてリング外にはじき出された。リング外の俺にダウンカウントが告げられ、10 秒が経過するとゴングが打ち鳴らされた。

３代目の銀河の大王が必殺の真・龍拳でキングオヴギャラクシーの優勝を飾った瞬間だ。

第 18 章 招待

俺は病院のベッドで目を覚ましていた。意識が戻った瞬間、ヨージ 12 世にナイフを突きつけられているミス・ワカマツの顔が脳裏を過ぎった。あたりを見回すと、ベッドの周りで心配そうに俺を見つめている一人の若い女がいた。もちろんミス・ワカマツだ。

「ミス・ワカマツ、無事だったのか？」

「ヨージは、銀河の大王のセコンドのＳＰに取り押さえられたの。どうも火星皇帝の依頼で、私達、いやポルゴさんを狙っていたみたい。ヨージの仕事成功率は自称 200 %で、あのもポルゴさんがワタシに気をとられたスキに大王にいいパンチをもらって、試合に負けたわ。一回戦の一対一の試合はポルゴさんが勝ったけど、最後の最後はヨージの作戦勝ちってところね。」

「優勝賞金もパーだし、トトももちろん大失敗か。また地球で一からビジネスやって、チマチマ稼ぐしかないんだな。正直スマン、ミス・ワカマツ。」

「トトには私達が探偵をやって稼いだ全財産をポルゴさんに賭けたワ。でも、ワタシは保険で兄貴の遺産を全部銀河の大王の方に賭けたので、安泰です。ポルゴさんは、準優勝の賞金 20 億マーズマネーがあるワ。」

「なるほど。でも、せっかく計画していた銀河帝国ツアーはキャンセルだな。普通の仕事じゃ、二人合わせて 100 億マーズマネー矯めるのに 10 世紀はかかる。賞金の 20 億マーズマネーは二人で山分けしよう。」

全身に銀河の大王の攻撃を受けた後の激痛が走っていた。ミス・ワカマツが献身的に看病してくれたおかげで、俺は１ヶ月で退院することなった。月の臨時病院で会計を済ませて、病院の玄関に立つと、そこにはスーツを着こなしたワニ顔の紳士が立っていた。

銀河の大王だ。

「お主のパートナーのミス・ワカマツから話は全て聞いた。ワシをあそこまで追い込んだ

相手はお主が初めてじゃ。公約の一分も耐え抜いたしナ。これはワシからの提案ジャが、もしよかったら我々の帝国に遊びに来ないか？ もちろんミス・ワカマツもだ。ワシが銀河帝国にこれから帰国する際、一緒にワシの量子宇宙船で案内するゾ。」

俺はかつての好敵手からの提案を即座に受け入れることした。ミス・ワカマツは手元のアイウォッチで、銀河帝国との貿易ビジネスの可能性と利潤率を必死に計算していた。

俺達の目前に新しい世界が広がっていた。

第 19 章 黒幕

ここは火星の地下 150 メートル、核攻撃にも耐えうるとされている火星皇帝宮殿だ。皇帝の間には、２人の人間がいた。

「皇帝閣下、命をお救い頂き、まことに有難うございます。もう少しで、銀河帝国の SP に処刑されるところでした。」

「ヨージ 12 世よ、気にすることはない。それに、我々の太陽系は銀河帝国の勢力圏外だ。やつらも勝手に我々太陽系の人間を処分することは出来ない。しかし、よくぞポルゴを敗北に導いた。」

「はっ、ポルゴのパートナーのミス・ワカマツが、彼の唯一の弱点とお見受けします。ポルゴ達の決勝戦の最中、ミス・ワカマツにナイフを突きつけ悲鳴を上げさせると、あっさりポルゴは相手への攻撃を止め、こちらに気をとられました。」

「まあ、３代目の銀河の大王に優勝させたのは、ちと不満じゃが、それはそれで仕方なかろう。私の用意したキラーマシンや強化人間どもは、みな予選で敗北じゃった。唯一、決

勝まで残った私の刺客は、ヨージ 12 世、お主だけじゃ。やはり、地球の名門ジム蛇の穴で鍛えられた実力は、相当のものと見受けたぞ。」

「私もギャグ路線をここで止めて、真面目にトレーニングに打ち込めば、この次はいい線を狙えると思っております。」

「さて、ヨージ 12 世よ、これからも私のために働いてくれるかな。もちろん、報酬ははずむぞ。」

「お任せください。」

どの世界にも案外黒幕は存在するのかもしれない。ヨージ 12 世はせいぜいその黒幕の使い魔といったところだが、その仕事成功率は驚異の 200 %だった。彼の戦闘能力は地球の格闘家の中ではＢクラス、つまり 80 点程度だが、彼の知能（ 悪知恵 ）はＳクラス、つまり 120 点程度だった。あわせて 200 %の強敵、それがジョー・ヨージ 12 世だ。

銀河帝国への旅行に胸を弾ませている今、ポルゴ達は新たなる世界への関心へ目が向いており、闇に潜むライバルの存在に気付くことはなかった。

第 20 章さらば太陽系

銀河の大王の量子宇宙船は、地球の月を離陸し、銀河帝国への 7 日間の旅に出発した。ポルゴとパートナーのミス・ワカマツも同乗していた。量子宇宙船は、物質の量子レベルでのゆらぎを利用して、あたかも瞬間移動を繰り返すかのような不思議な手法で惑星間、いや銀河間移動を可能にしていた。

ポルゴは地球圏、いや太陽系惑星圏での出来事を回想しながら、太陽系を離れる感慨に浸っていた。太陽系では常に惑星間紛争が頻発していた。その理由はポルゴに言わせれば、火星皇帝の専制帝国主義にあった。ポルゴは自分自身の目で、民主帝国主義を採用する銀河帝国の政治システムや文化を確認したいと感じていた。

ミス・ワカマツは量子宇宙船の中に与えられた彼女の部屋を離れて、銀河の大王の執務室に入り浸っては、大王に質問をしていた。

「ねえ、大王さん。アナタ独身ですか？」

「もちろん、ワシは独身じゃ。妻とは死別しておる。銀河の大王は同族、つまり龍の力を持った一族としか、正式に結婚しない慣例になっておる。もっとも、恋人は大歓迎で募集中じゃ。」

ミス・ワカマツは銀河の女王になるという野望はあきらめて、とりあえず、銀河帝国との間でビジネスの可能性を探ってみるという現実的な道に切り替えた。

「銀河帝国の資源ってどんなものがあるのですか？ もちろん、商品価値のある資源に限りますけど？」

「銀河帝国とて、地球と同じ物理・化学法則の支配下にある。というわけで、存在する天然資源の質は太陽系とは変わりない。しかし、我々は自然科学の法則を太陽系の人間より深く知っているという自負がある。つまり人為的に合成される物質や我々の工学技術は太陽系をはるかにしのぐレベルにある。もちろん、この宇宙船もだ。しかし、我々銀河帝国が誇りに思っているのは、自然科学の水準だけではない。むしろ、我々が歴史的に培ってきた政治システムにある。」

「政治システム？ そんなものが、自然科学よりも重要なのですか？」

「我々の帝国間では、惑星間の調停を行うルールがなによりも求められる。その基本は、

平易な言葉で言えば、他人に迷惑をかけないという限りにおいて市民の自由を認め、保護することにある。我々の銀河帝国では、他人に迷惑をかける宇宙環境の汚染、特に核による宇宙の汚染を極端に嫌う。核に代わる銀河世界の秩序を維持する存在として、強大な龍の力を持った我々の一族が、大王の名のもとで政治的な代表権と軍事的な統括権を委任されている。自然科学の発達よりも、それをどのように惑星社会に還元し、生かしていくかという社会システムの創造・維持管理の方が重要であるというのが、我々銀河帝国市民の信条じゃ。」

銀河の大王はそのユニークなワニ顔の下で、銀河帝国の将来や市民の安全を常に配慮していた。

ミス・ワカマツ、ポルゴともにこれから初めて経験することになる銀河帝国の社会システム・文化は太陽系に止まっていたのでは、決して想像すら出来ない世界であることは確かだった。銀河帝国を構成する市民は、地球人のようにサルから進化してきた哺乳類だけではなかった。大王のように爬虫類ベースの人間も存在するし、あるいは魚類ベースの人間も存在する。異なる種族で構成される銀河市民を調停する政治システムが銀河帝国には存在していた。それは、地球人と、いくら遺伝子操作を行っているにせよベースが同じホモ・サピエンスである火星人との激しい惑星間の戦争に悩んでいる太陽系、そこに住む一人の地球人であるポルゴにとって、新しい道を教示してくれるかもしれなかった。

第三部　火星皇帝の野望

第 21 章銀河世界

ポルゴとミス・ワカマツは銀河帝国に半年滞在した。ポルゴは銀河帝国を形成する諸惑星を観光して回ったが、ミス・ワカマツはその時間のほとんどを銀河帝国の国立自然科学研究所で過ごしていた。

俺はミス・ワカマツと離れて、魚族やワニ族、あるいはネコ族や甲冑をまとっているかのように見える昆虫族との交流を楽しんでいた。魚族、つまり魚類から進化した人類であるトビウオ星人に「おまえら地球人は俺達魚を食べるのか？」と聞かれた時は、正直焦った。地球のジパング地方では、刺身にして生のまま食べるが、俺もこの銀河では高度な知能を持った魚族を食べようとは思わないと返答しておいた。またネコ族の酋長からは、「ポルゴの祖国では我々の皮を三味線という楽器に利用すると聞いているが？」と尋ねられた。

俺は、猫の皮でなく、最近は犬の皮を多用していると答えておいた。

ネコ族は銀河帝国に広く勢力圏を持っている人種で、地球のような海を持った惑星を何個か所有しており、そこで魚介類の養殖を行っていた。ネコ族の人間は、地球の人間よりはやや背が低い程度で直立しており、もちろん尻尾も毛皮も地球のネコと同様の姿だった。ネコ族の酋長と誼を通じて、俺はネコ族に伝わる秘伝の焼酎をわけてもらった。これはネコ族の出身惑星でのみ生産される特殊な長粒種の米から作った蒸留酒だった。アルコール度数は 40 %くらいだった。この秘伝の焼酎はジパングにいる師にお土産としてもって帰るつもりだ。

一方、ミス・ワカマツはひたすら手元のアイウォッチで計算を行い、銀河帝国で生産される貴重な工業製品の輸入を考えていた。しかし、往復で最低 1000 億マーズマネーはかかるという量子宇宙船のチャーター料金が問題だった。そこで銀河帝国に存在する

遺伝子工学や物質科学、惑星間移動に関する物理工学の知識を収集し、その情報をアイウォッチにインプットして持ち帰ることに決めた。銀河帝国にはさまざまな惑星が存在し、独自の進化を遂げた生物が住んでいたが、彼らの一部は遺伝子操作によって生まれたものだ。

　この技術を地球圏に持ち帰ることで、新たなるビジネスの可能性を見出していたのだ。

　ポルゴは太陽系への帰還の一ヶ月前にミス・ワカマツと合流すると、こう切り出した。

「ミス・ワカマツ、そろそろ俺達も太陽系に戻る準備をしよう。何かこちらで情報は集まったのか？」

「もちろん。ばっちり新しいビジネスの可能性を見つけたわ。火星人に効く新しい薬や金星の銀河ワニをおとなしくするフェロモンの知識も仕入れたわ。全てはこのアイウォッチにインプットしてあるの。」

「なるほど。俺もこの銀河帝国の政治システムについて詳しく見聞してきたところだ。一緒に帰って、またビジネスをしよう。」

　ミス・ワカマツが銀河帝国の科学的知識にまだ未練があるのは薄々気付いてはいたが、この５ヶ月、彼女は研究所の中に篭りきりだったので、ここはいったん外の世界の空気を吸わせて気分転換をさせる必要を俺は感じていた。銀河帝国は我々太陽系の人間にとってはあまりに魅力的で、長居するともう元の世界には戻れない危険性があった。

　銀河帝国を構成する銀河は 11、その中でも中心に位置する大銀河の中の惑星サルバトーレが銀河帝国議会の位置する場所だった。俺達は惑星サルバトーレに行って、銀河の大王に謁見すると、そろそろ太陽系に戻る暇乞いをした。大王は快く、俺達の太陽系に戻るための量子宇宙船を貸し出す旨を了承してくれた。

「ポルゴよ。もっと鍛えて強くなれ。ワシはそのさらに上を目指す。また、キングオヴギャラクシーで会おう！」

俺達はその数週間後量子宇宙船で月まで戻ると、そこからはチープな定期便で地球圏に戻った。

第 22 章 師

俺はミス・ワカマツと共に地球圏に戻ると、単身で師匠に会いに行くことにした。師のミスター東郷は、60 才を越えたばかりの、ファンキーなじいちゃんだ。俺はかつてミスター東郷から古武術の手ほどきを受けていた。本当は、俺は学生時代からプロレスの練習がしたかったが、相手の技を常に受けることが前提とされている派手なプロレス技よりも、実践的な関節技・投げ技、そして当て身技の体系を持っている古武術をまずマスターすることをミスター東郷は俺に勧めてくれた。

ミスター東郷はもともとレジスタンスの人間で、火星人に両親を殺された過去をもつ男だ。しかし、今は酒とタバコを何よりも愛する一人のファンキーじいちゃんだ。

俺は心の中でミスター東郷を「オヤジ」と呼んでいた。じっさい、ミスター東郷はそのぶっきら棒な物言いや、反骨の精神からヤクザの親分のような風格を持っていた。その弟子（ つまり子分 ）にあたる俺としては、心の中で彼を「オヤジ」、つまりヤクザの組長（ ボス ）のようにしたっていた。

俺は銀河帝国でネコ族の酋長にもらった焼酎を手土産に、ミスター東郷の仕事場を訪ねた。

「よう、ポルゴっ！ ひさしぶりだな。俺も衛星中継でお前の試合を全部見ておった。よく頑張った。しかし、最後はなんというか、残念じゃったな。」

「ミスター東郷、おひさしぶりです。俺はあのギャラクシーの後、銀河帝国に行ってきました。これは手土産の焼酎です。」

「おう、では、さっそく空けよう。ところで、お前、いつ同棲している彼女と結婚するのだ。そういうことは早いほうがいいぞ。」

「ミスター東郷、ミス・ワカマツは俺の婚約者ではありません。前にも話したかもしれませんが、ミス・ワカマツは第３次地球侵略戦争の時、俺をかばって死んでしまった親友の妹なのです。親友のワカマツは死んでしまい、何もこれ以上ワカマツは出来ないのに、俺だけあいつの妹と幸せになるなんてことはとても出来ないです。俺はワカマツの遺志を継いで、火星人、いやあの火星皇帝の太陽系征服の野望を打ち砕きます。それからです。ミス・ワカマツとのことを考えるのは。」

「ポルゴ、お前はいつも固いことばかり言う！ 死んでしまった者の分まで幸せになるのが、生きている者の務めだろう。もちろん、ミス・ワカマツがお前に好意があることが前提だが。」

俺にはミス・ワカマツの本音について思い当たるフシがあった。彼女は、俺自身が目的ではなく、俺と一緒に行動すると単にビジネスになるからという理由で、俺と一緒に暮らし、仕事をしてきている。これから火星人達と本格的に闘うに当たって、ミス・ワカマツの身が危険にさらされることは、既に経験したことからも言って、想像に難くなかった。

師匠のミスター東郷は、焼酎のボトルを２本空けると、ワシにも若い女の子を紹介してくれとねだってきた。もちろん、ミスター東郷は妻帯者で、ミス・ワカマツと同い年の娘までいた。ミスター東郷は愛人に関しては常に募集中だ。俺は、アイウォッチを使い、仕事で知り合った 30 台の離婚暦のある女性を 2 人呼び出すと、この 2 人は今ちょうど独身で容姿もばっちりですと言い、オンラインチャットでミスター東郷と会話させた。ミスター東郷はさっそくメアドと携帯番号を交換して、彼女達と交際することにしたようだった。

俺は「若い女たち」との会話に熱中しているミスター東郷の心情を察して、中座した。

第 23 章 養殖

　ミス・ワカマツは地球圏に戻るや否や、さっそく金星フロンティアの科学者と頻繁に連絡をとっていた。銀河ワニをおとなしくさせるフェロモンの合成方法がわかった以上、野生の銀河ワニの本格的養殖や戦略的生物兵器への転用は彼女にとって時間の問題だ。

　ミス・ワカマツは、ワニ皮バックの新ブランド WAKAMATU で一儲けすることを企んでいた。

　数ヵ月後、ミス・ワカマツは金星フロンティアに兄貴の遺産をもとに増やした金で、銀河ワニによく効くフェロモンの合成プラントを建造した。

「ミス・ワカマツ、本当にそのビジネスは儲かるのか？　また、銀河ワニがヤクに耐性をもって反逆したりしないのか？」

「大丈夫、銀河帝国の科学力は絶大よ。このアイウォッチに情報は全て入力してあるわ。」

「わかった。それでは、君は当分金星フロンティアに行って来なさい。ここに金星への定期便のチケットがある。」

「さすが、ポルゴさん。何でも用意が早いわね。」

　俺はミス・ワカマツを金星に送ることで、当分自分から遠ざけることにした。これから始まる火星帝国との戦いで、ミス・ワカマツを危険にさらすことは出来なかった。それに、銀河ワニを養殖して、火星に送り込むことで、あのキノコ頭の火星人たちを大混乱に陥れることが出来る可能性があった。俺達は当分離れて暮らすことになる。

第 24 章 依頼

ミス・ワカマツは金星に渡ってから、化学プラントを建造し、銀河ワニによく効くフェロモンだけなく、火星人によく効く究極の新薬、ＭＤＰ（ マーズデッドリーパニック ）を開発した。このＭＤＰは火星人の粘膜性の肌に付着すると火星人たちは極度の快楽のあまり気絶する。さらに、限界量を越えて火星人に与えると死に至るという強力な薬だ。

また、ミス・ワカマツは銀河ワニの遺伝子解析に成功し、銀河ワニに火星人のみを好んで襲わせる習性を遺伝子レベルで刷り込ませた遺伝子改良銀河ワニの開発に着手した。その試作第一号の卵を冷凍保存して、地球の俺に１ダースばかり送ってくれた。

火星人たちは、地球人狩りを公然と行うようになっていた。地球の太陽教信者を扇動して、地球人の若い男女のみを狙っては、火星に拉致し、優秀な奴隷として強制労働をさせていた。あまりに過酷な労働に耐えられなくなり疲労困憊し労働効率が落ちた地球人奴隷が、酸素の薄い火星の非居住地区に身包み剥がれて捨てられているというニュースがさっき地球の報道番組に流れていた。捨てられた地球人は酸素欠乏症や凍傷で亡くなるか、あるいは野生の火星サソリの猛毒でやられてしまうかだ。

俺は怒りに打ち震えたが、火星人たちを黙らせる究極の秘密兵器、遺伝子改良銀河ワニがまだ 100 %完成してはいない以上、一探偵としては我慢するしかない。

そんな俺の元に師のミスター東郷から一本の電話がかかってきた。

「ポルゴ、お前か？ とにかく聞いてくれ。俺の娘のレイナが火星人に拉致されたのじゃ。ワシがちょっと若い彼女とデートに行っているスキに、あのキノコ星人どもが太陽教の信者を利用して、妻と買い物に行っていたレイナだけを一人かっさらったのじゃ。これはワシからの依頼じゃ。金は幾らでも払う！ 娘を助け出してくれっ！」

「ミスター東郷、俺と貴方の仲じゃないか。レイナは必ず俺が責任を持って、命に代えても助け出す！ 師匠の貴方から金なんて取れないぜ。安心して待っていてくれ！」

俺はどうにかして拉致された地球人が奴隷として強制労働させられている火星の強制収容所に潜り込む必要があった。その時、火星で賞金マッチが開かれているという情報を俺は手に入れた。メキシコ流空手の達人ジュン・バードという男が、火星で路上賞金マッチを開催し、彼に負けた格闘家たちは強制収容所に入れられ、過酷な肉体労働をさせられているという噂を耳にした。

俺は再びヨコスカまで単車を飛ばすと火星人たちの秘密基地に潜入し、とりあえずマーズアタックを使って、火星人の４人乗り宇宙船、つまり地球人であれば、2 人が乗れるサイズの宇宙船を奪った。コールドスリープに入ると、俺は一路火星に向かった。

第 25 章堕ちた不死鳥

俺は火星に潜入すると、レイナが収容されている強制収容所を探した。その第 14 強制収容所のガードは強烈に固かった。俺が今ここに無理やり殴りこんでも、レイナを探し出すことはおろか、脱出すら不可能な気がした。もう少し情報を集めると、賞金マッチに敗れた格闘家たちもこの第 14 強制収容所に連行されていることがわかった。どうやらこの強制収容所は地球侵略に向けた宇宙船を作るための工場らしい。

俺は賞金マッチを主催しているジュン・バードを火星で探し出すと、路上マッチを挑んだ。しかし、彼はまず誓約書にサインすることを要求した。その誓約書には、彼に勝利した場合は賞金１億マーズマネーを与えるが、敗北した者は第 14 強制収容所送りになる旨が記載されていた。俺はその誓約書にサインすると、ジュン・バードとの試合に挑んだ。ジュン・バードは伝説の不死鳥と呼ばれたかつてのキングオヴギャラクシーの常連、ジュン・ハーンの子孫で、メキシコ流空手の正統継承者だった。ジュン・ハーンはコリアの出身でテコンドーを極めた後、メキシコに渡り、ルチャ・リブレの空中殺法と

テコンドーの多彩な蹴り技を併せ持つ最強の打撃系格闘技、つまりメキシコ流空手を編み出したとされる。

　ジュン・バードはかつての香港の映画スターのような容姿で、黒髪に甘いマスクをしていた。ジュンの構えはテコンドーベースであるためか、ガードは異常に低かった。俺は打撃で行くか、組技（ グラップリング ）で行くか迷ったが、とりあえず、ガードの低い顔面にワンツーをかましてみた。ジュンは顔を左右に微妙に揺らしながら、俺のパンチをすれすれのところでかわしていた。

　出来るな。

　俺はローキックやミドルキックを狙っているジュンの懐に一発もらうことを覚悟で踏み込んでいった。案の定左のミドルが来たが、俺はそれをキャッチすると、強引に肘打ちをかまし、へたりこんだジュンの両腕をクラッチすると投げっぱなしタイガードライバーの姿勢で奴を投げつけた。

　ダウンしたジュンは、両手を耳元につけると、ハンドスプリングの要領で飛び上がり、俺のどてっ腹にドロップキックを見舞ってきた。そのまま、俺の体を支点にして、ムーンサルトキックを放ってきた。

「ワタシのフェニックスライジングの威力はどうですかな。」

　ダウンしたところから、起き上がりに蹴り技を見舞ってくるので、不死鳥の上昇という意味の技らしい。俺は、この程度の見せ技にだまされるほど、甘くなかった。

「効かないなー。あんたのとっておきを食らってみたいものだぜ。」

　奴の表情が一変した。挑発に乗ったらしい。

「では、ワタシの最終奥義、フェニックスアンジャスティスをお見せしましょう！」

　ジュンは一歩の踏み込みで一気に間合いを詰めると、強烈な左右の蹴り技のコンビネーションを見舞ってきた。こいつはまだ気の扱い方を知らないらしい。10 発位蹴り技を俺に見舞うと、こんどは低中位ドロップキックの要領で俺に蹴りかかり、俺の体を支点にしてサマーソルトキックを放ってきた。連続技の〆はやっぱりフェニックスライジングらしい。

　俺はわざと奴のフィニッシュを受けて、ダウンした。

　ところが、ダウンした俺にジュンは穏やかな笑顔を作って、右手を差し伸べてきた。

「怪我はなかったですか？」

　俺は思わず奴の差し出した右手を自分の右手で掴んでしまった。ジュンは俺の体を笑顔で引き上げると、俺の右手を掴んだまま、左ハイキックを見舞った。再びダウンした俺の体を今度はストンピングの要領でひたすら踏みつけてきた。起き上がろうにも、右手の関節を極められたまま押さえつけられているので不可能だった。鬼の形相でひたすら蹴りの嵐を受けてしまった俺は、されるがままになすしかなかった。

　俺は気絶したふりをして、相手が攻撃を止めるのを待っていた。しばらくするとジュンは攻撃を止め、携帯で火星人を呼んで、俺を第 14 強制収容所に担架で運び込んだ。

　これで、無事火星人たちの強制収容所に潜入することが出来た。

第 26 章 奪還

俺は火星人の強制収容所に潜入すると、あたりを見回した。この収容所では、地球侵略のための宇宙船を作るために、地球から無理やり連れてこられた地球人たちが強制労働させられていた。地球人たちは皆、足枷をはめられており、自由に動くことは不可能なようだった。もちろん、俺の右足首にも足枷がはめられていた。中では、400 人以上の地球人の若者が暗い目でつらい作業を強制させられていた。

周りを見渡すと、20 メートル先に長い金髪で青い目の一際目立つ女性がいた。レイナだ。俺は頭に隠していたヘアピンで自分の足枷を外すと、ためらうことなくレイナに近づいた。

「俺だよ。ポルゴだよ。あなたを助けに来た。話は後だ。とりあえず、これは火星人によく効く劇薬だ。お守り代わりに持って行くといい。」

俺はレイナの足枷をヘアピンではずすと、靴底からＭＤＰの入った袋を２つ取り出し、１つはレイナに渡した。

俺達は一直線に出口に向うと、早速門のガードマンにＭＤＰの粉を浴びせた。２人の生命の杖をもったガードマンはすぐに有頂天の快楽の表情を浮かべた後、そのまま硬直した。大丈夫、気絶しただけだ。しかし、俺達の前にジュン・バードが再び立ちふさがった。

「やはり貴様は、火星人に魂を売ったのだな？ あんたの相手はこの俺だ。レイナ、この先をまっすぐ進んだところにある洞穴に隠れていてくれ。こいつは俺が倒す」

「ワタシの技に一度破れたあなたが私に勝つことは絶対的に不可能です。またフェニックスアンジャスティスの餌食になってもらいましょう！」

　俺はジュンを牽制しているスキに、レイナが宇宙船を隠している洞穴に向かったことを確認すると、両手を顎の前に軽く構え、ジュンとの勝負に挑んだ。

　ステップして間合いを詰めると、俺は右のボディブローから左フックへのコンビネーションを使った。また間一髪でかわされる。ジュンは俺の左フックにカウンターで左のミドルを合わせてきた。俺は右手でその左足をキャッチすると、相手の首に左手を回し、大きな弧を描いてキャプチュードスープレックスをかました。ダウンしたジュンは、その体制からハンドスプリングで中低空ドロップキックを放ってきた。俺は両手を組んでダブルハンマーを作って、ドロップキックを迎撃した。

「フェニックスライジング、敗れたり！」

　俺はジュンを挑発すると、バックステップをして、相手の攻撃を誘った。

「得意のフェニックスアンジャスティスを俺にまたお見舞いしてくれよ。今度もあっさり食らってやるからよ。まあ、実を言うと、あの技は俺には効かなかったんだけどな。収容所に潜入するために、わざとさっきは食らったふりをしたんだよ。」

　俺はジュンの怒りをさそった。

　ジュンは一歩のステップで踏み込むと、ひらすら左右の蹴りを連発した。俺はちょうど 10 発全ての攻撃をブロックすると、最後の中低空ドロップキックからのサマーソルトをもろに食らった演技をして、派手に後ろに飛んでダウンした。またジュンは満面の笑みを浮かべて、ダウンした俺に右手を差し出した。

　俺は両手で差し出されたジュンの右手を掴むと、強引に引き込み、両脚でジュンの右腕を挟み込んだ。完璧な腕ひしぎ逆十字固めの体勢に入った。

「フェニックスアンジャスティス、敗れたり！ 悪いが、あんたの右腕は折らせてもらう！」

　嫌な音がすると、ジュンの右腕は不自然な角度で折れていた。俺はなおも攻撃の手を緩めなかった。ジュンの右手をさらに深く吸い込み、そのまま三角締めの体勢に入った。

「このまま眠ってもらうぜ。」

　ジュンの動きが止まり、落ちた事を確認すると、俺は技を解き、宇宙船のある洞穴に向った。

　俺は洞穴にレイナがいることを確認すると、宇宙船のハッチを開き、レイナを乗せた。

「ずいぶんと東郷のおやっさんも心配していたみたいだぜ。とりあえず、このまま地球まで送り届けるからな。ちょっと揺れるかもしれないが、ベルトを締めて大人しくしていてくれ。出発まで、あと３分だけ待っていてくれ。」

　俺はその三分の間に、火星人を好んで襲うことを遺伝子レベルで刷り込んである遺伝子改良済みの銀河ワニの卵を一ダース、洞穴の奥のほうに埋めて隠しておいた。こいつらが孵化して成長すると、火星人への最高の置き土産になるはずだった。

「待たせたな。それでは、地球へ。ゴー、バック！」

俺達は地球へ向けて出発した。

第 27 章 帰還

　俺はレイナを地球に連れ戻すことに成功した。俺はレイナを連れて、師のミスター東郷に会いに行った。

「おお、レイナ。無事だったのか。ポルゴ、ありがとう。この礼は必ずする！」

「礼だなんて、俺と貴方の仲じゃないですか。気を使わんでください。」

「ポルゴ、私からもお礼を言うわ。ありがとう。」

　レイナは高齢者福祉施設で老人介護の仕事をしていた。彼女のような一般の地球市民を何の理由もなく連れ去り、強制労働に追いやる火星人たちのやり方に強烈な疑問を俺は感じていた。

「まあ、ポルゴも俺とぜひ一杯やって行きなさい。とっておきの泡盛をあけよう。レイナ、ポルゴに酒をついでやりなさい。」

　俺は美人の酌を受けながら、頭では別のことを考えていた。あの第 14 強制収容所に入れられた 400 人以上の地球人のことだった。俺の力不足で、あの人たちを解放することは出来なかった。全ての強制収容所が 14 あるとすると、全部で 6000 人近くの地球人の若者が火星人に拉致され、強制労働の責め苦に苦しんでいるのだった。

「それでは、乾杯じゃ。」

　俺は反射的にミスター東郷と盃を交したが、心の中では釈然としないことがあった。一杯入って上機嫌になっているミスター東郷に火星で見聞してきたことを俺は少しずつ話していった。

「パパ、火星人の収容所では、地球人に地球侵略のための戦闘型宇宙船やミサイルを作らせているのよ。」

　レイナも少しずつ火星で見てきたこと、つらい思い出を話してくれた。

　ミスター東郷は俺達の話を聞き、怒りに打ち震えたが、こう切り出した。

「ワシもあと 10 歳若かったら、あの憎きキノコ星人どもに復讐できるのじゃが。ワシの武芸者としてのピークは実は 50 台前半じゃった。何も 20 台の若さまで取り戻したいとは言わん。武芸者としての円熟期の実力を保っていた 50 台の若さを取り戻せば、あのキノコ星人どもをぎゃふんと言わせられるのじゃが。ワシは両親を火星人に殺された。さらに最愛の娘まで誘拐されかけた。ワシのこの気持ちが、ポルゴにもわかるか？」

「ミスター東郷。火星人どもをとっちめるのは俺達若い衆の仕事だ。ミスター東郷は安心して、地球で隠居でもしながら、ふんぞり返っていればいい。」

　その時、レイナがこんな言葉を話した。

「パパ、収容所に入れられていた地球人から、生命の泉の話を聞いたわ。金星にある生命の泉で入浴すると、細胞レベルで若さを取り戻すことが出来るらしいの。普通の地球人だったら、５歳くらい。でも中には 10 歳以上若返る人もいるそうよ。」

　俺はそんな話は、ただの夢物語だろうと言って、その場を収めたが、後で金星にいる

ミス・ワカマツに聞いてみる価値はある話だった。もちろん、俺は今さら若返りなど求めてはいないのだが。

俺はミスター東郷にひたすら酌をして、ミスター東郷が２本ボトルを開け、眠気を感じ始めたのを知ると、用事があることを理由にミスター東郷の家を辞去した。

レイナの美しい瞳には、正直言ってちょっと未練があったが、師匠の娘に手を出すほど、俺はバカじゃなかった。

この事件を機に、ミスター東郷の女癖も直して欲しいと思ったが、そんなことを切り出せるほど、俺は偉くなかった。もしそんなことに口を滑らしたら、「このばか者！」とミスター東郷に一喝されることは、請け合いだ。

帰路に着いた俺は、ほろ酔い加減で歩きながら、火星人に魂を売った連中のことを考えていた。ジョー・ヨージ 12 世はおそらく純粋なビジネスが目的だろう。ジュン・バードはもしかしたら、あれで太陽教の信者なのかもしれない。いずれにせよ、あいつらはまた俺が火星人とやりあう過程でケチをつけてくるだろう。火星人だったら、マーズアタックなりミス・ワカマツの作ったＭＤＰなり薬物療法で対処の仕方があるが、地球人のＢクラス以上の格闘家となるとちょっと扱いがめんどうだった。あいつらと拳を交えて戦うと、こちらも無傷というわけにはいかない。

これからの戦いでは火星で密かに開発中であるとされる非生物兵器のキラーマシンや遺伝子操作による強化人間といった敵も登場することだろう。

帰宅した俺は、火星に卵を埋めてきた遺伝子改良済み銀河ワニ達の活動に期待しつつ、孤独な眠りについた。

第 28 章 逆襲

数ヵ月後、俺はニュースで卵から成長した銀河ワニ達が火星で大立ち回りを演じてくれていること知った。ミス・ワカマツは銀河ワニを大人しくさせるフェロモンで特許を獲得しており、火星帝国と秘密裏に高いマージンで銀河ワニフェロモンを取引する可能性を探っていた。

俺は金星への定期便のチケットを３枚手に入れると、金星にはいい温泉があるかもしれませんよと言って、ミスター東郷一家にプレゼントした。今回、ミスター東郷は奥さんを連れて行くらしい。もちろん、俺は細胞レベルで人間を若返らせるという生命の泉を信じるほどアホじゃなかったが、まあ気晴らし程度に行ってみる価値はあるのだろうと思っていた。

まずは、火星帝国で強制労働させられている 6000 人あまりの地球人を助け出すことが先決だった。これはある意味、ビジネスになるかもしれない話だったが、俺は人命を金で取引するほどあざとくはなかった。とりあえず、500 人乗りの大型宇宙船を 12 隻チャーターするなり、ハイジャックする必要があった。俺は火星皇帝親衛隊が大型宇宙船を 20 隻以上保有していることを知った。とりあえず、強力なヤクＭＤＰを使ってあいつらから頂くことにした。

俺はミス・ワカマツに頼んで１ダース以上ＭＤＰを箱買いすると、再び火星に向かうことにした。ミス・ワカマツはスペシャルサービスで銀河ワニの卵も３ダースプレゼントしてくれた。１ダースは目玉焼きにして食べたが、残りの２ダースはまた火星人たちにプレゼントすることにした。

俺は例によって、火星人の宇宙船を奪うと、コールドスリープに入って、一路火星を目指した。

火星に着くと、銀河ワニ達の鳴き声が聞こえた。大丈夫、奴らは火星人のみを襲うよう細工してある。近くの洞窟にまた銀河ワニの卵を埋めることを俺は忘れなかった。

長い地下通路を通って、14 ある強制収容所が林立している西の火星砂漠に行き着くと、俺は全ての強制収容所のそばに、ＭＤＰの箱と地球文字で使用法を書いたメモを残しておいた。

俺は残りの１ケース分のＭＤＰを使って、火星皇帝親衛隊に挑むつもりだった。

俺はあのなつかしの火星皇帝の宮殿に潜入した。ガードマンの火星人をＭＤＰで気絶させると生命の杖を奪った。本来ならば、全ての火星皇帝親衛隊が宮殿の護衛に回っていた。

俺はあらかじめ、ミス・ワカマツから受け取っておいた銀河ワニ興奮フェロモンを火星帝国の主要都市にばら撒いておいた。大立ち回りを演じてくれた銀河ワニ達のおかげで、宮殿の周りにいた火星皇帝親衛隊は半減していた。

俺の目前には 20 人以上のキノコ頭が生命の杖のスイッチをオンにして待ち構えていた。先頭の一人が、強引に突撃をしてきた。俺は生命の杖の一撃を自分の杖でガードすると、その瞬間ＭＤＰを使った。一瞬で悦楽の表情を浮かべたまま硬直してしまった仲間を見て、キノコたちにも動揺が走った。その瞬間、俺は硬直したキノコの生命の杖を奪い、キノコの群れに向って放り投げた。キノコたちが大混乱に陥った瞬間、俺はＭＤＰの白い粉を周りに思いっきりばら撒いた。俺はそのまま親衛隊を突破すると、猛ダッシュで火星皇帝の部屋に駆け込んだ。火星皇帝と一緒にそこにいたのは、皇帝の愛人達ではなく、ヨージ 12 世だった。

「またもノックをせずに入ってきたな。無礼者め！ だいたい今回の銀河ワニの事件も貴様の仕業なのだろう。まあ、いい。私も十分地球人たちに働いてもらい、念願の野望を果たす準備が完了したところだ。お主の今回の狙いも、地球人奴隷の解放だろう。」

「意外と話がわかるな。この生命の杖と薬が怖かったら、大人しく要求に答えてもらおう。」

「貴様のその薬、ＭＤＰとか言ったな。あれは、私は抗体を注射してもらってある。貴様はまだ気付いていないかもしれないが、私はこの部屋に生命の杖を無効化する電磁波を発生させるよう改良したのだよ。どうやら主導権はこちらにあるようだな。」

「シングルで戦えば、腕のない火星人と、俺達地球人では結果が見えきっているぜ！」

「そうかもしれないな。私はこの時のために、ヨージ 12 世を呼んでおいた。ヨージ、すまんがこの者と闘って返り討ちにしてくれるか？　ネオ・ステロイドは注射しておくか？」

「皇帝閣下、私はそんな薬に頼るほど、ヤワじゃありません。私はこれでも蛇の穴の人間です。」

「そうか、私はその言葉が聞きたかった。それでは、お前たち、存分に戦うがよい！」

　ありとあらゆるレベルでの闘いに心酔している火星皇帝は、ここで手持ちの宝物をゴング代わりにカンと叩いた。

　ヨージはアップライトに構えると、シャドーを行った。凄まじいパンチの切れだった。

　相手が気を使えないことを割り引いても、打撃で勝負するのは避けたほうがいいと俺は判断した。

　俺は一瞬の隙をついてタックルに行った。相手の脚を俺の両手が刈る瞬間、相手は膝蹴りを俺に合わせてきた。俺は額に膝を受けて、そのまま左手でキャッチすると、低い姿勢でドラゴンスクリューをかました。大きく頭上をヨージの体が回転する。

　ヨージは回転を利用して受身を取り、そのまま立ち上がった。俺も合わせて立ち上がる。

　左の裏拳で奇襲をかけると、相手は右のソバットを合わせてきた。

「今度はボクから行かせてもらいマース。」

　ヨージは右のローから左のミドルの鮮やかなコンビネーションを見せた。俺の両腕が左のミドルを受けることに専念して、ガードが下がった瞬間、ヨージは飛び上がり気味に右の延髄斬りを見舞ってきた。俺はたまらずダウンした。

　俺は背中を地面につけており、両足だけで相手と正対していた。ヨージはスタンドだった。いわゆる猪木対アリ戦状態になってしまった。ヨージはローキックをするそぶりを見せると、不用意に俺に脚から飛び込んできた。俺はヨージの蹴りを受けると足首の関節を極めて、背後に投げつけた。ミスター東郷から習った下段当て身投げだった。

　俺は立ち上がると、ヨージを挑発した。

「今ので、アンタの左の足首は貰ったな。これでもうアンタは蹴りも出来ないし、もちろんパンチの威力も半減だな。それとも何か、痛みを我慢して強引に俺を蹴り続けるか？ もちろん、それもいいだろう。悪いがこの勝負、あと一分以内に決めさせてもらうぜ。あんた、もう背中が死んでいるよ。」

　挑発に乗って激怒したヨージの蹴りの猛攻が始まった。俺は７発の全ての蹴りを完全にガードすると、間合いをはずしてから、再び挑発した。

「アンタの遅い蹴りは、もういいよ。飽きた。それより、俺のこの顎をあんたの右ストレートで打ち抜いて見ないか？ 俺は一発いいのを貰ってみる気になったぜ。」

　俺は自分の顎を右手で指差すと、そのままステップを止めて、相手を誘った。

「絶対決めマース！　あなた、許せまシェーン」

　ヨージは俺の顎を狙って渾身の右ストレートを放った。俺は軽く左に体を捻って相手のパンチをよけると左手で相手の手首を掴んだ。そのまま相手の右手首を決めると、右手で相手の胸を掴んで、軽く腰を入れて投げた。上段当て身投げが爽快に決まった瞬間だった。ダウンしたヨージの右手にそのまま逆十字を決めると、俺は躊躇なく折りに行った。また、いやな音がした。

　俺は技を解いて立ち上がった。だが、俺の前には再びヨージが立ち上がって、右手をだらりとぶら下げたまま、左手だけで、ファイティングポーズをとっていた。もちろん、ヨージの足首は片方だけひどく腫れ上がっていた。

「あんた、まだやるのか？」

「ボクもヤマトの武士のはしくれデース。自分が完全に闘えなくなるまで、やりマース」

　ヨージは残った左腕だけで渾身のラリアットを放ってきた。俺はラリアットを半身でかわすと、フジワラデスロック、つまり脇固めに捉えた。

　このまま極めてもよかったが、さすがに俺も相手の両腕を折るほど厳しくはなかった。バックをとって、相手をチョークスリーパーに捕らええた。両足をばたつかせてもがくヨージ。俺はチョークに捕らえたまま相手を引き起こすと、そのまま腰を入れて首を決めたまま背負い投げのように投げた。逆落としが決まった。さすがのヨージも完全に落ちていた。

「長い戦いだったな。悪いが火星皇帝、今回の要求を述べさせてもらう。お前らが拉致した地球人を全員解放しろ。皇帝親衛隊の宇宙船を１ダース借りる。あとは、あんたを人質にとってもいいが、まあ、今回は要求を呑んでくれれば、そこまではしない。あとは、後であんたの直営放送局を借りさせてもらう！」

「2 度までも、この火星皇帝にたてつくとは！ しかし、今回はお主の顔を立てよう」

火星皇帝は、部下に連絡して、ポルゴを直営放送局まで案内させると、その前後に、部下に皇帝の間の隠しカメラの映像を編集するよう依頼した。今回のポルゴとヨージ 12 世の戦いのデータを分析して、ポルゴを完膚なきまでに叩きのめすためのキラーマシンを作ることにした。その後、火星皇帝は仕方なく、地球人奴隷解放の演説を行った。

ポルゴは火星皇帝直営放送局を乗っ取ると、火星で強制労働をさせられている全ての地球人に向けて、強制収容所の傍にあるＭＤＰの入ったボックスの存在を教え、火星皇帝が彼らの地球への帰還を認めたことを報告した。地球人たちは、皇帝親衛隊の宇宙船で地球に戻ることが出来た。

俺は自分の乗ってきた宇宙船で何食わぬ顔をして、地球に戻った。

第 29 章 問題

火星に拉致された地球人たちを乗せた 12 隻の大型宇宙船は地球に帰還した。問題は、その護衛と称して、残りの 10 隻近くの火星帝国親衛隊の大型宇宙船も地球圏にやってきたことだ。

地球に戻ってきた被害者達の目は暗く、皆憔悴しきっていた。地球の世論は火星帝国への経済制裁の再発動と、主戦論の方向に盛り上がりを見せていた。

最近わかったことだが、実は火星人達は伝染病に弱いことが発覚した。彼らは人間以外の生物の遺伝子も取り込んでおり、そのため、極端にウィルスなどの病原体への抵抗力が低下していた。俺は、一度火星人をウィルスで攻撃することを考えたが、いくらなんでも相手もホモ・サピエンスの遺伝子がベースになっている人間であり、あまりというか、はっきり言って人道に反する手段であると思えた。

　ミス・ワカマツは一時的に地球圏に戻ると、ワニ革バックの展示即売会を開いていた。ワニ革バックといっても、小さな女性向けハンドバックだけではなく、スーツケースやボストンバックまで販売していた。さらに、ワニ革スカートやジャケットの販売まで手がけていた。

　俺はミス・ワカマツの展示即売会の会場を訪ね、彼女に面会した。彼女の周りはボディガードを兼ねた若い男性が４・５人囲んでいた。

「ミス・ワカマツ。俺だよ。ポルゴだよ。」

　一瞬、誰という表情をしていたが、すぐに俺だと気付いたようだった。

「ああ、ポルゴさん。お久しぶり。このワニ革のスーツいかが？ 安くしときますよ。」

　相変わらずのビジネスへの堂の入った打ち込みようだった。

「悪いけど、また例のヤクと銀河ワニの卵譲ってくれない？ もちろんマーズマネーのキャッシュで払うから」

　第四次地球侵略戦争以降、地球圏、いやこの太陽系の基軸通貨はマーズマネー１つになってしまった。かつて回顧主義でリラを使っていた頃が、懐かしい。ミス・ワカマツはあらかじめ手土産にＭＤＰと銀河ワニの卵を事務所に定期便で輸送する手続きを取っておいてくれたらしい。そのことを聞いて安心した俺は、付き合いでワニ革のスーツ一式とスーツケースをキャッシュで購入した。

「毎度あり！ ポルゴさん、ワタシは当分金星で大儲けするわ。この前、ミスター東郷一家が訪ねてきたけど、ポルゴさんの師匠でもあるし、ワタシがホテルを世話しておきま

した。生命の泉のことはまだよくわからないけど、情報網を使って調べてみるわ。」

「そうか。まあ、元気に暮らすんだな！　また金星でのビジネスに飽きたら、いつでも地球の事務所に戻って来いよな。」

　そうは言ってはみたものの、ビジネスを何よりも生きがいとするミス・ワカマツが当分金星に止まっていることは火を見るよりも明らかだった。自分の遺産を有効活用している妹に死んだワカマツもあの世で浮かばれていることだろう。

　俺は死者の魂の存在も信じないし、あの世の存在も信じてはいないが、ふとそんなことを考えていた。

第 30 章 予兆

　火星皇帝は地球人奴隷を解放したが、それは彼らの仕事が終了したからだ。拉致された若い地球人を奴隷にして、地球侵略のための宇宙船やミサイルなどの兵器を作らせていた。その作戦が全て終わったことを意味する。火星の側から見れば、いつでも第５次地球侵略戦争を仕掛けられる状態にあった。

　俺が火星に仕掛けてきた３ダースの銀河ワニの卵は全て無事孵化し、火星で大立ち回りを演じているようだ。特に、初期の１ダースの連中は子孫を生み出すに至っている。今火星には 50 匹以上の銀河ワニが野放しになっていた。

　銀河ワニ達は生命の杖で焼かれるほどヤワな肌じゃなかった。火星人のみを襲うよう遺伝子改良を行った彼らは、最強の生物兵器だった。

　金星フロンティアは相変わらず火星から植物由来の食料資源を地球に内緒で密輸し、金星は火星で暴れている銀河ワニを大人しくするフェロモンや鉱物資源を輸出していた。

そうして、第５次地球侵略戦争の際には、金星軍も火星帝国に協力する裏協定を結んでいた。あらたな太陽系秩序が生まれる予兆をこの地球圏は孕んでいた。金星フロンティアの独立を承認すると同時に、金星と火星が同盟を結ぶことを阻止する案が地球連合の中で議論されていた。

俺がいるといないに関わらず、太陽系の惑星は太陽の周りをグルグル回っているし、太陽系の政治・経済も回っていた。第５次地球侵略戦争が起こるのは時間の問題だ。地球の側もどうにかして火星帝国を滅ぼすことを考えている。

こんな世の中こそ、かえってミス・ワカマツのようにビジネスチャンスを見つけられるのかもしれない。太陽系帝国は未だかつて実現したことはないし、その帝国の元首が火星皇帝であるとするならば、全ての地球人にとって何の意味もないことだった。この太陽系にはまだまだフロンティアが存在するし、それは銀河系でも同じことだった。当分あてもなくどこかふらふらと旅に出ようかなと思いつつ、そんなことも出来ないのが俺達庶民の懐事情だった。

いずれにせよ、第５次地球侵略戦争が始まった時は、俺もレジスタンス活動をするつもりだったし、2 回も火星皇帝の命を狙えるチャンスがありながら、それをフイにした俺の甘さもちょっと無念だった。師匠のミスター東郷は今頃何しているのかと思いをはせたが、俺の頭に浮かんでくるのは、ミスター東郷の白髪交じりのファンキーフェイスではなく、長い金髪で笑顔が綺麗な東郷の娘のレイナの顔だった。

俺は溜まっていた書類や、小さな依頼をことごとく片付けると、金星フロンティアに向う決意をした。今は量子宇宙船に乗る大金は手元になかったが、ミスター東郷のもとでまた一から稽古をつけてもらうことも、それなりに魅力だ。俺は大インドに渡ると、金星フロンティアへの定期便に乗船した。あるうららかな春の日の出来事だ。

第四部　復活の鷹

第 31 章沈黙の惑星

　俺は金星入りすると、とりあえずミス・ワカマツを訪問した。

「あら、こんにちは、ポルゴさん。景気はどう？ 私のところは相変わらず儲かっていますけど。今後また、キングオヴギャラクシーが開催されるみたいですね。また、銀河トトでポルゴさんに賭けますわ。今度こそ、優勝してくださいね。」

「何、またギャラクシーがあるのか。今度の主催者は誰だ？ また、あの火星皇帝か？ それにルールは？」

「今回のギャラクシーの主催者は前回の優勝者、つまり銀河の大王です。今度のルールはタッグマッチだそうです。場所はやっぱり地球の月（ ルナ ）だそうです。」

「タッグマッチか。それだとパートナーの問題があるな。やっぱりあの銀河の大王やグレート・アジアクラスの使い手が出てくるとなると、気が使えて、それに格闘術もマスターしてないと。パートナー公募ってわけにもいかないよな。ちょっと困ったな。」

「ワシだったら、準備万全じゃぞ！」

　そこには、髪が黒々と生えそろっており、全身の筋肉が強烈に自己主張しているミスター東郷の姿があった。思わず圧力（ プレッシャー ）を感じてしまった。

「ミスター東郷、その髪、染めたんですか？」

「生命の泉じゃよ。ワシはあの温泉に妻と一緒に浸かって、10 歳は若返った。こんなことありえないと思うだろう。だが、現にワシはこうして全盛期の姿を取り戻している。どうだい、ポルゴ。このワシと一緒に火星人たちの刺客を葬り去るのは。一丁、暴れてみようじゃないか？」

「もちろん火星皇帝の刺客も今度のギャラクシーには参加するでしょう。ミスター東郷、奥さんの了承はとってあるのですか？ いくら貴方の実力でも、その年齢でギャラクシーに参加して無傷というわけにはいかないでしょう。」

「ワシにはそれなりの覚悟がある。もちろん、今回のことは妻にも了承済みだ。ポルゴよ、次のギャラクシーの開催までまだ半年ある。金星で銀河ワニ相手にスパーリングと行こう！」

「そういうことでしたら、目標は優勝ということで、バリバリ行きましょう！」

　地球の師弟チームが誕生した瞬間だった。

　一方地球では、グレート・アジア 13 世が今度のギャラクシーに備えて地獄の特訓を開始していた。あの時の闘いの敗因は、自分が気に頼りすぎたことだった。本来、レスラーである自分は、あくまでレスリングで勝負するべきだった。マウントをとった瞬間、パンチの嵐から気の連携技に移行するのではなく、あそこで逆十字に行っていれば、一本取れたはずだった。気の使い方も、無駄に具現化して消費するのではなく、気の鎧、つまりスーパーアーマーとして使っていれば、あの時の肘打ちで逆転勝利を奪われることもなかった。

　グレート・アジアはただ黙々とスクワットをしながら、そんなことを考えていた。あとは、パートナーだけが問題ね。他のジムのレスラーをスカウトするか、あるいは自分のジムの若手レスラーに声を掛けるか。

　場合によっては、地球の腕利きの殺し屋をパートナーに選ぶこともルール上は可能だった。しかし、グレート・アジアはレスラーとしてのプライドと可能性にかけることを選んでいた。

　火星皇帝の間では、地球の優秀な格闘家が２人呼ばれていた。

「ヨージ 12 世、それにジュン・バードよ。お主らの働きは火星皇帝であるこの私も高く評価している。お主ら二人とも、あのポルゴに腕を折られたようじゃな。あの時の怪我は、もう完治したことじゃろう。実は、お主らにいい復讐のチャンスがある。次のキングオヴギャクシーに参加してみないか？ もちろん、あのポルゴも参加するじゃろう。なんだったら、ネオ・ステロイドを注射したり、お主たちを遺伝子レベルで強化してやっても、いいぞ。」

「皇帝閣下、ワタシたち地球人の格闘家にはプライドがあります。ネオ・ステロイドのような薬物や強化手術に頼らなくても、あのポルゴをしとめてみせます。伝説の不死鳥の名にかけて誓います。」

「ボクもネオ・ステロイドに頼らずとも、ポルゴに勝ってみせる自信ありマース。ジュン兄さんと一緒でしたら、百人力デース。皇帝閣下、ボクたちのために高重力ルームをご用意していただけますか？」

「何、高重力ルームだと。お主たちはそこまで本気を見せるのか？ とりあえず地球の 10 倍の重力に設定してある部屋を用意しよう。スイッチを捻れば、あと 10 倍程度は調節可能じゃ。低重力に慣れきった我々火星人には全く考えられない世界だが。」

　2 人の格闘家を部下に高重力ルームに案内させると、火星皇帝は手元の電話で、科学者のドクター・トリックを呼ばせた。

「ドクター・トリックよ。例のものは用意できたか？」

「ハイ、二体共です。一体は地球で拉致してきた女性格闘家に強化手術を行ったものです。二体目は我々の科学力が生み出したキラーマシンです。一体目には洗脳マスクをかぶせて、ポルゴの戦闘データと対策をインストールしています。もちろん、火星皇帝閣下への忠誠も誓わせています。地球での記憶は全て削除してあります。キラーマシンの方は、その内蔵コンピュータにポルゴの格闘データを全てインプットしてあります。」

「なるほど。さすがは、ドクター・トリック。今後の研究費も弾ませてもらおう。ただ、インセンティヴ報酬に関しては今度のギャラクシーの結果次第だが。」

「全てわかっております。火星帝国の科学の発展と皇帝閣下のために。」

「期待しておるぞ。では、さがってよい。」

　火星皇帝は今度のギャラクシーでのポルゴ排除のために、強化人間とキラーマシンで勝負を賭けていた。地球の格闘家を金で雇ったのはダミーだった。既にポルゴに敗北している２人は本来ならば用済みだった。彼らに声をかけたのは、皇帝の争い好きな性格と地球人たちの感情の力、復讐への憎悪の力を試してみたかったという理由からだ。

　金星フロンティアではポルゴとミスター東郷達が修行に入っていた。ミスター東郷はまず、ポルゴに古流柔術の４つの型、それぞれが 12 本の技からなっているが、それを確認させた。ポルゴが型を正確に１つ１つ再現してゆくと、ミスター東郷は弟子の実力に満足感を覚えたようだった。次にミスター東郷はパンチングミットを持つと、ポルゴにパンチのコンビネーションを確認させた。ワンツー、フック、アッパー、それに肘打ちが爽快にミットを打っていった。今度はキックミットを大腿部の前に構えると、ローの練習をさせた。

　次は脇に構えてミドル、顔面の前に構えてハイを打たせた。

「これで、基本の確認は終わりじゃ。これからは本格的な練習に入る！ 全身の気を高めるのじゃ、ポルゴ！」

　ミスター東郷はミス・ワカマツに用意させた特別なミットに持ち替えると、ポルゴにミドルキックを促した。

「ポルゴ、このミットは通常のミットの 10 倍の威力に耐えられるよう強化した素材で作られておる。ミーティングの瞬間、気を爆発させるのじゃ。いいな！」

　黙々とポルゴはミドルキックを数十発ミットに叩き込んだ。

「バカ者！ ポルゴよ、お主はまだ力をセーブして蹴っておる！ 本気を出すのじゃ。ワシがミットごと吹っ飛ばされるようなケリを放て！ まだお前の表情には甘えがある！」

　そう言うとミスター東郷は鬼の表情で、足元に放置してあった竹刀を手に取り、ポルゴの顔面を容赦なく殴りつけた。

「そうだ。その面だ。今度のギャラクシーに勝つには、お主の本気の力が必要なのじゃ。」

　ひたすらポルゴがミットにケリを入れると、ミスター東郷はフイにミットを放り投げた。

「甘いな。まだ甘い！ 甘過ぎる！！ 今度はワシが直々にスパーリングで稽古をつけてやろう！ ポルゴよ、グローブをオープンフィンガーに付け替えるのじゃ。あとはレガース（ 脛当て ）と膝パッドも忘れずにな。スパーはルール無用じゃ。どちらかが一本取るまでが、ワンラウンドじゃ。それを５ラウンド行う。いいな。」

　ミスター東郷は５ラウンド全てを取った。ポルゴに一本も取らせなかった。

「お主、ワシが老いぼれたと思って手を抜いているのではないだろうな！ まあ、いい。お前の実力は、これから行う実践練習で全てが明らかになる！ これからミス・ワカマツの銀河ワニ牧場に行くぞ！」

　ポルゴとミスター東郷はミス・ワカマツが経営する銀河ワニ牧場に行くと、十二分に成長しており、ワニ革バックやスーツへ運命が決まっている 20 匹の銀河ワニ達が放し飼いになっている第３牧場に案内された。

「ポルゴよ。たまにはミス・ワカマツの仕事をお主が手伝ってやるのもいいだろう。ここにいる銀河ワニ 20 匹を全て素手で倒せ！ もちろん、ワシも最小限の援護はする。いいな！ これは師匠のワシの絶対命令じゃぞ！」

　第 3 牧場に入ったポルゴたちの前に、さっそく体長 10 メートルはあろうかという活きのいい銀河ワニが立ちはだかった。

　銀河ワニは大きな口を空けて、ポルゴに向って飛び掛ってきた。

　ポルゴはサイドステップでワニの第一波をよけると、銀河ワニのこめかみにあたる急所めがけて左のハイキックを放った。ミーティングの瞬間、全身の気を爆発させた。

　はずだった。

　しかし、銀河ワニはぴんぴんしていた。仲間の異変に気がついた銀河ワニたちが５匹でポルゴたちを取り囲んでいた。

「ポルゴよ、今のは当たり所が悪かった。ちょっとポイントが外れていたぞ。蹴りってのは、こういう風にやるもんだぜ。」

ミスター東郷は一足で飛び上がると、回転回し蹴りを放った。左足を軸に右ハイを放ち、右足が着地する前に今度は左のソバットを放った。これで２匹の銀河ワニが気絶していた。

ミスター東郷は一歩踏み込み、３匹目の銀河ワニに左の裏拳を放った。返す刀で右のサイドキックで４匹目を仕留めた。

「やってみい。ポルゴよ。正拳突きでお前の獲物を仕留めるんじゃ。」

ポルゴは最初に彼に襲い掛かった銀河ワニに右ストレートを放った。銀河ワニは鼻血を流して気絶してしまった。

「泡盛でもロックで一杯やる。では、ちゃんと仕事をするんじゃぞ。」

「やれば出来るじゃないか？ 残りの 15 匹は全てお前が片付けろ。ワシは温泉に入ってくる。」

　ミスター東郷はそういい残すと、銀河ワニ牧場を後にした。檻を管理している警備員に、全ての銀河ワニが大人しくなるまで、ポルゴを出してはいけないと固く言い残すことを忘れなかった。

「クッソー。あのアル中オヤジ。俺を殺す気かよ！ 幾らなんでも 15 匹の銀河ワニを素手で倒すなんて無理だろ！ あんなボケジジイにパートナーを頼んだ俺が悪かったぜ。」

「誰がアル中だと。ボケジジイとはどこに居る？ ポルゴよ、言葉を慎むんじゃな！」

　檻の外から様子を見ていたミスター東郷は鬼の形相で叫んでいた。

　このやりとりを聞きつけた残りの銀河ワニが 15 匹、円を描くかのようにポルゴを取り囲んでいた。ポルゴは深呼吸をすると、全身の気を一気に開放した。ポルゴを取り囲んでいた銀河ワニ達はプレシャーを受けて、５メートルほど後退した。そのスキを踏み込んだポルゴは、右ストレート、右サイドキック、左バックキックというように的確に打撃を当てると確実に銀河ワニ達を眠らせていった。

これがミスター東郷の地獄の特訓だ。あっという間に５ヶ月が経過した。

第 32 章 裏

　復活して第２回目のキングオヴギャラクシーの開催が一ヶ月後に迫っていた。俺とミスター東郷は試合に備えて、修行に励んでいた。

「ポルゴよ。遠慮なく打って来い！」

　俺はワンツーを放った。ミスター東郷は俺の右ストレートをキャッチすると、そのまま左手で俺の右手首を極め、右腕で俺の胸元を掴んで腰を入れて放り投げた。豪快な当て身投げが決まっていた。

　俺は懲りずに立ち上がると、左手でダミーの目潰しをかまして、そのスキに右ハイを放った。決まったな、と思った瞬間、ミスター東郷の体を軸に俺は宙を舞っていた。

　その後も左のミドルや右のフックなどを俺は放ったが、例外なく同じ結果だった。ミスター東郷との実力の差は歴然だった。

　しかし、俺もかつてミスター東郷から古流柔術のそれぞれ 12 本の技からなる４つの型を全て習い免許皆伝を頂いたはずだった。その中には当身技、投げ技、関節技、絞め技全てが含まれていると俺は思っていた。四十八手が相撲と同じで、俺の習ってきた古武術の全てだと思っていた。

「なぜお主がワシの技を全て食らってしまっているか、お主も自問しているところじゃろう。お前にワシが教えてきた技は、実は全て表の技だ。表の四十八手には全て完全な返し技が存在する。それが裏の四十八手じゃ。ポルゴよ、お主に与えた免許皆伝は表の技だけじゃ。ワシの伝承してきた古流柔術は奥義秘伝書に裏四十八手まで記されている。これからお主には奥義秘伝書の裏四十八手を伝授しよう。」

　俺が今までどんな相手の打撃も切り返すことが出来ると習ってきた当て身投げには、もちろん返しの裏技が存在していた。そして、表の当て身投げを全てマスターした者のみが使いこなすことの出来る必殺の裏の当て身投げをミスター東郷は身をもって教えてくれた。

　裏の当て身投げは、返し技がたとえ存在していたとしても、常人には切り返すのが不可能な技だった。

　ミスター東郷は奥義秘伝書に記されているという技の数々を全て俺に教えてくれた。そのほとんどが一歩間違えれば相手を死に至らしめるという強力な破壊力を持つ禁じ手ばかりだった。あまりに危険な技が記されているという奥義秘伝書の在り処についてミスター東郷は決して話してくれなかった。しかし、俺は身をもってその内容を叩き込まれた。

「ポルゴよ、裏四十八手の型は、所詮は全て型じゃ。それを学んだ上で、実践に生かしてこそ真の実力になる！ 裏四十八手の技をそのまま相手に用いれば、それが原因で相手を死に至らしめることがある。我々が目指すのは、表の型でも裏の型でもなく、それらを統合したより上位での実践じゃ！ 古流柔術の九十六手全てを自分の物とした上で、独自のアレンジを加えるのじゃ。その先に、あの銀河の大王にも勝てる道がある。」

「ミスター東郷、しかし、ただ幾ら古流柔術の技を磨いたところで、銀河の大王を倒すためには、ギャラクシーウェーブの気をまともに食らっても大丈夫な強力な気の力を養成すべきだと思います。」

「ポルゴよ。お主、まだまだじゃの。裏四十八手は人間の気の力を最大限に引き出す型でもあるのだ。一見単純に見える裏の型第一番の投げ技、柳流れの動きそのものが、実は人間の気の流れを象徴しているのだ。つべこべ言わんと、型の練習に打ち込め！ その後でみっちりワシがスパーリングで稽古をつけてやる！」

　俺達が銀河ワニ相手に修行を行った成果で、ミス・ワカマツの牧場ではワニ革の大量生産に成功していた。俺達は野生の銀河ワニにも手を出すようになり、ミス・ワカマツは高価な銀河ワニフェロモンを使用せずにワニ革を集めることが出来、ホクホク顔で喜んでいた。最終の調整は一ヶ月続いたが、その間にも銀河ワニとの戦いで自分のレベルアップが実感できた。

「ポルゴよ。お主の実力も大分ついてきたな。ワシの若い頃と比べるとちと不安じゃが、まあ好しとしよう。明日の月への直行便で発つ！ 準備をしておけ！ ところで、ワシのリングネームじゃが、何かいいものはないかのう？」

「ミスター東郷では、ご不満で？」

「ワシも昔、ミスター東郷の名で火星人たちや地球の格闘家を震え上がらせたことがある。しかし、若返りに成功したワシとしては、リングネームもちょこっとだけ新しくリフレッシュしたいのじゃ。」

「それでは、以前のミスター東郷以上に強力かつ凶暴なミスター東郷ということで、バイオレンス東郷はどうでしょうか？」

「それじゃ！！ ワシはバイオレンス東郷としてエントリーする！ ポルゴよ。お前も何かリングネームをつけてみてはどうじゃ？ ミスター・ポルゴ。いや、ポルゴ大王。あるいはポルゴ総統なんていうのはどうじゃ。」

「私は自分の名前でエントリーします。ポルゴの３文字で十分でしょう。チーム名はどうなさいますか？」

「それはもちろんイケメンファイターズで確定じゃろう！ 全地球の若い娘、いや全銀河のナイスギャルにアピールじゃ。」

「ミスター東郷、いやこれからはバイオレンス東郷と呼ぶことにしましょう。そのチーム名は幾らなんでも。タッグチーム名はミス・ワカマツや貴方の御家族と相談して決めましょう。」

「了解じゃ。明日は出発になる。今日は早めに休んでおくのだ。」

　こうして俺達師弟は一旦別れて、明日の出発に備えることになった。

第 33 章 エリカ

　グレート・アジア 13 世は地球でレスラー仲間に声をかけてみた。女子・男子を問わず最強のプロレスラーであるグレート・アジアにはプロレスラーの友人はあまりいなかった。あまりに彼女は強すぎたのだ。そして誰よりも孤独だった。もちろん、彼女が代表を務めるウェヌスジムには女子レスラーを中心に地球を代表するレスラーが何名か所属していたが、彼女達は銀河最強を決めるキングオヴギャラクシーに参加するには、やや力不足と言わざるを得なかった。

　黙々とヒンズースクワットを繰り返し、足元で汗の水溜りを作っている彼女の前に一人の強烈な肉体が現れた。

「エリカじゃないの？ 久しぶりね。あなた、最近フリー宣言したって聞いたけど？ 調子はどう？」

「アジア、私の目標はあなたよ。団体の枠を越えて、地球の７色のベルトを全て所持するあなたに挑戦するために、私はフリーになった。しかし、今日はそのことを話に来たのではないわ。プロレスが銀河最強の格闘技であることを示すために、あなたにパートナーになってもらいたいと思って、あなたのジムまで会いに来たの。」

「えー、ウッソー、マジ？ エリカとだったら私絶対優勝する自信があるわ。一緒に頑張りましょう。」

「じゃあ、交渉成立ね。念のために言っておくけど、あなたとタッグを組むのはこれっきりよ。ギャラクシーが終わったら、私たちは敵同士。あなたを倒すのはこのわたしということを覚えておいてね。」

「ま、なんでもいいけど、頑張りましょうね。」

「前回のギャラクシーでのあなたの戦いは生で見せてもらったわ。その時の闘いの内容を踏まえて、たまたま昔のプロレスのビデオアーカイブを持ってきたから、後でよかったら参考にしてね。」

女子プロレスのライバル団体のトップが置いていったビデオアーカイブは数世紀前、地球で行われたプロレスの団体、パンクラチオンの試合の映像だった。グレート・アジアはトレーニングを終えると、その映像を鑑賞した。パンクラチオンでは、全ての試合が３分以内に決着がついていた。相手が KO するか、ギブアップするかで決着がつく。乗るか反るかのシュートプロレス、それがパンクラチオンだった。

アジアはパンクラチオンの映像を見終えると、一人で物思いにふけっていた。トップのプロレスラーである彼女は、常に試合会場に来場してくれた全てのファンを満足させることを最大の目標にしてきた。プロレスラーにとって強いことは最低条件であり、さらに会場にいる全てのファンを満足させることが課せられていた。相手の技を全て受けきり、相手の実力を全て引き出させた上で、最後は完全無敵のフィニッシュホールドで決める。それがプロレス王者であるグレート・アジアに課せられた使命だった。パンクラチオンのように数分で、いや数秒で相手に何もさせず、一気に関節を取って試合を決

めることは彼女にとってあまりに容易なことだったが、プロフェッショナルなレスラーとしての彼女がそういう試合構成を拒絶していた。

躊躇なく一気に決める、一瞬で相手を落とす、そういう勝負を如何に重ねてきたかが、前回のギャラクシーでの対ポルゴ戦での勝敗に大きく影響していた。相手の腕を躊躇なく折ること、それを常態としているのが、あのポルゴの生き様だった。あの時、アックスボンバーからチョークスリーパーに移行した時、相手にギブアップをさせず、容赦なく一瞬で落とせば、あの試合は貰っていた。そのことにレスラーであるエリカは気付いていたのだった。

グレート・アジア 13 世はパンクラチオンのビデオを見終えると、エリカに電話を掛けた。

「私よ、グレート・アジア。明日からウチのジムに来てくれる？ 一緒に強化練習をしましょう。絶対無敵のツープラトンも編み出さないとね。」

こうしてギャラクシーの優勝候補筆頭に掲げられる最強プロレスラーのチームが誕生した。

第 34 章 西郷

銀河の大王は銀河帝国の公務を首相に全権で委任すると、第２回キングオヴギャラクシーの半年前に、自家用の量子宇宙船で地球圏を訪れた。

「あなたが大東流合気柔術師範の西郷詩郎先生ですね。私、前に連絡を差し上げた銀河帝国議会で議長をしているギャラクティカ・マグナという者です。実は西郷先生にお願いが在って来たのですが。」

「キングオヴギャラクシーのことでしょう。いいでしょう。あなたとだったら、優勝が狙える気がします。」

「もしよろしければ、私の国で一緒に合同練習が出来ればと思っております。私の国では最先端の科学に基づく練習器具が利用できます。私の仕事上の都合で、是非、西郷先生にはあと半年、一緒に私の国で過ごしていただければと思っております。もちろん、無理にとは言いませんが。」

「もちろん、私もそのつもりです。是非、銀河帝国にお邪魔させてもらいましょう。」

　銀河の大王ほどの男が先生と呼ぶ相手、それが西郷詩郎だった。彼が身につけている合気柔術は単なる柔術ではなく、全ての人間に本来備わっている潜在能力である気を最大限引き出す技術体系であった。そして、彼が先生と呼ばれるほどの実力を持っているのは、単にその凄まじい気の潜在能力だけではなく、彼がかつてジパングで四天王と呼ばれた最強の格闘家の子孫であり、かつて四天王と呼ばれた彼の先祖を遥かに凌駕すると言われている実力を彼が保持していることだった。

　銀河の大王はかつての対戦から、地球最大のライバルであるポルゴが気の技術を完全に身につけており、古流柔術をベースにした総合格闘技の使い手であることを見抜いていた。西郷詩郎は古流柔術から進化した合気柔術と柔道の両方の奥義を全てマスターしている地球の至高の使い手だ。銀河帝国に西郷を案内することで、彼は最高の環境で最高のトレーニングを経験することになる。自ら主催し、第２回目となるキングオヴギャラクシーをぶっちぎりで制覇するために、銀河の大王は自ら地球圏に足を伸ばして、西郷をスカウトしたのだ。

第 35 章決戦前夜

　ついに、地球の月（ ルナ ）で３代目の銀河の大王が主催する第二回キングオヴギャラクシーの予選の火蓋が切って落とされた。ポルゴとバイオレンス東郷のチーム、グレー

ト・アジア 13 世とエリカの女子プロレス最強チーム、３代目の銀河の大王と西郷詩郎の銀河帝国チーム、ジョー・ヨージ 12 世とジュン・バードのゴールデンシューターズ、火星帝国代表の匿名希望チーム、その他３チームの合計８チームが決勝トーナメントまで残った。

　決勝トーナメント参加チームは改めてチーム名を申告し、２対２のサドンデスタッグマッチ形式の試合を行うことが主催者である銀河の大王からアナウンスされた。このサドンデスタッグマッチのルールは、KO、ギブアップ、リングアウトでどちらかのチームの二人共が負けるまで行う。一人でも上記３つのパターンで敗北した場合、そのチームは残りの一名のみがリングで闘うことになるという過酷なルールだった。敗者はリングから去らねばならない。たとえチームメイトがまだ闘っていたとしてもだ。対戦チームの組み合わせは厳選なる抽選で決められた。

「バイオレンス東郷、チーム名はホントにチーム・ファルコーネで良かったんですか？」

「そうじゃ、ポルゴよ。ワシらは空の王者鷹（ タカ ）のように最強のバトルを行うんじゃ。

　第一回戦は火星帝国チームじゃな。奴らだけは絶対叩きのめそう！」

「了解しました。」

　ポルゴとバイオレンス東郷のチーム・ファルコーネの名称はかつて数世紀前に地球でマフィアと闘い正義のために殉職したファルコーネ検事をリスペクトして名付けられていた。地球で反火星パルチザンとして多くの犠牲を払い戦ってきた彼ら師弟にとって、火星皇帝率いる火星人たちはみなマフィアのような連中で、いかなる犠牲を払っても地球の平和のために排除すべき相手だった。

「エリカ、チーム名はどうする？ 私はかつて初代のグレート・アジアがキングオヴギャラクシーで名乗ったチーム名、ヘルリベンジャーズで登録したいんだけど。」

「わかったわ。決勝トーナメントに行く前に私と約束してくれる？ たとえどんなに楽勝な相手であっても、絶対一人では勝負を決めないで。極力二人で力を合わせて、練習したとおり、ツープラトンで勝負を決めましょう。シャイニングヘルクラッシュやシャイニングヘルドロップで勝負を決めるのよ。この戦い、ローンバトルはあまりに危険だわ。いいわね。」

「自信家のあなたがそこまで言うならいいわ。約束しましょう。どんな時もお互いに協力を惜しまないと。」

「ジュンさーん。一回戦の相手はなんと二人とも女の子デース。きっと楽勝ですネー。ほんとはグラウンド（ 寝技 ）で決めたいデースけど、セクハラにならない程度に頑張りましょう。」

「ヨージ君、たとえ女性が相手だからといって、油断は禁物です。相手は仮にも地球のプロレスの現役チャンプ。我々も本気でかからないと痛い目見ますよ。もちろん、私も試合の後にデートに誘うことは忘れませんが。全ては我々の勝利の後です。」

　ゴールデンシューターズは一回戦の相手が女子プロレスチーム（ ヘルリベンジャーズ ）であると知って、いつになくご機嫌だった。ヨージは試合中のセクハラ攻撃、ジュンは試合後に対戦相手をデートに誘うチャンスを虎視眈々と狙っていた。

「西郷先生、一回戦の相手は無名チームです。楽勝ですかな？」

「我々はシードでもいいくらいの実力です。しかし２回戦（ 準決勝 ）の相手の方が問題ですな。ゴールデンシューターズはかなりの実力者で技巧派チームです。一方のヘルリベンジャーズのグレート・アジア 13 世はかつてギャラクシーの常連だった初代グレート・アジアの子孫です。パートナーのエリカはグレート・アジア 13 世に唯一匹敵する実力を持っているとされるプロレスラーです。決して油断はなりません。あのポルゴとバイオレンス東郷のチームと別ブロックということは、我々が彼らと戦うのは決勝という最高の舞台においてのみです。バイオレンス東郷は私に唯一匹敵する地球の武術家です。彼の師匠の断末魔の叫びは、今でも忘れられません。」

「西郷先生、あなたはあの東郷の師匠に闘って勝ったのですか？ それははじめて聞きましたナ。」

「昔の話です。古流柔術とそれから発生した柔道や合気柔術の使い手は、お互いに闘って雌雄を決する運命なのです。昔は私のほうが、東郷の師匠より実力が上だった。ただそれだけの話です。」

西郷詩郎は広大な銀河帝国で最強を誇る銀河の大王ほどの使い手が一目置くほどの達人だ。その隠された実力は決勝トーナメントで明らかになる。

明日の午前から第２回キングオヴギャラクシーの決勝トーナメントが始まる。全ての参加者 16 名は虎視眈々と優勝と銀河最強チームの名を狙っていた。この大会は太陽系および銀河帝国に生中継され、宣伝効果は絶大だった。火星皇帝はこのトーナメントに世界の注目が集まっているスキを利用して、陰で太陽系支配のための布石を確実に打っていた。火星皇帝の恐怖の計画はいずれ白日の下に明らかにされる。

第 36 章復活の鷹

第２回キングオヴギャラクシーの決勝トーナメントの火蓋が切られた。一回戦はポルゴ、バイオレンス東郷のチーム・ファルコーネと火星帝国代表チームだった。

地球の名曲、GLORIA（ 栄光 ）が月面コロシアムの会場中に鳴り響くと、まずは青コーナーからポルゴがダッシュで入場した。今回のリングは４本ロープの四角いジャングルだった。ポルゴがトップロープとセカンドロープの間に隙間を作って、バイオレンス東郷を待っていた。

　一瞬、リングの照明が消され、次の瞬間にはバイオレンス東郷がリングインしていた。全盛期の姿をそのまま保っている東郷の姿に観客達は溜息を漏らしていた。バイオレンス東郷の背後には強烈なオーラが支配していた。

　火星の国歌とともにまず火星皇帝がリングに入場すると、マイクを握り会場にこう宣言した。

「親愛なる太陽系の諸君および銀河帝国の諸君、私が火星皇帝じゃ。今回は私の帝国の予選を見事勝ち抜いた猛者を紹介しよう。レッドソルジャーズ、カモン！」

　最初に銀のマスクを着けた女性がリングインした。次にかなり体格のいい大男がリングインした。

「マスクの選手はレッド・スコーピオン。こちらの大男はセカンド・フォボスじゃ。彼らは私の国の科学的トレーニングで強化され、本大会の優勝候補筆頭と考えておる。大観衆の諸君、どうぞ私の国の代表に盛大なご声援を！」

　言い終わると火星皇帝はリングサイドに陣取っていた。さすがに月世界では生命の杖のスイッチをオフにしているようだった。

　レッド・スコーピオンが強化人間、セカンド・フォボスがキラーマシンであることは俺達の眼には明らかだったが、そんなことはこの試合とは関係なかった。

　強いほうが勝つ。

　それでいいのだ。

「ポルゴよ。この試合は全てお前に任す。ワシはコーナーで高みの見物と行かせてもらおう。」

リングには俺とレッド・スコーピオンが構えていた。そのまま運命のゴングがしたたかに打ち鳴らされた。

俺はアップライトに構えた。スコーピオンはレスリングベースの低いガードの構えだった。構わず右のハイキックで襲い掛かる。スコーピオンは左手一本で渾身の俺のハイをガードすると返す刀で右のミドルを合わせてきた。ガード越しに俺の左手に激痛が走る。常人（ レスラー ）の 1.5 倍の力はあった。俺はバックステップで間合いを取ると、電光石火の低空タックルにいった。タックルを完全に見切って、膝蹴りで返すスコーピオン。また俺の額に激痛が走る。

決勝一回戦で手の内をさらすのはあまりに危険な選択だった。俺は仕方なく相手の格闘スタイルに合わせることにしてお互いに組み合った。相手はすかさずヘッドロックを掛けて来た。俺はヘッドロックを強烈なバックドロップで切り返す。そのままマウントを取る。

間奏曲のつもりで俺はワンツーを放った。俺の渾身の右ストレートをフォボスはキャッチすると、そのまま右の手首を極めて、俺の胸倉を掴んで腰を入れて半身で投げた。俺の得意技当て身投げを相手はマスターしていた。

「ポルゴよ。そやつはお主の表の四十八手を全て見抜いておる！ 仕方ない、裏構えに切り替えて、裏の四十八手で応戦しろ！」

確か火星皇帝の宮殿でヨージ 12 世と闘っていた時、俺たちの戦いは全て隠しカメラで撮影されていたかもしれない。そのことを思い出した俺は、オーソドックスからサウスポーに構えをスイッチして、拳の位置を微妙に変えた。

プログラムにない行動をとった俺に対して、フォボスの表情に動揺が走った。タックルで攻めてきたフォボスの顔面に左のコークスクリューキックを叩き込むと、そのまま相手のバックに回った。この一瞬でフォボスの右腕を極めた俺は、右手でフォボスの右腕を極めたまま、裏一本背負いでフォボスを完全に投げきった。不自然な角度で顔面からマットに叩き付けられるフォボス。そのままダウンカウントが 10 まで数えられる。俺たちチーム・ファルコーネが緒戦を決めた瞬間だった。

裏一本背負い－それは通常の一本背負いが相手の正面から掛ける技であるのに対して、裏一本背負いは相手の腕を決めたまま、背後から一回転させて相手を投げる非常に危険な技だった。バイオレンス東郷の伝説の奥義秘伝書の裏四十八手に記されているという禁断の技だった。

火星皇帝は怒りの表情で生命の杖を持ったまま立ち上がると、俺たちをキッと睨みつけて会場を後にした。キラーマシンは仕方なかったが、地球人の女性に洗脳マスクを着けて無理矢理闘わせる火星皇帝の汚いやり方に、俺たち師弟は怒りを覚えていた。

第 37 章新生ヘルリベンジャーズ

続く２回戦は、黒いマスクをした背の高い謎の二人組、ブラックホールズがあっさり秒殺で無名チームを葬っていた。

３回戦がリングアナからコールされると、まずは青コーナーにジョー・ヨージ 12 世とジュン・バードのゴールデンシューターズがリングインした。彼らは黒のストロングスタイルのタイツに、ゴールドのシューティングレガースを着用していた。オープンフィンガーもゴールドだった。ジュンが入場した瞬間、会場の地球人女性の観客から割れんばかりの黄色い声援が送られた。

一方、会場にヘルリベンジャーズの懐かしのテーマをロック調にアレンジした新曲が鳴り響くと、新生ヘルリベンジャーズのグレート・アジア 13 世とエリカが入場した。彼女達は黒のデビル風アクセントのペイントでコーディネイトしており、ヘビーアーマーを着けて入場した。先に入場したエリカはヘビー級のボディで石油缶を持って入場した。続いて入場したグレト・アジアは体重をジュニアヘビー級クラスまで絞り込んでいた。短距離走の選手を思わせるような、洗練されたフォルムの美しい肉体に会場全体は溜息をついていた。

「ジュンさーん、ここはワタシ一人に任せてもらいマース。こんな美しい女性と闘えるなんてチャンス滅多にありまセーン。ワタシ全力で頑張りマース。」

　そう説明してジュンをコーナーに追い出すと、ヨージ 12 世はアップライトに構えていた。

　赤コーナーからはエリカが出てきた。

　痛烈にゴングがかき鳴らされた。

　ヨージはゴングと共に表情を一変させると、鋭い視線で右のハイキックを放った。エリカは左手で右ハイをキャッチすると、そのまま間合いを詰めてキャプチュードを放った。ダウンしたヨージにコーナーからグレート・アジアがダイビングエルボーをかました。そのままアジアはヨージに首４の字、エリカはフィギュアフォーレッグロック（ 足４の字 ）でヨージを捉える。たまらずジュンがストンピング（ 踏みつけ ）でカットに入る。アジアとジュンはコーナーに素早く戻った。

「ジュンさん、手出しは無用です。ワタシは名門蛇の穴出身のファイターです。女性レスラー二人を相手にしても十分闘えることをここで証明します！」

　エリカはロープの反動を利用して、渾身のラリアットを放った。すかさず脇固めに切り返すヨージ。エリカは体を回転させて、脇固めを逃れた。そのまま反動を利用してスタンドに持ち込むと、エリカは右ストレートを放つと見せかけて、必殺の左のバックハンドを放った。エリカの裏拳が的確にヨージのこめかみを捉える。そのままヨージはダウンした。ダウンしたヨージの頭を股間に挟んでエリカはヨージの逆さ吊りの体勢で抱え上げる。

　そのまま強烈なドリル・ア・ホール・パイルドライバーを放った。

－ユニバーサル・レスリングは確かに打・投・極のバランスが取れたスタイルだわ。しかし最近は打撃と関節技の練習に力を入れるばかり、レスラーの基本である肝心な受身の練習を忘れているわ。このままプロレスの投げ技でこの勝負、決めるわ！　－

エリカはそう思念した。

ダウンしたヨージがそのプライドで四つん這いのまま立ち上がろうとしたとき、エリカは肩車の姿勢でヨージを強引に抱え上げた。コーナーの最上段では、グレート・アジアが構えていた。エリカに肩車されたヨージの鳩尾にアジアは左のジャンピングキックを見舞うと、左足を支点にして右の回し蹴りでヨージの顔面を的確に捉えた。そのままリング外へ吹っ飛ばされるヨージ。シャイニングヘルクラッシュがクリーンヒットした瞬間だった。

すかさずジュンがリングインするとテコンドーベースの構えを取った。試合の権利を持っているエリカに強烈な右のミドルを放つ！ エリカの左腕に激痛が走った。相手のガードを破壊するような強烈な力をジュンは高重力ルームで修行することで手に入れていた。そのままジュンは左のロー、右ハイ、左のインローと的確に打撃を放ってきた。

－せめて相手を捕らえて組み技に持ち込むことが出来れば－

そう思って無理に踏み込んだエリカの出鼻を挫いたのが、ジュンの右ローキックだった。一瞬かがみこんだエリカにジュンは非情な右の踵落し（ ネリチャギ ）を脳天にみまった。たまらずエリカはダウンする。

「エリカ、タッチよ。はやくコーナーに逃げて！」

コーナーから右手を差し伸べるアジアに起き上がって近寄ろうとしたエリカにジュンは意打ちの水面蹴りを放って再びダウンさせた。仰向けになったエリカの顔面を鬼の形相で踏みつけるジュン。たまらずグレート・アジアはノータッチでコーナーからミサイ

ルキックで迎撃する。やっと起き上がったエリカにタッチを成功すると、グレート・アジアは拳を顔面の前に突き出して構えた。

「ジュン・バード、あなたの相手は私よ！」

　ジュンは一瞬前髪をかき上げると、すぐさま右のローキックを放った。そのまま一歩の踏み込みで間合いを詰めると、強引に蹴り技の嵐でアジアをコーナーまで追い込んだ。そのままジュンは中低空ドロップを決めると、さらにサマーソルトキックを放った。ジュンの必殺技フェニックスライジングだった。アジアはジュンのサマーソルトを空中でキャッチするとそのままジュンをパワーボムの体勢で天高く逆さ吊りに抱え上げた。

　トップコーナーには驚異の回復力で復活したエリカが陣取っていた。エリカはトップコーナーでジュンの両足を掴むと、そのまま合体技のスーパーパワーボムを決めた。ダウンするジュン。アジアとエリカはお互いに反対方向のロープに向かってダッシュすると、ロープの反動を利用して、立ち上がったジュンに強烈なダブルラリアットで板ばさみにした。ダウンしたジュンを二人で強引に抱え上げるとそのまま二人で垂直落下ブレーンバスターの要領でマットにたたきつけた。ダブルヘルバスターが決まった瞬間だった。そのままテンカウントが進むと、新生ヘルリベンジャーズの勝利が告げられた。

　続く第４試合では、銀河帝国チームが秒殺で無名チームをしとめた。銀河の大王一人で２人を 50 秒前後でしとめていた。驚異の実力だ。

第 38 章ブラックホールズ

　準決勝第一試合がアナウンスされた。青コーナーにはポルゴとバイオレンス東郷のチーム・ファルコーネが陣取っていた。リングが暗転すると、スモークと共にブラックホールズの二人が入場してきた。彼らはブラックホールの黒いマスクを被り、黒のマントで身を包んでいる大男だ。

　ブラックホールズの一人が言った。

「お前たちには俺たちの本当の姿を見せてもいいだろう。俺はブラック・ホークとでも名乗っておこうか？　片割れはブラック・アニマルだ！」

　ブラックホールズはマスクを脱ぐと、その表情が白日のもとに晒された。先に名乗ったブラック・ホークは般若を思わせる白い顔面で額から短い角２本が生えていた。ブラック・アニマルの方は、額にもう１個第３の目が不気味に光っていた。

「お主達、この世（ ＝太陽系 ）の者ではないな？！」

　バイオレンス東郷が言った。

「如何にも。我々はお前らから見れば異界の者だ。俺たちは銀河を舞台に暴れているマフィアギャラクティカにカネで雇われた殺し屋だ！　ここでお前たちを葬って、銀河の大王を決勝の舞台で公然と処分する！」

「それはワシらに勝ってからの話だろう。まあ、よい。ポルゴよ。お前がまず相手をせい。ワシが出るかどうかは、お前の内容を見て判断する！」

　俺はアップライトに構えると、ブラック・ホークと向き合っていた。ゴングが鳴り響く。

　ブラック・ホークの背後からは恐怖の叫びを思い起こすような暗い思念に包まれた冷たい気のオーラがただよっていた。

「ポルゴ！ 相手に呑まれるんじゃない！ 相手の動きを体で見切るのじゃ！」

　ハッと俺が我に帰ると、ブラック・ホークの強引な右ストレートが俺のこめかみをかすめていた。...やるじゃないか？ 俺は右に体を捻ってさっきのストレートをかわすと、そのまま右のフックで相手のこめかみを打ち抜いた。よろけたブラック・ホークの角を掴むと俺は膝蹴りの応酬に持ち込んだ。すかさずハイキックの高さの膝をブラック・ホークの顔面にひたすら打ち込む。

「バカもん！ 後ろじゃーっ！」

　俺は後頭部に激痛を感じた。ブラック・ホーク相手に膝蹴りを行っている隙をつかれて、ブラック・アニマルのノータッチの右ハイキックをまともに食らってしまった。そのままダウンする俺。容赦なくブラックホールズのストンピング攻撃が俺の体を捉える。

　不意に蹴りの嵐が止んだ。立ち上がった俺が周りを眺めると、ブラックホールズの二人は両者ダウンしていた。ノータッチで飛び込んだバイオレンス東郷が一瞬のスキをついて、右のジャンピングハイキックからの左のソバットのコンビネーションを叩き込んだ。

「ワシが力を貸すのはここまでじゃ。ポルゴよ。あとは自分で始末をせい！」

　ブラック・ホークの方はバイオレンス東郷の一撃で完全にKOしていた。ダウンカウントが告げられると、カウントナインぎりぎりでブラック・アニマルだけが起き上がった。俺はブラック・ホークをリング外に追い出すと、ブラック・アニマルとの戦いに集中した。あらためてブラック・アニマルを眺めると、その脚はバレリーナのように長く、腰が非常に高い位置で安定していた。不気味な第3の眼が俺を睨みつけていた。

　俺はブラック・アニマルにワンツーを見舞った。すかさずコンビネーションで右のミドルを放つ。全て間一髪で見切られていた。焦った俺に追い討ちをかけたのがブラック・アニマルの左ハイだった。俺は蹴りの軌跡を見切れずに食らってしまった。すかさず追い討ちの右ミドルをわき腹に食らってしまう。これも見えなかった。仕方なく俺はバッ

クステップで間合いを取った。

「ポルゴよ。相手の蹴りを目で追おうとはするな！ 相手の気の流れや空気の微妙な振動（ ゆれ ）を掴むのじゃ！！」

　バイオレンス東郷からの激が飛ぶ。確かに相手は眼を３つも持っており、全て俺の動きを見切っている。さらに妖術か何かで、全く見えない打撃技を持っている。

　俺は眼を瞑ると、ひたすら相手の気配に集中した。右のパンチはなんとかすれすれでよけることに成功した。次の左ハイキックを右腕でガードすると、そのまま相手の足首の関節を取りながら左手で相手の胸倉を掴み、裏の当て身投げをみまった。俺は掴んだ相手の左脚を離さずに、そのまま膝十字を極めた。折ってしまおう！ そう思い一気に渾身の力を込める俺。その時、バイオレンス東郷の竹刀が俺を襲った。

「バカ者！ 相手は既に死に体じゃ。無理に相手の脚を折ってどうする？ 放してやれ！ 肘くらいだったら折ってもいい。しかし膝は相手の選手生命に関わる。そんなこともわからんのか？」

　俺は膝十字を解いた。ブラック・アニマルは激痛のあまり失神していた。KO のゴングが鳴らされるとバイオレンス東郷は自らコールドスプレーでブラック・アニマルに応急処置をしていた。

第 39 章初めての敗北

　第２回キングオヴギャラクシー準決勝第２試合がアナウンスされた。青コーナーからグレート・アジア 13 世とエリカの新生ヘルリベンジャーズが入場していた。今回、彼女達はペイントなしの素顔で挑んでいた。その美しい表情に観客達が見とれていると、赤コーナーから３代目の銀河の大王と西郷詩郎の銀河帝国チームが入場してきた。さっそ

くファイティングスタイルを取る西郷。銀河の大王は西郷をコーナーに追いやってこう囁いた。

「地球人の女二人に我々が二人で挑む必要はありません。西郷先生はコーナーで高みの見物でもしていてください。」

　そう言い終わると銀河の大王はリングで構えていた。ヘルリベンジャーズサイドはグレート・アジアがリングインしていた。

「アジア、油断は禁物よ。」

　青コーナーから叫ぶエリカ。ゴングが打ち鳴らされる。銀河の大王は左足を深く折り曲げ、右足を後方に大きく引いて構えていた。そのまま両の掌を合わせるようにして、腰元で全身の気を溜めていた。歴代銀河の大王の必殺技ギャラクシーウェーブの体勢だった。

　グレート・アジアは構わず凄まじい速度の低空タックルを見舞い、大王からテイクダウンをとった。そのままマウントで容赦なく数発顔面に肘を入れると、大王の腹を右足で踏みつけたまま立ち上がった。サッとアジアが大王から離れると、コーナーポストからムーンサルトの体勢でエリカが降って来た。大王は思わず反動で仰け反った。そのままエリカはコーナーに下がった。

　起き上がった大王にアジアは叫んだ。

「銀河の大王、あなたのギャラクシーウェーブは気の充填に時間がかかるのが最大の弱点だわ。あなたとの対戦を見越して、ワタシは今の体までウェートを絞ったのよ！ 私たちのスピードについて行けるかしら？ そろそろタッチしたらどうなの？」

「グレート・アジアよ。ワシはたとえプロレスの統一王者であろうとも地球の生身の女性に絶対負けるわけにはいかんのじゃ。お主ら二人とも、ワシが葬る！」

　言い終わるは否や、銀河の大王は必殺の真・龍拳の体勢に入った。右手を大きく引き腰に拳を溜め、重心を下げられるだけ下げていた。

「食らえー！　これがホントの真・龍拳じゃぁー！」

　グレート・アジアは体を右方向に半身に捻り、大王の真・龍拳をかわすと、そのスキにバックを取った。バックドロップの体勢に入ると、ノータッチでリングインしたエリカが大王の体に左の跳び蹴りを放った。そのままエリカは左足を軸に大王の首を回し蹴りで刈った。同時にアジアは垂直落下式バックドロップで大王をマットに叩きつけた。合体技のシャイニングヘルドロップが痛烈に決まった瞬間だ。

　ダウンした銀河の大王をエリカは三角絞めに捉え、グレート・アジアはヒールホールドに捉えていた。たまらず西郷がアジアとエリカにストンピングを放ちカットに入る。２人が技を解いた時、銀河最強を誇る銀河の大王は落ちていた。３代目の銀河の大王がキングオヴギャラクシーで初めて敗北した瞬間だった。

　西郷がリングで構えると、アジアはエリカにタッチしてコーナーに戻った。エリカは一旦ロープに体をぶつけると、反動を利用して右の豪腕ラリアットにいった。アックスボンバー気味の角度をつけた強力なエリカのラリアットを西郷は当て身投げで切り替えした。素早く立ち上がるエリカ。今度は左のミドルキックを放つ。これも西郷は難なくキャッチして当て身投げで切り替えした。

「やるわね。すべての打撃を切り返す投げ技。それが当て身投げね。しかし、あなたが今たった一人で私たち二人を相手していることを忘れないで欲しいわ。」

　エリカは言い終わると左のダミーのジャブから右のフックを放った。エリカの右手をキャッチして当て身投げに移行する西郷。そのスキにアジアがコーナーからミサイルキックを放った。

　不意打ちにダウンする西郷。そのままエリカが肩車の体勢で西郷を抱え上げ、アジアがコーナーに昇って、シャイニングヘルクラッシュの準備に入っていた。アジアがエリ

カの肩の上の西郷目掛けて跳び蹴りを放った瞬間、西郷はエリカの首を軸に体を入れ替え音速のフランケンシュタイナーを決めた。アジアは目標を失って、リングに不時着していた。凄まじい速度の切り返しのフランケンシュタイナーを食らったエリカはそのままダウンしていた。

「起きて、起きてよ、エリカ！」

　グレート・アジアの叫びも虚しくエリカはテンカウントを聞かざるをえなかった。

　担架で運ばれるエリカを後に、グレート・アジアは始めて見せる新しい構えを取った。

「ワタシもここで自分の気を開放する番ね。本当は決勝まで、気を使った技はとっておきたかったけど。仕方ないわね。西郷さん、あなたの本当の実力がみたいわ。」

　グレート・アジアは拳の先に気を込めて強烈なパンチを放っていった。当て身投げに捉らわれることもなく面白いようにアジアのパンチが西郷の顔面を捉えてゆく。そのまま西郷はアジアのパンチで後退しだした。

「止めよ！　この右ストレートで決めるわ！」

　そう言い放つとグレート・アジアは渾身の右ストレートを放った。西郷は左足を一歩引いて半身になってアジアの右をよけると、そのまま左手でアジアの手首を掴み、右腕でアジアの右腕の付け根を抱え、一本背負いの体勢に入った。右足のつま先でアジアの右の足首の辺りを刈りながら、凄まじい速度でアジアを頭から叩き落した。西郷の得意技一本背負い崩れの山嵐が決まった瞬間だった。グレート・アジアはテンカウントを聞かざるをえなかった。

第 40 章　宿命の闘い

　決勝の前に控え室でバイオレンス東郷と俺は作戦会議をしていた。

「ポルゴよ。既に気付いておるかもしれないが、あの西郷という男、とてもお主のかなう相手ではない。決勝戦はワシが何とか先に西郷を仕留めるから、お主はあの銀河の大王と戦うことに専念するのじゃ。いいな。これは師匠のワシからの絶対命令じゃぞ！」

　俺は自分が西郷に勝てる器じゃないと聞いてショックを受けたが、師匠の提案を即座に受け入れることにした。

　ドアをノックする音が聞こえる。ミス・ワカマツとバイオレンス東郷の娘のレイナが入ってきた。

「ポルゴさん。頑張ってください！！ 今回もポルゴさんに全財産の半分を賭けました。」

「ミス・ワカマツ、また残りの半分を保険で大王に賭けているんじゃないだろうな？ まあ、いい。また決勝となると何かと物騒だ！ 気を付けてくれ！」

「今回はワタシの雇ったボディガードを東郷さんの奥様と娘さんにも付けてあります。安心して闘ってください。」

「パパ、それにポルゴさん。頑張ってくださいね。」

　バイオレンス東郷の娘を見つめる嬉しそうな表情に、今回の彼のギャラクシー参加の理由を垣間見ることが出来た。彼は最愛の娘に自分がリングで闘っている姿を見せたかったのだ。たとえ自分が齢 60 を越えていたとしてもだ。

　試合開始５分前になるとバイオレンス東郷は彼女達を控え室から追い出した。そうして俺にこう告げた。

「ポルゴよ。大王のあのギャラクシーウェーブに対抗するために、まさかお主も光線技で勝負しようと思っておらんじゃろうな？ ギャラクシーウェーブのように気を放出する技はエネルギーのロスが激しい。それに気を掌に溜めるにも時間がかかる。お主はあくまで打撃を相手に直接ヒットする瞬間に気を爆発する発頸で勝負を決めるのじゃ。金星であの銀河ワニと戦った時のようにだ。いいな？」

「わかりました。バイオレンス東郷。」

　同じ頃、３代目の銀河の大王と西郷詩郎の銀河帝国チームも控え室で作戦会議をしていた。

「西郷先生、実はワタシも内緒でとっておきを用意しておきました。１１倍ギャラクシーウェーブという新必殺技です。文字通り通常のギャラクシーウェーブの１１倍の威力のある技なのですが、一つだけ難点がありまして。掌に全身の気を溜めるのにかなりの時間がかかるのです。出来れば先生に先鋒をお願いして、先生の闘っている最中に気を集中して最大限（ マックス ）まで溜めさせていただきたいのですが？」

「わかりました。その技、確かに強いのですな？ チーム・ファルコーネの司令塔はあのバイオレンス東郷です。東郷さえ倒せば、ただ師匠の指示だけでラッキーを掴んでいる未熟なポルゴの攻略は楽勝です。ワタシが先鋒であの東郷に挑みましょう。後は任せますよ。」

ついに銀河最強タッグを決めるキングオヴギャラクシーの決勝がリングアナにより告知された。どちらかのタッグの両者が敗れるまで闘うという最も過酷なルールでの戦いが火蓋を切ろうとしていた。

チーム・ファルコーネがコールされると俺たちは青コーナーから入場した。今回は、上半身は空手着、下は袴で統一していた。なぜ柔道着を着ないかって？ 柔道着は生地が厚く敵に掴まれ易いように出来ているからさ。バイオレンス東郷は入場すると早くも前後左右にステップを開始して、これから始まるであろう闘いに備える。

銀河帝国チームがコールされると、重厚な音楽と共に３代目の銀河の大王と西郷詩郎が入場した。この音楽は確か銀河帝国の国歌のはずだ。西郷も同じく道着に袴だが、あちらは柔道着をジャケットに着用していた。西郷はいつになく鋭い視線でバイオレンス東郷を見詰めると、真っ直ぐに指先をバイオレンス東郷に向けて対戦相手を指定した。

俺と銀河の大王はコーナーに下がり、バイオレンス東郷と西郷詩郎がそれぞれ円熟の構えで向き合った。一瞬、時の流れが止まったと思ったその時、ゴングは打ち鳴らされた。バイオレンス東郷が全身の気を限界まで高めたのが俺にはわかった。いや、それは既に東郷の肉体の限界を遥かに越えているのかも知れなかった。一方の西郷は余裕の表情だ。

バイオレンス東郷はオーソドックスに構え、左は掌を軽く開いて、右は拳を固めたまま構えていた。バイオレンス東郷はいきなりの右ストレートで西郷を襲った。見えないくらい軽く体を動かして東郷の右をかわすと、西郷は右の足払いで東郷からダウンを奪った。

すかさずダウンしたまま両足を西郷の正面に向け牽制する東郷。西郷が一歩下がった瞬間、ハンドスプリングの要領でバイオレンス東郷が立ち上がる。このルチャを思わせる軽快な動作は、とても東郷が齢 60 を超えているとは思えない。

立ち上がったバイオレンス東郷は強烈な右ミドルキックから左のハイキックのコンビネーションで西郷を襲う。西郷は全ての打撃技を間一髪でかわしていた。

「今度はこちらから行かせてもらう！」

西郷は凄まじい勢いでバイオレンス東郷に掴みかかるとそのまま東郷を巴投げに捉える。

空中で一回転してそのまま立ち上がる東郷。再び向き合って睨みあう二人。

西郷は一歩踏み込んで、右の関節蹴りで東郷の右膝を狙う。一歩下がってかわす東郷。

西郷は右半身になったまま東郷に掴みかかった。そのまま左手で東郷の右腕を掴み、右腕で東郷の右腕を抱えると、右の一本背負いの体勢で、なおかつ右足で東郷の右足を刈りにかかる西郷。必殺の一本背負い崩れの山嵐だ。

東郷はがっちり腰を落として西郷の山嵐を受けきると、そのままバックをとって必殺のバックドロップで切り返した。高角度アーチを描いて東郷はブリッジする。西郷は頭からマットにめり込んだ。そのままマウントを取って数発西郷を殴ると、上に上がって西郷に三角絞めを極める。俺はカット防止のためにリングインして大王を牽制していた。一分、二分、三分とそのまま時間が経過する。バイオレンス東郷が両足のクロスを緩め、自ら技を解いた瞬間、西郷は既に目を開けたまま気絶していた。俺たちが西郷の気絶を確認したその瞬間、大王は凄まじい速度でリングインすると一気に俺たち師弟の方向に両の掌を向けた。大王の掌には強烈な熱エネルギーがマグマのように唸っていた。

しまった！ と俺たちが思った瞬間、ぶっぱなしの 11 倍ギャラクシーウェーブが大王の掌から放出された。すかさずガードする俺達。一瞬ガードが遅れたバイオレンス東郷はロープをぶっ飛ばしながらリング外に飛ばされ、そのまま壁にぶち当たってダウンした。俺は何とかリング中央で全身の気を高めて、今の一撃をガードすることが出来た。

「なかなかやってくれるじゃないか？ よくもバイオレンス東郷を。」

「今のも作戦のウチじゃ。貴様の司令塔、バイオレンス東郷さえ倒せば、パワーアップしたワシにとっては、楽勝も同然じゃ。」

俺は全身の気を高めると同時に拳の先や脛に気を集中して、強烈な打撃のコンビネーションを見せる。面白いように、左ロー、右ミドル、ワンツー、フックと俺の打撃がヒットする。やはり修行の成果でスピードに格段の違いが出ているようだった。

俺はやや緩い速度で右のストレートを打って、大王の反撃を誘った。あろうことか大王は俺の右ストレートをキャッチすると、当て身投げで切り返して来た。西郷との修行で身に付けたのだろう。俺は空中を舞いダウンすると、大王の追い討ちを警戒しながら、エビで距離をとって再び起き上がる。

「やるな、あんたも。」

しかし、今のやり取りで俺たちの実力の差は歴然だった。大王はパワーを重視するあまり、スピードが遅くなっている。幾らあの西郷から合気柔術や柔道の技を仕込まれているとはいえ、それはやはり俺の技術レベルからみれば素人同然だった。

「悪いが、ここから先は本気を出させてもらう！」

構えをスイッチして、右前、つまりサウスポーに俺は構えた。普段はストレート専用の右手で体重の乗ったジャブを放つ。次は左ハイだ。いつもはあまり蹴りに使うのが面倒くさい方の脚だったが、サウスポーに構えた今、面白いように体重が乗って左の回し蹴りが打てた。

大王は俺に合わせてスイッチしてきた。これで右の真・龍拳の威力は半減する。俺は大王に右・左のローで撹乱させる作戦に出た。右のローを当て、左のローにいった時、大王は素早くバックステップして見事に俺のローをかわした。俺は勢い余ってそのまま回転して、一瞬、奴に背中を向けてしまった。

大王は一瞬の隙を見逃さなかった。背後を向けた俺に右のショートレンジのラリアットで後頭部を痛打した。痛みに耐えながら、敵に正面を向ける俺。今度は掌底気味に左フックで俺は頬を打たれた。さらに追い討ちで大王は掌底で右のアッパーを打った。そのまま俺はコーナーまで一気に追い込まれてしまった。

　大王は俺をコーナーに追い込むと一瞬大掛かりなバックステップで後退した。次の瞬間、大王の両の掌から閃光が走った。俺の両腕に激痛が走る。咄嗟に両腕を顔面の前に置き、全身の気を集めてガードする俺。何とか大王のギャラクシーウェーブをガードしきることが出来た。しかもほとんど後退することなしに、その場でだ。

－これがバイオレンス東郷との修行の成果なのだな－

　そう思った俺は、裏四十八手で勝負を決めることにしようと決断した。

「あんたのギャラクシーウェーブはもう俺には通用しないよ。もう気をマックスまで溜める時間を与えるつもりはないし、それにあんたの背中にはもう敗者の相が出ている。次に眼が覚めるのは、きっと病院のベッドだろうな。ああ、断言してもいい。それとも、他に何かとっておきがあるのなら、話は別だが」

大王は今の挑発に一気に激怒の表情を見せた。左の前蹴りをダミーに使って踏み込むと、そのまま右の中段フックを打ってきた。俺は左肘で大王のフックを叩き落すと、今度は左の上段フックで追い込んできた。一瞬、俺が左フックに気を取られた瞬間、大王は体をギリギリまで沈めて、渾身の右アッパーの体勢に入っていた。

－また真・龍拳か？　コンビネーションで出してくるとは言え、進歩がないな－

　右足を一歩踏み込んで半身になると、大王の右アッパーを左手でキャッチした。そのまま大王の右手首を小手返しの要領で一気に極めた。大王の右脇が空いた隙に俺は一本背負いの要領で大王の右手首を左手で極めたまま、大王の右腕を俺の右腕で抱え込んだ。そのまま一気に体を沈めて、右足であらんばかりの力を込めて大王の右足首、正確には踝のあたりに足先を引っ掛けて刈り払った。俺の頭上を一回転して頭から倒れる大王。俺は右手首を極めたまま、逆十字に持ち込んだ。山嵐から逆十字のコンビネーション。さっきの西郷の戦いからインスピレーションをもらった技だ。

折れろとばかりに力を込める俺。銀河帝国の期待を一身に背負っている大王はギブアップするつもりがなかった。俺は右腕を極めたまま、大王の上に乗ると、大王の喉下に右膝を押し付け、大王の息の根を断とうとした。ギロチン気味の変形のストラングルホールドだ。大王は両足をバタつかせてもがいていたが、その脚の動きもだんだん弱くなって、ついには止まった。

俺は技を解いて、構えたまま立ち上がると、ダウンカウントがコールされた。エイト、ナイン、テン。ついに銀河最強の大王に前回大会の雪辱を果たすことが出来た。

試合終了を告げるリングが打ち鳴らされると、ダッシュでリングに駆け上がる若い女性がいた。もちろん、ミス・ワカマツだった。銀河トトで無事金儲けが出来たとミス・ワカマツは眼を輝かせて話した。今回の賞金も私に投資してみませんかと言われたが、師匠のバイオレンス東郷と相談してからと話しておいた。銀河の大王に活を入れて起こすと、俺は彼と握手をしてリングを去った。もちろん、優勝賞金の小切手を受け取ることは忘れなかったが。

その後、真っ先に俺はバイオレンス東郷の入院先を訪ねた。担架で病院に運ばれたバイオレンス東郷は一週間ほど意識不明の状態を彷徨っていた。大王の 11 倍ギャラクシーウェーブで吹き飛ばされた際、会場の壁に頭をしたたか打ち付けたからだった。奥さんと娘のレイナの必死の看病の甲斐あってか、一週間後に東郷は意識を回復していた。それまでの間は幾ら俺が病院を訪ねても、親族以外面会謝絶と言って、看護士が決して俺を東郷の病室まで決して通そうとはしなかった。

やっと面会謝絶の看板が外れた東郷の病室を訪ねると、そこには一人の白髪の老人がベッドに寝ていた。体も一回り小さくなり、金星の生命の泉で若返る以前より遥かに老け込んだようだった。

「バイオレンス東郷、おかげさまで３代目の銀河の大王を倒すことが出来ました。これは賞金の小切手です。」

「もうその名前はいい。これまでどおりワシをミスター東郷として呼んでくれ。お主も既に気付いておるじゃろうが、ワシは自分の体に必要以上に無理を強いてしまったようじゃ。その反動で以前より遥かに老け込んでしまったわい。年寄りの冷や水とはよく言っ

たものだな。」

「何をおっしゃるんですか、あなたは十分若いです。たとえ以前より老け込んでしまったとしても、また金星に行って生命の泉に浸かればよいじゃないですか？ すぐに金星行きのチケットをミス・ワカマツに手配させましょう。」

　その時、俯き加減だった東郷の娘、レイナが口を開いた。

「ポルゴさん、もう生命の泉の話はなかったことにしましょう。いくらまた父が若返ったとしても、また無理をして危険な行いをして、結局さらに老け込んでしまうだけです。もう父にはこれ以上危険な行いはさせたくないのです。」

「ワシも十分楽しい思いをさせてもらった。この代償は確かに重いが、時の流れに諍えぬのが我々人間の定め。今のこの結果もワシが欲張って若返りなどというバカなことを考えた罰じゃろうて。また次のギャラクシーが開かれる時は、お主も新しい若いパートナーを見つければよい。いいな。」

「わかりました。ところで、我々の流派の奥義秘伝書はどこにあるのですか？ ギャラクシーも優勝したことですし、そろそろ私も後継者としてその秘伝書に眼を通してみたいのですが。」

「あれか、あれはワシの作り話じゃ。そんなものはもとからどこにも存在しない。強いて言えば、ワシとお主の心と身体（ からだ ）の中かのう。我々の流派はもともと技が四十八手しか存在しないのじゃ。ワシは留守中に自分の師匠が西郷に破られたと聞いたあと、四十八手の技の返し技の研究に没頭した。その結果、ワシが編み出した技がお主に教えた裏四十八手じゃ。古流柔術も時代の流れと同時に常に進化しておる。ワシやお主が生きて、次の世代に伝承し続ける限り、この進化の歴史は止まらない。西郷はかつての我々の流派しか知らなかったし、我々の技が奴の合気柔術や柔道と全く同じように時代と共に変化していることに気付かなかった。それがワシと西郷の勝負の分かれ目じゃったな。あの山嵐にも返し技が存在することは、我々古流柔術家なら誰もが知っていることじゃ。後で聞いたのじゃが、お主もあの大王に山嵐を決めて投げたそうじゃな？ まあ、ワシじゃったらその技にはひっからんじゃろうて。あの銀河の大王も自分の強大な力に頼っているだけで、このワシに言わせればまだまだ未熟じゃわい。もちろんお主もだ。地球

に戻って、そのさらに一歩上を目指すがよい。」

俺はミスター東郷に挨拶を言って、優勝賞金の小切手を封筒に入れて、レイナに預けると病室を辞去した。なぜ小切手を丸ごと師匠に渡したかって？ それは俺も隠し財産から自分にありったけの金をトトで賭けておいたからだった。優勝賞金の半分にも満たない額であったが、それなりに儲ける事が出来た。

ギャラクシー決勝一回戦が終わった後の火星皇帝の表情が気になったが、しかしそのことは一仕事を終えた俺には関係がなかった。いずれ、奴の野望とは決着を完全につける必要がある。師匠のミスター東郷が俺より遥かに上の実力を持っていると言う西郷詩郎のことも気がかりだったが、さっきのミスター東郷の言葉の中に、西郷の攻略法もほのめかされている気がした。

長い人生において俺はやり残した事があったが、それは俺がこれから片付ければいいだけの話だった。ミス・ワカマツをアイウォッチのヴォイスチャットで呼び出して、ミスター東郷に意識が戻って面会を済ませたことを告げると、彼女もほっと一安心したようだった。ミス・ワカマツは一足先に金星フロンティアに戻っていたが、彼女も生命の泉に浸かって、今の 20 台の若さではなく、10 台後半の肌のツヤとハリを取り戻したいと嘯いていた。案外、真面目に秘密の生命の泉の場所を探しているのかもしれない。

俺は「生命の泉に浸かると精神年齢まで若返ってしまうから、まだ精神年齢 10 台後半のミス・ワカマツだったら、ガキのレベルまで戻ってしまうかもしれない、もちろん知能指数もな」と冗談を言うと、彼女は案外本気にしてしまったようだった。こんな他愛もない言葉のやり取りをしながら、俺は地球に戻ることを心の中で既に決めていた。

かりにこの世界の終わりが明日だったとしても、悔いのない生き方をしてみたい。

それはかつての親友ワカマツの言葉であり、同時に今を生きる俺の信条でもあった。

今回のギャラクシーで、既に火星帝国は軍事目的に転用可能なキラーマシンや地球人を強制的に洗脳してファイターにしてしまう洗脳マスクを完成させていることがわかった。

この太陽系には火種が尽きなかったし、それはそれで人類の長い歴史を見ても仕方がないことなのかもしれなかった。しかし、地球人としての俺にとって、太陽系帝国構想をでっち上げ、その皇帝に横滑りで就任することを狙っている火星皇帝の存在は許せなかった。

この太陽系を１つに纏め上げる普遍的理念は専制独裁主義ではなく、他人の自由を侵害しない限り、最大限の個人の自由を認めるという理念の下の民主主義のはずだった。いずれこの太陽系における平和と民主主義のためには地球も植民地である金星フロンティアの独立を承認することが筋だろう。地球が専制独裁主義の火星帝国の民主化のために軍事力を行使することの正当性が疑わしいことと同様か、それ以上に専制独裁主義の火星皇帝が太陽教徒を扇動して太陽系帝国の名の下でこの太陽系の惑星全てをその独裁政治の支配下に置くことも疑問と呼ばざるを得なかった。

そんなことを考えながら、俺は月面ステーションから、定期観光便で地球に向けて出発していた。月世界ロケットの窓からは日の入りを迎え、青く輝いている太平洋が見えていた。数世紀、いや数千年の間も変わらずにその水を湛えている大洋の前に、俺は人間の限られた生命のはかなさを思わずにはいられなかった。

こうして感傷に浸っている間も、少しずつ今を生きている俺の時間は流れていったが、宇宙空間と地球圏では時間の流れ方すら変わってしまっているように思えた。

自由落下の快感とストレスに身を委ねながら、俺は一時の休息に入った。ちょうど今ジパングでは木々が赤や黄色に染まる季節になっているはずだ。

第五部　過去世界

第 41 章現在・過去・未来

　俺は地球圏に帰って一ヶ月くらいだらだらと過ごしていた。ついに初雪がこのトキオにも降って来た。そんなある日、ミス・ワカマツから、銀河の大王を通して前回のギャラクシーのトトで儲けたマーズマネー全てをはたいて最新の量子宇宙船を買ったという知らせがあった。数日後、凄まじい勢いで事務所の傍の空き地に、ミス・ワカマツの量子宇宙船が着地する。

「こんにちは、ポルゴさん。お久しぶりね。」

「ああ。それが例の新型宇宙船か？　しかし、いくらなんでもあのトトで儲けた金だけで宇宙船が買えるとは、なにか裏があるのじゃないか？　普通、トトで作った金じゃ、銀河帝国までの往復定期便のチケットが関の山だろ？」

「これは宇宙船ではないわ。正確には、ね。４次元量子移動機の試作版よ。」

「４次元、量子？　一体何のことだ？」

「要するに、これはタイムスリップが出来るマシンなの。定員は２名よ。まだ試作機だから確実に別の時代に行って、戻って来られる保障はないわ。しかも一回の往復が限度なの。」

　一瞬、ミス・ワカマツの俯き加減の表情が憂いを帯びた。

「実は、兄貴の生きていた時代まで戻ってみたいの。」

「そうか、そのためにわざわざそのマシンを買ったんだな。しかし、一応使い方のこともあるし、アイウォッチを通して、銀河の大王にコンタクトをとってみよう。」

　俺はアイウォッチの画面で銀河の大王の写真をタッチした。

「ワシじゃ。おお、ポルゴか。それにミス・ワカマツも一緒のようじゃな。」

「お久しぶりね、大王さん。私、実は兄貴の生きていた時代までトリップしてみたいのだけど？」

「それは、ちょっと問題じゃな。実はタイムマシンで同じ人間同士が接触すると、ちょっと問題があるのじゃ。ミスター・ワカマツが健在じゃった時代には、少女時代のミス・ワカマツも存在するわけじゃな。そこに今のミス・ワカマツが行ってしまうと、同じ時代に２人のミス・ワカマツが存在してしまい、ちとめんどうなことになる。出来れば、もっと前の時代なら、現在にもあまり影響がなくて好ましいのじゃが？」

「大王、そこのところなんとかならないのか？ あんたの顔でちょっとくらい銀河のルールを破っても、免除ってわけには？ なあ、ミス・ワカマツ？」

「ワシは銀河のルールの護衛者として、そればっかりは認めることが出来んのじゃ。そのマシンも実は数世紀前以前にしか戻れない仕組みになっておる。ミス・ワカマツのお兄さんはきっとあなたの心の中で生きておる。それでいいということには出来ないのかな？」

「ちょっと話が違うんじゃないですか？ でも、その数世紀前以前に戻れるって事は、もしかしたら、私たちの先祖くらいだったら、会えるってことですよね？」

「そうじゃ。ワシのジイ様も数世紀前なら全盛期で元気なはずじゃ。もちろん、ワシは職業柄、この時代を後にして自由な旅をするわけにはいかないのじゃが。」

「せっかくだから、その数世紀前って時代までトリップしよう。なあ、ミス・ワカマツ。」

「そうね。何かビジネスの参考にもなるかもしれないし。」

「じゃあ、大王、そういうことで。」

　俺たちは一応、最初のギャラクシーが開かれていた数世紀前にアバウトに時間をセットすることにした。その時代でも役に立ちそうな金品、博物館（ アーカイブ･ミュージアム ）で引き取った数世紀前の型のラップトップ、それに一か月分の食料をマシンに積み込むと、４次元量子移動機に乗り込んだ。

「ミス・ワカマツ。準備はいいな？」

「オッケーです。スイッチを入れます！」

　轟音と共にマシンが数メートルくらい上昇すると、量子のゆらぎを利用して、俺たちは４次元空間を遡る旅に出た。

「様子がおかしいぞ！！ マシンの調子が変だ！！」

「なんとかこのまま、この時代に着陸します。」

　俺たちは計器に狂いが生じている４次元量子移動機を操作して、無事数世紀前の世界にたどり着くことが出来た。初めて足を踏み込む過去の世界は、思いの他暗く、空気も煤けている気がした。まわりの状況を探り、安全を確認したところで、俺はミス・ワカマツと４次元量子移動機の点検作業に入った。

「ポルゴさん。燃料タンクが空になっているワ。」

「んなもんこの時代のガソリンスタンドで買えばいいだろ！」

「いや、この時代にも同じ型の燃料はあるけど、まだ私たちの時代の新技術が発見されていなくて、非常に稀少なの。とっても値段が高いと思うわ。たぶんこの時代の通貨で1000 億＄くらいね。」

「だったら、グレジットカードで買えばいいさ。」

「ダメよ。この時代にはまだ私たちが生まれていない事になっているから、クレジットカードも無理。」

「仕方ないな。この時代のインターネットに接続して、もうちょっと情報を集めてみよう。」

　俺たちはこの時代の OS にあらかじめ直しておいた数世紀前の型のラップトップでインターネットに接続した。どうもこの世界はまだ人類が宇宙に本格的に進出する前の世界で、かつての第９回キングオヴギャラクシーが数ヵ月後に開催されようとしていた。この大会の賞金は 777 億＄とわかったので、とりあえずギャラクシーに参加して、後は探偵業で稼げば、無事もとの俺たちの時代に戻れるはずだった。

「しかし、この時代のギャラクシーはタッグマッチだろ？ パートナーの必要があるな。まさか、ミス・ワカマツに頼むわけにもゆかないしな。この時代の優秀なファイターって誰だったっけ？」

「それはもちろん、私たちの時代の銀河の大王のおジイ様にあたる人よね。初代の銀河の大王がイチオシ。でも、一度もギャラクシーで優勝したことはないらしいけど。あとはやっぱり、初代グレート・アジアかしら？」

「それだ！ 今の状態では、銀河帝国までアポイントをとるのは不可能だ。とりあえず、初代グレート・アジアのところにパートナーの話を持っていこう。アジアの経営するジムの名前ってなんだっけ？」

「ウェヌスジムよ。ここから歩いていける範囲ね。行ってみましょう。」

　俺とミス・ワカマツはウェヌスジムを訪ねた。ガラス越しにジムを眺めると、華奢な女性が一人で黙々とサンドバックを叩いていた。

「こんにちは。あなたが有名なグレート・アジアさんですか？」

　ミス・ワカマツが尋ねた。

「入門希望者の方ですか？ 私がこのジムの経営者です。確かに私はグレート・アジアです。」

「俺はポルゴ。こっちはパートナーのミス・ワカマツだ。入門の話じゃなくて、ギャラクシーのタッグパートナーの件で訪ねてきたのだが。しかし、おかしいな。俺が映像で見たことのあるグレート・アジアはもっとパワフルで４ WD のボディをした女性だった気がするんだが？」

「母さんのことを言っているのね。初代のグレート・アジアは以前に敵と戦った時に、私をかばって殺されたの。私は２代目のグレート・アジアよ。今、本当言うとタッグパートナーは喉から手が出るほど欲しいけど。でも、あなたの実力がわからないし。それにあなた達の服装や髪型もちょっと変よね。時代遅れってわけじゃなんだけど、なんて言うか、時代を先取りしているって言うか、なんとなく前衛的なファッションよね。まるでこの世界の人間じゃないみたい。」

「まあ、これには色々と訳があってね。俺の実力か。まさか女性のあなたを殴るわけにもいかないしな。じゃあ、このサンドバックを一発殴らせてもらおうか？」

　俺は全身の気を８割まで高めると、渾身の右ストレートでサンドバックを殴った。ミーティングの瞬間、俺は体中のありったけの気を爆発させた。サンドバックは俺のパンチに耐えられず、ついに爆発した。

「今のは発頸ね。しかし、おかしいわね。今まで、私はあなたのような気の使い手の話を聞いたことがないのだけど？ あなたくらいの使い手だったら、もうちょっと有名になっていたり、噂になったりしてもいいんじゃないの？」

アジアに対して、ミス・ワカマツが口を挟んだ。

「あなたに信じてもらえるかわからないけど、私たちは数世紀後の未来から来たの。でも、マシンの燃料が切れてしまって、それを買うために、ギャラクシーで優勝してお金を稼ぐ必要があるの。このポルゴさんは数世紀後のギャラクシーに優勝したこともある使い手よ。それに私たちの時代でも、あなたの１１代目の子孫がギャラクシーで当時（未来）の銀河の大王を破るという好成績を納めているわ。出来れば、あなたにポルゴさんのパートナーをお願いしたいんだけど？」

「未来？ タイムマシンなんて本当に存在するの？ わからないわ。もしあなたたちの話が本当だったら、私も自分の子孫がグレート・アジアの名前を継いで戦ってくれていることを嬉しく思うけど。いまいち、信用できないわ。それに、まだ私はギャラクシーで優勝したこともないし。死んだ母さんの悲願だったけどね、ギャラクシーの優勝は。」

　そんな会話をしていると、黒いサングラスにヒゲ面で皮ジャンを斜にかけたマル暴のような壮絶な凄みを持つ男がジムの２階の事務所から降りてきた。俺は一瞬、強烈なプレッシャーに襲われた。

「アキコ、お客さんかい？」

「未来から来たっていうカップルが今、私のギャラクシーのパートナーになりたいと言って、訪ねてきたの。」

「小説家のタビト大伴だ。よろしく。」

俺は思わず差し伸べられた相手の手を握り返した。その瞬間、相手も俺の気を探り、全てを理解したようだった。

「CYBER 探偵をやっているポルゴです。こちらはパートナーのミス・ワカマツです。」

「どうやら君達の話は本当のようだね。私にも瞬間移動を出来る知り合いが２，３いる。その原理を応用すれば、おそらくタイムスリップも可能なんだろう。しかし、一体、未来の世界はどんな世界なのかな？ まあ、君達も長旅で疲れていることだろう。事務所の２階で休んでゆきなさい。」

　俺もミス・ワカマツも、あのタビト大伴の名前を知らないはずがなかった。CYBER 探偵の草分け的存在で、この時代の悪徳政治家フジワラ４兄弟の地球連合政府乗っ取りの野望を打ち砕いた腕利きの探偵だった。一度はギャラクシーだって優勝したことのあるタマだった。確か、念願の小説家になって、文学賞をとったんだよな。まだ若い２代目のグレート・アジアより、こちらにパートナーを依頼したほうが、確実かもしれない。そんなことを俺たちは考えていた。

２階の事務所に上がって、ソファでコーヒーをご馳走になりながら、俺たちはタビト大伴と娘のグレート・アジア２世に事情をじっくり説明した。

タビト大伴は探偵の仕事を俺たちにも廻してくれるから、ギャラクシーが開催されるまでの数ヶ月、探偵業の合間に合同トレーニングを敢行して、俺とアジアでギャラクシーに挑戦することを勧めてくれた。俺はあのダメタイムマシンで寝泊りすることになり、ミス・ワカマツはグレート・アジアの寝室を間借りすることになった。話がまとまったところで、俺はひとまずウェヌスジムを後にした。

第 42 章謎の新人

俺とグレート・アジア２世が地球圏で行われる第９回キングオヴギャラクシーにエントリーすると、真っ先にプロレスラーのササキ・ウォーリアーがエントリーを表明した。ミスター・プロレスの名を継承しているササキ・ウォーリアーは、はじめて地球のヘビー級プロレスメジャー５タイトルを統一した最強の男子レスラーだった。亡くなった初代のグレート・アジアにバーリ・トゥード系の２本のベルトをエサに挑戦され、地球七色のベルト統一戦でアジアに敗れた男だった。その敗因は、彼が元レスラーの美しい奥さんを含めて、女性を殴るようなことが決して出来ないような心優しい男だったからと俺たちの時代には伝えられている。ササキ・ウォーリアーはかつての宿敵初代グレート・アジアの娘への復讐と名誉回復を果たすため、総合に転向した空手使いの愛弟子をマスクマン、スカイドラゴン Jr としてプロレス界に呼び戻し、タッグパートナーとしてエントリーした。

ちまたのスポーツ新聞やネットでは、グレート・アジアの因縁の話や、俺のことを謎の新人としてスポークする記事が連発されていた。

俺はグレート・アジア２世のオヤジさんから探偵の仕事を廻してもらいながら、アジア２世との地獄の特訓に明け暮れた。最初のうちは、俺がアジア２世に打撃を教え、アジアが俺に関節技などの寝技を教える約束だったが、そこにアジアのオヤジさんがコーチとして割り込んでくると、俺たちの練習場は大混乱の修羅場と化した。オヤジさんは、

女の子のアジア２世に対しては竹刀、俺に対しては木刀で稽古をつけてくれた。木刀で直接顔を殴るとは、あまりにシャレにならない話だった。

　たまたまオヤジさんが出版社との打ち合わせで出かけている時、俺はアジア２世と関節技のスパーリングをしていた。俺はコスチューム姿で肌を露出しているアジアを眺めながら、なかなかいい女だな、なんてことを考えていた。マウント合戦の練習中、俺が上になって、アジアがガードポジションで下から俺の右腕に逆十字を狙っている瞬間、ミス・ワカマツが入ってきた。

「コーヒーと紅茶の準備が出来ました。そろそろ休憩にしたらどうですか？？ ってポルゴさん、何しているの！ まさか、オヤジさんの娘さんに手を出そうっていうの？ 一体、ワタシとの仲は？」

「いや、これは違うんだ。ちょっと関節技の練習で...」

　ワタシとの仲は？ という言葉がちょっと聞き捨てならなかったが、俺はなんとかフォローすることに専念した。

　こんなアクシデントもあったが、ミス・ワカマツはオヤジさんをアシストしながら、さまざまな情報収集に当たってくれた。まだチーム構成まではわからないが、俺たちの時代のジュン・バードの先祖に当たるメキシコ流空手の創始者ジュン・ハーンや、オヤジさんの弟子のジャック・ハロルド、それに初代銀河の大王や謎の強化人間のG’（ジー・ダッシュ）、超一流の暗殺者と呼ばれこの時代の為政者を震え上がらせたキラー・L（エル）といった使い手が続々参戦を表明していた。ササキ・ウォーリアーをはじめとする錚々たるこの時代の使い手を知るに至り、俺はこの時代に愛着を感じずにはいられなかった。

「ポルゴさん。この時代も既に火星皇帝が存在するのね。だったら、まだ火星人達が勢力をつけない内に、火星帝国を叩けば、私たちの時代の火星皇帝も歴史から消滅するんじゃない？」

「そいつは出来ない相談だな。この時代に、俺たちの時代の火星皇帝の先祖を暗殺しち

まったら、俺たちの時代とこの時代は完全なパラレル・ワールドになってしまう。つまり、この過去の世界で幾ら俺たちが火星人を叩いても、別世界になった俺たちのもとの未来とは縁が切れて、つながりすらなくなってしまう。それに、過去に戻って、敵の先祖を暗殺するっていう卑怯なやり方は俺のポリシーに反するしな。」

「そうね。でも、この過去の時代の火星皇帝だって、何か悪策みをしているはずよね。ちょっと懲らしめるくらいだったら、いいわよね。」

「まあ、それはミス・ワカマツ。君にまかせるよ。」

第 43 章最後の調整

　この世紀の第９回キングオヴギャラクシーが開催されるまで、あと一ヶ月となった。俺はオヤジさんの廻してくれた探偵業を着々とこなし、入ってきた収入のほぼ全てをミス・ワカマツは株で運用して増やしていった。探偵の仕事が終わって一息つくまもなく、オヤジさんの指導の下、木刀が嵐のように飛び交う修行が俺たちを待っていた。俺はオヤジさんが小説を書きにラップトップを持って近場の喫茶店にシケ込んだのを確認すると、２代目のアジアにこう言った。

「俺たちの時代のグレート・アジア、まあ１３代目ってことになるな、が使っていた技で、シャイニングヘルクラッシュっていう強力な技がある。一人が敵を肩車にして、もう一人がコーナーからシャイニング・ウィザードを掛けるんだ。」

「それって、ダブルインパクトのパクリじゃないの！ ササキ・ウォーリアーの十八番の。」

「俺も今までのスパーであなたの実力は理解している。しかし、そろそろ、パクリでもなんでもいいが、合体技を練習しておこう。ラリアットで挟み撃ちのダブルラリアットや

スーパーパワーボム、これは説明要らないよな。なんて技も俺たちの時代、つまりあなたから見て未来のグレート・アジアは使っていたぜ。」

「そうね。だったら、ダミーって言うか、技の実験台にパパの弟子のジャック君を呼んでおくわね。」

　アジア２世が電話を掛けた３０分後、スーツ姿のジャック・ハロルドがジムに現れた。

　青年実業家といってもいいような雰囲気だった。

「君があのオヤジさんの弟子のジャックさんか？　俺はポルゴだ。よろしく。」

　俺は握手をした瞬間、ジャック・ハロルドの気を感じ取ることが出来た。よく制御されたいい気だった。

「ジャック君、悪いけどこれからあなたを実験台にして、私たちの新必殺技を練習させてもらうわ。ところで、息子さんはお元気？」

「元気です。お蔭様で。妻もあいかわらずです。」

「アジア、このジャックさんもギャラクシーに出るんだろ？　いいのか、手の内を教えてしまって？」

「いいのよ。ジャックと戦うことになったとしても、その時は連携技ではなくて、シングルで決めるわ。タイマンよ。」

　俺はジャックさんに肩車を掛け、担ぎ上げると、グレート・アジア２世はジムの特設

リングのトップコーナーに駆け上がり、シャイニング・ウィザードをジャックに掛けた。これで、シャイニングヘルクラッシュの確認は出来た。

　その後は、俺とアジアでジャックをブレーンバスターの体勢で抱え上げ、そのまま垂直落下式に落とした。ダブルヘルバスターの確認も出来た。今度は俺がジャックをパワーボムの体勢で抱え上げると、アジアはコーナーからジャックの脚を持って、一気に叩き落した。スーパーパワーボムが確認できた。

　さすがのジャック氏もフラフラになり、彼の携帯に奥さんから電話が掛かってきた所で、俺たちの今日の練習も打ち切りになった。

「ジャックさん、今日は何かと世話になったな。また、ギャラクシーで会うときは、お互いにベストを尽くそう！」

「何言ってるの、ポルゴ。ジャックはこれから毎日、私たちの強化練習の実験台よ。ジャック、あなたもギャラクシーに出るんでしょ。私たちはもう練習を打ち切るけど、あなたはここでスクワット千回やるまで帰っちゃだめよ！！」

「いやー、アジアさん。今日は妻と息子がボクの帰りを待っているんです。スクワット千は勘弁してください。」

「じゃあ、負けて５百ネ。サボったら、わかってるわね。」

　俺はアジアの厳しい本性を知って、被害が俺に及ぶ前に、そそくさとジムを後にした。

第 44 章沈黙のギャラクシー

遂に第９回キングオヴギャラクシーの火蓋が切って落とされた。ササキ・ウォーリアー率いるミスタープロレスチーム、初代銀河の大王率いる銀河帝国チーム、超一流の殺し屋キラー・L 率いるナイスガイチーム、それに我らがグレート・アジア２世率いるヘルリベンジャーズといった錚々たる面々が決勝ベスト４トーナメントまで勝ち残った。なお、この時代（ 過去 ）のキングオヴギャラクシーは２対２のタッグバトルで、あらゆる武器（ 凶器 ）の使用が認められている。タッグはチームリーダーとヒットマンから構成され、チームリーダーが戦闘不能もしくはギブアップした時点で、勝敗は決する。なお、相手タッグのどちらか一方でも死に追いやってしまった場合は、即時反則負けとなる。ヘルリベンジャーズでは、グレート・アジア２世がチームリーダーであり、ポルゴはヒットマンだった。つまり、勝敗如何は全てグレート・アジア２世の両肩にかかっていた。賞金はアジアとポルゴで折半する約束になっていた。

メキシコ風のラテンな曲がかかると、銀髪のササキ・ウォーリアーと弟子のスカイドラゴン Jr が入場してきた。ササキ・ウォーリアーは伝説のペイントに強烈なヘビーアーマーを身に着けていた。スカイドラゴン Jr は、変幻自在のマスクを身に着け、地球世界七大陸の全てのジュニアベルトを統一した実力者で、現在はヘビー級に転向して、総合格闘技を主戦場にしていた。チーム名は、ヘルウォーリアーズ。リーダーのササキ・ウォーリアーはかつて、今は亡き親友にして師匠のある男に「タッグチームとは、プロレスとは何であるか」を全て叩き込まれていた。二代目ミスター・プロレスを襲名した今、弟子のスカイドラゴン Jr にかつての親友への恩返しを込めて、身を持ってプロレスの全てを教えるつもりでいた。そして、かつて己のベルトを全て強奪した初代グレート・アジアへの雪辱を、娘の二代目グレート・アジアに果たすつもりでいた。

グレート・アジア２世のチーム、ヘルリベンジャーズはさっそうとリングテーマと共に入場した。今回のセレクトは、ポルゴからの強いリクエストで地球の名曲、ウナルトラヴィータ (Un altra vita) だった。これはイタリア語で新生を意味する。グレート・アジアは身体をかなり絞り込んできており、素晴らしいフォルムだった。ポルゴの後からセコンドのタビト大伴、つまりかつてギャラクシーを制覇した CYBER 探偵オヤジ 40（ フォーティー ）がついてきた。

　ポルゴは強烈なプレッシャーを感じていた。彼の時代の最大の使い手、西郷詩郎は確かに洗練された武術の達人であったが、それは心技体の内、特に心と技を日本酒において米を徹底的に磨くがごとく、鍛えたがために生まれたものであった。西郷の肉体はほろびゆくことを運命付けられた人間の性を逃れることが出来なかった。

　技量と心量においては達人、あるいは神業の領域に達していたが、しかし身体は常人と比べて多少マッチョな中年に過ぎなかった。一方、現役の最も脂が乗ったプロレスラーであるヘルウォーリアーズは、たとえ気の技術を習得していなかったとしても、常人を遥かに凌ぐ圧倒的なワイルドアニマルの肉体だった。その肉体から発せられる野獣（ビースト）のような強烈なプレッシャーにポルゴは呑まれてしまったのだ。

「バカモノっ！ 相手に呑まれるな！」

　セコンドのオヤジ 40 から激が飛ぶ！ アジアはポルゴの試合を任せて、コーナーに立った。

　一方、アジアがコーナーに向ったことを確認したササキ・ウォーリアーは愛弟子のスカイドラゴン Jr を先鋒を指示していた。壮絶なゴングが掻き鳴らされた。

　ポルゴはスタンダードに左前のアップライトに構えた。一方、マスクマンのスカイドラゴン Jr は右前、つまりサウスポーに構えた。様子を伺うポルゴ。一瞬、スカイドラゴンの右足から閃光がほどばしる。次の瞬間、ポルゴの左手からオープンフィンガーグローブが消えていた。今の一瞬のみでスカイドラゴンは右の上段廻し蹴りでポルゴのグローブを吹っ飛ばしたのだった。ポルゴの表情に戦慄が浮かぶ。バックステップで間合いを取ると、ポルゴは右のグローブも取り外した。

「へへ、この方が、なんだな。摑み易いんでね。」

　ポルゴは電光石火のタックルでスカイドラゴンを捉える。上手く左の膝で合わせるスカイドラゴン。ポルゴはその膝をドラゴンスクリューで切り返す。半立ちになった両者。すかさず、スカイドラゴンが閃光魔術でポルゴに蹴りかかる。

　そろそろ会場の観客もこの試合のレベルに気付き出したところだった。間が違うのだ。一瞬、一瞬の攻防を見逃すことが出来ない興奮感。今の一撃、一撃のコンタクトに、全ての思いが凝縮されていた。

　ポルゴは次のコンタクトの瞬間、構えをスイッチした。サウスポーで強烈な打撃の攻防を仕掛けた。ワンツー、左ミドル、右フック、左のアッパー、全てを間一髪でかわすスカイドラゴン。そうしてポルゴが攻撃を休めた一瞬、強烈な左の踵落とし（ ネリチャギ ）から右のソバットのコンビネーションがポルゴを襲った。ポルゴは相手の攻撃を食らいながら、ダメージを最小限に抑えるガードを取っていた。

「休むんじゃない！ 諦めるな！ 相手はまだ若造だ！」

　オヤジ 40 の檄が飛ぶ。

　ポルゴはわざと上段右フックを空振った。スカイドラゴンはカウンターの右ストレートで応戦する。この瞬間をポルゴは逃さなかった。

　スカイドラゴンの右のパンチを捉えたポルゴは左手で相手の右手首を決めると、体を半身で入れて、相手の右腕の付け根を軽く摑んだまま、腰を半分入れて豪快に投げた。上段の当て身投げが決まった。そのまま逆十字でポルゴは相手の右腕を折りに掛かる。

　その時だ。ノータッチでリングインしたササキ・ウォーリアーがカットに入った。ストンピングで不意に踏みつけられたポルゴは、一瞬全身の力が抜けたように技を解いた。すかさずフォローにアジアがリングインする。試合の権利はリーダー同士に移行した。ポルゴはマットを寝ながら回転してコーナーに逃れた。

　アジアとササキ・ウォーリアーはがっぷりと手四つに組み合い、古典的な力比べをした。最初はパワーファイターのササキが優勢だったが、徐々に若さで勝るアジア２世が盛り返した。そのままササキは片膝立ちの屈辱を味わってしまった。アジアはすかさず

ストンピングでササキを攻める。いったんロープまで下がった両者は反動を利用してラリアットの打ち合いになった。ポルゴはコーナーからこの熱戦を眺めていた。バックの取り合いからバックドロップに行こうとするアジア、そこをすかさず首投げで投げるササキ・ウォーリアー。そのままチョーク気味の裸絞めに移行する。そこをあっさり強烈な肘打ちで外すアジア。一瞬、表情を歪めるササキ。くるりと相手に正面を向けるアジア。そのまま両者はスタンドに移行した。

　ササキ・ウォーリアーは意表をついて片足タックルでテイクダウンした。そのままアジアの右足を蠍に捉えて、シャープシューターで固めるササキ。ポルゴは一瞬、アジアの表情を確認した。「大丈夫。」そうアジアの眼は語っていた。プッシュアップでシャープシューターを外すアジア。まだ、アジアは手の内を見せない。アジアはロープの反動を利用して、渾身のラリアットを打つ。そこを一本背負い巻き込みに捉えるササキ。ダウンしたアジアを変形の三角締めで攻めるササキ。これも難なく外すアジア。一進一退の攻防だ。

「アジア２世よ。オレは、あんたのおふくろさんに負けてから、散々敗者のレッテルに苦悩してきた。女に負けた男と罵られた。一夜にして五冠王から無冠のただの人に転落したのだ。フリーだったオレにはもうどこの団体も声を掛けてくれなかった。そんな時、オレのかつてのタッグパートナーの親友が、オレに必殺技を教えてくれたんだ。アジア２世、今こそ、オレの新必殺技でアンタに雪辱する！」

　言い終わるや否や、ササキは猛烈なボディタックルでアジアを捉えた。そのままノーザンライトスープレックスの体勢、つまりアジアの脇に自分の頭を入れて相手の身体と利き腕をホールドした。さらにホールドした時に、アジアの利き腕の手首の関節を捉えていた。

　そのまま垂直落下式にアジアを強烈な弧を描いて、頭からマットに突き刺した。ササキ・ウォーリアーの必殺技、ノーザンライトバスターが決まった瞬間だった。

　たまらずポルゴはノータッチでリングインしてカットに入る。そこに介入したドラゴン Jr。しかし、アジアは何事もなかったのかのように立ち上がった。

「アジア、今の技をまともに食らって平気だったのか？」

「私はこれでも現プロレス王者よ。それに柔軟性もピカイチだし。この試合、一対一で決めたいの。邪魔なスカイドラゴンを場外戦に引き釣り込んでくれない？」

「わかった。後はアンタに任せるぜ。」

　ポルゴはジャブでドラゴン Jr のハイキックを呼び寄せると、ドラゴンスクリューに捉えて、そのまま場外戦に持ち込んだ。これでリングには二人だけが残った。

リング外ではポルゴとドラゴン Jr が客席イスでチャンバラを展開していた。ポルゴが強引にドラゴン Jr を鉄柵にブチ当てていた。

アジアはササキ・ウォーリアーを見つめながら、こう言った。

「あなたも相変わらずバカの一つ覚えみたいにラリアットにこだわるのね。確か、死んだジャパンプロ時代の師匠の得意技だったのね。それにさっきのシャープシューターも。あなたのオリジナルな技はノーザンだけなの？ あれも、奥さんやお友達の技を改良しただけよね？」

ササキは怒りの表情に変わり、逆水平の嵐でアジアの喉元を襲った。アジアはカウンターの裏拳でササキからダウンを奪った。

「今度は、ミスター・プロレスのグーパンチでも使うつもり？ もちろんギャラクシーでは顔面パンチは反則にはならないけど？ もうちょっと捻りの聞いた技はないの？ ないのだったら、こっちから行かせてもらうけど。」

　アジアは一旦ロープに身体を振ると反動を利用してフライングニールキックでササキを襲う。カウンターのグーパンチで迎撃するササキ・ウォーリアー。一進一退の攻防が続く。ササキは強引にアジアを高角度パワーボムの体勢に捉えた。アジアはササキの首

を両足で挟んだまま、後ろ回りの要領でササキを投げた。ウラカンラナが決まった。ダウンしたササキを今度はアジアが垂直落下式ブレーンバスターの体勢で真っ逆さまに抱え上げる。

　そのまま後ろに落とさずに、アジアはジャンプしながら、前方に 4 分の一回転の捻りを加えて、ササキ・ウォーリアーをジャンピングパワーボムに捉えた。ササキは真っ逆さまに頭からマットにめり込んだ。アマゾネスドライバー 2000 が決まった瞬間だった。そのまま腕絡み（ キムラロック ）でササキを捉えていた。

　師匠ササキのピンチにリングインして救出に向おうとするスカイドラゴン Jr。しかし、ポルゴがドラゴン Jr の胴体に抱きついて離れなかった。

「あなたはこのままじゃ絶対ギブアップしないでしょう。このまま折ってもいいけど、それは今のプロレス界を考えると大きい損失になるわ。あなたにはここで落ちてもらうわ。」

アジアは腕絡みを決めたまま、ササキ・ウォーリアーの上体に乗った。そうして自分の膝頭をササキの喉元にあてがって、腕を決めたまま変形のギロチンチョークを掛けた。アジア２世の必殺技、ストラングルホールド・ネオが決まった。リング下ではポルゴがスカイドラゴン Jr を発頸パンチで KO していた。そのまま１分時間が過ぎると、ササキ・ウォーリアーは白目を剥いて気絶していた。

　ミスタープロレスチームが敗北した瞬間だ。

第 45 章実力者登場！

　第９回キングオヴギャラクシー準決勝第２試合が始まった。会場総立ちのもとで銀河帝国の国歌が厳粛に演奏されると、赤コーナーから初代銀河の大王率いる銀河帝国チー

ムが入場した。初代銀河の大王のパートナーは、ジャック・ハロルドだった。ジャックはタビト大伴（ オヤジ 40 ）の弟子で、もっとも気をコントロールして使いこなすことが出来る男という噂だった。初代の銀河の大王は、顔はワニで直立しており、身体は超重量級、強烈なアーマーを身に着けていた。ジャック・ハロルドは黒のボディスーツを身に着けていた。

一方ラテン系の曲がかき鳴らされると、キラー・L（ エル ）率いるナイスガイチームが入場した。パートナーはジュン・ハーン。ポルゴたちの時代のジュン・バードの先祖だ。

キラー・L はワルサー Q バズーカ仕様という強烈な凶器を持参していた。この凶器は、全身の気のエネルギーを変換して、バズーカとして使うというとんでもない賜物だった。キラー・L はポルゴと同じ銀髪で長いもみあげが特徴的だった。赤紫のスーツと薄いピンクのズボンを履いていた。ワイシャツは水色で、ネクタイはゴールドだった。ジュン・ハーンは黒髪のホンコンスターを思わせるナイスガイで、テコンドーとルチャ・リブレを融合したメキシコ流空手の創始者だった。ナイスガイチームが入場すると、会場は黄色い声援で包まれた。

この試合のリーダーは、銀河帝国チームはジャック・ハロルド、ナイスガイチームはキラー・L だった。ボディチェックが終わると、両者は先鋒に立った。

ジャック・ハロルドは拳を浅く握って構えていた。キラー・L は武器をいったんコーナーに置くと、やる気ないッスという風にだらだらと構えていた。

ジャックの右手が一瞬後方に下がると、再びアッパー気味に右手が前に突き出された。次の瞬間、ジャックの右手から青い閃光が走り、波のような衝撃波がキラー・L に向けてほどばしった。難なくこれをかわすキラー・L。

「ボクの痛風拳を交すとは、やるじゃないか？ でも、今度のは、どうかな？ 食らいなっ、ダブル痛風拳！」

ジャックの右手と左手が交互にアッパーのように弧を描くと、今度は波のような飛び道具が二本続けてキラー・L に向けて発射された。これも見事にタイミングを見計らって、かわすキラー・L。

「お兄ちゃん、まだ若いな。このキラー・L さまをそんなひょろい飛び道具で倒そうなんて、百万年早いねー。」

　言い終わるは否や、キラー・L は一足跳びにジャックに襲い掛かる。強烈な左右のボディーブローのコンビネーションの後、痛烈な左アッパーを見舞った。ジャックがよろけた瞬間、右の水面蹴りで鮮やかにダウンを奪った。

「こんな若造倒してもなんの実績にもならないんでね。大王、悪いが俺と一発勝負してくれるか？」

　初代銀河の大王はキラー・L の挑発に乗りリングインした。既に大王の拳の先には限界まで気が集中しており、リングインと同時に銀河の大王一族の必殺の光線技、ギャラクシーウェーブが発射された。リング全体が黄金の閃光で包まれていた。

　轟音の後、眩しい光が収まるとそこには大王とキラー・L の姿が確認できた。キラー・L は左手を前に突き出していた。あろうことか、銀河最強の必殺技、ギャラクシーウェーブを片手で完全に防いでいたのだった。

「キラー・L さん。ここは迷わず私にタッチしてください！　交替です。」

　コーナーからパートナーのジュン・ハーンが叫ぶ。

「せっかくのバトルなんだから、もうちょっと楽しみたいナー。ジュンちゃん、ちゃんとアンタの見せ場は残しておくからさー。」

　圧倒的な余裕を見せるキラー・L。拳の先に気を込めると、銀河の大王と壮絶なパンチの打ち合いを演じ始めた。一発、一発がお互いの身体の芯を捕らえる。有効な打撃に対して、全く痛いそぶりを見せない両者。大王が右の拳を腰まで溜めて、得意の真・龍拳

の体勢に入った瞬間、キラー・L は身体を沈めると、カウンターの右の水面蹴りで大王からダウンを奪った。

「ジュンちゃん。タッチだ。得意のフェニックスライジングでやっちゃってくれ！」

大王がダウンしたスキにナイスガイチームはタッチを成功させた。青コーナーではジャック・ハロルドが息を吹き返していた。

ジュン・ハーンはムエタイのようにしなる蹴りで大王をコーナーまで一気に追い詰めた。

銀河の大王の技は一発一発が重いが、それだけ隙がある。一方、ジュン・ハーンは一つ一つの技は軽いが的確で、全くスキがなかった。

左ミドル、右ハイ、左ローのコンビネーションで大王がかがみこむと、まずジュンは右のソバットを決めた。完全に大王がよろけたところで、下がった頭に左の踵落とし（ ネリ・チャギ ）を見舞った。止めは大王の身体を支点にして、駆け上がるようにサマーソルトキックを放った。ジュン一族の伝家の宝刀、フェニックスライジングが決まった。

ダウンカウントが告げられると、カウント５で大王は立ち上がる。しかし、試合の権利を握っている対戦相手のジュンは大王がダウンカウントを数えられているスキに、キラー・L とのタッチを成功させていた。キラー・L は右肩に、この時代の最強の凶器、ワルサー Q バズーカ仕様を構えていた。大王が立ち上がりファイティングポーズをとった瞬間、強烈な青い閃光と共にワルサー Q のエネルギーが大王の身体にヒットした。

遂に銀河最強の生物と呼ばれた銀河の大王はノックアウトした。すかさずジャック・ハロルドがリングインすると、バズーカを発射して硬直しているキラー・L に低空の高速タックルを見舞った。テイクダウンされたキラー・L の上に、ジャックはマウントの体勢で肘打ちを連打していた。一瞬、キラー・L たちの周囲に鳥篭のような気の嵐が吹きぬけた。

ジャック・ハロルドが強烈な気の嵐を生み出し、キラー・L を攻撃したのだった。

　今の攻撃をなんとも感じないような素振りで、キラー・L は下からのアッパー一つでジャック・ハロルドを振り落とした。

　立ち上がったキラー・L はこう言った。

「ジャック・ハロルド。アンタは確かにいい線行っているよ。気の使い方も正確だし、打撃も確かだ。素人にしてはね。でもなー、こっちはプロなんだぜ。依頼を受けて何人確実に始末したかで評価が決まる世界だ。あんた、アマちゃんだよ。」

　言い終わるは否や、キラー・L は右のラリアット一つでジャック・ハロルドを KO した。

　あまりに力の差があらわれた一戦だ。

第 46 章ビックマウス

　第９回キングオヴギャラクシーの決勝が 30 分前に迫った今、俺たちは控え室で作戦会議といった様相だった。控え室にはオレとアジア２世の他に、オヤジさんがいた。ノックもせずに控え室のドアを開け、ミス・ワカマツが駆け込んできた。

「ポルゴさん、どういうこと？ さっきの準決勝は？ もとの時代に戻りたくないの？ なんでただのチャンプでもないフツーのレスラーに、プロのポルゴさんが萎縮しないといけないわけ？ ササキ・ウォーリアーもスカイドラゴンＪｒも気の技術もロクに習得していないようにワタシには見えたけど？？」

「要約するとそういうことだな。ポルゴよ、何か言いたいことはないか？」

　オヤジさんがダメ押しした。

「いや、なんて言うか、あんなに体格のいいお兄さん達と試合するのは初めてでして。いや、それとも別になにか理由があるのかな？　もちろん、もとの時代に戻るために優勝は狙って行きますけど。」

　俺はそういいながら別のことを考えていた。別に元の時代に戻るために、何も合法的にカネを稼いで燃料を買うことに専念しなくてもいいのではないか。信用カードだって幾らでも改造の余地がある。合法という手段を除けば、幾らでも解法はある。それに、燃料だって、この時代の科学者に知恵を仕込んで安く作らせればいいさ。

「人間、楽な方、楽な方と考え出すとダメになる！　次の試合はキラー・L さんとジュン・ハーンだ。ジャックの能力は今のアジア２世より高いと俺は見込んでいる。そのジャックをキラー・L さんはラリアットたった一発で KO したんだぞ！　ポルゴ、お前にキラー・L さんに勝つ自信はあるのか！」

　ミスター東郷を思わせるような、熱い語りだ。それにしてもキラー・L という名前、どこかで以前聞いたことがあるな。あの俺に似た銀髪も気になる。確か死んだ俺のオヤジが、昔キラー・L という名前をどこかで口にしなかったか？　俺は無意識に胸元の金のネックレスをさすりながら、自分の脳の記憶バンクを探っていた。このネックレスは父親から形見で受け取った品だ。

「ポルゴっ、ねぇ、聞いているの？　次の試合の作戦はどうするの？」

　木刀を片手にオヤジさんがこう言った。

「お前ら、作戦以前の問題だよ。協調性だよ、協調性。お前らに欠けているのは！ 準決勝で、一回でもツープラトンを決めたことがあったか？ まずはそこからだ！」オヤジさんの激が飛ぶ。ブチ切れ顔のオヤジさんと不満たらたらの表情のミス・ワカマツが控え室を出た後、俺はアジア２世にこう言った。

「キラー・L なんざ、あのワルサー Q っていう卑怯な武器さえなけりゃ、タダの素人さ。アイツは俺が引き受ける。ジュン・ハーンの野郎はアンタが仕留めてくれ！ とりあえずフェニックスライジングに気をつければ大丈夫だろう。ツープラトンは練習してあった例のヤツで行こう！ シャイニングヘルクラッシュの一点買いだ！」

「やっといつものあなたらしくなったわね。キラー・L を引き受けるって言う言葉、絶対忘れないからね。」

「一応確かめておきたいんだが、このギャラクシー、まだ試合に参加していない大物がいるんじゃないか？ それに何かとてつもない凶悪な気を感じないか？ こう背中がぞくぞくするって言うか。俺も今思うと、準決勝の時から既にこの邪悪な気を感じ取っていたのかもしれない。」

「確かにまだ実力者中の実力者でギャラクシーに姿を見せてない人はいるわ。しかし、決勝に勝った者がギャラクシーの勝者よ。なんとなく不気味な気は私も感じていたけど、それは次の決勝とは別の話よ。お互い集中してベストを尽くしましょう！」

　こうして俺の余計な言葉と共に、かつて見たことのない地獄の修羅場が展開される第９回キングオヴギャラクシーの決勝は秒読みを始めていた。

第 47 章隠された真実

第９回キングオヴギャラクシーの決勝が始まった。まずは赤コーナーからナイスガイチームが入場した。まず、キラー・L が必殺の凶器、ワルサー Q バズーカ仕様を抱えて入場した。その後、キラー・L がロープの間に入って隙間を作ると、ジュン・ハーンが甘いマスクに満面の笑みを浮かべて入場した。会場から割れんばかりの黄色い声援が飛ぶ。

次に青コーナーからヘルリベンジャーズが入場した。ポルゴのお気に入りの一曲、Scivolando（ シヴォランド ）と共にまずポルゴが入場する。次にワルキューレの騎行と共にグレート・アジア２世が入場した。

この試合のチームリーダーはそれぞれキラー・L とグレート・アジア２世でこの両者の内どちらかが敗れたときに、チームの勝敗は決するのだった。

まずグレート・アジアとジュン・ハーンがリングに残った。ゴングがなる前にジュン・ハーンは握手を求めてきた。グレート・アジアが握手に応じると、ジュン・ハーンは胸元から一輪の矢車菊の青紫の花を取り出し、アジアに捧げた。

「クリーンファイトで行きましょう。フランス語でこの花の花言葉は、あなたに愛が告白できなくて、です。もし私たちのチームがあなたがたに勝った場合は、私とデートしてくれますか？」

「いいわ。もちろんあなたたちが勝って、無事でいられたらの話だけど。かなりありえない話よね。」

そう言うと、アジアは花をリングの外に投げ放った。

「あなたもこうなる運命よ。」

冷徹なゴングがかき鳴らされた。グレート・アジアは低いレスリングの構えでジュン・ハーンの周りを回りながら、様子を伺う。ジュン・ハーンは片足立ちの鶴の構えを保ったまま、右足を軸に、常に身体をアジアの正面に向けていた。

　一瞬のスキを突き、アジアが低空片足タックルに打って出る。ケンケンの要領でタックルを潰すと、アジアの脳天に強烈な左の踵落としが決まる。だが、アジアはびくともせずジュンの右の軸足をキャッチした。そのまま強引とも言えるドラゴンスクリューで寝技に引き込む。

　すかさずフィギュアフォーレッグロック（ 足四の字 ）を極めるアジア。ポルゴは赤コーナーのキラー・L の動きを伺うが、カットに入る気配がない。ジュンは片足を極められたまま、残りのフリーの足の踵を使って、見事に技を解く。そのまま、ハンドスプリングの要領で立ち上がる。

「いやー、実はワタシもメヒコでプロレスを齧っていましてね。まあ、クラシックな関節技でギブする程、ヤワじゃないんですよ。」

　爽やかな笑顔でジュンは語りかける。

　アジアはためらわずロープまで駆け寄ると、反動を利用して、渾身の右ラリアットでジュンを襲う。ジュンはアジアの右腕に自分の足をかけると、振り子の要領で逆十字を決める。すかさずポルゴがカットに入る。まだ、キラー・L は無表情でリングを見つめている。

「ここは私の仕事場だわ。無駄な介入は控えてくれる？」

　アジアは冷たくポルゴに言い放つ。ポルゴはそそくさと青コーナーに戻った。

「ルチャ・リブレっていうのは、ただただバッタみたいに飛び跳ねているだけじゃないですよ。今みたいな複合関節技も含めたフリースタイルのレスリング、それが、ルチャです。」

　アジアは強引にジュンにボディタックルを極める。そのままブレーンバスターを決める。

　ダウンしたジュンに、すかさずコーナーからムーンサルトプレスで追い討ちを仕掛ける。

　しかし、ジュンの立て膝がアジアを襲った。いかなる相手の行動にも柔軟に対応する。それが、ルチャ・リブレの真骨頂だった。

　蹲るアジアをスタンドに移行したジュンは挑発する。

「ワタシはメキシコ流空手の創始者です。出来れば、レスリングだけではなく、打撃の技術でも勝負してみませんか？」

　ジュンの構えがサウスポーにスイッチしていた。アジアはムエタイ仕込みの鋭い蹴りでジュンを襲う。的確にガードするジュン。一発、二発、三発とアジアの蹴りが軌道を描く。

全てジュンはガードした。

「こんどはワタシから行かせてもらいます。」

　左のロー、右のミドル、左の踵落とし（ ネリチャギ ）のコンビネーションで、ジュンはアジアを襲った。俯き加減になったアジアの身体をジュンは駆け上がり、必殺のフェニックスライジングを仕掛ける。

「今だ！ アジアっ。ダブルハンマーでブロックだ！」

ポルゴがコーナーから叫ぶ。

アジアは両手を組み合わせて、ジュンの宙返りキックを撃墜した。そのまま尻餅をつくジュン。すかさずアジアはジュンを肩車に捕らえた。トップコーナーからはポルゴがジュン・ハーンに向って飛び跳ね、左足先を支点にしてジュンの首を右の廻し蹴りで刈った。

必殺のツープラトン、シャイニングヘルクラッシュが決まった瞬間だ。

次の瞬間、リングに突然、銀髪に黒のハート型のサングラスを掛けた青年が現れた。

「今からここに間も無くとてつもなく邪悪な気を持った異星人があらわれる。アジア、俺と協力して闘ってくれないか？」そう言ったのは、かつてのギャラクシーの常連、G’（ジー・ダッシュ）だ。

彼は瞬間移動の技術をマスターして、この会場に現れたのだった。「何言っているのG’？ そんな相手、私ひとりで十分よ！！ ポルゴもG’も下がっていてくれない。今近づいているちっぽけな気がそうよね。アレくらいだったら、私一人で宇宙人３分間クッキングよ。」

ギャラクシー決勝の会場にのっそりとした黒尽くめの中年の小太りの宇宙人が歩いて現れた。唇が異常に厚い。一見、地球人にも見えなくはないが、やはり異質で、誰の眼を見ても彼が宇宙人であることは疑いの余地がなかった。彼はリングインするとこうバスの声で呟いた。

「ボクはスプラッター星人デース。ギャラクシーの勝者に挑戦させていただきマース。」

グレート・アジア二世はすかさずファイティングポーズを取るとこう叫んだ。

「私が最強のプロレスラー、グレート・アジアよ。さっさと始めましょう。」

すかさずグレート・アジアは強烈な打撃でスプラッター星人をコーナーまで追い込む。

されるがままのスプラッター星人。垂れた腹が、パンチがヒットするたびに左右に揺れている。アジアは続けて首相撲の体勢で膝地獄を打ち込んだ。

・・・おかしいわ。パンチも膝も全く効いている気配はない。ポルゴに習った発頸で全身の気をミーティングの瞬間、爆発させているのに・・・

気のせいかリングの外の人間たちはスプラッター星人が一回り大きくなったような錯覚を覚えていた。

アジアは間合いを取ると、全身の気を最大まで高めて、強烈な右ストレートと共に気を具現化して、スプラッター星人を攻撃した。黒い嵐のような気が彼を襲う。しかし、スプラッター星人はその気を何事もなかったかのように掌から吸収し、また一回り身体を大きくしていた。

・・・そうか、ヤツは気を吸収して強くなるタイプなのね。それでは、ワタシの全身の気を食べさせて、パンクさせてあげる・・・

アジアはすかさず強力な気を具現化して打撃に合わせて解放することで、スプラッター星人を攻撃した。

　一発、一発、アジアの強烈な打撃と共に、気の嵐がスプラッター星人を襲う。みるみる内にスプラッター星人は巨大化して、ついにはリングの面積からはみ出すくらい丸くパンパンに丸く太っていった。

「ここまで大きくなったら、後はパンクして終りね。」

アジアはとどめのパンチを打った。しかし、パンチには勢いがなく、なんの気の気配も表れなかった。

「しまった！　全身の気を全て吸収されたのね。ってことは？」

「エナジー満タンデース。このままこの地球ごと今頂いたエネルギーをもとに爆破させていただきマース。」

そのまま膨らみ続けるスプラッター星人。その身体からはエネルギーが光となって、点滅している。

「いかん。みんな逃げるんだ。」

　オヤジ 40（ フォーティー ）が叫んだ。

　スプラッター星人はひたすら膨張し、ついに爆発の瞬間が迫っていた。

　ポルゴはコーナーからアジアとリングサイドのミス・ワカマツを交互に眼をやると、爆発の瞬間、全速力でミス・ワカマツに駆け寄り、彼女を抱きしめた。そのまま自分の身体を楯に大爆発の衝撃からミス・ワカマツをかばった。

「もうお仕舞いね。ワタシも母さんのところに行くのね。」

　アジアをリング外に突き飛ばす一つの影があった。その影は膨張しきったスプラッター星人の首に取り付くと、そのまま瞬間移動で地球圏の外まで移動し、スプラッター星人は大爆発を起こした。まるで彗星が地球圏を横切るかのようなヴィジョンが地球から確認できた。リングには黒のハート型サングラスが残されていたのだ。

第48章 絆

「ミス・ワカマツっ、無事か？」

ポルゴが尋ねた。

「兄さん...」

「俺だよ。ポルゴだよ。怪我はないようだな。よかった。」

ポルゴは今の爆発の瞬間無意識的にミス・ワカマツを守ろうと駆け出していた。自分達が無事であるという事実が不思議ではあった。

ポルゴはリングに眼を向けた。

「アジア、これは一体どういうことだ？ アイツは確かに爆発したんだよな？ 今、爆音も地鳴りも衝撃波も感じたし。アンタのとっておきで仕留めたのか？」

ポルゴは尋ねた。

グレート・アジア２世はリングの隅に落ちているハート型のサングラスに眼をやった。

「一瞬のことでよくわからないけど、G’ が瞬間移動を使って私たちを皆助けてくれたみたい。」

グレート・アジア２世の父であるオヤジ 40 が言った。

「ヤツのことは気にするな。確かにあいつはいいヤツだった。死ぬ瞬間にヒトさまの役に立つヤツだって、世の中にはいるんだよな。」

　ポルゴはオヤジ 40 に向かって言った。

「しかし、あのスプラッター星人って野郎、一体何者ですが？ 他人の気を吸収して自爆する。厄介な敵ですね。」

「終わったことだ。気にするな。さあ、事務所に戻って打ち上げだ。」

ポルゴたちは気を取り直して事務所に戻った。数時間後、テーブルにはミス・ワカマツの手料理が並んでいた。

「カンパーイ！」

　しばらく料理を食べ始めるポルゴたち。「しかしおいしいな、このステーキ。こんな上手い肉食べたことないぜ。それにこの巨大オムレツも。これはダチョウの卵でも使っているのか？」

　ポルゴが言った。

「いつもワカマツさんが用意してくれるこのお肉、本当においしいわね。ところで、これって何の肉？ 豚でも鳥でも牛でもないみたいだけど？」

　アジアも一緒に尋ねた。

「これは実は、銀河ワニの肉と卵です。」

　一瞬、金星での悪夢を思い出し、吐きそうになりかけるポルゴ。

「エー、マジ？」

「冷凍して量子移動機の冷蔵庫に保管しておいたの。銀河ワニのお肉は高タンパク、低カロリー、低脂質の三拍子よ。ダイエット中の女性にもオススメね。そんなわけで、毎日の食事に一品加えておいたの。アジアさん、自分でも肉体改造の成果に気付かなかった？」

「何となく身体が軽くなって、身動きが楽になったような気がしたけど、これって毎日知らずに食べていた銀河ワニのお肉の効果だったのね。ところで、この前、ワタシの誕生日にプレゼントしてくれた紺の革のハンドバック、あれってもしかして？」

「もちろん、ワタシの会社で養殖している銀河ワニの革で作ったものです。特許出願中ですよ。」

　そういい終わるとミス・ワカマツは一瞬、オヤジさんの方へ目をやった。彼も黒の革ジャンに、レザーパンツをはいていた。

「この前くれたこれも、ワニ革かい？」

「もちろんです。」

　ポルゴは優勝賞金から山分けした後の小切手 388 億ドルをミス・ワカマツに手渡した。

「これでマシンの燃料を手配してくれ。あとの 612 億ドルも探偵業と株の運用で儲かったから大丈夫だよな？ 燃料が手に入り次第、もとの時代に戻ろう！」

　その時、大柄な金髪の男が事務所を訪れた。

「兄さん。お久しぶりね。」

「色々と大変だったな。ネットヴィジョンで試合の様子は見ていたよ。父さん、元気でしたか？」

　いかにもミュージシャンといったファッションのこの男は二代目グレート・アジアの兄であるヤカモチ大伴だ。

「アジアさん、お兄さんがいたのね。これまでてっきりあなたは一人っ子だと思っていたわ。」

「兄のヤカモチはシンガーソングライターで、地球中を駆け回っています。」

　ポルゴは気さくにヤカモチにビールを注ぎながら、挨拶をしたが、ミス・ワカマツは何かを急に思い出したかのように、何も言わずに事務所を飛び出していた。

ポルゴはそれに気付き、事務所を出るとミス・ワカマツに声を掛けた。

「ミス・ワカマツ、大丈夫か？」

「いや、ただ、ワタシだけ一人、天涯孤独だと思って。ずっと、アジアさんに兄弟がいないものと勘違いしていたから。しばらく一人にしておいて欲しいの。」

　暗い表情で語るミス・ワカマツ。

「一人じゃないさ。オレがいるじゃないか？」

「ポルゴさんはワタシの肉親じゃないわ。ワタシには血の繋がった家族がいない。ひと目でも死んだ兄貴に会えたら、いつも寝る前にそう思っているの。しばらく一人にしてください。」

　いつも理知的に振舞っているミス・ワカマツが唯一の肉親である兄を亡くしたことをトラウマに思っていることに、ポルゴは再び気付かされた。たまには一人になって考え

るのもいいさ、そう気楽に取り直して、ポルゴは事務所に戻って、宴会を続けた。

第 49 章暗殺依頼

　ミス・ワカマツはアイウォッチのハッキング機能を使い、キラー・L の連絡先を割り出した。そのままヴァイスチャットでアポイントを取ると、超一流の暗殺者キラー・L にコンタクトした。

　トキオの場末の喫茶店でキラー・L とミス・ワカマツは密会した。

「依頼の内容は、今の火星皇帝の暗殺よ。契約金はメールで伝えたとおり、キャッシュで 500 億ドルでいい？」

「ああ、わかったよ。ヤり方はどうする？」

「そうね、細胞一つ残らずがいいわ。後からクローンとか作られると問題だから。」

「お嬢さん、それではこの契約書に血判とサインをお願いします。」

「血判？」

「いや、ここに朱肉があるので拇印でも構わないよ。」

「サインをしてもらう前にひと言だけ説明しておこう。俺の依頼成功率は 100 %だ。ただし、人を呪わば穴二つという諺がある。依頼が不可能な場合は、俺は依頼人を消す。そうして依頼そのものの存在をなかったことにするんだ。まあ、10 件くらいしかそんなケースは今までになかったけどね。あと、理由も聞きたいな。」

「あなたのことは全て調べたわ。もちろん、依頼の実行が不可能な時に、依頼人を消すという話も含めてね。理由は説明すると長くなるけど、要するに復讐とか、そういう部類ね。サインはこれでいいかしら？ 出来れば、どれくらいかかるのかも教えて欲しいな。」

「ざっと１週間、いや十日以内にはなんとかなるはずだ。今、火星皇帝はギャラクシーの観戦を兼ねて地球圏に来ている。確実にヤツが地球に居るうちに仕留めるよ。まあ、ニュースでもマメにチェックしてくれよな。」

　キラー・L はキャッシュで 500 億ドルの大金を受け取ると何事もなかったかのようにその場を立ち去った。その飄々とした風貌と、引き締まった肉体は、狼の獣性を感じさせると共に、どこからか知性の匂いが漂っていた。それから数日が経過した。ミス・ワカマツは神経質にニュースをチェックするようになった。

「あのさー、燃料の手配はどうなっているんだい？ もちろん、全部ミス・ワカマツに任せたから、俺に意見する権利はないけどね。」

「実は、もとの時代に戻るのはあと一ヶ月、いや半年は待って欲しいの。」

「なぜだ？ せっかく燃料を買う金も合法的に溜めたし、後はもとの時代に戻るだけじゃないか？」

ミス・ワカマツの眼に冷徹な光が宿った。

「あのキラー・L に火星皇帝の暗殺を依頼したのよ。500 億ドルでね。」

「ふざけんな！！ なんでこの時代の人間を消す必要がある？ 今までアンタは今までヒトをあやめた事があるのか？ たとえ相手が火星人でも、人間は人間だ。一生十字架を背負って生きてゆくことになる。」

「今、この時代の火星皇帝を消せば、私たちの時代の火星皇帝も居なくなるし、火星帝国だって。そうすれば、兄貴だって火星人に殺されなくても済む。もちろん、地球侵略戦争で亡くなった多くの人たちの運命だって変わるかもしれない。歴史を変えることになるかもしれないけど、私は兄貴が生きているはずのもう一つの未来に賭けることにしたの。」

「今ここで火星皇帝を消せば、確かにワカマツが殺されないもう一つの未来も存在することになるかもしれない。しかし、それは完全なパラレル・ワールドで、俺たちはそこにはアクセスすることは出来ない。しかも、過去に戻って宿敵の祖先を消すというやり方が俺には許せないぜ！ モラルはモラルだ。ヒトにはやっていいことと、いけないことがあるはずだ！」

「なんとでも言ってよ。でも、ワタシにとって兄貴はたった一人。たとえどんなに汚い手段を使っても、別の世界に歴史が分岐しても、それでも兄貴と一緒に生活している幸せな自分の居る未来を作りたいの？ それが我儘って言うの？」

「とにかく、俺はキラー・L の野郎に依頼を撤回させる。力づくでもだ！ 君に殺しはさせはしないさ。」

「何も知らないのね。キラー・L はいったん引き受けた依頼は絶対に撤回しないわ。彼が依頼を撤回する時は、依頼人そのものを消した時よ。それにあの生粋の銀髪、紺碧の眼、キラー・L はあなたの...」

「そのことは言うな。いや、言わないでくれ。俺も薄々感づいてはいたさ。この前、ディスクで俺の家系図を見て確認したし。とにかく、ヤツに掛け合ってみるよ。有無は言わせないさ。」

ポルゴはキラー・L のアジトを割り出し、アポなしで訪問した。

「アンタかい？　あの時は楽しかったな。まあ、何となく気配でアンタの考えていることもわかっているけどな。とりあえず、用件はなんだい？」

「単刀直入に言う。ミス・ワカマツの依頼を撤回して欲しい。カネは別に返してくれなくてもいい。」

「おや、その金のネックレス、俺が恋人の誕生日にプレゼントしたのと全く同じ型だな。確かあれは工場の職人に特注したヤツだったが。アンタのネックレスはちょっと古びているな。それにそのオレと同じ銀髪と碧眼の眼。アンタには肉親のような親しみを感じる。しかし、それと仕事と話は別だ！　あんたもプロだろ。それくらいわかっているはずだ。」

「あなたには全部話してもいいだろう。俺とミス・ワカマツは未来から来た。俺のこのネックレスは死んだオヤジから先祖代々伝わってきた家宝として形見に貰ったものだ。そうだよ。俺はあなたの 15 代目の子孫さ。この眼この髪の色を見ればわかるだろ？　ミス・ワカマツは唯一の肉親を俺たちの時代の火星皇帝に殺されている。そのことを防止するために、あなたに依頼をした。そのことが馬鹿げたことであることは、彼女も理解しているはずだ。しかし、感情は数式のようには簡単に割り切れないものだよな。子孫の俺の頼みを一つくらい聞いてくれてもいいだろ？」

「結論から言おう。ムリだな。三日後には依頼を決行することに決めている。そのことを防ぐために、オレをヤるか？　それはアンタにはムリだろ。オレを消すことは、アンタの存在自体を消すことに繋がる。ミス・ワカマツと同じ論理だがな。まあ、今日のところはアンタにもお引取り願おう。自分の先祖が暗殺者と知った時は相当ショックだっただろうな。だが、オレは今の仕事にプライドを持っている。アンタの身体の中にはオレの遺伝子が３万分の一だけ含まれているんだな。言ってみれば、全くの他人かもな。まあ、未来に戻ってからも元気にやるんだな。あの時のギャラクシーはひさしぶりにワクワクさせてもらったよ。じゃあな。」

キラー・L は部屋のドアを自ら開けて、ポルゴを追い返すかのように送り出した。

それから半日が経過した。

「オヤジさん。実は話がある。ちょっと長くなるかもしれないが、聞いてくれよ。」

ポルゴはタビト大伴に洗いざらいことをぶちまけた。

「それは急を要する事態だな。キラー・L の天敵は連合警察の牧島夢子警部だ。牧島さんは連合警察の特別指名手配犯キラー・L を追っている腕利きの警部だ。ギャラクシー開催期間中は、参加者は不逮捕特権があるが、もうそれも切れているはずだ。牧島警部にアポを取って、協力してヤツを逮捕すれば、問題は解決だ。これが牧島警部の直通アドレスだ。」

「ありがとうございます。さっそく連絡を取ってみます。」

「帰りの燃料のことは、また株と探偵やって稼ぐか、それともこの時代の科学者に連絡をとってどうにかするんだな。ドクター・カオスと呼ばれている某博士や応用化学を専門にしているドクター・トリックが最有力候補だな。まあ、とりあえず先にキラー・L の件を片付けるんだな。」

ポルゴはアポを取ってその日のうちに牧島警部を訪ねた。

牧島警部はおよそ公務員である警察官とはかけ離れたなりだった。強いて言えば、腰に手錠と拳銃を身に着けていることが、彼女を警察官として認識させる唯一の目印だった。

右目から右耳にかけては何か計器を身に着けている。左手には鞭のような武器を持っ

ている。犯人を逮捕する時に使うのだろうか？ 髪は淡い紫がかった長髪で、およそ警察官とは縁がないであろうセクシーな服装をしていた。

「あなたが牧島さんでよろしいのですか？ 私が連絡を差し上げたポルゴというものです。」

「あなたのことはよく知っているわ。私もナマでギャラクシーを見ていたもの。不逮捕特権さえなければ、あの場ですぐキラー・L を逮捕できたのに。ホント、法律って面倒で無駄なルールまでだらだら条文に残っちゃうのよね。確認のために、ちょっと待っていてくれる。よしっ、スカウターオン！」

　牧島警部は右耳にかけている計器のスイッチを入れた。画面にはこう映っていた。

「ポルゴ。データベース不詳。戦闘能力：推定 520 ポイント。ルックス＋ 70 点。性格 85 点。こいつは利用価値があります。」

「本当便利ね、このスカウター。あなたの戦闘能力はだいたいキラー・L と同じくらい。まあ、本気になった私の半分ってところかな。嘘もつかなそうなタイプね。いいわ、キラー・L のアジトの位置を話してくれる？ さっそく今日中に殴りこみに行きましょうね。」

「灯台下暗しとはよく言ったものだな。ヤツのアジトは隣町の一番高いマンションの地下二階のスペースを全部借り切ってある。俺はヤツに顔が知られているんで、出来れば遠見の見物と行きたいのだが。」

「いいわ。場所さえわかれば、後は私が始末するわ。超一流の逮捕術をあなたにも見せてあげるわね。」

　そういうと牧島警部は左手の鞭を蛇のようにくねらせた。

「無事逮捕に成功した場合は、それなりの懸賞金をあなたにも返すわね。」

　牧島警部とポルゴはその日のキラー・L のアジトに潜入した。地下二階のフロアの入り口でポルゴは止まっていた。幾らなんでも、自分の子孫の手引きで寝込みを掻かれるとは、さすがの彼も夢にも思ってはいないだろう。牧島警部は躊躇なくキラー・L の寝室に土足で踏み込んだ。キラー・L はダブルベットに一人で寝ていた。

「あれ、今日は会わない約束じゃなかったっけ？ それとも急に俺が恋しくなって、って、牧島警部じゃないか？ なんでオレの居場所がわかったんだよ。」

「理解ある善良な地球市民の一人から、有力なタレコミがあったのよ。キラー・L、連合刑法第 199 条殺人罪により逮捕します。」

「せっかく寝室まで来てくれたんだし、一発してからでも、逮捕はいいんじゃないの？」

「誰が親の仇のあなたと、下手に動いたら抵抗するものとして射殺するわよ。」

キラー・L はベッドからおもむろに立ち上がると、枕を右手に構えた拳銃目掛けてなげつけた。そのまま横転して、ワルサー Q レーザー仕様を手に取った。

「これで形勢逆転だな？ 悪いが、ちょっと天国まで旅行してきてもらおうかな。もちろん片道切符でね。」

　キラー・L はワルサー Q のトリガーに手を掛けた。しかし、次の瞬間引き金を引こうとしたキラー・L の右手に電流のような強いショックが起こった。キラー・L の身体を牧島警部の鞭が捕らえていた。鞭の先から高圧電流が流れていた。ぐったりしている彼に牧島警部は手錠を掛けた。

「何回目かしらね。このキラー・L を逮捕するのは。逮捕するたびに多額の保釈金積んだり、カネにものを言わせて一流の悪徳弁護士呼んで裁判の結果逆転させたり、あるいは刑務所から脱走したりね。もうちょっと連合政府の司法システムもどうにかならないも

のかしら？」

　牧島警部は手錠を掛け、鞭で拘束したキラー・L を促し、外に止めてあったジパング地方政府警察庁の車に向って歩いていた。

「ちょっとでも変な動きをしたら、この鞭の電流でジエンドよ。」

覆面パトにキラー・L を収容すると、後部座席の窓から牧島警部はポルゴにウィンクをした。

「グッジョブ。じゃあ、出してくれる。」

　こうして超一流の暗殺者キラー・L は逮捕され、ミス・ワカマツの火星皇帝暗殺計画は闇から闇へ葬られたのだ。

第 50 章未来への帰還

　翌日、俺はミス・ワカマツに話しかけた。

「朝のニュース見たか？ 残念だったな。キラー・L 逮捕だってさ。やっぱり悪いことはするもんじゃないな。」

「残念ね。やっぱりもう兄には二度と会えないのかしら。死んじゃったんだもの。仕方ないわね。」

　俺はミス・ワカマツの目元に暗い翳が走ったのを見逃さなかった。

「まあ、この世の中には絶対って言葉は、本当は存在しないさ。もちろん、絶対無理ってこともありえない。現にタイムマシンだって君は所有しているんだし。生きてれば必ずいいこともあるさ。」

「生きてれば、ね。」

「まあ、いい。いつも面倒くさい作業はミス・ワカマツに任せてしまったから、燃料の手配は俺が全部どうにかするよ。今日はアジアも練習オフみたいだから、二人で買い物でも行って気晴らしでもして来いよな。燃料はそうだな、一ヶ月以内に手配するよ。カネも今のままで十分だ。アイウォッチに俺たちの時代の科学技術のデータをコピーしてある。やや邪道だが、この時代の科学者を利用して、燃料を安く作らせる。」

「じゃ、俺はしばらく外で交渉してくるよ。じゃあな。」

この時代の最有力な応用化学者、ドクター・トリックに連絡すると、俺は彼の研究室で量子移動機の燃料を安く合成するための基礎理論とそのためのミニ化学プラントの設計図をプレゼンした。

「ほっほっほ。面白い話ですな。せっかくだから実験してみましょう。予算も 500 億ドル近くプレゼントしてくれるとは、科学者冥利に尽きますな。」

「じゃあ、交渉成立ということで。よろしくお願いします。」

その後、俺は事務所に戻ると、オヤジさんに誰かメカに強い知り合いがいないか相談し

た。量子移動機のリミッターに俺は細工を施すつもりだった。

「それだったら、ジャック君の奥さんのメガ子さんが適任だ。彼女はエンジニアで惑星間航空工学を専門にしている。子育てで何かと忙しいかもしれないが、彼女に頼んであげよう。」

メガ子さん、本名イザベラ・ハロルドは、保育園に息子さんを預けて事務所に駆けつけてくれた。特徴的な黒ぶちのメガネを掛け、激しいまでの天然パーマの女性だった。これがあのジャックさんの好みのタイプなのか？ そんなことを考えながら、俺は満面の笑みで彼女に挨拶をした。

「ポルゴだ。よろしく。」

「イザベラです。どうも、夫のジャックがお世話になったそうで。」

「いやいや、お世話になっているのはこちらの方だ。早速、俺たちの量子移動機のところまで案内させてもらうよ。実は、このマシンは移動する時空間に制限が加えられているみたいで、数年といった短い単位での移動は出来ないことになっている。そこをあなたの力で改良して欲しいのだけど。」

「現物を見て判断させていただきます。」

４次元量子移動機を前にして、興味深い表情を浮かべ、真剣に得意の機械いじりをしだすイザベラさん。俺は彼女が手を休めた時に、コーヒーとお菓子を差し出しながら、ちょっと気になる質問をしてみた。

「ジャックさんとはいつから知り合ったのかい？」

「私とジャックは幼稚園の時から幼なじみで、私に初めて大人になったら結婚しようと言ってくれたのは、確か４歳の時かしら。あまりに嬉しかったので、ずっと覚えていたわ。彼が確か第７回のギャラクシーに参戦して優勝したとき、私は名乗り出て声を掛けたのよね。彼ちゃんと幼い時の約束覚えていてくれてね。付き合っていたら、子供が出来て、それがきっかけで結婚したの。」

俺は一瞬、世の中には子供の時の他愛ない約束を本気で覚えて実行をせまる執念深い人間もいるものだと感じたが、おくびにも出さずにこう言った。

「いやー、駅前のケーキ屋においしいチョコレートケーキが売っていてね。これも良かったら食べてくれよな。もちろん、息子さんとジャックさんの分は、別にお土産として用意してあるからさ。」

イザベラさんの協力で、二週間後に量子移動機のリミッターの解除に無事成功した。燃料の方は、後一、二週間はかかりそうだった。
　ある日、俺はアジアのオヤジさんに時間をとってもらい、焼き鳥屋に一緒に一杯やりにった。

「いや、オヤジさんの協力で無事、一週間後にはもとの時代に戻れそうです。この時代にも強い人間は山ほどいた。いろいろあったけど、全ていい思い出です。さあ、飲んでください。今日は俺が全部出しますよ。」

「ああ、ありがとう。しかし、俺は一つだけ気になっていることがある。ポルゴ、あんたは数世紀後の未来から来たんだろ。ってことはあれだな、俺の運命とかも知っていたりするのか？」

「運命って、あれですか？ 例えば、いつどんな風に死んだとか、子孫繁栄がどうかとか？」

「そういうことじゃないんだ。俺が小説家として成功したか？ 作品が後世まで残って伝えられているかとか？ そういうことだ。」

「ああ、それだったら話してもいいでしょう。というか是非、私は話すべきですね。小説家タビト大伴の名前は俺たちの時代、つまり数世紀後にも残っていますよ。処女作の『にごりざけ』も俺たちの時代ではハイスクールのジパング語の教科書に収録されています。まあ、俺の好みは、あなたが探偵時代の経験をまとめた名作『フジワラ４兄弟の野望』の方が数倍面白かったですが。これはまだ出版されていない作品ですよね。」

「いや、あんたも知っていると思うが、俺が今、普段喫茶店でしけ込んでいる時に書いているのが、その小説『フジワラ４兄弟の野望』だよ。ところで、俺の娘、グレート・アジア２世はちゃんと結婚できるのか？」

「その質問は答えるまでもないでしょう。私たちの時代にはグレート・アジア 13 世が活躍しています。私がこの時代に来て、最初に訪ねようと思った相手は、グレート・アジアさん、その人でしたよ。しかし、まだなぜ初代のグレート・アジア、つまりあなたの奥様が亡くなったのか、詳細を聞いてないですよ。良かったら、話してくれませんか？」

「ああ、妻の初代アジア、漢字で書けば亜路逢は、銀河をまたにかける最悪な使い手、通称、異界の死神に殺されたんだ。例のフジワラ 4 兄弟の長男が俺たちへの復讐にヤツを使ってまず娘を誘拐した。俺たちは娘を助けるために夫婦で殴り込みにいったが、ヤツは相手の気を無効化する妖術を操り、日本刀を武器に娘を盾にして戦いを挑んできた。ヤツが娘を斬ろうとした瞬間、アジアが盾になって庇ってくれた。それがアジアの死因だよ。」

「で、異界の死神は倒せたんですか？」

「ああ、娘を助け出した時は、逃げられてしまったが、また俺の事務所に殴りこみを掛けてきた。その時に、素手でどうにか仕留めたよ。ヤツの冷酷な髑髏のマスクを思い返すたびに、虫唾が走るぜ。」

「そんなことがあったんですか？　まあ、いい。今日は潰れるまで、飲みましょう。家まで送りますよ。安心してください。」

とうとう俺たちがもとの時代に戻る時がやってきた。アジアとオヤジさん、それにジャッ

クさんとメガ子さんが俺たちの量子移動機の前まで見送りに来てくれた。

俺はアジアと軽く抱擁を交わした。その時、アジアは耳元でこう言った。

「あの決勝の後の爆発の時、あなたはタッグパートナーの私ではなく、迷わずミス・ワカマツを助けに向ったわね。それがあなたの答えかしら？」

　俺は何食わぬ笑みをアジアに返すと、そのまま無言でオヤジさん、ジャックさんと奥さんと握手をした。ミス・ワカマツはもとの時代に帰れるというのになぜか浮かない表情だった。

「アジアさん、あなたと一緒に部屋で生活した思い出は忘れないわ。私にもはじめて姉妹が出来たような気分を味わったもの。お兄さんと仲良くやってね。それじゃあ。」

　俺たちは量子移動機に乗り込んだ。ベルトを締めた後、俺はアジアとオヤジさんにガラス越しに手を降り、メガ子さんにはこっそりアイコンタクトをした。

「それじゃあ、そろそろ出発しよう。」

　轟音と共に俺たちは時空を越える旅に出発した。実際は数分だったか、俺たちは幾日もせまい量子移動機に閉じ込められている気がしていた。そのまま移動機は規定の時間までの移動（ ジャンプ ）に成功した。

「どうやらもう着いたみたい。でも、日時の設定が変ね。私たちが出発した時の７年前になっているわ。この計器、狂っているのかしら？」

「そんなことはないさ。ちょっとしたハプニングだよ。いいから外に出てみようじゃないか？ よく覚えている街並みだろ？ まだ貴女は高校生くらいだったかな？」

　それから俺たちは少し街並みを歩き、ミス・ワカマツの家の前までやって来た。2 階の出窓を覗くと、そこにはボードレールの詩集を懸命に読んでいる兄ワカマツの姿があった。

ミス・ワカマツの眼から一筋の涙が流れた。

「兄さん...」

「いいんだぜ。会ってもな。それくらいのいたずらは神様だって許してくれるさ。まあ、年を７歳以上食った俺たちがいきなり会っても、あれだから、ちょっといつもの喫茶店で待っていてくれよ。俺は上手くワカマツと交渉して、喫茶店まで呼び出すからさ。後は好きにやりなよ。でも、この世界に居られるのは一日だけっていう条件付きだがな。まあ、ちょっと待っていてくれ。」

　俺は当時のワカマツの携帯番号にアイウォッチから電話を掛け、若作りのやや高めの声を出して、かつての親友に話しかけた。

「よう、俺だよ。ポルゴ。ちょっと最近風邪引いちまってさ。それはいいんだが。とっておきの美人がお前と一回デートしたいって言って、いつもの喫茶店で待っている。ファミリーネームはお前と同じワカマツさんだ。まあ、頑張ってくれよな。じゃあな。」

「ちょっと待てよ、ポルゴ...って、切っちまったよ、アイツ。いつもせっかちだからな。」

俺は思わず電話を切ってから思わず涙ぐんだ。久しぶりに聞いた親友の声だった。

ワカマツは急いで身なりを整えると、勝負服のジャケットをひっかけ、猛ダッシュでいつもの喫茶店、つまりザ・ブラックキャットを訪れた。そこには彼と同じくらいの年のメガネを掛けた長い黒髪の美しい女性が笑顔で手を振っていた。

「ワカマツさん。こんにちは。いや、はじめまして、かな。私も偶然ワカマツっていうの。とりあえずテキトーに頼んでもいい？ そうね、レモンチーズケーキとアイスミルクティーなんてどうかしら？ 私も同じのをお願いするわ。」

ウェイターがケーキと飲み物を運んできた。

「偶然だな。オレの好みとどんぴしゃりだな。オレたち何か気が合いそうだな。なんかあなたのことずっと前から知っていたような気がする。苗字が同じってことは親戚とかじゃないよね？」

「あははは、どうかしらね。私の下の名前は夢見よ。ユメミって呼んでね。」

「偶然だな。高校生の妹と同じ名前だよ。偶然って重なるものなんだな。今ちょうど、妹は修学旅行で留守にしているけどね。」

「妹さんとは仲良くやっているの？」

「ああ、唯一の肉親だからな。俺たちは第二次地球侵略戦争のときに両親を失った。それからは祖父母の家で世話になっている。まあ、祖父母も去年、多額の財産を残して、亡くなったけどな。」

しばらくミス・ワカマツとワカマツは笑顔で話し合っていた。俺は量子移動機の微調整と燃料の補充に向った。

二時間後、俺は再び喫茶店の方に様子を見に行った。

ワカマツ兄妹が店から出てきた。俺は邪魔にならないように離れて様子を見守った。

「いやー、あまりここに長くいると彼女にみつかっちゃうからさー。悪い、悪い。」

ミス・ワカマツは兄貴のワカマツに恋人がいたことを知らなかった。

「へー、ワカマツさんの彼女ってどんな人？　きっと美人かしら。」

「まあね、君にはかなわないかもしれないけど。いちおう結婚するつもりさ。まだ彼女学生だから、卒業した後にでも、すぐね。あと３年くらいかかるかな？」

「そーなんだ。あのさー、ワタシからお願いがあるんだけど、聞いてくれるかしら？　２年後の妹さんの誕生日には絶対家にいて、妹さんと一緒にお祝いしてあげてね。彼女、そろそろ成人するんじゃない？」

「よく知っているな。わかったよ。必ずそうするよ。」

「そろそろお別れしないとね。きっとあなたの妹さんはお兄さんのあなたのことをいつも頼りにしているから。あなたも自分の身体を大切にしてね。じゃあ、もう私時間がないから。」

　言い終わると、振り返りもせずにミス・ワカマツは量子移動機に向かい駆け込んだ。この日から２年後のミス・ワカマツの誕生日、それは兄ワカマツの命日だった。

　俺は量子移動機の中でミス・ワカマツを待っていた。彼女は、何かを吹っ切るかのようにもの凄い勢いで量子移動機に駆け込んできた。

「どうだった？　もっと長く居てもいいんだぜ。いや、もう何も言うな。貴女の気持ちはわかっている。このまま出発するけど、いいよな？　きっかりもとの俺たちの時代に、過去の世界で経過した時間を足した時点に今からトリップするぜ。」

　ミス・ワカマツはしばらく茫然としていたが、ふと気を取り直すとこう言った。

「ありがとう。ポルゴさん。」

　俺は全力でスロットルを引いた。次の瞬間、量子移動機は俺たちの時代へ向けて旅立った。過去の世界との交渉はいろいろあったが、俺たちにとって忘れられない記憶となった。

　俺は笑顔で語り合うワカマツ兄妹の姿を思い出し、彼女にバレないように一筋の泪を流していた。ミス・ワカマツも兄貴のことを考えながら、自分の時代で前向きに自分の道を歩こうと決めていた。

　長い人生、たまには寄り道したっていいじゃないか？　それがたとえ寄り道であっても、人生に忘れられない決定的な影響を与えることだってあるのだしさ。

　この７年前の世界への寄り道は、銀河のルールでは違法かもしれないが、ミス・ワカマツにとっては彼女の忘れられない過去の記憶に一つの区切りをつけることを意味していた。

　人生の区切りの後には、また気をとりなおして再出発しないと。量子移動機が揺れ始めると、窓の視界から俺たちの時代の懐かしい景色が見えてきた。これからが本当のはじまりだ。

第六部　VS 太陽系帝国

第 51 章アフター・ワールド

　確かに俺たちはもとの未来、いや俺たちの時代にきっかり戻ってきた。俺はダメタイムマシン（ いや量子移動機だっけ？ ）から降りる前に、安全確認を行った。

「ミス・ワカマツ、放射能反応はどうなっている？」

「オール・グリーン。正常値です。」

「じゃあ、とりあえず俺が外に出て様子を確かめてみる。ちょっと中で待っていてくれ。」

　分厚い扉を開けて外の世界に俺は出た。やっともとのジパング地方に戻ってきた。

　はずだった。

　辺りは一面の砂漠だ。いや、正確には焼け野原といった方がいい。数百メートルおきに、地面に木の棒が何本も突き刺さっていた。遠くの方にはシェルター、いやむしろ巣（ ネスト ）といった方がいいような怪しげな白い建物が見えていた。よーく、神経を研ぎ澄まして気配を探ると、確かに我々地球人の気配も感じる。また、どこかで一度軽くコンタクトしたことがあるはずの懐かしい、それでいて、とてつもなく強大な気も感じることが出来た。

やばい。

この状況を正確に表現するには、この下卑た言葉しか、存在しなかった。

「ミス・ワカマツ。あなたは外の世界をまだ見ないほうが、いい。とりあえずこのマシンの中からネットに直に接続して、情報を集めてみよう。」

「どういうこと、ポルゴさん。私たちが過去にトリップした事で、まさか歴史そのものが変わってしまったとか？ もしかして兄貴も無事だったりして...」

「前も言ったはずだ。俺達に過ぎ去った歴史を変える権利はない。この時代は俺達がこのマシンでトリップした時点から、俺達が過去世界で過ごした時間をきっかり足したものだ。もちろん、時間軸（ タイム・ホライズン ）は連続しているし、非可逆だ。どうやら地球は、このジパングは、火星人に征服されてしまったらしい。」

実は私もさっきからモニターで見ていたんですけど...地面に突き刺さっているあの木の棒って？」

「火星人に殺された地球人たちの墓だろう。遠くに見えているシェルターは、宇宙（ そら ）から降りて来た火星人たちの巣だ。この状況は、あまりにやば過ぎる。とりあえず、残りの燃料で俺達の事務所の地下シェルターまで、一気にこのマシンごとトリップしよう。」

「...了解。」

なんとか残りの燃料とミス・ワカマツのテクニックで無事に俺達の事務所の地下まで移動することが出来た。狭いシェルターに無理矢理マシンを瞬間移動させたため、快適だった俺達の２段ベッドは一気にミシミシと破壊されてしまった。俺達は当分このマシンの中で暮らすことになりそうだった。

「とりあえず、ミスター東郷の自宅に電話でも掛けてみるよ。悪いけど、情報収集を頼む！」

　俺はアイウォッチのアンテナ機能を最大出力にして、ミスター東郷の自宅に電話した。

「はい、東郷です。ああ、ポルゴさんね。」

「レイナか。ところで、皆さん無事か？」

「母と私は無事です。ただ、父が行方不明に...」

「何、あの無敵の師匠が。前回のギャラクシーで相当ガタが来ていたはずだが...一体どういうことだ？」

「火星人たちの空爆のとき。最初は、旧地球連合政府は群発大地震って報道したのだけど。

　あれが火星人たちの仕業だと地球の人々が気付いた時、父は、カタをつけに行く、と言ったきり、一人で家を出て行ってしまったの。それから一切音沙汰なし。あの身体で、もう父さんは闘える年齢でもないのに。」

「旧地球連合政府って？ いま地球の政治を誰が仕切っているんだ？」

「いま、地球は旧連合政府ではなく、太陽系帝国第一植民地：第三惑星と呼ばれているわ。仕切っているのは、当然火星皇帝。金星フロンティアはこの混乱に乗じて独立を達成。その後、あっさり太陽系帝国に併合されたわ。」

「ミスター東郷の行方は俺が責任持って探す！ とりあえず、そのまま自宅シェルターに篭るなり、太陽系の他の惑星に逃げるなり、ベストな方法を選ぶのだな。」

「だから、太陽系の惑星は全て火星皇帝に支配されちゃっているのよ。この太陽系のどこにも自由はないし、私達も太陽系帝国の国民背番号カード（ 身分証明書 ）を渡されているの。金星に避難しても、無駄、無駄。まあ、奴隷にされなかっただけマシかもね。」

　あまりに唐突かつ酷過ぎる話だった。俺の留守中によくもここまでやってくれたものだ。

　電話を終えると、ミス・ワカマツが分析した情報を解説してくれた。

「ポルゴさん。火星人たちは、地球の太陽教徒を扇動して、テロを起こさせたみたい。それを火星皇帝専属スポークスマンたちが、反火星パルチザンの仕業に仕立てあげた報道を意図的に流して...内乱に乗じて、火星帝国宙軍が核兵器を使って空爆を開始、焦土にキラーマシンを送り込んで、さらに細菌兵器を投入...これが第五次地球侵略戦争、いや火星人から見れば、太陽系統一戦争の全てよ。この戦争のおかげで地球の人口も半減してしまった。どうやら私達にも太陽系帝国の住民番号まで割り振られているみたいね。」

「なめた話だ。あまりに人命というものを軽んじている。たとえ姿・形は違っても、ヒトの命の重さ・尊さに違いはないはずだ。あっさり地球人を半分も虐殺してしまう火星皇帝は、絶対に許せない！ いまやヤツの称号は、太陽系皇帝か。とてもその器にあるとは思えん！」

「また抵抗活動をするの？...これ以上、ワタシは大切な人を失いたくない。」

「方法はいろいろある。とりあえず、アイウォッチで３代目の銀河の大王と連絡を取ってみるか？」

　俺はアイウォッチから、銀河の大王を呼び出してみた。

「おお、ポルゴか。過去の世界から無事戻ってきたようじゃノ。感想はどうじゃった？ ワシのジイさまは健在じゃったか？」

「ああ、確かにアンタのジイさんの全盛期は、今のアンタより強かったかもな。俺はそんなことを話したいんじゃないんだ！ 一体この地球圏、いや太陽系はどうなっているのだ。」

「そう興奮するものではない。太陽系のことは、我々銀河帝国議会でも問題になっておる。もちろん、旧火星皇帝率いる太陽系帝国が我々の銀河帝国に加盟せず、銀河帝国議会に代表を送り出していない以上、我々銀河帝国に内政干渉の権利は一切存在しない。ただ、あまりに旧火星皇帝、今の太陽系皇帝が紛争解決に核兵器や生物細菌兵器を乱発することで、清潔好きな銀河帝国市民から、宇宙核汚染反対の大コールが上がっておるのじゃ。放射能による宇宙環境汚染となると、内政自治の原則とは、大いに問題の性質が異なってくるのじゃ。銀河帝国議会議長として、さすがにワシもそろそろ帝国市民の声を無視できなくなっておる。いっそのこと、銀河帝国一個艦隊を率いるなり、ワシのフルパワーギャラクシウェーブなりで、アホな太陽系帝国構想を総清算したいなんて思ったりもするが、さすがにそこまではノ。だからこその問題なのじゃが。」

「銀河帝国は、太陽系惑星総攻撃まで視野に入れているのか？ 確かに、核戦争や生物細菌攻撃は良くないよな。火星皇帝は手段を選ばなかったんだな。」

「まあ、ヒトにはヒトの事情がある。我々のモラルから見て、あまりに自然の摂理や生態系を乱すことは、宇宙全体のバランスから見てもよくない。それはたとえ、太陽系という宇宙全体から見れば、あまり局所的な部分における話であってもだ。人類として文明を持つ以上、やっていいことと、決してやってはいけないことがある。どうやら太陽系帝国の人間とその支配者は、そのことをあまりに軽視し過ぎてしまったようだ。ワシとしても考えざるを得まい。ところで、そろそろ量子移動機を回収させて欲しいのじゃが。今後の改良のために、データを回収したい。後で部下に回収に行かせるが、よいかの？」

「ああ、後でミス・ワカマツの了解をとっておくよ。アンタも何かと苦労が多いな。」

こんな会話が続いていた。俺達が数世紀前の世界にいったんトリップして、また戻ってきた元の世界（ 未来世界 ）はあまりに希望のない世界になっていた。まるでパンドラの箱を開けてひっくり返した後のようだが、パンドラの箱であれば、いらん全ての罪悪が世間に降り掛かった後、最後には何の役にも立たない希望 (hope) が残っているはずだった。それすら残っていないのが、俺達のアフター・ワールドだった。

この時代、いや俺にとっての唯一の頼みの綱である師匠ミスター東郷すら、行方不明だった。パートナーのミス・ワカマツの知性・知略は圧倒的であるが、このあまりに危険な状況で、彼女に頼ることは出来なかった。彼女がこれ以上自分の大切な人間を失いたくないと思っているのと同じように、俺もこれ以上自分の愛する人びとを失いたくはなかった。

失ってからはじめてその重みがわかる宝も世の中には存在する。俺達はその重みを既に思い知らされている以上、ここからは別行動といかざるを得ないだろう。ミス・ワカマツの無事を確保した上で、初心に戻ってピンで反皇帝パルチザン運動を始めることしか道は残されていないように思えた。かつての仲間達は皆、前の抵抗運動の時に火星人たちに殺された。

第 52 章地獄からの使者

地球圏には今一人の逆立った銀髪の若い男が立っていた。強い爆発からとっさに瞬間移動を使って逃れてきたはずだった。ここがどこかはわからない。確かにここが地球という感じ、いや感覚（ フィーリング ）はする。しかし、あたりはどこを見ても一面の焼け野原だったし、もしかしたら時代まで違っているのかもしれなかった。

－スプラッター星人の野郎め。ひどい爆発を起こしやがって。とんでもないエネルギーだったな。あの大爆発のエネルギーを利用して、最後の瞬間移動を使ったが、どうやら時空間まで飛び越えてしまったらしい。とんだ「瞬間」移動だぜ。－

男はこんなことを一人で考えながら、辺りを見回していた。きっかり何も見えない。

文明というものがこの世界からは感じられなかった。

短い期間に瞬間移動を連発してしまったため、これ以上瞬間移動をすることは出来なかった。それに、もうそんな力も残っていないことも、彼自身がよくわかっていた。銀河全体のパワーが集まり、ぶつかり合う場、そう、キングオヴギャラクシーのような場があれば、彼の力も呼応してその潜在能力を取り戻すことが出来るかもしれなかった。

－とりあえず、気でも探ってみるか？　－

廃墟と化したこの惑星（ほし）でも、やはり強い気や普通の人々の気は存在していた。

やっぱりこんなぼろ惑星でも地球だとわかってみるとちょっと嬉しかった。探ってみた気の中に、懐かしい感じのする気が１つだけあった。彼の知っている相手とは別の気ではあったが、どこかに何かしら繋がりを感じる。まだ眠っているような穏やかな気だった。彼はこの気の相手に会ってみる事にした。どうやら歩いてゆける距離のようだ。

この廃墟で最初に彼が発見した人間達はぼろを着て集団で争っていた。

「この裏切り者め。」

怒号が飛び交う。どうやら地球人同士で殺しあっている様子だ。彼はちらと一瞥をくれると、また歩き出した。

－おかしい。俺の技（ 瞬間移動 ）ではいかに気を高めても、過去にまで戻ることは出来ないはずだ。しかし、この世界の人間は文明以前の生活をしているし、仲間同士で殺しあっている。とても「バラ色」の未来とやらにジャンプしたとは思えん。－

殺風景な世界を彼が歩き続けると、どうやらなんとなく懐かしさを感じる街並みが見えてきた。もちろん街並みといっても、めぼしい建物はない。かつて道路があったところのまわりに、ぽつぽつとバラック小屋が立ち並んでいる。どうやらバザールが開かれているようだ。さらに歩みを進めていくと、彼が求めていた強い気が手にとるように感じられてきた。だんだん相手に近づいている。そんな気がした。

もうすぐ会える。そう思い彼が歩いてゆくと、そこにはリングが存在していた。横の看板に「ウェヌスジム青空道場」と墨で書いてあった。一応、リングの上には急ごしらえの屋根はあったのだが。リングの上には若い女が一人でヒンズースクワットをしていた。彼はリングサイドに立つと、今まで隠していた気を相手にもわかるよう少し高めて、視線を送った。相手と目線が合った。女はジッとこちらを見つめると、一筋の涙を流していた。

「ずっとあなたに会いたかった気がするわ。ビデオアーカイブでしか貴方を見たことはないけどね。あなた、初代キングオヴギャラクシーの覇者 G’（ ジー・ダッシュ ）さんでしょ。ワタシは 13 代目のグレート・アジアよ。どうやってこの時代までやってきたの？」

「そういうことか。どうやら俺はずいぶん先の未来まで飛ばされてしまったらしいな。アンタが 13 代目のグレート・アジアか。俺は初代と闘った事があるし、２代目と一度だけタッグを組んだこともある。今のアンタの涙を見ると、どうやら俺はもう元の（ 過去の ）世界には戻れない運命のようだな。しかし、一体どうなっているんだ？ この世界のザマは？」

「火星人たちが地球に侵略してきて、地球の人口は一気に半減。ワタシは地下のシェルターに避難して何とか助かったけど、地上のジムの建物は全壊。所属していたプロレス団体も戦争のゴタゴタで崩壊して. . . 今の状態に。」

「青空リングか。いろいろ大変だったのだな。プロレスの団体の運営は、さすがにこの戦後の状況を見ると難しいのはわかる。でも、例えば銀河レベルの大会、それにタッグの

大会とかは、ないのか？」

「キングオヴギャラクシーのことね。確かに近々どこかで開かれるっていう噂は聞いているけど。まだ主催者の情報もわからないし、それに肝心のタッグパートナーが。前回大会で一緒に参加してくれたエリカって子がいるんだけど、もうライバルの私とは金輪際組みたくないと三行半突きつけられちゃってね。」

「俺と一緒に組んで参加しよう。銀河最強クラスのエネルギーがぶつかりあう例の大会に参加すれば、俺も力を取り戻して、あわよくば元の時代まで戻れるかもしれない。それに...」

「願ってもない話ね。シェルターの中にもう一部屋空き部屋があるし、これからワタシと一緒に生活して合同強化練習を始めてくれる？ エントリーとか、面倒くさい作業はこちらで全部済ませておくから。」

「了解。交渉成立だな。」

　廃墟となった地球圏で、かつてのキングオヴギャラクシーの常連にして初代銀河の大王の龍の気の遺伝子を受け継ぐ強化人間 G’（ ジー・ダッシュ ）と、最強レスラーの遺伝子を持つグレート・アジア 13 世が時代を超えて手を結んでいた。これから来るべき反火星パルチザン抵抗運動、波乱の予兆を含んだ新世紀第３回キングオヴギャラクシーへ向けて、時代はゆっくりと、しかし正確に胎動していた。

「ちょっと火星人でも狩って来る！ 合同練習はその後だ。」

　そう言い残すと、彼は急ごしらえのウェヌスジムを後にした。侵略者達を狩る！ それは銀河の掃除人（ スイーパー・ギャラクティカ ）と呼ばれた彼にとって、朝飯前の作業だった。

第 53 章最強の挑戦者

　銀河帝国の首都がある惑星サルバトーレでは、２人の人間が強烈なトレーニングを開始していた。

「王子！ もっと気合入れて練習してくださいよ。」

「んなこといっても、ニート君。最近ちょっと厳しくなってない？」

「すべて王子のためです。今度のキングオヴギャラクシーで、お父上、いや大王様を越えて見せるのです。この銀河帝国で４代目の大王の座を狙っている連中は、王子だけではないことをお忘れなく。」

王子と呼ばれている龍族の若い青年は、３代目の銀河の大王の息子、つまり銀河帝国の皇太子だった。またニート君と呼ばれている小柄な少年、こちらは地球人タイプであったが、彼は（ 本当は性別まではわからないが、とりあえず彼としておこう ）は本名ニコラス・トルーマン、略称はニート君だった。ニート君は王子のスパーリング・パートナー兼コーチだった。

「王子っ！ 前のギャラクシーで大王様が、地球人の女性チームに負けたことをご存知ですよね？ あれで大王様の株はグンと落ちてしまったのです。そこで、息子の王子が頑張れば、一気に次期大王の座は確定です。」

「でも、ニート君、ボクそんなに根性ないしさー。どうせ今の状態で試合出場しても、一回戦負けがオチだよね。」

「だからこそのトレーニングです。私が王子の潜在能力をギリギリまで引き出して見せます！」

王子とニート君がパンチンググローブをオープンフィンガーグローブに付け替えると強烈な殴り合いのスパーリングがはじまった。

　銀河帝国の王子が全身の気を込めたパンチをワンツー・フック・アッパーと放つ。すれすれで全てかわすニート君。ニート君が軽く踏み込んだだけのノーモーションのジャブ気味右ストレートを放つと、あろうことか王子はダウンした。すかさずダウンした王子の頭にニート君が蹴りかかる。

　寸止めだ。

「王子。あなたはまだ甘さがとれていない。実戦だったら、ここでＫＯされていますよ。」

「んなこと言ってもニート君、ボク、カワイ子ちゃんが応援してくれないと本気が出ないんだよ。ボクまだ成人もしていないしさー。やっぱり彼女くらい欲しいよね。」

「何言っているのですか？ 王子！ キングオヴギャラクシーにナンパはカンケーありません。異性をナメているからお父上のように負けてしまうのです。」

「ニート君、ボクはパパと違って、まだ無敗だよ。なぜって、まだデビューしてないんだからね。今まで小柄な君のことを気遣って本気を出さなかったけど、パパのことまで引き合いに出すんだったら、ボクにも考えがあるよ。」

　言い終わると銀河帝国の王子は両の掌を合わせ、腰元に溜めた。そのまま両手を前に出すと、両の掌からニート君に向けて全身の気を一気に放った。

「食らいなー。10 倍ギャラクシーウェーブ！」

　至近距離からの大技だ。小柄なニート君が受けられるはずがなかった。

　しかし、そこには片手（左手のみ！）でギャラクシーウェーブを完全に受けきっているニコラスの姿があった。

「王子、まだ甘いですね。世の中にはもっと凄い技があることをお教えしましょう。」

　言い終わるとニート君は使っていない方の右手を前に突き出すと、鏡のように王子のギャラクシーウェーブを反射させ、一気に王子目掛けて強力な返しの光線技を放った。

「リフレクション・エッジ、なんちゃってネ。王子、お怪我はありませんか？」

　その時、トレーニングルームに入ってきた一つの強大な影があった。３代目の銀河の大王、その人であった。

「ニコラス・トルーマン、もう今日はその辺でジュニアを勘弁してやってくれんか？ ワシも自分の息子だけはついつい甘やかしてしまう。もちろん、お主の教育方針には賛成じゃがの。」

「ハイ、大王様！」

　こうして、次のギャラクシーに向けて、銀河帝国では着々と準備が進められていた。

第 54 章憤怒の皇帝

―くたばれ！ ゴミども。

　その言葉と共に銀髪の若者の掌から光線が放たれる。目の前にいた火星人４人がいまの気を利用した強烈な光線技で完全に消滅していた。なおもまだ、この若者の周りを 20 人以上の火星人たちが取り囲んでいる。

－オトナシクシロ！ この無知蒙昧な地球人め。生命の杖でヤキコロサレタイカ？

彼を囲んでいる火星人の一人が言った。どうやらリーダー格らしい。

－なんだ？ 生命の杖って？ コレのことか？

一瞬で火星人の生命の杖を奪い取ると、銀髪の若者は一気にその杖を無造作に振り回した。

－ヤメロ、貴様、なんてキケンなことを！！

　隊長がその言葉を言い終わる前に、生命の杖が彼の体を貫いていた。

－侵略者のゴミどもめ！ お前ら、生きる権利がねーよ。少なくともこの地球上ではな！

　言い終わると、銀髪の若者は全身の気を一気に開放した。たったこれだけで、まわりの 20 人を越える火星人が全て蒸発していた。

「一体なんじゃ？ このひどいビデオアーカイブは。私の可愛い同胞達が無残に殺されておるではないか？」

「太陽系帝国皇帝閣下！ もうあなたは火星人だけの代表ではないのですぞ！ 太陽系の住民、すべての利益を代表してものを考えていただかないと。」

「うるさい、うるさい。私は同胞が無残に殺されてゆく姿が歯がゆいのじゃ！ あの銀髪の地球人め、絶対に公式の場で公開処刑してやる。おい、ジョー・ヨージ司令官を呼べ！」

「は、はっ。ただちに。」

火星皇帝に魂を売った地球の格闘家ジョー・ヨージ 12 世は、先の太陽系統一戦争の地球侵略部隊の司令官を引き受けていた。時代遅れの軍服に身を包んだヨージ司令官が、火星皇帝、いや太陽系皇帝の執務室に呼び出された。もちろん、太陽系帝国の首都はマーシャンポリスだった。

「ヨージ司令官、参上しました！」

「おお、ヨージか。入れ、入れ。この度の戦、素晴らしい活躍じゃったの。」

「邪魔者のポルゴも現れなかったせいか、地球併合作戦は上手く行きました。しかし、今回のご用件はなんでしょうか？」

「お主も既に見たであろう、このビデオアーカイブを？　この銀髪の地球人の若者を始末して欲しい。」

　スクリーンに映し出された銀髪の青年の顔を見て、ヨージ司令官の表情は一瞬にして凍りついた。

「この男は、この男は、かつて数世紀前に開かれていたというキングオヴギャラクシーの初代覇者 G’（ ジー・ダッシュ ）という男にそっくりです。もちろん、何かの間違いだとは思いますが。彼が本物の G’、あるいはその遺伝子を引き継ぐものであるとすると、２流格闘家の私の能力を遥かに越えます。出来れば、今回の件はなかったことにしていただきたいのですが。」

「何だと！　このワタシの頼みが聞けないと言うのか？　それほどまでに、この男が凄いと申すのか？　納得がいかんな。まあ、いい。ワタシは太陽系統一記念に近々キングオヴギャラクシーを主催する。その場で、この男を公衆の面前で始末させよう。ヨージ司令官、世の中にはお主の代わりが腐るほどおることを忘れるなよ！」

　ヨージ司令官は屈辱に顔を歪めながら、内心ほっとしていた。あの男が本当に G’ であるとすれば、時空すら超越している彼を止められる者などこの世には存在しないはずだ。

　全ての太陽系の格闘家にとって、初代キングオヴギャラクシーの覇者 G’ は伝説の存在だった。彼は地球人ではじめて気を駆使した格闘術をマスターし、最終的には瞬間移動まで極めたという伝説の武道家 G・ハロルドのクローンにして、初代銀河の大王の爆発的な龍の気を生み出すための遺伝子を移植された最強の強化人間だった。彼はキングオヴギャラクシーを５連覇して、唯一彼を第６回大会で食い止めることが出来た人間は、ただ一人、G・ハロルドの弟子であり、地球の CYBER 探偵の草分け、タビト大伴だった。

　タビト大伴の子孫が現代まで生き残り、プロレスラーをやっていることを思い出したヨージは、部下にタビト大伴の子孫の所在を聞き出した。

「ヨージ司令官殿、タビト大伴の子孫、つまりグレート・アジア 13 世は、次のギャラクシーに向けて、例の銀髪の男と合同練習中です。」

　あまりに救い様のない事実だ。伝説の強化人間 G' とかつて彼を止めることを出来た唯一の人間の子孫が時空を超えて共闘している。もはや誰にも彼らを止めることは不可能だった。

　地球人の眼から見れば、侵略者である火星人たちを銀河の掃除人（スイーパー・ギャラクティカ）G' が始末してくれていることは有り難い事かもしれなかった。ただ、ジョー・ヨージ 12 世はかつて、最愛の恋人を同胞であるはずの地球人から、コミュニティー裏切りの疑惑の元で殺されていた。同じ地球人が地球人同士で殺し合うという事実を体験してしまったヨージ 12 世は、もはや地球人という存在を信じることは出来なかった。それが火星皇帝に彼の魂を売らせてしまった本当の理由であり、火星皇帝やヨージにとって G' は邪魔者以外の何者でもなかった。

「あの G' と一度タッグを組んだといわれているジュン・ハーンの子孫、ジュン・バード兄さんだったら、G' の攻略法わかるかも知れまセーン。しばらく地球圏に戻ってみマース。」

　そう部下に言い残すと、ヨージ司令官は地球圏に戻ることにした。

第 55 章最強タッグ

　ポルゴたちの事務所に銀河帝国からの使者が訪問した。用件は４次元量子移動機の回収だった。先方は今後の研究のためにデータを回収したいらしい。使者達は大型宇宙船に４次元量子移動機を回収した。彼らにポルゴはミス・ワカマツを一緒に銀河帝国まで連れて行ってくれるよう頼んだ。これ以上、この危険な太陽系に最愛のパートナーを置いておくことは出来なかった。ポルゴは久しぶりに地下シェルターから体を外に出すと、轟音を立てて飛び立った宇宙船を見送った。

―これでミス・ワカマツとも当分は会えないな。俺もそろそろ自分の人生にカタをつけないとな。

　ふとかつて事務所の玄関があった場所にポルゴは眼を向けた。まだ、金属製のポストが激しい空爆にも耐えて姿を残していた。彼はその中に一枚の紙切れを発見した。

―連絡乞う。西郷

　紙切れにはたったそれだけの文言と、西郷詩郎の住所が書いてあった。かつての好敵手からの意外なメッセージに、ポルゴは西郷を訪ねることにした。

　まだ残っていたハイウェイを単車で飛ばし、東北地方にある西郷の住所をポルゴは尋ねた。その住所は人里離れた山奥にあった。もう整備された路は尽きた。仕方なくポルゴは、紙切れに書いてあった住所を求め、歩き出した。

　ふと気付くとポルゴは原野の中にいた。彼の目の前、約 250 メートル先には古寺があった。一歩一歩、叢を掻き分けて進む。研ぎ澄まされた強い気を感じる。もう、西郷の間合いに入ってしまったらしい。ポルゴはこちらに戦意がない意思表示の気を相手に送ると、さらに突き進んだ。襖が開かれた古寺の中が視界に入る。

　西郷が居た。

　彼は座禅を組んで精神を集中していた。ポルゴは構わずひたすら古寺に向けて突き進

んだ。

－ポルゴだな。よく来た。

　振り向きもせず、眼すら開けずに西郷詩郎が低い威厳のある声で話し掛ける。

－ああ、あの紙切れを見てな。ところで、何の用件だい？

　かっ、と西郷が眼を見開くと、振り向き様にポルゴに話し掛ける。

―まあ、せっかくだから茶でも一杯飲んでゆきなさい。実は私も少年時代に家族を火星人に殺されてな。できれば、あなたと共闘したい。

　ポルゴの表情に戦慄が走る。ジパングきって、いや、銀河最強の使い手、西郷詩郎が火星人撲滅のために共闘を申し込んできた。願ってもない話だった。

－そういうことか？ 俺にとっては願ってもない話だ。俺も昔親友を火星人に殺された。あなたのような使い手と組めるのだったら、これ以上の話はない。

－ただ、条件が一つある。流派も違うあなたと組むのは、火星人への抵抗運動に関してのみだ。私はかつてあなたの師匠のそのまた師匠を、死合いとはいえ殺めた。東郷師範不在の今だけ、あなたと組む。その条件に異存はないな？

－わかっている。火星人へのレジスタンス運動のみの共闘だな。それにカタがついたら、お互いまた敵同士、面白い話だ。

こうして流派の違いを超え、ポルゴと西郷の反火星パルチザン最強タッグが生まれた。

ポルゴと西郷詩郎はさっそく、ジパング地方を中心に、火星人たちが地球占領・植民地化の拠点にしているアジトに殴り込みを掛けに行った。地球征服の手駒となっている火星人たちはみな、マーズアタックや MDP（ マーズデットリーパニック ）といった火星人によく効く薬に対して耐性を備えていた。皆遺伝子レベルで強化・あるいは予防注射か何かを受けているようであった。

ポルゴと西郷は仕方なく肉弾戦に持ち込み、力技でジパングの火星人たちの各拠点を日夜壊滅させていった。

第 56 章ある火星人の最期

地球圏では、地球征服・植民活動に来た火星人の人口が一気に３分の１まで減少していた。全ては、銀河の掃除人（ スイーパー・ギャラクティカ ）G’ の仕業だ。

－命乞いか？ それもいいだろう。

火星人たちの 1 個小隊は既に壊滅しかけていた。最後の一匹が義肢、いや義手をすり合わせて必死に命乞いをしていた。

－お前らはそうやって命乞いをしてきた地球人を何人殺してきたのだ？ お前らの侵略の結果、地球の人口は一気に半減したのだろ？ この青の美しい惑星に核兵器や生物兵器ま

で使いやがって。いいだろう、そろそろ楽にしてやるよ。すぐにお仲間の所に逝かせてやる。逆立った銀髪の若い男が右の人差し指を火星人に向けた。引き金を引くかのように親指を曲げると、人差し指の先から気弾のようなものが発射された。次の瞬間、火星人の両肩、いや義手のつけ根から緑色の血が流れていた。

－これでもう命乞いも出来まい？ お前に殺された地球人の数は一体何百人だ？ 火星人？ お前らは人間じゃない！ 宇宙ウツボの遺伝子まで取り込んでいるんだろ？ 手も足もないし、おまけに頭もキノコ、流れる血は緑かよ。それでも人間を名乗っているなんて、冗談クサ過ぎるぜ！ 次の一発で死ぬんだな。

また銀髪の男が右の人差し指で構えた。必死に肢、いや身体のつけ根をもぞもぞと動かして逃げようとする火星人。銀髪の男が右の人差し指からまた気弾を放った。今度は火星人の身体のつけ根に命中した。

－ゴミが、そんなとろいアシでわざわざ地球まで降りて来るんじゃねーよ！ 安心しろ、次でトドメだからよ！

あ、ば、よ。

　銀髪の男の指先から閃光が走った。今度は的確に火星人のキノコ状の頭を貫いていた。

「許せん！ 許せんぞ、G’（ ジー・ダッシュ ）。私の派遣したキラーマシンどもはどうなっておるのじゃ？」

このビデオアーカイブを見た旧火星皇帝は激怒して、部下に質問した。

「はっ、太陽系皇帝閣下。地球に送り込んだ一万体のキラーマシンは全てヤツに始末されました。より正確には、全てスクラップにされたと言ってよいのですが。」

「ヨージは、ジョー・ヨージ司令官はどうした？」

「彼は地球圏に帰ると言ったまま、音信不通です。」

「どいつもこいつも使えん！ まあ、いい。私は今度地球の月、いや地球上でキングオヴギャラクシーを主催する。キングオヴギャラクシーの公式の舞台でヤツを、刺客を使って始末するのじゃ！ 私の用意した刺客がだめだった場合は、銀河の大王にでもやらせればよかろう。いや、出来ればヤツを大会の前に暗殺したい。誰かいい部下はおらぬのか？」

「太陽系皇帝閣下、我らが太陽系帝国は法治国家であり、太陽系帝国憲法の支配下にあります！ いかに犯罪者や極悪人であっても、司法の判断がないまま、暗殺することは出来ません！」

「ふざけるな！ 治安維持法があっただろう？ 今は改正されて、破壊活動防止法か？ あれを適用して、ヤツを始末すればよいのじゃ。」

「だめです。証拠がありません。ヤツは死体や凶器といった証拠一切を残していません。」

「このビデオアーカイブがあるだろう？ それとも何か、私が独裁者にでもなれば、法の支配を踏みにじって、ヤツを始末できるのか？」

「どちらも無理です。ビデオアーカイブは惑星間法で証拠物とならない旨が記載されています。編集の有無を立証できないからです。皇帝閣下がもし法治国家の原則を無視して独裁政治に踏み切られた場合、太陽系統一の偉業は全て無に帰します。」

「民主主義も、法治国家の原則も全ていらん！ ワタシはただ、同胞、我が火星人たちの

安全を保障したいのだ。そんなこともままならぬのか！」

　太陽系皇帝の怒りも覚めやらぬまま、今日も過去からやってきた銀髪の若者、つまりG’ は今日も地球上で火星人狩りを行っていた。太陽系帝国の地球支配は風前の灯火となっていた。

第 57 章西郷去る！

　ポルゴと西郷詩郎は共闘して、ジパングに散在する火星人たちの拠点やネスト（ 巣 ）を破壊していった。そんな彼らの元に、一つのニュースがもたらされた。

「西郷さん、地球の火星人全滅か？ だって。一体どういうことだ？」

「私にはわからないが、火星人たちの気はもう地球上から一切感じることが出来ない。疫病か何かで全滅したのか？ あるいは...」

　銀河の掃除人 G’ の手によって、地球上の火星人は全て粛清されていた。ポルゴと西郷達は不殺の誓いを立てて、降伏した火星人たちにはトドメは刺さなかったが、結局 G’ によって地球征服の実働部隊となっている火星人どもは皆始末されていた。

「またニュースがアイウォッチに入りましたよ。太陽系皇帝、地球圏で数ヵ月後にキングオヴギャラクシーを主催。」

「火星人へのレジスタンス運動という目的はどうやら達成されたみたいですな。私はまた銀河の大王と組むことになりそうです。私たちの短かった共闘も、これまで。明日からはまたライバル同士ですな。」

　西郷が冷たく言い放った。

「俺一人の力では、とてもジパングの火星人の拠点を全て攻撃することは出来なかった。感謝するよ。有難う。」

「では、私は実家に戻って静養しましょう。その後はまた、銀河帝国で修行でも。それでは、またギャラクシーで会いましょう。」

　こうして地球圏最強の使い手西郷詩郎は去っていった。東郷師範不在の今、西郷を越える使い手は地球圏にはいないはずだった。ポルゴも一からまたギャラクシーのパートナーを探すことになった。あては一切なかった。

第 58 章 マリア

　ポルゴはアイウォッチのハッキング機能を駆使して、ブラックデータベースに接続していた。ブラックデータベースのビデオアーカイブには、逆立った銀髪の若者が地球侵略に来た火星人たちを根こそぎ残酷に始末している闇動画が映っていた。

－そういうことだったのか。G’ の野郎、あの時のスプラッター星人の爆発のエネルギーを利用して、この未来世界まで瞬間移動しやがったな。まあ、ヤツが火星人たちを始末してくれたことは有り難い。しかし、次のギャラクシーにヤツほどの使い手が参加するとなると、これは面倒だな。大会のレベルが一気に跳ね上がる。俺はまだパートナーも見つけてはいない。

　そんなことを考えながら、ポルゴは左腕のアイウォッチを眺めながら、事務所の地下シェルターのソファで寝転んでいた。

―コンコン。

　誰かがシェルターのドアをノックしている。

―誰だ？

　ドアを開けるポルゴ。そこにはまだ少女といってもいいくらいの若いウェーブがかった銀髪の女がひとり立っていた。確かに美しい若い娘だったが、眼光が異常に冷たく、年齢を遥かに凌ぐ冷静さと落ち着きを持っていた。

－マリア・ハロルドよ。単刀直入に言うわ。あなたと次のギャラクシーに参加したいの。

－ハ、ハロルド？　どこかで聞いたことのあるファミリーネームだな。まあ、殺風景なところだが、どうぞ中に入ってくれ。いま紅茶とクッキーを用意するよ。もし時間に余裕があるのだったら、俺がちょっとひとっ走りして、外のバザールでケーキでも買ってくるんだけどな？　時間はあるかい？

－どうぞお構いなく。話が先よ。

－私の先祖の備忘録に、タイムマシンでやってきたあなたと接触した記録があってね。それにここ数年のキングオヴギャラクシーでのあなたの活躍を見させてもらったわ。

－君の先祖って、あのジャック・ハロルドさんのことか？

－そういうことになるわね。まあ、ジャック・ハロルドの父親にあたる武道家ゲーセ・ハロルドという人が、たぶん私の先祖で最強だったみたい。そのクローンが、今この太陽系を騒がしている G' よ。ずいぶんと濃い血を引き継いでいるみたいね。それに彼って、初代の銀河の大王の龍の気を操るための遺伝子まで移植されているのでしょ。どうにかして彼を止めたいの。このハロルド一族の力で。

－まあ、俺はタイムマシンで過去の世界にトリップした時にジャックさんと奥さんのメガ子さん、いやイザベラさんに大分お世話になっている。その子孫の君の頼みを断ることは、俺にはとても出来ないよ。ただ、我々地球人のために火星人たちとピンで闘ってくれている G' をなぜ俺たち地球人がわざわざ倒す必要があるんだ？

－彼はまだ自分の力の限界を知らない。それにいずれ私たちの血と大王一族の血が反駁しあって、彼は力を制御できなくなるわ。私たちハロルド一族は力の使い方、言ってみれば制御方法を知っている。彼はそれを知らないわ。それに火星人も一応人間よ。手当たり次第殺すなんて、庶民の常識じゃとても考えられないわ。

－まあ、前半は納得だな。ただ、問題は後半だ。俺たち地球人は奴らの侵略戦争で、一気に人口の半分まで失い、地球連合政府まで崩壊して、今じゃ地球はただの植民地だ。わざわざ地球征服にのこのこやって来た火星人を始末して、何が悪い。もちろん、俺も殺しはしない主義だがな。

－殺しはいつでも、誰にとってもいけないことだわ。たとえ相手が異星人あってもね。殺されたから殺す。それでは戦争はいつになっても終わらないわ。

－君の言っている事は、たぶん正しいのだろうな。わかった。これから数ヶ月間一緒に練習して、次のギャラクシーに備えよう？

－そう来なくっちゃ！

－交渉成立だな。じゃあ、俺は外でケーキでも買ってくるから、ちょっとそのまま待っていてくれよな。ショート、モンブラン、チョコレート、チーズ、いろいろ選択肢はあるけど、どれにする？

―チョコレート！

　こうして、ポルゴは強力なパートナーを見つけることが出来た。マリア・ハロルドがメガ子さん似ではなかったことが救いだった。

　長生きすればするほど、いい異性にめぐり逢えるな。そんな幻想あるいは願望をいだきつつ、ポルゴは炎天下の中、バザールにケーキを買いに走った。

第 59 章 KOG 開催！

　ついに地球圏で再びキングオヴギャラクシーが開催される日がやって来た。ポルゴたちの時代では第３回にあたる。わざわざ、旧火星皇帝、つまり今の太陽系帝国皇帝が地球上に降り立ち、主催者として開催の演説を行っていた。

－ついに太陽系は１つとなることが出来た。これは太陽系帝国の国民諸君の総意と努力による。こうして太陽系人類発祥の地、第三惑星において太陽系統一後はじめてのキングオヴギャラクシーが開催されることを、私は主催者として誇りに思う...

　銀髪の逞しい青年が隣の若い美しい女に語りかけた。

－うるさいな。ちょっと黙らせておこう。

　言い終わると彼は右手をピストルのように構え、人差し指を迷わず太陽系皇帝の喉下に向けた。一気に親指を倒す。まるで引き金を引いたかのようだった。

　次の瞬間、太陽系皇帝は喉元を義手で押さえ、もごもごと口を動かしていた。だが、もう彼女の口から言葉が発せられることはなかった。

－安心しろよ。ただの衝撃波だ。じきにまた話せるようになるさ。

－ G’、そろそろ予選エントリーの受付が始まるわ。一緒に来て。

　この二人組は腕を組みながら真っ直ぐ受付に向けて歩いていった。

－こちらの女性は、グレート・アジア 13 世さんですね。確かに国民背番号カードを拝見しました。そちらの男性は？ 国民背番号カードの提示をお願いします。

－あーん？ 今はそんなチンケなカードを持ってないと、ギャラクシーにも参加できないのか？？ 忘れたよ。今取ってくる。

　もちろん、過去の世界からやって来た G’ が太陽系帝国の国民背番号カードを持っているはずがなかった。

－どうするの？

－もちろん、強制参加に決まっている。そうだな、ここ数年のチャンプでも倒せば、向こうから参加を持ちかけてくるだろう。

　いま数人のＳＰと共に、威厳のある一人の龍族の男が受付に歩いてきた。三代目の銀河の大王だった。

－ワシのチームはシードということでよろしいのだな。パートナーは西郷先生だ。異存はないな。

　受付に威厳を持って話し掛ける大王だった。その時だ。

－待てよ。おい、そこのワニ面。ちょっとツラ貸してくれや？

　一気にＳＰたちがこの不躾な青年に睨みを効かせた。次の瞬間、ＳＰはみなこの青年のプレッシャーで吹き飛ばされていた。そのままつかつかと大王に歩み寄る青年。

－しばらく眠っていてくれや。だいたい一週間くらいな。

　言い終わると青年は大王のボディにショートレンジのアッパーをかました。次の瞬間、銀河の大王は一気に膝から崩れ落ちた。

－こいつがこの時代の第一回ギャラクシーのチャンプか？ このワニ面をのしたんだから、オレの参加ってことでいいよな。なあ、受付のアンちゃんよ？ 俺の名前はG’（ジー・ダッシュ）で頼む。パートナーはグレート・アジア13世でな。チーム名はそうだな、ダブルエックスで行こう。今の俺の実力を見れば、予選なんてなんの意味もないことがわかるだろ？ でも、一応ルールってことなら、予選から参加してやるよ。まあ、担架を多めに用意しておいてくれれば、いいさ。リングドクターと看護士も忘れずにな。有無は言わせないぜ。

　この一連の様子をポルゴとマリアは見ていた。

－今、G’ が大王を殴った時の拳の軌跡が見切れた？

－ああ、ちょっと速かったけどな。なんか蒼い気のようなオーラが見えた気がする。

－それが、彼に移植された龍の気の能力よ。ポルゴ、あなた油断は禁物よ。わかっているわね？

－ああ、そろそろ俺たちもエントリーを済ませておこう。

この予選受付会場では、他にも大王襲撃の様子を目撃していたグループが存在した。

－ねえ、ニート君、今パパがやられちゃったよ。あいつー、ちょっとムカつくなー。強すぎだよ。でも、パパがやられたってことは、代わりに誰が銀河帝国の代表として参加するのかなー？

－そんなこともわからないのですか？ もちろん、王子に決まっています。さあ、大王様の所に行きましょう。大王様の無事を確かめるのです。

　ニコラス・トルーマンと銀河帝国の王子は、襲撃されまだ意識がない大王のところに駆け寄った。王子が大王を抱き起こすと、必死に話し掛ける。大王もおぼろげながらに意識を取り戻した。

－おお、ジュニアか？ ワシはもはや今の身体では闘えん。頼む、あの男に雪辱してくれ。今すぐ西郷先生に連絡を取るのだ。彼は帝国議会議長専用宇宙船の中で待っている。アイウォッチで連絡を。

－もしもし、ボクだよ。ギャラクティカ・ジュニア。パパが G’ とかいう強化人間にやられちゃったんだ。代わりにボクが出場するよ。悪いけど、君、ボクのパートナーやって

くれない？

－誠に申し訳ありませんな、王子。まだ青二才の御坊ちゃんと組む気は私には一切ありません。大王によろしくお伝えください。では。

－切っちゃったよ。西郷のバカ。パートナー降りるって。パパと一緒じゃなきゃ嫌だって。どうしようか、ニート君？

－仕方ありませんな、王子。私がパートナーの役を引き受けましょう。一緒にエントリーを申し込みに行きましょう。

　銀河帝国代表チームとして、エントリーの手続きを済ませたニコラスと王子。その時、王子がニコラスに話しかけた。

―でもさー、これで良かったの？ ニート君。君、まだ身体が子供のままじゃん。幾らなんでもギャラクシー参加なんて、とっても無理だと思うけどなー。

－王子はまだ何も聞かされていなかったようですね。私はこれから本戦開催まで時間があるので、しばらく一人で過ごさせていただきます。王子、私が前にお渡ししたトレーニング・スケジュール表通りにお一人で練習していただけますか？ 我々は今世紀の初代チャンプ大王様の代役で出場するわけですから、当然シードです。予選期間中は、私は別行動とさせていただきますね。本戦当日、控え室で会いましょう！

－連れないなー、ニート君。まあ、いいか。予選会場に観戦に来ている女の子でもナンパして、ゲットしようかなー。じゃあね、ニート君。

　こうして王子とお目付け役ニコラスの会話は終了した。

　このギャラクシーには太陽系の内外から最強の使い手たちが参加することになる。今この時点で、このバトルの衝撃の結末を知るものは誰もいなかった。

第 60 章予選開幕

　人類が宇宙で本格的に生活を始めてから、３回目のキングオヴギャラクシーが地球で開催されていた。今大会のルールは２対２のタッグマッチ、どちらかのチームが２名とも戦闘不能あるいはギブアップするまで戦うサバイバルマッチだった。武器の使用すら認められていた。ただし、対戦相手を殺めたチームは即刻失格となる。レフリーは選手が気を使うことを考慮して、リングサイド（ 場外 ）から試合を裁いていた。

「予選からなんて、かったりーな。何で銀河帝国チームだけシードなんだよ。」

「何言っているの、ポルゴ。主要参加チームの手の内を見る、いいチャンスよ。」

　ポルゴとマリアのチームは順調に予選を勝ち進んで行った。

「マリア、見ろよ。あのチームダブルエックス、KO 狙いで行くのかと思ったら、銀髪の G’ までわざわざ足関節で確実にギブアップを奪っているぜ。」

「彼ら、たぶんコマンドサンボを習得しているみたいね。さすがプロレスの名門ウェヌスジムで合同トレーニングを行っただけのことはあるわ。まだ気を使った攻撃を一切見せない辺り、なかなかの策士ね。」

「策士か。ある意味、いい言葉だ。」

今回のギャラクシーには懐かしのチームが２組参戦していた。

１組目はジョー・ヨージ１２世とジュン・バードのゴールデンシューターズ、そして２組目はブラック・ホークとブラック・アニマルのブラックホールズだった。彼らも堅実に予選で勝ちを重ねてきた。

「今回、西郷詩郎は参加しないのか？」

「大王襲撃事件で、今回は降りることにしたみたい。代わりに大王の息子とお目付け役が銀河帝国代表で参加するみたい。」

「ますます面白くなってきたな。西郷のヤツと決着をつけられないのは面白くはないが。」

予選参加チームの中には、他にも目ぼしい連中がいた。太陽系帝国代表チームだった。

１万体以上は既に作られたというキラーマシンの中からもっとも完成度の高い２体を選び、優勝候補筆頭の G’ の戦闘データを入力されていた。太陽系帝国代表キラーラブマシンズは G’ 並みの残虐ファイトで勝ち残ったが、リミッターが強化されていたため、対戦相手を死に至らしめることはなかった。

第七部　地獄からの使者

第 61 章ネオ・ファルコンズ初戦

無事長かった予選も終了し、キングオヴギャラクシーの決勝大会が始まった。ポルゴたちはＢブロック、同ブロックにはゴールデンシューターズやブラックホールズ、それにキラーラブマシンズといった、どうでもいいギャグチームだけが揃っていた。一方、Ａブロックは銀河帝国代表チーム、チームダブルエックスといった優勝候補筆頭の他に、前回大会で銀河の大王を KO した実力者エリカ率いるビューティクイーンズといったチームが揃っていた。無名チームもあわせて、８チームでトーナメントが始まった。

Ｂブロック第一試合で、ポルゴ、マリア・ハロルドのネオ・ファルコンズと太陽系帝国代表のキラーラブマシンズの試合がアナウンスされた。

ラテンな熱い入場テーマ曲と共に、まずポルゴがダッシュでリングインした。セカンドロープとトップロープの間に隙間を作ってポルゴが待っていると、ゆっくりと落ち着き払ってマリア・ハロルドがリングインした。この動作で二人の力関係は一目瞭然だった。マリアはウェーブがかった銀髪をうなじの辺りから軽く掻き揚げる動作をした。観客の男性陣から溜息が漏れる。若き美人格闘家といったところか。

一方、騒がしいアイドルの流行曲と共に、覆面の二人組キラーラブマシンズが入場した。

体格がいい方がキラーマシン・ゴリラであり、小柄なジュニアヘビー級の選手がキラーマシン・モンキーであった。キラーラブマシンズはリングインすると赤コーナーでキラーラブマシンサンバを踊りだしていた。なかなかファンキーな連中だったが、こいつらが地球侵略のために生み出されたキラーマシンの中でもエリート中の超エリートであることは明らかだった。

「ポルゴ、まずは私がお手本を見せるわね。そこのデカイ方、そうキラーマシン・ゴリラちゃん、私がお相手よ。」

　マリア・ハロルドはあろうことか最初の対戦相手に重量級のキラーマシン・ゴリラを指名した。ゴングがけたたましくかき鳴らされる。

　銀髪の女性、マリアは軽いフットワークを始めた。一方、キラーマシン・ゴリラは踵をべったり地面につけたまま、動こうともしなかった。

シュッ、シュ。

　マリアがワンツーで殴りかかる。キラーマシン・ゴリラは超反応で今の攻撃をガードした。すかさずマリアは右のミドルを空ぶって、左のソバットを見せた。疾い。ゴリラはすかさずガードを固めると共に、左のソバットに右の下段横蹴り（ シャッセ・バー ）を合わせてきた。

　観客から感嘆の溜息がもれる。美しい上に、出来る。マリアはこの上ない使い手だった。ゴリラはマリアの動きに乗せられて打撃で勝負に出た。ワンツーからの大降りの左フックを空ぶって、右の裏拳を使った。そのバックハンドをマリアはキャッチすると飛び付き逆十字に捉える。一気に極める。しかし、相手は腕があらん方向に曲がっているのに、全く平気な表情だった。マリアは技を解くと、ポジションを優位に保ったまま、間合いを開き、スタンドに移行した。

―やはり、相手はキラーマシンと言うだけあって、ロボットだから関節技も効かない訳よね。気を使ってぶっ飛ばしてもいいけど、最初から手の内を見せるわけにはいかないわ。しゃあないわね、投げて KO しましょう。

　マリアは構えると一気に打撃のラッシュに打って出た。パンチのコンビネーションから左ミドル、右の上段回し蹴りを放った。あまりの速さにゴリラはついて来られなかった。ゴリラが上段回し蹴りにたじろいた瞬間、マリアはゴリラのバックを取って、いっ

きに高角度バックドロップを極めた。脳天からリングにのめり込んだ、ゴリラ。そのままノックアウトが告げられる。

　すかさずリングインするキラーマシン・モンキー。マリアはつかつかと青コーナーに歩み寄るとポルゴとタッチした。

－今の勝負見ていたわね。相手が本気を出す前に、こっちが先に本気を出して一瞬で倒す！ セオリーと言うか、むしろ鉄則よ。あなたもやってみることね。

　ポルゴは全身の気を一気に高めてリングインした。キラーマシン・モンキーは先手必勝のドロップキックでポルゴに襲い掛かる。サイドステップで見事にかわすポルゴ。

　モンキーはポルゴの後方に着地するとそのままバックハンドで応戦した。ポルゴは右の拳でガードする。バックハンドの隙をついて、ポルゴはモンキーの背中に抱きつき、スライディングの要領でモンキーを後方に投げ放った。強烈な谷落としだった。

　なおもポジショニングをコントロールして、マウントポジションをキープするポルゴ。

－ポルゴ、トドメよ。そのまま肘打ちかまして、ストラングルホールドで極めて！！

　マリアの指示通りマウントから 2,3 発肘打ちを決めると、一気にモンキーの喉仏に左膝を当て、モンキーの右腕を決めたまま、変形のストラングルホールドを極めた。ポルゴは容赦なくモンキーの喉仏に膝を押し込む。そのまま KO に持ち込んだ。

－やれば出来るじゃない！ そう、相手が本気を出す前に倒すの。

　美貌・強さの上に知略まで兼ね備えている。マリア・ハロルドはファイター向きの女性だ。

第62章王子登場！

Aブロック第一試合は銀河帝国代表チームVSビューティクイーンズだった。

－ここが決勝出場者控え室か。まだニート君は来ていないな。遅いなー、アイツ。

その時、控え室に長い黒髪でスタイル抜群の年上の女性が現れた。いい香水の匂いがする。フェミニンな雰囲気。脚がモデル並み、いやそれ以上に長い。この女、出るべきところは出て、へこむべき所は芸術的にへこんでいた。

－王子、お待たせっ。

－だれ、キミ？ ボクの好みのタイプだから、まあいっか。ルンルン。

ご機嫌な王子だった。

－あいかわらずダメ王子だね。私だよ、ニコラス・トルーマン。惑星サルバトーレは重力が私の出身惑星の数倍だったため、幼い時の姿に擬態していた。これが、私の本当の姿。ニコラス・トルーマンは父の名前を引き継いだのだ。私の性別は女。さあ、試合会場へ急ごう。

意外な展開に驚きを隠せないダメ王子。

早くも試合会場ではリングアナのコールが始まった。

－青コーナーより、ビューティクイーンズの入場です！

派手な入場曲と共に、まずヘビー級実力派女子レスラーのエリカが入場した。後から入場してきたのは、エリカの一番弟子、怪奇派で知られるブラッティー桜が入場した。ブラッティー桜は顔面白塗りのペイントで、リングインすると赤ワインを口に含んだ後、生肉を食べるパフォーマンスを行っていた。

－赤コーナーより、銀河帝国代表チームの入場です。

厳粛なムードの中、会場のオーケストラにより、銀河帝国の国歌が演奏された。まず若き銀河帝国の王子が龍族の正装をまとい入場した。その後、胸元が大きく開かれた黒尽くめのドレスを着た背の高い女性が入場した。王子のお目付け役、ニコラス・トルーマンだった。

－ねぇ、ニート君。あのエリカって女が前のギャラクシーでパパを倒したんだよね。ボクが先攻であの女とやるよ。

－ああ、バカ王子、油断はするなよ。あと、ニート君って呼び方は全く気に入らないな。ニコラスさんとか、トルーマン先生とか、って聞いてねーか。

赤コーナーから銀河帝国の王子がリングインして構えると、グローブを真っ直ぐエリカに向けた。

－キミをボクの対戦相手に指名するよ。

　エリカは挑発に乗って、リングインした。ゴングが鳴る。

　王子は若さに任せて、強烈な打撃で勝負に出た。エリカは長年の実戦経験を生かして、全てのパンチをすれすれでガードしていた。王子が右フックを空振った瞬間、エリカは強烈な低空タックルでテイクダウンした。そのままマウントで掌打の嵐を見せるエリカ。ブラッティー桜はコーナーから身を乗り出して、ニコラスを牽制する。ニコラスは全くカットに入る気配がない。

－助けてー、ニート君っ。

―バカ王子、それくらい自分で脱出しろ。マウントの抜け方、さんざん練習しただろ！

　王子は若さと全身のバネを生かして、ブリッジで重量級のエリカを跳ね除ける。そのままハンドスプリングの要領で立ち上がる。

　軽くステップを踏んで、自分のペースを確認する王子。

－なかなかやるねー、キミ。さすが、パパを倒しただけのことはあるよ。うん。

　王子は軽く前にステップすると、そのまま右のミドルを放った。左肘でガードするエリカ。しかし、王子の強力な脚力は、エリカをガードごとふっ飛ばしていた。

－弱いものいじめは、ボク嫌いなんだよね。ハンデだよ。二人で掛かって来な。

　挑発に乗って、ブラッティー桜がリングインする。今のキックでダメージを受けたエリカをかばいつつ、ブラッティー桜はワンツーを打ってきた。

－ちょっと、遊んじゃおっかなー。

　王子もワンツーを返すと、次に左フックを大きく空振りした。その回転を利用して、右のバックハンドを打った。その瞬間だった。王子の顔面が真っ赤に染まった。ブラッティー桜の赤ワイン毒霧攻撃がクリーンヒットした。

－見えないよー。何も、見えない。

　回復したエリカとブラッティー桜は一瞬のスキをついて王子を一気に二人で抱え上げた。垂直落下式ブレーンバスターの体勢で、捻りを加えて一気に落とした。ダブルデンジャラスドライバーが決まった。ダウンした王子をエリカがバックドロップの体勢で抱え上げると、ブラッティー桜は王子の顔にキラークローを仕掛ける。そのまま合体技、ダブルヘルクラッシャーが決まる。

　完全に虫の息の王子だ。

－しゃーねーな。ダメ王子。せっかく見せ場を作ってやろうと思って、任せたのに。相変わらず傲慢なダメお坊ちゃんだぜ。ここは一丁、加勢してやるか。

　ニコラスがリングインした。まずブラッティー桜に左の後ろ回し蹴りをかますと、そのままの腰の位置で、今度はエリカに軽快な右の上段回し蹴りをかました。あっさり両者ダウンだった。

　ビューティクイーンズにトドメをささずに、ニコラスは王子の顔をしたたかにひっぱたいた。

－おい、起きろよ。ダメ王子。自分のケツくらい自分で拭けよな。あのレスラーどもにトドメをさすんだ。ギャラクシーウェーブでも、真・龍拳でもいい。自分の技で決着をつけろ！ いいな。

　王子は蘇生して起き上がった。

－地球人の女の子にこの大技を使うのはちょっと可愛そうな気もするけど、仕方ないよね。

　言い終わると、ニコラスの攻撃からやっと立ち上がった二人に目掛けて、王子は全身の気を高めて、一気に両の掌を向けた。

－食らいなーっ！ スーパーギャラクシーウェーブっ。

　濃密に凝縮された気が一気に彼女達を襲う。エリカとブラッティー桜はガードする余裕もなく、近距離から出された大技のため、完全にダウンしていた。

　ダウンカウントが告げられる。ノックアウト。

－それでいいんだ、王子。やれば出来るじゃないか？

－でもさー、地球人のフツーの女の子にあんな大技使っちゃって、ヤバクない？ ちょっと可愛そうだよ。

－お前はその甘さが最大の弱点だ。キングオヴギャラクシーは真剣勝負だよ。勝利こそが全てさ。

ニコラス・トルーマンという強力なパートナーを得て、銀河帝国の王子が初勝利を飾った瞬間だ。

第 63 章ゴールデンシューターズ

キングオヴギャラクシーＢブロック第二試合では、ブラックホールズとゴールデンシューターズの試合がアナウンスされた。

低音の地響きと共に会場全体の明かりが一旦落とされ、スモークが焚かれた。３つ目のブラック・アニマルと白鬼ブラック・ホークが全身黒尽くめの魔術的な衣装でまず入場する。そのままどっかりと赤コーナーを陣取る。

次にサンバベースの明るい曲が演奏されると、メキシコ流空手の達人ジュン・バードとユニバーサル・レスリングの使い手ジョー・ヨージ 12 世のゴールデンシューターズが入場した。ジュン・バードが甘いマスクで笑みを振りまくと、会場の女性陣から黄色い歓声があがる。ポルゴたちの目には、彼らが全身に強烈なオーラを具現化しているのが見えていた。ついにゴールデンシューターズも気の技術を獲得したようだった。

ボディチェックが終わると、赤コーナーからはブラック・アニマルがリングインし、青コーナーからはヨージがリングインした。そのままゴングが鳴る！ ブラック・アニマルはその長身と長い脚を生かして、軌道の見えない蹴撃の嵐をヨージに叩き込む。ヨージは全ての打撃をブロックしている。

―なぜだ？ なぜ俺の音速のシュートキックをガードできるのだ？

　ヨージはステップバックして相手と距離をとると、自分の頭を指差した。

「ここの違いだよ。」

　そう言いたいらしかった。

　ヨージはワンツーからの右のミドル、左の後ろ回し蹴りのコンビネーションを不用意に出した。超反応で右のミドルを返すブラック・アニマル、ヨージはそれを待っていたかのように、相手の蹴り脚をキャッチするとドラゴンスクリューで切り返す。そのままフィギュア・フォー・レッグロックに相手を捕らえる。

－天才は天才を知る。プロフェッショナルレスリングの歴史にジョー・ヨージあり！

　ヨージは天狗的コメントを発した。すかさず、ブラック・ホークがカットに入る。ブラック・ホークが強烈な負のオーラでヨージを圧倒すると、まずは強烈なクローズラインのラリアットでダウンをとった。ダウンしたヨージをブラック・アニマルが肩車に捕らえると、ブラック・ホークはコーナーから肘を曲げてアックスボンバーでヨージを薙ぎ払う。

　合体技ブラックインパクトが決まった。そのままヨージはノックアウト。

　すかさずジュン・バードがリングインすると、彼は全身の気を限界まで高めて、脚の周りに蒼い炎のようなオーラを具現化した。先手必勝で右のハイキックから、左のサイドキックのコンビネーションを見せる。今の右ハイキック一発で、ブラック・アニマルはノックアウト。一方のブラック・ホークはサイドキックでダウンを喫したものの再び立ち上がる。

　ブラック・ホークは地獄のような修羅場を潜り抜けてきた者だけが出せる暗黒のオー

ラを放ち、ジュン・バードを牽制した。ジュン・バードは表情一つ変えなかった。そのままブラック・ホークは強引な右ラリアットでジュンに襲い掛かる。ブラック・ホークはラリアットを両手でブロックされると、空いた下段に強烈な左ローキックを見舞う。ジュンはバックステップでこれをかわす。

－あなた、そこそこ出来ますね。仕方ないでしょう、メキシコ流空手の奥義をあなたにおみせしましょう！

ジュン・バードは言い終わると、ワンステップでブラック・ホークの間合いに飛び込み、突き上げるような右の上段前蹴りでブラック・ホーを宙に浮かせた。そのまま全身のオーラを左脚に込めて強烈な左のバックキックを放った。ブラック・ホークはジュンのオーラで全身を焼かれながらリングアウトした。そのまま気を失っていた。

－大技フェニックスファイナルアタックをこんなところで見せたくはなかったのですが、まあ仕方ないでしょう。

続く A ブロック第二試合では、チームダブルエックスが無名チームを秒殺していた。いよいよ新世紀第 3 回キングオヴギャラクシーの準決勝が始まろうとしていた。

第 64 章隠された力

キングオヴギャラクシー準決勝第一試合、銀河帝国代表チーム VS チームダブルエックスがリングアナにコールされると、まず赤コーナーに銀河帝国代表チームが入場した。銀河帝国の正装をまとい、若き王子（ ギャラクティカ・ジュニア ）が入場する。彼はまだ成人するために必要な最後の脱皮を済ませてはいなかったが、それでも龍族の王子として威厳のある態度と青春時代の若さと新鮮さとを合わせて持っていた。王子が入場すると、その後からお目付け役の黒のドレスを身にまとった女性ニコラス・トルーマンが入場する。胸元が眩しい。彼女は抜群のスタイルで、トップロープをまたいで入場した。

「ねぇ、ニート君。僕たちって勝てるのかなー？」

「バカ王子、お前が本気を出せばね。」

　次に青コーナーに銀髪の若者 G’（ ジー・ダッシュ ）とプロレスラーのグレート・アジア 13 世のチームダブルエックスが入場する。彼らがリングインした瞬間、圧倒的な両チームの気のレベルの高さに、会場全体からどよめきがあがる。両チームの実力から言って、この試合は事実上の決勝戦とも解釈できた。

「おい、アホ王子。お前にチャンスをやるよ。とりあえずアンタが先攻であの女の子を倒して来い！ その後でじっくりあの生意気な G’ の野郎をツープラトンで始末しよう。」

「ニート君、まじっスか？ あんな美人と先にボクが一対一で戦っていいの？ グローブ外して、素手でやっちゃおうかな？」

「とりあえず、オープンフィンガーはそのまま着けておけ！」

　コールが終わると、赤コーナーから王子が前に出て、グローブで対戦相手にグレート・アジアを指名した。グレート・アジアは挑発に乗って前に出た。そのまま両者はグローブの拳先を合わせて挨拶すると、ゴングがかき鳴らされた。

　今回、グレート・アジアはいつものムエタイをとりいれたシュートレスリングスタイルよりも、ガードの位置を明らかに落としていた。かまわず、王子はガードが下がっていることを利用して、いきなりの上段右ハイキックでアジアに襲いかかかる。アジアは左のグローブでこのキックを止めると、そのまま両腕・両脚を王子の右脚に絡めて飛び付きヒールホールドを極める。

　バタバタともがく王子。

「助けてー、ニート君！」

「アホ王子、足関の抜け方くらいやっただろ！ 左足で相手を蹴りながら、身体を捻って逃げるんだよ。ボケ。決まっちまうぞ。」

　ニコラスのアドバイスで無事危機を脱した王子。スタンドの攻防に移行すると、王子は一気に全身の気を高めた。そのまま両の掌に強烈な気弾を具現化し、一気に２つの気弾を合わせると、グレート・アジアに向けて放った。

「さよなら。スーパーギャラクシーウェーブ！」

　会場全体がいまの光線技で眩しく照らされている。会場全体がアジアの敗北を予期していた。光が収まり、人々の目が慣れてきた時、人々は片手で今の大技を軽々と受けきったグレート・アジアを確認した。

「切れたワ。フルコースで始末してあげる。」

　言い終わると、アジアはいったん身体をロープに振って、王子に強烈なラリアットを見舞った。そのまま王子をダウンさせて反対側のロープに身を振ると、今度は立ち上がりかけた王子に、後頭部目掛けて閃光魔術（ シャイニングウィザード ）を掛ける。ダウンした王子の左足をステップオーバートゥホールドに捉えると、そのままチョークスリーパーに王子を捉える。STS が極まる。両腕をバタつかせてもがく王子。王子がついに気を失ったところで、技を解いたアジアは倒れている王子を無理矢理引き上げ、垂直に抱え上げる。そのまま捻りを加えた垂直落下式 DDT で王子をマットに突き刺した。

「ビバ三銃士！」

　なおも意識のない王子の喉下に左膝を押し付け、王子の右腕をアジアは決める。グレート・アジア一族伝家の宝刀、ストラングルホールド・ネオが決まった。たまらずニコラスがノータッチでリングインして、アジアの顔面を蹴り上げカットに入る。会場に王子の気絶がバレない様に、ニコラスは王子の鳩尾を軽く踏みつけ、蘇生させた。まだ意識が朦朧としている王子をよそに、ニコラスは長い黒髪を振り乱しながら、強烈なキックの嵐でグレート・アジアを一気にコーナーまで追い込んだ。

　アジアは得意な打撃技の攻防でニコラスにリードを許してしまったため、焦燥してしまった。つい、全身の気の威力に身を任せて、具現化した強大な気で不用意にニコラスを攻撃してしまった。

　右ストレートの要領で、全身の気を具現化させてアジアはニコラスを攻撃した。ニコラスは左手でバリアを作って、今の攻撃を受けきると、今度は右手を使って、今具現化された気を数倍にして跳ね返した。アジアは今の反撃でダウンした。

「リフレクションエッジ・デュエル。」

　さすがにG’もコーナーから身を乗り出して、タッチを要求する。アジアは手を振って、タッチの要求を拒否した。赤コーナーでは蘇生した王子が陣取っていた。ニコラスは迷わずつかつかと赤コーナーに歩み寄って、王子とのタッチを成功させる。
「仕留めるんだ、あの女を。投げでも、光線技でも、寝技でもいい。非情になれ！」

ニコラスはそう言い残すと、リングインした王子に蹴りを入れて、リング中央まで無理矢理進ませた。

「ボク、女の子をいじめるのはスキじゃないんだけどな。やっぱり本気でやらせてもらうよ。」

　おっとりとしたお坊ちゃんの目つきであった王子の表情が一変する。まるで肉食の恐竜のような鋭い視線だ。この変化に合わせて、王子の発する気のレベルが明らかに高まった。これが銀河帝国の正統後継者の実力とでも言わんばかりだった。

いきなりの右フックから、左ボディ、右アッパーと決まる。間合いをいったん離して、右ロー、左ロー、右ミドルから左のバックキックへつなぐ。アジアはコーナーでダウンする。既に意識がない。王子はアジアの右腕を捉えて、逆十字に極める。

－二度とプロレスが出来ない身体にしてあげるよ。

一気に王子がアジアの腕を折りにかかった時、青コーナーから G' がカットに入る。リング外に常駐しているレフリーからはアジアの KO が告げられた。

－テメー、大人しそうな顔して、結構ヒデーことをやるな。俺のパートナーの腕を折ろうとはいい度胸だ。

既に G' の気は王子を越えるまでに高まっている。彼の潜在能力は対戦相手に合わせて引き出されるらしい。

王子と G' の両者は壮絶なパンチとキックの打ち合いを展開した後、すかさずバックステップで間合いを取る。そのまま高められた気を同時に両者は打ち合った。大技ギャラクシーウェーブの打ち合いだ。

両者の気弾の大きさは拮抗していた。やや王子の気弾の大きさが大きくなったと思えた瞬間、G' の姿は消えていた。

大技を使って体が硬直している王子の右前方に G' が突然現れた。瞬間移動だ。そのまま G' は左ミドルから右フック、左フックから右の上段回し蹴りで王子を攻める。王子がたじろいだ瞬間、G' は王子のふところに潜り込み、右の豪快な一本背負いで王子を投げ放った。ダウンした王子をひたすら足蹴にする G'。サッカーボールを蹴るかのように王子の後頭部を狙って、数十発蹴りを叩き込む。

場外レフリーがノックアウトの判定をした。なおも王子を攻撃する G'。

―坊や、やり過ぎだよ。

　たまらずニコラス・トルーマンがリングインする。ダウンした王子を蹴っていたG’は振り向き様に、ニコラスの右肩を狙ってワンハンドのギャラクシーウェーブを放った。ニコラスは何事もなかったかのようにバリアを張って、今の攻撃を防いだ。

－お前はただのクローン、人形だよ。その力はもともと龍族のものなのだ。強化人間なんて、存在する価値がないよ。

　言い終わると、ニコラスは腰を入れたパンチでG’に殴りかかる。G’がサイドステップで今のテレフォンパンチをかわしたと思った瞬間、彼のボディにニコラスのパンチがクリーンヒットした。G’はすかさずパンチで応酬する。姿が見えない。いない。そう思った瞬間、正面からニコラスの左ミドルハイがG’を襲った。

－残心だよ。気配を残したまま本体が移動して、相手の攻撃をかわした後、もとの立ち居地で相手を攻撃する。まあ、手の内を教えたところで、あんたには私の攻撃は防げないだろうがな。

　ニコラスの打撃の猛攻が続く。G’は相手の気配のあるところ狙って攻撃するが、すべて柳のようにかわされている。

　G’はいったんバックステップした後、リング全体を覆うような強烈な気弾で相手を攻撃した。思わず立ち止まって、バリアを張り今の技を防いだニコラス。

　その時だった。

－チェックメイトだな、ネーちゃん。

G' は瞬間移動でニコラスの背後に回ると、彼女を羽交い絞めにした。そのままハイアングルのドラゴンスープレックスに捉える。受身の取れない状態でマットに頭から突き刺さった彼女を、すかさず G' がタイガードライバーの姿勢で担ぎ上げる。一気にニコラスの両腕を極めたままジャンプした G' はジャンピング・タイガードライバーでニコラスを投げ放った。ニコラスはそのまま気絶していた。

チームダブルエックスの勝利だ。

第 65 章 本道

キングオヴギャラクシー準決勝第二試合、ネオ・ファルコンズ VS ゴールデンシューターズがリングアナにコールされると、まず赤コーナーにネオ・ファルコンズが入場した。まずポルゴが入場テーマ曲と共にダッシュで入場する。今回は空手着にスパッツというラフな格好だった。すかさずトップロープとセカンドロープの間にポルゴが入り、隙間を作る。余裕の表情と共にネオ・ファルコンズの司令塔マリア・ハロルドがリングインした。彼女はタンクトップの上にTシャツを重ね着して、下はスパッツだった。

次に青コーナーにゴールデンシューターズが入場する。まずは特攻隊長のジョー・ヨージ 12 世が敬礼のポーズをとって会場を沸かせながら入場した。食えない男だ。次に黒髪のスター、メキシコ流空手の達人ジュン・バードが入場する。ゴールデンシューターズはレガース、ニーパッド、リストバンドをゴールドで統一し、オープンフィンガーとタイツは黒のストロングスタイルで決めていた。今回、ゴールデンシューターズの二人はマジだった。全身の気を最初からマックスまで高め、短期決戦で決めるつもりだった。

ボディチェックが済むと、ヨージ 12 世がリング中央まで歩み出て、迷わずポルゴを指差し、対戦相手に指名した。挑発に乗ったポルゴは短く刈り込んだ銀髪の頭を軽くなで

ながら、リング中央に歩み出る。両者がグローブの先を合わせて挨拶すると、ゴングが鳴った。

　ポルゴは冷静さを保ったまま、オーソドックスに構える。ヨージの気が今にも爆発して弾けそうなのがわかった。具現化された気のオーラがレガースの周りで漂っている。様子見のジャブを放つと、カウンターの中段ストレートが返ってきた。すかさずヨージは右のミドルから左のソバットを決めてくる。ポルゴは今の３連打を全てガードしたが、ガードの上からでもダメージが残っていた。強烈な攻撃だった。

－何やっているの、ポルゴ？　さっさと決めなさい！

　マリアからの指示を聞こうとして油断した瞬間、ヨージの高角度飛び付き式フランケンシュタイナーが決まる。頭からマットに突き刺さるポルゴ。フランケンの体勢からそのままマウントポジションを維持して、拳に気を込めたままヨージが殴りかかる。ポルゴは相手の脇に脚を掛け、マウントをひっくり返した。今度はヨージが下になっている。そのままヨージを抱え上げると、ポルゴが高角度パワーボムに捉えた。パワーボムを決められたヨージが下から三角締めを狙っている。

－あなた、いつからプロレスラーになったの？　もっと間合いを取って、打撃で勝負して！！

　マリアの指示が飛ぶ。ポルゴは三角を嫌って、バックステップの後、スタンドを要求した。ヨージが立ち上がる。

　ヨージはアクティブにポルゴに殴りかかる。ポルゴはサウスポーにスイッチして、相手のパンチを貰いながら、一気に間合いを詰めた。ヨージの右ストレートをかわしたポルゴは、その右腕をキャッチしたまま一本背負いで豪快にヨージを投げきった。すかさず逆十字で一気に相手の腕を折りにかかる。

　ヨージはついにギブアップした。技を解いたポルゴは、ちらりとジュン・バードに一

瞥をくれた。

　ジュン・バードはリングインするとこう言った。

「以前のワタシでしたら、ナンパ目的で迷わず美人のマリアさんとの対戦を要求するでしょう。しかし、武芸者としての本道に目覚めた今、ワタシはポルゴさん、あなたに対戦を挑みます。あなたに勝って、決勝でG’さんに挑戦します。」

　会場が沸いた。

　ポルゴは軽くステップを踏みながら、ガードを少し上げ直して、ジュンとの対戦に備える。ジュンは得意の鶴足立ちの構えから、左足で前蹴りを数発放った。すべてかわすポルゴ。しかし、ジュンの蹴りからは衝撃波のようにオーラが出ており、ポルゴはダメージを受けざるを得なかった。

－ポルゴ、相手はストライカーよ。今度は接近戦に持ち込んで。

　マリアの指示が飛ぶ。

　ポルゴは相手のキックの嵐を掻い潜り、首相撲に持ち込むと、全身の気を両膝に込めて膝地獄で攻撃する。ジュンはポルゴの身体にボディタックルの要領で抱きつくと、ぶっこ抜きのフロントスープレックスでポルゴを投げ放つ！ ポルゴは相手の捨て身の投げ技を食らいながら、見事に体勢をコントロールして、逆にいいポジションを奪った。スープレックスを決めたジュンの上になり肩固めを決める。

－いいわ、そのまま一気に決めて。相手の肩を外すつもりで。

　マリアの指示通りポルゴは一気に両腕を引き締め、ジュンを気絶させた。マリアの出る幕もなくポルゴたちは決勝に進むことが出来た。

第 66 章最終決戦！

　ついに新世紀第３回キングオヴギャラクシーの決勝戦が始まろうとしていた。ネオ・ファルコンズの控え室ではポルゴとマリア・ハロルドが最終ミーティングに挑んでいた。

「結局、今大会にはミス・ワカマツは応援に来てくれなかったな。けっ、つまんねーな。」

「何ぼそぼそ独り言つぶやいているのよ、ポルゴっ！ しっかりして。次の相手は最強のチームダブルエックスよ。あの G’（ ジー・ダッシュ ）に勝つ自信あるの？ グレート・アジア 13 世もかなりの使い手よ。」

「グレート・アジア 13 世の方は、この時代の第一回ギャラクシーで拳を合わせたから、何とかなるかもしれないな。」

「かもしれない、じゃダメなのよ！！」

「G’ の野郎、クローンであれだけ強いんだから、オリジナルのあんたの先祖はたぶん人類最強だったんだろうな。その子孫のあんたは、何かとっておきとかないのか？」

「ないこともないけどね。ほんとのとっておきだから、使うべきときが来たら使うけど。」

「マリアさん、そんなに強気じゃ、いい彼氏出来ないよ。」

「よけいなお世話よ。だからあなた彼女に逃げられるのよ。」

　最初にこの話題を振ったとはいえ、ポルゴにとっては聞き捨てならない話だった。

　一方のチームダブルエックス控え室では、G’とグレート・アジア 13 世が打ち合わせをしていた。

「ねえ、G’。この決勝が終わったらどうするの？　またタイムマシンか何かで、過去の世界に戻るつもり？」

「いや、過去にはもう戻らない。」

「まだ火星人狩りは続けるの？」

「もうこの惑星（ ほし ）には火星人はいないさ。今はギャラクシー開催期間中だから、自称太陽系皇帝の一味が会場に来て威張っているけどね。奴らも今日限りの命だろう。」

「どういうこと、またあなたが彼らに直接手を下すの？」

「いや、地球人の人口を核・生物兵器で半減させたのは旧火星皇帝その人自身だ。ノコノコ地球圏にやってきて、彼女はその報いを自らの身に受けるだろうな。」

「次の試合の勝算は？」

「当然だろ！ ジムを建て直す費用くらいはがっちり稼ごうぜ！ その後は銀河を豪遊でもするか？」

銀河の掃除人（ スィーパー・ギャラクティカ ）の意外な一面だった。

ついに決勝のコールが始まった。赤コーナーにチームダブルエックスがコールされる。

まずはグレート・アジア 13 世が新生ヘルリベンジャーズのテーマで入場する。その後、G' が無音のテーマ曲と共に走って入場した。グレート・アジアはスパッツにタンクトップ、G' は黒のシャツにレザーパンツだった。彼らはコーナーに駆け上がり、クロスした両手を掲げてポーズを決めた。大観衆の割れんばかりの声援が飛ぶ。

青コーナーにネオ・ファルコンズがコールされると、刈り込んだ銀髪に長いもみあげのポルゴがまずダッシュでリングインした。次に落ち着き払った若き美人格闘家マリア・ハロルドが入場する。ポルゴとマリアは、ジャケットは空手着、下は袴の古武術スタイルだった。きっちり両者とも腰に黒帯を巻いている。

「ポルゴ、とりあえずあのグレート・アジアを料理して。全てはそれからよ。」

マリアは指示した。すかさずポルゴがリング中央に立つと、グレート・アジア 13 世を対戦相手に指名した。

グレート・アジアは何食わぬ顔でこの挑戦を受けて立った。

ゴングが鳴った。

　アジアは両手を高く上げて牽制した。ポルゴはアップライトに構えてフットワークをしている。迷わずアジアが摑みかかる。ポルゴの両肩を押さえつけたまま、左・右とローを連発する。肩を押さえた手を外すと、今度は右のフックでポルゴをしたたかに殴りつける。

―ポルゴ、何やっているの？ 間合いを離して！ 相手に呑まれちゃ、ダメっ。

　マリアは先手必勝で小刻みにパンチやキックを打って、G’を攻める。適度な間合いを保って、絶対に無理はしない。G’は超反応でカウンターを狙ってくるが、マリアはすべてブロックした。

　しびれを切らしたG’は強引な右の上段回し蹴りでマリアに蹴りかかる。マリアはバックステップで今の蹴りをかわした。

―フッ、かかったな。

　G’は右の人差し指を突き出すと、親指で引き金を引くアクションをして、一度に４発の気弾を放った。まるで拳銃の弾のようにマリアの両肩、両膝を狙って弾は放たれた。

マリアは見えないバリアを張って、今の攻撃を防いだ。

―甘いわね。今度はこっちから行かせてもらうわ。

　マリアは軽く左手で髪をかき上げると、右腕で離れた間合いからアッパーを放った。拳の軌跡に呼応して衝撃波が放たれる。すかさず左腕も弧を描くかのように振り上げる。ダブルで衝撃波がG’を襲った。

　G’ は今の技が来た瞬間、とっさにバックステップをしながら両の掌を一気に前方に突き出すと、全身の気を高めてマリアに向って気を放出した。気弾はダブル痛風拳をはじき返しながら、マリアを襲った。

　誰もが今の強烈なギャラクシーウェーブでマリアの敗北を予感した。

　次の瞬間、マリアは G’ の背後に立っていた。

―今の技をかわしたのか？　お前も瞬間移動が出来るのか？

　マリアは G’ の首をチョークスリーパーに極めながら、言った。

―私は気をフィールド（ 場 ）として操れるのよ。このリングは既に私のフィールドの中に入っているわ。その中だったら、私は自由に瞬間移動が出来る。そんなことはいいわ。さあ、眠ってもらうわ。

一気に極めるマリア。G’ の体から力が抜けていく。

―アメーよ。ネーちゃん。

　G’ はマリアに後ろから締め上げられながら、一気に全身の気を解放して、強烈なプレシャーを起こし、マリアを吹き飛ばした。

―やるわね。まあ、まずはお手合わせってところね。ポルゴ、タッチよ。

　青コーナーからポルゴがリングインして、マリアとタッチを成功させる。

―２対１だ。絶対に何とかなる。

　そんな甘さがあったかもしれない。ポルゴは全身の気を極限まで高めると、一気に勝負に出た。ダッシュからステップを踏んで一気に間合いを詰めると、大振りなフック気味のジャブを空ぶって、相手が気を取られたところで、強烈な得意の右フックで G’ のこめかみを打ち抜いた。ミィーティングの瞬間、ポルゴは拳の先から全身の気を爆発させた。おおきくよろめく G’。すかさずポルゴは左のフックから、摑んでの膝地獄のゴールデンコンボを使う。G’ は一方的に一連の攻撃を受けていた。ポルゴはすかさず膝を G’ の顔面に連打する。

―くたばれ。

　ポルゴは心の中で叫んだ。

　次の瞬間、今まで攻撃を一方的に食らっていた G’ がショートレンジの左のボディアッパーを放つ。ポルゴの動きが明らかに止まった。

　G’ は軽く左腕を引くと、反動を利用して体ごと右のボディアッパーでポルゴの鳩尾を打ちぬいた。そのままの動きを利用して、ポルゴのアゴを右の２段式アッパーで G’ は打ち抜く。3 段目は右肘でアッパー気味にポルゴのアゴを完全に叩いていた。ポルゴの意識が飛ぶ。G’ は左の後ろ回し蹴りで今の３段アッパーのスキをフォローした。このキックでポルゴはダウンした。

　すかさず G’ はバックステップで間合いを取ると両の拳を前方に一気に開いて、強烈な気功波をポルゴに向けて放った。銀河最強の光線技、ギャラクシーウェーブがダウンし

たポルゴを襲う。

　マリアは瞬間移動でポルゴの前に立ち、片手でギャラクシーウェーブを完全に止めた。

―やってくれるわね。レフリー、ポルゴのノックアウトをとって。これからサシで決着をつけるわ。

　マリアは上半身の空手着をサッと脱ぎ捨てると、Ｔシャツ一枚になって構えた。全身の気を極限まで高める。ウェーブがかった彼女の銀髪が光り輝き、逆立っている。

―あなたも、龍の気を極限まで引き出すことね。お互いパワー全開で一気に決着を付けましょう。

　言い終わると両者は強烈な殴り合いをはじめた。マリアも G' もガードすらしなかった。数十発は打ち合ったかと思えた瞬間、両者は一気に間合いを離して、気功波を放つ！互角の展開だ。

　G' は瞬間移動で、気功波を放ったばかりのマリアの目の前に現れると強烈な左フックでマリアのこめかみを打ちぬいた。すかさず右のミドルでマリアの横腹を襲う。次は右の上段フック。その回転を利用して、右の上段ハイキックを放つ。マリアのガードの上から当たったキックがマリアを弾き飛ばす。コーナーまで吹き飛んだマリアを、得意の右アッパーで G' は打ち抜こうとした。

　G' の右の拳をマリアの両肘がブロックして、肘の間に完全に挟み込んでいた。

―かかったわね。真・龍拳破れたり。

　マリアは G' の右の拳を肘の間に捉えたまま、両の掌を G' の顔面に向けて、今大会最大とも言うべき強烈な気功波を放った。

直撃だ。

気功波による強烈な閃光が消え、会場の観客の目が慣れた瞬間、そこには何事もなかったかのように突っ立っている G' の姿があった。

―待たせたな。そろそろ本番始めようか？

G' の全身の気がその潜在能力の限界近くまで高まり、彼の銀髪は異様な輝きを帯びたままいつも以上に逆立っていた。情け容赦なく G' がマリアに蹴りかかる。マリアは全ての蹴りを完全にガード・ブロックしていたが、ガードの上からでもダメージは相当なものだった。

ついに G' の得意の上段ハイキックがマリアのガードをブチ破り、彼女の顔面を捉えようとした瞬間、彼女の姿はそこにはなかった。

背後から強烈なローキックが G' を襲う。すかさず水面蹴りで G' はダウンを喫する。ダウンした G' の上にマウントを取り、肘で殴りかかるマリア。美しい鬼。鬼神の表情だ。G' はブリッジでマリアのマウントを切り返すと、上になる。マリアは下でガードポジションをとっているが、かまわず強引に殴りつける。マリアが下から三角締め、いや逆十字を狙っている。G' は右腕をマリアに取らせた。マリアは一気に G' の右腕を逆十字で極めにかかった。

次の瞬間、G' はマリアを片腕だけで引き上げると、腕を極めさせたまま強引なジャンピングパワーボムを極めた。後頭部をしたたかに打ち付けられたマリアはなおも両脚のクラッチをきつく絞って、G' の右腕を折りにかかる。

これで勝負が決したか？ 誰もがそう考えた瞬間、G' は右の拳を開くと、逆十字を極めているマリアの顔面目掛けて、フルパワーのワンハンドギャラクシーウェーブを放った。会場全体が今の衝撃波の影響で大きく揺れる。マリアはバリアを張ってガードした

が、ついに力尽きた。

　ゴングが鳴った。息を吹き返したアジアがリングに駆け上がり、G’ に抱きついた。ポルゴは既に担架で控え室に運ばれていた。マリアも同じ運命だ。

第 67 章運命の日

　地球で行われた新世紀第３回キングオヴギャラクシーは G’ とグレート・アジア 13 世のチームダブルエックスが優勝した。これで G’ は時空を越えて、６度にわたってギャラクシーを制覇したことになる。主催者の太陽系皇帝は自ら閉会式の演説を行っていた。既に G’ たちは太陽系皇帝の側近から表彰状と賞金の小切手を受け取っていた。

―わかるだろ。この険悪な気のムードが。しばらく会場の中心を離れていよう。それにしてもあのオバサン、演説長すぎだぜ。

　太陽系皇帝の周りに地球人たちが目の色を変えて取り囲む。5,6 人の火星人の側近達が生命の杖を振りかざしながら、地球人の群集を牽制する。

―太陽系皇帝！ いや、元火星皇帝よ。おまえのせいで、俺たちは肉親・恋人・友人を失ったんだ。その償いをここでさせてもらうぞ。

―えーい、黙れ黙れ。この生命の杖が目に入らんか？

　側近の火星人達が生命の杖のスイッチをオンにして、炎で地球の群集を脅かしている。

―しゃあねぇな。一応手助けしてやるか？

　G’ が右の人差し指を皇帝の側近達に向け、気弾で彼らを狙った瞬間、彼らは皆一様に緑色の血を流して倒れていた。地球の群集の一人が、レーザー銃で彼らを撃ったのだった。

―側近は倒した。皆の手で帝国主義の元凶をぶちのめすんだっ！

　地球の群集たちは一目散に太陽系皇帝に殴りかかった。数分後、群衆が太陽系皇帝から離れたその時、彼女は既に息絶えていた。

　こうして地球人自らの手により、太陽系皇帝（ もはや旧火星皇帝というべきか ）は始末された。このクーデターの成功により、太陽系帝国は崩壊し、新たに太陽系連合政府が成立する。時代遅れの惑星間帝国主義体制は、地球の民主主義の前に葬り去られた。太陽系帝国の危機と崩壊は同時に、太陽系の民主主義の再来と復活を意味していた。地球の帝国主義シンパであった太陽教の信者達は転向、または自決を余儀なくされた。

　地球圏、そして太陽系には再び平和と秩序が訪れた。

第 68 章 ポルゴ

　ふと気付くと俺はずっとベッドの上で寝ていた。誰かがずっと俺の右手を必死に握っていてくれる。あたたかい。ずっとそばにいてくれた懐かしい相手、そんな気がした。眼を開けてみる。

―ポルゴさん、気付いた？

　ミス・ワカマツが言った。

―やべーな。またやられちまったよ。試合の結果はどうなったんだ？

―敗北です。完敗。

―マリアさんは無事なのか？

―彼女も同じ病院で寝ているわ。

　無理に俺は起き上がろうとした。激痛が全身を走る。

―まだ無理しちゃダメ。マリアさんは大丈夫。ちょっと休んでいるだけよ。

―そうか。ところで君は今までどこにいたんだい？ ずっと銀河帝国にいたのかと思っていたけど。

―ギャラクシーに参加するつもりだった３代目の大王の宇宙船で私は地球に戻ってきたわ。

　ギャラクシーが始まるまでの間に、大分仕事をさせてもらったけど。ポルゴさんの試合は全部生で見ていたわ。

―仕事？　また銀河ワニ革のバックでも売っていたのかい？

―旧太陽系帝国のガバナンス（ 統治 ）コンピューターシステムをクラックして、防衛・軍事に関する命令系統システムを全て落としたわ。独裁主義の旧太陽系帝国は全てのガバナンス・情報系統を一つのコア・コンピューターにまとめていたの。それを落とすのに大分時間がかかったわ。

―ずいぶんとサイバー探偵らしい仕事だな。ところで旧太陽系帝国って？

―ああ、ポルゴさんは眠っていて、何も知らなかったのね。ギャラクシー閉会式での地球の一般市民たちのクーデターにより、旧太陽系皇帝は暗殺され、太陽系帝国も崩壊。あまりに独善的かつ冷酷な独裁政治体制を敷いたのが彼女の運の尽きだったのよね。

―これで死んだワカマツの魂も浮かばれるか。パルチザンでも軍隊でもなく、地球の一般市民によって惑星間帝国主義は駆逐されたのか。意外な展開だったな。

　ミス・ワカマツが飲み物を買いに行くと、俺はベッドの上で一人物思いにふけっていた。

―あの G’ を止める事は誰にも出来なかった。若い銀河帝国の王子にも、マリアさんにも。それにまだ西郷詩郎との決着もついていない。師匠のミスター東郷は未だ行方不明か。たしかに旧火星皇帝の帝国主義戦略が崩壊したのはこの上なく望ましいことだったが、俺にローカルな問題は何も解決されていない。

　そんなことを考えつつ、俺はまた無理に起き上がろうとした。身体に力が入らない。痛い。結局この世界に救世主は現れなかった。地球人たちは自らの手で旧火星皇帝の支配をブチのめした。結構なことだった。人は常に自らの力で自らを助けるしか道はないも

のだ。

―ポルゴさん。お茶買ってきました。喉渇いたでしょう。

―ああ、ところで他には何かビックニュースとかないの？

―旧火星皇帝の地球支配に協力した地球の太陽教教徒たちが自決をはじめたわ。教祖とも言うべき旧火星皇帝を失った今、彼らは生きる希望を失ったのね。

―宗教の問題は、ほんと救いようがないな。いつの時代も異なる宗教・イデオロギー間での闘争が絶えない。人を救うための宗教が人を殺める。その繰り返しだ。

―確かにね。でも人間ってそんなにペシミスティックな面だけの存在ではないものよ。

―ああ、そうだな。

　ぼーっとしてきた。またしばらくは眠っていよう。次のチャンスに備えて。

第 69 章これから

　銀河帝国の王子とお目付け役のニコラス・トルーマンはキングオヴギャラクシーの閉会式が終わった後、地球圏に滞在している大王に謁見を済ませた。

―やー、パパはいつ会っても怖いねー。ねぇ、ニート君。

―大王様の前だから、お前の好きなようにさせていたが、ダメ王子、私をニートと呼ぶのはやめろっ。ニコラスさんか、トルーマン先生と呼ぶんだな。

―だってニート君はニート君でしょ。ところでニート君、これからどうするの？

―私はこの地球圏、いや太陽系に残ってしばらく修行するよ。私の出身惑星とこの地球は気候のタイプ、重力の心地よさが似ている。それに私はあの G' を止められなかった。まだ修行が足りなかったんだな。ダメ王子、アンタもな。

―ボクはまだ成人になるための脱皮まで後２年くらいある。しばらくはボクも地球圏で修行したいなー。地球の女の子も結構可愛いみたいだしね。

―ダメ王子、自分で大王に許可貰って来い！ あんたはこれでも次の世代の銀河帝国を背負う男だ。自分のことを全て自分の都合で決める訳にはいかない。銀河帝国の市民のことを常に考えるのだな。

―わかったよ。さっき行ったばかりだけど、またパパに会いに行って地球圏長期滞在の許可を貰って来るよ。

　王子からニート君と呼ばれているこの女性、ニコラス・トルーマンの実力が高い、いや圧倒的に高すぎることは誰の眼にも明らかだった。彼女は銀河帝国の首都、高重力の惑星サルバトーレでは幼少時代の姿に擬態していたが、隠されていた実力の高さは王子をも上回っていた。そのことに未だ気付かない王子はただのバカなのか、それとも何かの役得に違いなかった。

　一方、マリア・ハロルドは退院手続きを済ませると、同じ病院の中のポルゴの部屋を

訪れた。

―ポルゴ、元気？ まあ、そのザマじゃ元気じゃないのはわかるけどね。彼女が看病に来てくれてよかったじゃん。アタシ、そろそろ高校の新学期が始まるから、いつもの生活に戻るよ。だいぶギャラクシーの前の合同練習で学校さぼっちゃったし。

―はっ？ マリアさん、あんた何回留年しているんだ？

―まだ私は 16 歳よ。現役の高校生。

―俺はそんなガキに今まで敬語を使って話していたのかよ？ ふざけんな！

―まあ、力の差というか、ぶっちゃけこっちの方が格闘の実力上だったんだから仕方ないじゃない。世の中、実力主義よ。命の恩人のこの私に一体何てこと言うの？ あの時のギャラクシーウェーブが直撃していたら、あなた間違いなく死んでいたわ。

―そ、そうですね。じゃあ、準優勝の賞金とかって、山分けでいいっすか？

―何言っているの？ 賞金なんてただの紙切れよ。だってあれマーズマネー立ての小切手だったじゃん。火星皇帝が死んで、太陽系帝国が崩壊して、マーズマネーはハイパーインフレに襲われちゃったの。そういうわけで、今の地球圏の通貨はグローバルリラに戻ったのよ。何も知らないのね。欲しかったら、このただの紙切れ全部あげるわ。

―けっ、大分この入院期間中に世の中の動きから疎くなったらしいな。

―いいんじゃないの？ 憎き火星皇帝も、彼女が作った太陽系帝国も危機を迎えて崩壊し

た。あなたの目標は全て達成よね。亡命していた彼女も無事あなたの元に戻ったし。これ以上ない結末よね。私の目的はまだ達成していないけど。

―マリアさんの目的って？　太陽系帝国撲滅じゃないの？

―打倒、いやストップ・ザ・ジー・ダッシュよ！！　あの時は決勝戦で大分こちらも消耗してからの試合だったけど、パワーマックスの今、サシで決着をつけに行くわ。彼の気は？

そうね、グレート・アジアのウェヌスジムのあたりね。じゃあ、ね。

―ちょい待ち、マリアさん。待ってってば。

―心にもないこと言わないで。あなたが待っている人は一人だけでしょ。それじゃあ

第７０章決着（ケリ）

　マリアはG’の気の気配をたどって、彼に会いに行った。彼はやはりウェヌスジムにいた。ジムの建物の前で逆立った銀髪の男がにこやかに隣の若い女と話している。男があまりに強いオーラを放っているために、隣の女がどこにでもいるような普通の若者の雰囲気に見える。しかし、この女こそが間違いなく現役のプロレス王者グレート・アジア13世である。彼らは協力して手作業でウェヌスジムの建物を再建したようだ。ジムの前のベンチで座って、ソフトクリームを食べながら、何かを楽しそうに話している。

　マリアは全身の気を一気に高めて、G’ に近づく。彼は既に気付いているはずたったが、表情を全く変えずに恋人との会話を楽しんでいる。

―よお、アンタか？

―お取り込み中失礼するわ。ケリを付けに来たと言えば、わかるかしら？

―何となくは、な。

―あなたはまだギャラクシーの決勝でも、真の力を見せてはくれなかった。良かったら、あなたのＭＡＸの気を見せてくれる。

―いいだろう。アジア、ちょっと離れていてくれないか？

　言い終わると G’ は全身の気を一気に最大限まで高めた。銀髪の髪はこれでもかと言わばかりに逆立ち、光り輝いていた。強烈なプレッシャーがマリアを襲う。彼の周りには素人にもわかるくらいオーラが激しく具現化され、蠢き、渦巻いていた。

―わかったわ。確かにポテンシャルは私よりは上みたいね。でも、それじゃあ超時空瞬間移動は出来ないでしょうね。フツーの瞬間移動は出来てもね。

―痛いところついてくるな、アンタ。どうやら俺はもう、もとの時代には戻れないらしいな。

　マリアは地図か何かが書いてあるカードと、鍵を G’ に向って投げた。

―何のマネだ？

―私の先祖が作ったタイムマシンの隠し場所の在り処と、キーよ。過去でも未来でも、好きな時代に一回だけトリップで出来るわ。一回だけね。ただし定員は二人だけよ。率直に言って、あなた、もうこの時代にいるべきではないわ。もうあなたの役割は終わったのよ。

―どういうことだ？

―いったい何人殺したの？　この時代の火星人たちを。

―さあな。地球にいるやつは全部始末したはずだが。

―地球人であれ、火星人であれ、人間は人間よ。人が人を殺してはいけないわ。ポルゴも私も不殺の誓いを立てて、いままで生きてきたわ。

―じゃあ言わせて貰う。地球の人口を半減させたのは誰だ？　あのキノコ異星人どもだろう？　この銀河は大きさ（キャパシティ）が限られている。無駄なゴミやクズどもはさっさと始末しないとな。それが俺の役割だ。何か文句あるか？　アンタだって、自分の恋人や肉親が火星人に殺される場面を見たら、その前後に迷わず火星人に手を下すだろ？　それとも何か？　誰も殺したくないから、自ら進んでテロリストに殺されるのかよ。

―あなたは人間の手で作られた強化クローン人間というだけあって、やはり冷酷な性格ね。人としての温かみが全く感じられないわ。思っていたよりは力や精神を制御しているみたいだけどね。私は当初、あなたが自分の力を抑えられなくなって、ただ無秩序に火星人たちを殺しているのかと思ったけど、あなたなりの哲学も持っていたみたいね。私とは共通するところが何もないのが残念だけど。結論は一つよ。はやくタイムマシンでどこか別の時代に行って。あなた、もう用済みよ。

　マリアが言い終わった途端、G’は右の人差し指の先からマリアに向けて気弾を放った。

　マリアはその気弾を片手でぱっと握りつぶした。

―本当言うと、あの時足手まといのポルゴさえいなければ、自分の気をＭＡＸまで解放してあなたを殺すことすら出来たのだけど、やはり私も非情になりきれないのが、オチよね。今ので、きっとわかったでしょ。私はあなたのオリジナルの子孫よ。クローンがオリジナルを越えることなんて出来るのかしらね。まあ、いいわ。タイムマシンの件、考えておいて。使用料は私からのサービスよ。無料でね。銀河の平和を天秤にかけたら安いものよね。

　言い終わるとマリアは去っていった。

―生意気な女だな。

―ねぇ、G’、あなた一人で過去の世界に戻るつもり？

―いや、俺はもう過去には戻れないさ。俺と一緒に未来に行ってみないか？

―でも未来って、まだどこかでプロレスやっているのかしら？

―プロレスは不滅さ。もしなくなっていたら、総合の試合なり、二人で組んでまた未来のキングオヴギャラクシーでひと暴れすればいいさ。

―グレート・アジアの名跡を 13 代目で潰すのは、ちょっと納得いかないんだけどなー。

―んなもの、未来に行ってから 14 代目を一緒に仕込んで、また継続すればいいさ。なっ、一緒に俺について来いよ。

キングオヴギャラクシーで未知数というべき力を発揮したチームダブルエックスの二人は手を繋いでタイムマシンに向って歩いていった。

これで全ての決着（ ケリ ）がついたとはとても言いがたいが、ポルゴ、ミス・ワカマツ、マリア、G’、グレート・アジアたちはまたそれぞれの道を歩き出した。

地球圏は太陽系帝国の侵略により危機を迎えたが、皇帝の侵略を最終的にストップさせたのは、気という不思議な力を持った CYBER 探偵ポルゴでも銀河の掃除人 G’ でもなく、地球の一般市民だった。

歴史に名を残すほど何かには秀でていないが、普通の生活を送ってきた無名の人々によって、歴史は動かされているのかもしれない。

ポルゴと西郷の決着はまだついてはいない。東郷師範もまだ不在のままではある。しかし、太陽系帝国による地球侵略がまさに危機一髪というところでストップしたところで、ポルゴたちはしばらく休息の時を迎えた。

第八部　パープルパンサー

第 71 章 紫の豹

太陽系に 100 年ぶりと言っても過言ではないひさびさ平和が訪れていた。未だに太陽教の残党たちはテロ行為を繰り返していたが、旧火星皇帝が殺され、この太陽系から帝国主義独裁国家が駆逐された以上、彼らは衰退の一途を辿っていた。

俺はギャラクシーが終り体調を元に戻すと、またかつてのように CYBER 探偵の仕事をはじめた。結婚前の素行調査や浮気調査といったいかにも探偵業に象徴的な小さな依頼から、大企業の不正追及までありとあらゆる仕事を引き受けていた。半年くらいこんな状況が続くと、俺たちはひとまず依頼にカタをつけて 1 週間の休暇をとることにした。

休暇といっても、どこかの惑星にバカンスにゆくこともなく、近場をぶらぶらと飲み歩きを繰り返していた。二日酔いの午前中は事務所兼自宅でソファに横になりながら、ネットヴィジョンでプロレス中継を見て、だらだら枝豆でもつまんでいた。もちろん、俺たちの片手にはすかさずビール缶が握られていた。

メインイベントが始まった。会場には大勢のファンが詰め掛けている。プロレス界の最強実力者グレート・アジア 13 世の突然の失踪から半年が経過し、某プロレスメジャー団体では実力ナンバーワン決定ワンナイトトーナメントが行われていた。本大会のメインイベント、つまり決勝戦では、メキシコ流空手の達人ジュン・バードが順当に勝ち残っていた。対戦相手は全くの新顔だった。まだ 10 代後半か 20 代前半の若手といってもいいくらいの体のハリとツヤで、紫のコスチュームに、これまた紫の豹の仮面を着けていた。この男、パープルパンサーと名乗っていた。

総合格闘技 (MMA) やキングオヴギャラクシーは純粋に実力を争う競技だが、プロレスはただ勝つだけでは、全く評価されない競技だった。いかにファンを満足させ、感動を与えるか？ 選ばれたものだけがリングに立てるプロ競技だった。

しかしあらかじめ勝敗が決まっていることも周知の事実であり、半ば食傷気味に俺はビールを片手にこの試合を眺めていた。ジュン・バードの野郎も相変わらず金儲けやあくどい商売に未練があると見えた。

パープルパンサーは明らかに余裕のムーブメントでジュン・バードをいなすように闘っていた。いつでも極めることが出来ますよ。そんなことをちらつかせながら、テキトーにジュンのテコンドーベースの蹴りを受け続けていた。

俺はミス・ワカマツの表情が瞬く間に変わっていくのに気付いた。

この試合、どうやら格闘の素人にもわかるほどの強烈な闘いだった。

俺の眼には、ジュン・バードとパープルパンサーの放つ微妙なオーラが見て取れた。彼らは、自らの気を最大限に抑えて、隠しながら闘っているが、それでもパンチとパンチ、蹴りと蹴りがコンタクトするたびに、お互いのオーラが爆発しているのが確実に見て取れた。

どうやらこの試合、プロレスの名を借りて、お互いに真剣勝負（ シュート ）をやっているらしい。

たしかにジュン・バードの技は小気味よく確実に決まっている。台本（ ブック ）どおりに両者は闘っているのかもしれなかった。ただ、パープルパンサーは大げさにダメージを受けた演技をしていたが、彼がまったく消耗していないのは誰の眼にも明らかだった。あまりに両者に実力差がありすぎて、いくらパンサーがジュンの技を受けたところで、ダメージを与えるには至らなかった。

ジュンの表情が変わる。ついに必殺のフェニックスアンジャスティスを出し、ひたすら蹴りの乱打でパンサーをコーナーに追い込む。サマーソルト気味のフェニックスライジングでパンサーをダウンさせた後、ジュンは満面に笑みを浮かべて右手をパンサーに差し伸べた。

パンサーはダウンしたまま、差し伸べられたジュンの右手を掴むと、そのまま手首の関節を極めて片手でジュンを投げ飛ばしていた。

会場からどよめきがあがる。

明らかに脚本を無視した動作に、ジュンは逆上していた。

「前もってあなたの口座に指定された金額を振り込んでおきましたが、契約を無視されたようですね。それなら、私もプロレスの紳士協定を破棄させていただくことにしましょう。」

「プロレスの紳士協定」とは、どうやら対戦相手には絶対に怪我をさせないという暗黙のルールのことらしかった。ジュン・バードは全身の気を一気に解放すると、そのまま両足にオーラを具現化した。

「トドメです。フェニックスファイナルアタック！」

ジュンは強烈な右の前蹴りでパンサーを垂直に蹴り上げると、燃える炎のオーラを纏った左足でバックキックを放った。誰もが勝負が決したと思った。

だが、ジュンの左足の先には誰も存在しなかった。パンサーは前蹴りを食らった勢いを利用して空中で宙返りを行うと、一気にジュンのバックを取っていた。そのままジュンの右腕をハーフネルソン、左腕をチキンウィングに捉えると、高角度のアーチを描いてスープレックスを極めた。この間、０カンマ４秒。レフリーがスリーカウントを入れた。ゴングが鳴った後も、ジュンが起きることはなかった。そのまま担架で運ばれていった。リングアナがフィニッシュホールドを龍虎ＳＨとアナウンスした。いまだかつて誰も眼にしたことがない強烈なスープレックスだ。右腕をドラゴンスープレックス、左腕

をタイガースープレックスのクラッチに捕らえ、相手が受身の取れないまま完全な高角度アーチを描き、一瞬で投げ放つこの技は、タイガードラゴンスープレックスと命名された。パープルパンサーの驚異の実力が世間に知れ渡ることになる歴史的な一戦だった、

「さすがミス・ワカマツだな。パープルパンサーの実力が君にもわかるんだな。」

「まあね。中に入っている人って一体誰なんでしょうね。こんな凄い使い手が今までギャラクシーにも出ずに、地球圏の片隅で生きていたなんて。それに年齢も私と同じか、もっと若いみたい。まさに後世畏るべしね。」

「ああ、この若さでここまで極められるものなんだな。ヤツは並みのレスラー、いや武道家じゃないな。」

　パープルパンサーは、実力ナンバーワン決定トーナメントを制した勝利者に与えられるはずの 7 冠統一ベルトを受け取らずに、リングサイドの若い水着姿のラウンドガール達のところにすたすたと駆け寄っていった。10 人近くいるラウンドガールからスタイルの特にいい 2 人を選ぶと、両脇に抱えて、余裕の表情で堂々と花道を退場していった。

　かつてグレート・アジア一族の存在により、誰も腰に巻くことが出来なかったプロレス界の至宝をあっさり無視して、ラウンドガールを選ぶと言うあまりに常識外れなパンサーの行動に団体上層部のレスラーやフロント陣は顔をしかめていたが、会場のファン達は明らかにパンサーの強さを熱狂的に支持していた。

「あの紫豹、ベルトより女を選んでやがる！」

　俺はこれまでグレート・アジア一族の前で涙を飲んできた歴戦の勇者達の表情を思い浮かべながら、ベルトの権威と歴史を無視したパンサーの行動に強い怒りを覚えずにはいられなかった。

　控え室のインタビューでは、報道陣からやはり、なぜベルトを受け取らなかったかに

集中して、強烈な質問攻めにあっていた。

「ゴホン。確かにこの 7 冠統一ベルトは数世紀にわたる地球を代表する先輩レスラー・格闘家達の血と汗と涙がしみ込んでいます。しかし、私は汗の臭いよりも、香水の薫りを選びたいと思っています。そしてベルトという形骸化した象徴ではなく、強さと実力を己が身体で表現したいと思います。今日ここで、地球 7 冠統一ベルトは私の手により封印と言う形にさせていただきたい。」

報道陣や某団体のレスラー達およびフロント陣がこの意外な発言にいっせいに非難の眼を向けると、パンサーはマスク越しに控え室に押しかけた面々を睨んだ。パンサーが両脇に抱えている女性達と一緒に立ち上がった瞬間、彼を止める者、彼に意見をする者は誰もいなかった。そのままパンサーはタクシーでホテルに向かっていった。

たかがネットヴィジョンの一番組かもしれなかった。ただ、この試合、そして紫の豹の存在が、俺たちの人生に決定的な影響を与えるとはこの時点で想像することは決して出来なかった。火星人との長い戦いを終え休息していた俺の心の中の狼を、この一戦の生中継は強烈に叩き起こしたのだった。それほどまでに強烈な何か、俺の心に直接訴えかける何かが、この紫の豹の仮面の裏に隠されているはずだった。その正体が何かは一切わからなかった、俺には一つだけわかっていることがあった。

ヤツとはどこかで必ず合い見えることになるだろう。そして答えを導きださねばならない。あの若さであそこまで極められる秘密は何であるかを。そして、ヤツの強さを自分の拳と身体で味わってみたかった。俺も自分の限界、いや極限を知りたくなった。

第 72 章 400% の勝率

太陽系帝国が崩壊した後、ジョー・ヨージ 12 世は経営する法律事務所の資金繰りに困っていた。

「皆さーん、ごめんなさーい。今日限りでレイオフ（ 解雇 ）デース。ヨージ法律事務所は今日で廃業しマース。退職金はボクのポケットマネーで支払いマース。ハイ、どうぞ。今までご苦労様デース。」

彼は自宅兼事務所の土地建物を売却する契約を結び、その頭金でかつての部下に最後の給与、いや退職金を支払った。

今日から住むところもなければ、行くアテもない。先の大戦で旧太陽系帝国、つまり火星の側に協力してしまった手前、地球圏に彼の仲間はいなかった。皇帝を失った火星は既に混乱と無秩序が支配しているという。

彼もユニバーサル・レスリングの使い手であり、こうなった以上、前座からでも、また一レスラーとしてやっていくしかなかった。しかし、太陽系帝国の司令官という地位を一度でも占めてしまった彼が、また前座からやり直すこともあまりに酷な話である。さらに年齢的な問題も存在する。彼は若手でもなければ、大御所でもない、まさに中堅のポジションだった。若手からの突き上げ、大御所からのプレッシャー。やり切れないと思いつつ、信用・評判という大きな財産を火星人に魂を売ることで失った以上、もはや法律家として地球圏で活躍する道はなかった。

なけなしの現金をはたいて、一番大きなプロレス団体の試合会場に足を運んでみた。そこには、かつての盟友ジュン・バードと紫の豹のマスクを着けた男が闘っていた。これだ！ 俺もこういうレベルの戦いを一度でもいいからやってみたい。やるか、やられるかのシュートプロレス。ムーブを見ながら、思わずヨージの体が動いていた。ここは俺だったら、こうかわす。ほんとは右のガードが下がっている、チャンスだ。

我を忘れて試合に見とれていると、一瞬のスープレックスで決着がついた。龍虎ＳＨ。見たこともない鮮やかな技だった。紫の豹、こいつの実力は確かに本物だ。

迷わずリングサイドに駆け寄るヨージ 12 世。リングサイドに陣取っている団体幹部を見つけ出すと、すかさず自分から次回の興行への参加を持ちかけた。もちろんカードは対パープルパンサーだった。

「よろしいのですな。確かにファイトマネーは弾みましょう。ただ、彼は約束事の通用し

ない相手です。」

「約束事？ あぁ、そんなものはどうでもいいデース。ワタシ、彼に 400 パーセント勝ちマース！」

後でパンサーはタバコの煙をくゆらせながら、この対戦を受諾したという。ファイトマネーはいくらでも高いほうが、いい。世の中、金次第だ。パンサーはそう呟いたという。ポストグレート・アジア時代の新エース、パープルパンサーとジョー・ヨージ 12 世の試合は、前回のワンナイトトーナメントの一ヵ月後に行われた。リングアナがまずヨージ 12 世をコールすると、彼は 400% と書かれたマスクを被り入場する。典型的なアマレススタイルのコスチュームに、レスリングシューズをはいて入場する。

一方、パープルパンサーは「哀しみの孤豹」のテーマ曲とともにダッシュで入場する。

紫の豹のコスチュームに紫のタンクトップ、パンタロンで統一していた。

ゴングが鳴る。ジョー・ヨージは音速のタックルでテイクダウンを奪い、蛇のように絡み付いてグラウンドを仕掛ける。パンサーはガードポジションで下からヨージをコントロールする。ヨージは脅しを兼ねて上からパンチの雨を降らすが、パンサーは左手でヨージの頭を掴み、うざいパンチは右腕で全部受けきっていた。

やはり、圧倒的な実力差だ。パンサーには隙というものがなかった。たとえグラウンドでマウントを取られたとしても、パンサーの絶対優位は変わらない。そんな雰囲気が会場を支配していた。

パンサーはエビの体勢で距離をとると、寝たまま蹴りを放ち、間合いをとって立ち上がった。ヨージはマスクを取って、掌底でパンチを放つ。パンサーは今のパンチの軌道を見切ると、左のローリングソバットで合わせた。確実にヨージのレバーを射抜いていた。ヨージは左膝をマットについて屈み込んだ。パンサーはすかさずダッシュして閃光魔術を仕掛ける。ダウンしたヨージを尻目にパンサーはサードロープまで一気にロープを駆け上がると、後方宙返りの体勢で一回転して両脚でヨージの腹に着地した。ムーンサルトフットスタンプが華麗に決まった。

ダウンしたヨージを無理矢理立たすと、パンサーはヨージの右肩をハーフネルソン、左腕をチキンウィングに捉え、一気にスープレックスで頭からマットに放り投げた。そのまま完全なブリッジでホールドの体勢に入る。タイガードラゴンスープレックスが決まった。３カウントがきっちりと入っていた。

もう仕事は終わった。そんなセリフを言いたげに、パンサーはリングを後にしようとした。その時だった。

羽織袴姿の古武士とでも言うべき男が立ち上がり、いきなりリングサイドまで歩いて近寄ると、パンサーに挑戦状を突きつけていた。この男こそが、プロレスを単なるショービジネスと否定し、今まで総合戦にしか出なかった伝説の武術家、西郷詩郎だった。西郷は半年後のムーンアリーナでの決戦要求を突きつけていた。パンサーは無言でその挑戦状を受け取ると、ラウンドガールにも声を掛けずに会場を後にした。

パンサーはマスクを着けたまま会場からタクシーでとある小児病院に向かっていた。その小児病院の個室にパンサーは花束を持って見舞いに駆けつけたのだった。

「やっぱりパンサーは強いね。生中継で見ていたよ。」

「あぁ、ヒロシ君、ワタシは次の試合でもきっと勝ち続ける。だから、注射やメスを怖いと言わないで、頑張って手術に挑戦してくれ。ワタシとの約束だ。」

「今日挑戦状をパンサーにたたきつけた西郷選手って強いのかな？ あの人に勝ってくれると約束してくれたら、ボクも手術を受けることにするよ。」

パンサーは無言で頷くと、病室から外の廊下に出た。そこには少年の祖母と思しき高齢の女性がいた。

「ワタシの今までのファイトマネーは全て貴女名義の口座に振り込みました。これでなん

とかヒロシ君の手術費用も足りるはずです。」

「なんとお礼を言ったらよいものでしょうか。ただ、ヒロシは死のリスクが非常に高い手術を受けるのを怖いと申しておりまして。そこをなんとか貴方に説得していただけると。」

少年は手術をしなければ寿命は確実にあと２年、手術をして完全回復する可能性は二分の一、非常に難易度の高い手術のため、手術中の事故死の確率も同じく二分の一という重い遺伝病に罹っていた。パンサーは自分の少年時代の大恩人から孫を救って欲しいと頼まれ、レスラーとしてデビューし、そのファイトマネーを全額少年の手術費用として渡していたのだった。

病院暮らしが長く続き痩せこけてしまっている少年を思い出しつつ、パンサーはこう呟いた。

「私にも、もう半年なんていう時間は残されていない。しかも相手はあの西郷か。運命の皮肉とはよく言ったものだな。」

普通の地球人が一生かかっても稼ぐことが出来ないような大金をプロレスのリングで稼いでも、肝心の少年は手術を恐れていた。誰でも死は怖い。しかし、手術なしでは２年以内に命の危険が確実に迫ると聞かされてしまったパンサーは、いくら危険な手術であっても、少年に手術の受諾を勧めるしかなかった。老人が先に死に、若者が後に死ぬとは限らないのが世の常。自分の寿命が残っていたら、パンサーは少年に分けてやりたがったが、パープルパンサーとしての彼に残された時間はあと半年すら残されてはいなかった。彼は雨の中、病院を後にすると、マスクを外し、恋人にも見せたことのない素顔を曝け出していた。彫りの深い縄文系の若いジパング人の顔をしていた。男は雨に濡れながら、ただ真っ直ぐ前に向って歩き出した。その行き先には、彼を継ぐ者が待っているはずだ。

第 73 章究極の依頼

　俺はオフの日にミス・ワカマツと居酒屋をはしごして、肩を組みながらほろ酔い気分で街中を闊歩していた。いや、正確にはふらついていた。あと 200 メートルで自宅兼事務所だな、そんなことを考えつつ、俺たちはふらついていた。

　突然、目の前に金髪、ピアス、派手な真紅のＴシャツにジーンズという派手な出で立ちの今風の若い男が歩いてきた。自然と目が向いてしまう彫りの深い特徴的な顔だ。しかし、年齢的にはただの青二才だった。男は俺とミス・ワカマツの間を遮るように立ちふさがると、軽くタックルのように俺の右肩にぶつかってきた。痛い。

「よう、ポルゴ！　ひさしぶり。」

「あぁーん？　テメーみたいな青二才に呼び捨てで呼ばれる筋合いはねーぜ。どこのどいつだ？」

　一瞬、若い男の眼光が光った。よく覚えている険しい目つきだった。

「ポルゴよ、出世したのう。このワシにそんなデカイ口を叩くとはのう。」

「あ、あんた、もしや、もしやミスター東郷では？」

「その通りじゃ。ワシは金星に行って生命の泉に浸かった後、その成分を採取して銀河帝国で分析を依頼した。ワシは生命の泉の成分から作った新薬でここまで若返ったのじゃ。」

その後、俺たちはこの自分らより若い「ミスター東郷」を事務所に迎えて、とっておきの金の泡盛を注ぎながら、事情を聞いた。

金星の生命の泉と銀河帝国の力で若返りに成功したミスター東郷であったが、やはり若返りにも賞味期限があるらしい。期間は半年だった。若返りの新薬を完成させた東郷は自ら実験台となり、地球圏に戻ってきた。問題は、これからだった。

「ワシが地球圏に帰ると１通のメールが来ていた。ワシの青年時代の初恋の人からじゃった。」

齢 60 を過ぎて、嬉しそうにまだ初恋の人に未練があるとでも言わんとするミスター東郷の執念はうざかったが、問題はそのメールの内容だった。

ミスター東郷の初恋の人、つまり我々の流派の先代の当主の娘は源夫人といった。ミスター東郷が修行で地球圏を出ていた際に、先代の源師範は西郷詩郎の手で殺められている。つまり先代の死には東郷にも責任があり、その娘には負い目を感じているという。メールの内容は孫が重い遺伝子病にかかっているが、孫の両親は地球侵略戦争で殺され、現在の住居や財産も戦争で火星人に破壊されてしまった。頼りになる人間は貴方（ ミスター東郷 ）だけだから、相談にのって欲しいとのことだった。ミスター東郷は源夫人からメールをもらうと、東郷の使いと称して紫の豹のマスクを被り、彼女とその孫のヒロシに会いに行った。事情を聞いた彼は、手術代は俺がプロレスで稼ぐから、君は勇気を出して手術を受けろと勧めたのだ。

あくどい試合も含めて、伝説の地球 7 冠ベルトすら手中にした東郷は、ファイトマネーを全て老女の口座に振り込んで、平均的地球人が７回生まれ変わって一生働いたとしても払えないと言われた超高額な手術代を自力で稼いだ。だが、肝心のカネがそろったところで、ヒロシ少年は死亡確率５０％の手術を恐れていた。ヒロシ少年からの提案が、西郷詩郎に勝ってくれたら、自分も勇気を出して手術に挑戦するということだ。

「西郷詩郎との試合は半年後のムーンアリーナだ。ワシはその頃には、若返り薬の薬効が切れ、副作用もあわせて、ただの老人、いや以前以上に老け込んでいるはずだ。そこでだ、ワシは愛弟子のお前に頼みがある。この紫の豹のマスクを着けて、パープルパンサーとして西郷と戦ってほしい。そして、ヤツに勝って欲しいのじゃ。」

　あまりに飛躍したキツ過ぎる話だった。あの地球圏、いや銀河最強の格闘家西郷詩郎とプロレスのリングで、しかも真剣勝負（ シュート ）で、紫の豹として闘えという依頼だった。しかも、この依頼の性質上、敗北や失敗は一切許されなかった。先代の師範の娘の孫の命がかかっていた。これは、あまりに因縁じみた話だった。

「安心しろ、まだ時間は半年ある。ワシはあと数ヶ月間今の若さを保っていられる。それまでに、源流、いや東郷流の古武術の奥義と真髄をお主に全て叩き込んでやる。もちろん、必殺のタイガードラゴンスープレックスもじゃ。しばらく一緒に金星フロンティアに行って修行をしよう！！」

　圧倒的にやる気のミスター東郷を尻目に、また地獄の修行が始まると聞いた俺は、溜息をつかずにはいられなかった。

第 74 章仮面の中の真実

　俺とミスター東郷は金星フロンティアに到着すると、さっそく修行を始めた。

　ミスター東郷はポケットからいつもの豹のマスクを取り出すと、俺に渡した。

「ナンすか？ このマスク。真っ黒っすよ。これじゃあ、ブラックパンサーですよ。」

「まあ、ええからそのマスクを着けてみい。お主がパープルパンサーになれるかのテストじゃて。」

　俺はマスクを被ってみた。相変わらずマスクは黒いままだった。

「いいか、そのまま、全身の気をマックスまで高めるのじゃ。」

　俺は全身の気を一気に最大まで高めた。目の前にある鏡で確認すると、俺のマスクは赤に変色していた。

「大分修行をサボっていたようじゃな。今のお主はパープルパンサーどころか、フツーのパンサーにもなれない。」

　ミスター東郷の話によるとこの豹のマスクの秘密はこうだった。「パープル」パンサーのマスクの色は通常は黒だ。このマスクを着ける人間の気の強さ・波長に応じて７段階に色が変化する。

　最初は、俺が着けた時の赤、次は橙、黄、緑、青、藍、紫の順に気の強さに応じて変色する。世間一般で言う豹のマスクは黄色だった。一番低級の赤のレベルの気しか出せない俺には、フツーのパンサーの色である黄色に到達することすら出来なかったのだ。

「人間の気を使うレベルは大きく分けて４段階に分かれる。素人の次に気を初めて使いこなせるようになった第一段階では、赤、橙。第二段階では、黄色、緑。世間的には達人と呼ばれる第三段階では、青、藍。ワシのような人智を超えたレベルの者は第４段階、つまりこのマスクは紫色として反応する。お主がワシとギャラクシーに参加したときには、まだ第２段階のレベルじゃった。第４段階の西郷に勝てる余地がないと言ったワシの言葉の意味がわかったじゃろう。お主は修行をサボって、彼女と酒ばかり飲んで遊んでいたので、遂にレベル自体が下がって、素人同然の第一段階まで実力が落ちている。豹のマスクの前では、ウソはつけないのう。」

　あまりに絶望的な情報だ。パープルパンサーのマスクにそんな秘密があったとは知らなかった。

「まあいい。ワシがこれから地獄の修行で、お主を第４段階まで覚醒させてやる。とりあえず、そのマスクを被って、せめてもとの第２段階まで実力が戻るまで、野生の銀河ワニとでも遊んでおれ。ワシは金星ホステスとバーで一杯やってくる。じゃあな。」

　あまりに無責任な師匠の言葉だ。

第 75 章究極の絶滅危惧種

　俺はひたすら野生の銀河ワニに戦いを挑んでは、発頸パンチやキックで KO していった。ミスター東郷は、俺が倒したワニの肉を冷凍しては、刺身やステーキに調理して、手当たりしだい泡盛のつまみにして食べていった。

「そろそろ奥さんや娘さんに連絡をしておきますか？ ご家族も地球で心配されていることでしょう。」

「いや、その必要はない！ ワシは既に家族に健在であるとメールを送っている。もちろんどこの惑星にいるかは、もちろん教えてはいないがな。」

　この酒・タバコ・女好きの３点そろった爺さんが、俺よりも若返ることに成功しているという救いようのない事実に怒りが思わずこみ上げた。古武術の師匠である上に、俺より若いという時点で、こちらに勝ち目はなかった。はやく若返り薬の効力が切れて、もとのジジイにもどってもらいたかった。いや、まだ決して師匠はボケてはいなかった。

「ポルゴよ。どうやら金星での修行で、第二段階までは覚醒することに成功したのだな。お主のマスクも、今はやっと黄色に輝いている。さて、では銀河ワニに続く、ワシらのスパーリング・パートナーを紹介しよう。お主は、まだ今のワシとやるには実力が低すぎる。まずはこのヒョウちゃんとでも勝負するのだな。」

　ミスター東郷がヒョウちゃんといって連れてきた相手。あろうことか、金星フロンティアにおける究極の絶滅危惧種、パープルパンサー（ 金星豹 ）だった。ミスター東郷がなぜリングネームをパープルパンサーにしていたかが今よくわかった。パープルパンサーは金星で銀河ワニの天敵としてその牙や爪で猛威を振るっていたが、銀河ワニの囲い込み政策、つまり柵で囲まれ管理された銀河ワニ牧場が金星フロンティアで増加するに連れ、彼らの絶滅が危惧されるようになった。

「なーに、こんなのはただのネコと同じよ。もちろん猫の親戚だから、平気で人間にじゃれるつもりで、噛んだり、嘗めたり、引っかいたりする。ポルゴよ、くれぐれも言っておくが、パープルパンサーは太陽系条約で指定された絶滅危惧種だ。専守防衛に徹するのじゃぞ。」

　ミスター東郷は言い終わると、パープルパンサーの鎖を解き放った。親愛の情（ ？ ）を浮かべて、俺に向って飛び掛ってくる野生のパープルパンサー。俺は猛然とダッシュして逃げた。金星における百獣の王に勝てるほど、俺の脚は速くはない。ついに追いつかれた。じゃれるつもりで引っかいてくるが、相手は人間の倍の大きさだった。必死にかわす。こんどは俺の右腕を嘗めてきた。悪寒が走る。俺の頭にヒョウちゃんが噛み付こうとしてきたところで、俺は必死に両腕でヒョウちゃんのアゴを開いて、どうかそれだけはと哀願した。絶対、コイツ俺を食うつもりだ！ 俺はそう思った。なおも親愛の情を浮かべて、俺の頭に噛み付こうとする紫の金星ヒョウ。絶体絶命の危機だ。

パン、パン！

　ミスター東郷は両手を叩いて音を立てると、こう言った。

「もういいぞ。ヒョウちゃん。今日のおやつに、銀河ワニのおいしいヒレ肉をやろう。こっちにおいで。」

眼の色を変えて、喉をごろごろと鳴らしながら、ミスター東郷のほうに駆け寄る金星ヒョウだった。

「さすがに冗談がきつ過ぎたようじゃの。ポルゴよ、済まなかった。まだワシもあと二ヶ月はこの若さを保っていられると思う。その間は、ワシがレベルを２段階落として、お主のスパーリング・パートナーを務めよう。最後の仕上げは、適任者を用意してある。さてと、その仮面を脱いで、まずはパンチンググローブを付けるんじゃな。まずは打撃の基本の型の確認からゆこう。ワシがミットでお主の技を受ける。好きなように打って来い！！」

俺は構えて真剣な表情になると、心を落ち着けた上で、ひたすら無心にミスター東郷のミットを打っていった。この時間が止まったような感覚。これは俺たち師弟に共有される濃い修行の時間からのみ味わえるものだ。ただ無心にパンチ、キックを打つ。それだけで、心が研ぎ澄まされていった。さっきの金星豹への恐怖も徐々に薄れていった。

これで晩飯に出るメインディッシュが銀河ワニの肉じゃなかったら、もしミス・ワカマツが金星まで一緒に着いて来てくれたら、全てが幸福といえたかもしれない。早くジパングに帰って、豆腐と彼女の手作りミソスープが食べたかったが、俺たちの置かれた状況はそこまで甘くはなかった。何しろ、あの西郷詩郎を相手に真剣勝負（ シュート ）を演じて、しかも勝たねばならないのだから。

やり直しが利かない一度限りの人生だけに、失敗は許されないのが、この賭けだ。

第 76 章究極の必殺技

俺はミスター東郷、いや伝説のパープルパンサーの龍虎ＳＨを絶対に信じてはいなかった。あれは、ブレーンバスターと同じでプロレスの約束事の範囲内で成立する必殺技だと思っていた。

今日の打撃練習が終わり、組み技の時間に入ると、ミスター東郷はこう言った。

「お主にそろそろパープルパンサーの必殺技、タイガードラゴンスープレックスを伝授しよう。今までのワシとの修行の成果で、お主も第三段階まで覚醒したようじゃしな。」

言い終わると、ミスター東郷は一瞬で俺のバックを取り、俺の右腕をハーフネルソン、左腕をチキンウィングに捉えた。

どうせ、右肘で発頸かまして外せばいい。俺はそう思っていた。

動けない。ミスター東郷はクラッチを極めた瞬間、気で俺の両腕、いや上半身の動きを完全にブロックしていた。

そのままミスター東郷は一気に反り返り、強力な龍虎ＳＨが決まった。俺は受身も取れずに、そのまま気絶してしまった。

「どうやら眼が醒めたようじゃな。お主、ワシのタイガードラゴンスープレックスを嘗めてかかっていたようじゃの。あと、若さを保ったワシに残された時間は一ヶ月じゃ。それまでに、気を使って相手の体の動きを封じるという技術をお主には覚えてもらおう。それだけじゃの、とりあえず今のワシがお主にしてやれることは。」

はっきり言ってこの金星での修行、いつものように何もいいことはなかった。金星にいる女は俺の好みではなかったし、何しろこの惑星には修行目的で来ていた。来る日も来る日も修行。俺は夢の中でもあのミスター東郷の鬼神の表情にうなされていた。どこまで気のレベルが上がったかと思い、毎日豹の仮面を被って鏡を見ていたが、どんなに頑張っても豹のマスクは青色にしか輝かなかった。第三段階の下のレベルだった。まさにブルーな日々だった。

この均衡状態が打ち破られるあの日が来るとは、俺はまだ思っても見なかった。

第 77 章 切り札

　もうそろそろミスター東郷の若返り薬の効き目も切れるはずだ。これでどうやら俺も解放される。例の試合まであと 2 ヶ月を切ったな。そんなことを俺は考えながら、ひたすらミスター東郷の構えるミットに強烈な蹴りを放っていた。

「悪いがポルゴ、ワシはしばらく地球圏に戻ることにする。ワシが若さを保っていられるのも、あと２週間程度じゃろう。最後に地球の若いギャルをナンパしに行きたい。ついでといってはなんだが、次のスパーリング・パートナーを連れてくるつもりじゃ。その間はスマンが自主トレをしてもらうことにする。くれぐれも手を抜かずやり抜くことじゃ。」

　俺は思わず心の中で、やった！ と叫んでいた。師匠が女好きだったことが不幸中の幸いだった。ちなみにこの師匠は酔拳までマスターしているところが余計に手に負えなかった。まあ、これはかなり蛇足な情報だったな。

「そうですか、残念ですな。私は若返った全盛期の師匠とぜひ一度真剣勝負をしてみたいと思っていました。次の練習相手が誰になるかはわかりませんが、期待してお待ちしております。」

「そうか、ワシとやりたいか？ では、その望み、今叶えて進ぜよう。ワシにそのパープルパンサーのマスクを寄越せ。」

　ミスター東郷は真っ黒なヒョウの仮面を被った。ミスター東郷の肌にマスクが触れた瞬間、一気にマスクは紫色、つまりパープルパンサーのマスクに変化した。

「お主にはまだワシの本気を見せていなかったな。遠慮せずに掛かって来い。」

　ミスター東郷は紫の豹の仮面を付けたまま構えた。隙が全くない。俺は拳をアゴの前に構えた瞬間、集中力のボルテージを限界まで上昇させた。この相手、一瞬で相手に致命傷を与えることが出来る圧倒的な強さを持っている。俺は心を決めて、ストレート気味の左のジャブでミスター東郷に殴りかかる。

　ミスター東郷は今のパンチをよける事すらしなかった。きっちり右の頬でパンチを受けると、カウンターの左で俺のアゴを正確に打ち抜いていた。なおも踏み込んで右のフックで俺のこめかみを打ち抜くミスター東郷。今度は左の中段アッパーで俺の鳩尾を打ち抜いていた。

　まるで俺は人間サンドバックだった。仕方なくボディタックルをかまし、間合いを詰める。ミスター東郷は俺の体をそのままブレーンバスターの体勢で持ち上げると、捻りを加えて一気に垂直落下させた。そのまま上になってミスター東郷は数発マウントパンチをかますと、俺の右腕を逆十字に捉え、一気に極めた。俺はミスター東郷の体を二回叩いて、ギブアップの意思表示をした。

「なぜ、古武術の技を一つも使わずにワシが戦っていたと思っていることじゃろうな。技なんてものは、ほんとはどうでもいいんじゃ。問題は心と心のぶつかり合いじゃ。今のワシには若さと勢いがある。ただやりたいようにプロレス技を連発するだけでも、一方的に勝負を決めることが出来る。お主にはあと２ヶ月弱で、今のワシを越えてもらうことになるだろうな。では、さらばじゃ。」

　そう言い残すと、ミスター東郷は俺にパープルパンサーのマスクを残して去っていった。やっと解放されたという思いが走る。しかし、修行を十分積んできたはずの俺が、若い時の姿の師匠に勝てなかったという事実にシコリが残った。俺にはまだまだ足りないものがあるはずだったが、それが何かはわからなかった。道を究めた者とそうでない者の差は歴然だった。でも、そんな俺にもきっと明日があるはずだった。

　それから数週間後、俺が借りている金星のホテルの一室に一人の若い女とよぼよぼの老人が訪ねて来た。老人の方は、杖をついてやっとのことで歩いている。若い女はショート気味のウェーブがかった銀髪で、完璧に化粧をこなしていた。

ジイサンのほうはたぶんミスター東郷だな。いや、絶対にそうだ。若い女を連れてきている時点で確定だ。しかし、いやに老け込んだな。実年齢より 10 歳は老けている。さすがに若返り薬の副作用はキツイな。俺はそんなことを考えていた。

「おっス、ポルゴ！ 元気だった？」

「あ、アンタ、マリアさんか？」

「ポルゴよ。次のスパーリング・パートナーをこのマリア・ハロルドさんにお願いすることにした。さっそく外でスパーリングに入ろう。」

あまりに大人びた雰囲気の化粧と服装で、俺はこの女がかつてのタッグパートナー、マリア・ハロルドであることをすぐには見抜けなかった。ニコッとあどけない笑顔をされると、こちらも微笑み返してしまうと同時に、この古武術の達人である娘が、まだ高校生であるという嫌な事実をも思い出してしまった。自分よりケンカが強いガキに敬語を使ってしまう自分が許せなかった。向うは、俺に対してタメ語だ。

俺はさっそくこのマリアさんの実力を試そうと思った。こっちは反吐を吐くほどきつい修行をこなしていた。まだ高校生のマリアさんは、学生仲間とコンパやカラオケに明け暮れ、修行をサボっていただろうと俺は内心読んでいた。

「マリアさん、とりあえずこのマスク着けて見て、ねっ。」

「あぁ、例のパープルパンサーのマスクね。いいわ。」

マリアさんが黒いマスクを被った瞬間、ヒョウの仮面は黄色に変化した。もっともあ

りふれている色だ。この色のレベルは第二段階の下だった。もはや第三段階に到達している俺の気のレベルより明らかに格下だ。

「たしかあなたのレベルは第三段階だったわよね。ゴメン、今のはただのギャグ、今から本気を出すわ。」

　マリアさんが言い終えると、ヒョウの仮面は一気に紫に変色した。やはりこの女、武の道を極めていやがる。俺は思わず冷や汗をかいてしまった。

「事情が事情だし、本当は出来れば私がパープルパンサーの役割を変わってあげたいけどね。問題は私のスタイルよね。このスタイルだと、すぐ女だってばれちゃう。パンサーの中身がすり替わっているってね。晒しでも巻いて出ようかしら。でも、ヒップも体つきもセクシーな女そのものだしね。東郷さんの代わりは、ポルゴ、あなたじゃないと勤まらないわ。これから約一ヶ月、一緒に私と修行しましょう。もちろん、手加減はするつもりはないわ。」

「ワシは今回の修行の全てをマリアさんに一任することにした。もうワシが若返ることは金輪際望めないが、しばらく生命の泉で一服でもしていようかの。ポルゴよ、マリアさんをワシだと思って、がっちり稽古を付けてもらえ。お主に、西郷との一戦の全てを託す。さらばじゃ。」

　もとの老人、いやそれ以上に老け込んだミスター東郷が温泉療養に行くと、今回の切り札であるマリアさんとの壮絶な修行が始まった。「手加減はするつもりはない」というマリアさんの言葉を俺は身を持って思い知らされることになる。

第 78 章 嵐

西郷詩郎との試合をあと一ヶ月後に控えて、俺とマリアさんの修行が始まった。俺は青色のレベルにしか反応してくれない「パープル」パンサーのマスクを着けて、マリアさんとスパーリングをこなしていた。

「仕方ないわね。引き立て稽古をしてあげる。無理な反撃は絶対にしないから、安心して攻めてきて。」

俺は完全なシュートスタイルでマリアさんに蹴りかかる。マリアさんは完璧に俺のキックを一発一発ガードしている。相手がガードを固めたスキをついてバックを取ると、すかさず俺は高角度ジャーマンを決めた。その後、グラウンドに移行した俺は、左腕をマリアさんの首に上から巻きつけ、右腕でマリアさんの右腕を制した。ドラゴンスリーパーの体勢で、今度は左足をマリアさんの胴に掛ける。ドランゴンスリーパーとグラウンドコブラの合わせ技、グラウンド冬木スペシャルが極まった。ギブアップが取れるかも。

甘い思いがよぎる。

マリアさんは空いている左の拳に全身の気を込めると、パンチ一発で今の複合関節技を外した。いや、正確には今の強烈なパンチで俺が一瞬、全身の力を失ったという表現が正しかった。そのまま立ち上がり、パンチでダウンした俺を見下げるマリア・ハロルド。

「ダメダメじゃん。ポルゴ、いやあなたは今だけは夢のヒーロー、パープルパンサーなんだから、もっと自由かつ夢のある闘い方をしないとね。ちょっとそのマスク、私に貸してみて。見本を見せてあげるから。」

俺から半ば強引にヒョウの仮面を奪うと、マリア・ハロルドは正真正銘の紫の豹に変身した。俺は気をギリギリまで高めて、最大限に警戒して構えていた。

目の前の紫の豹はいきなり俺にローリングソバットを叩き込んできた。レバーを打ち抜かれ、ひるんだところで、サマーソルトキックで俺からダウンを奪う。ダウンしたところをムーンサルトフットスタンプで踏みつける。俺はひたすら横に転がってエスケープした。なおも攻撃の手を緩めない紫の豹は、ヒールホールドで俺を攻める。空いている方の足で必死に蹴りつけて、いまの技を外す。立ち上がろうとした俺の両腕をマリアさ

んはクラッチすると、俺を真ッ逆さまに抱え上げ、ジャンピング・パンサードライバーに捉える。

　脳天をまともに打った俺をそのままフォールすると、自分でワン・ツー・スリーと言って、勝手に決着を着けてしまった。そのまま伸びてしまう俺。

「しょうがないわね。起きて。これじゃあ、当分西郷詩郎にはかないそうにないわね。今のあなたには何が足りないのかしら。もちろん覇気が足りないのは見え見えだけどね。どうしたら後一ヶ月であの西郷さんに勝てるレベルまでいけるのだろうかしら。やっぱりスモールパッケージホールドとか丸め込み系の技でスリーカウント狙うしかないのかしらね。でも、それじゃあ、正義の戦士の名が廃るわね。」

「いや、俺はやるよ。この一ヶ月だけは、マリアさん、あなたについて行く。師匠の初恋の人の孫を死なせるわけにはゆかないしな。」

「そう、じゃあ、ワタシが中学生の時まで父から受けた壮絶に厳しい修行をあなたにも適用するわ。本当に覚悟はいいわね。まだ、ワタシの本気をあなたに見せたことはなかったわ。本気のワタシと今からスパーリングをしましょう。ワタシから一度でもダウンが奪えたら、休憩タイムにしてあげるわ。一度でもね。」

　マスクを脱ぎ捨てたマリアさんの気が爆発的に上がった。もはや人間の域を超えている気のレベルだった。銀色の髪がそのまま逆立つと、全身のオーラが体の周りに炎のように具現化している。俺は一瞬、プレッシャーで金縛りにあった。

　相手の壮絶なまでの強さに震える全身を抑えて、一歩、また一歩踏み込む。思い切り良く右のストレートを放った。当たった！ そう思った瞬間、マリアさんは俺の鼻の先にいた。そのまま強烈な右アッパーでアゴを打ちぬかれる俺。後ろに倒れそうになった俺の胸元をマリアさんは掴んだ。

「パンチ一発でダウンさせてあなたを休ませるほど、ワタシは甘くないわ。」

そう言い終えると、マリアさんは強烈な右肘で俺のコメカミを打ち抜いていた。すかさず背負い投げで俺を投げるマリア・ハロルド。俺はやられるがままに、全くなすすべがなかった。

マウントポジションからマリアさんのパンチが飛ぶ。左膝を俺の喉元に押し当て、俺の右腕を極めると、マリアさんはストラングルホールド・ネオを極めた。バタついて逃れようとする俺。

意識が遠のく。数分後、俺は強烈な張り手で叩き起こされた。

「落ちた位で練習を終わらせるほど、ワタシは甘くないわ。さあ、立ち上がって。ワタシからダウンがとれるようになるまでは、絶対にあなたを休ませないわ。たとえ、一週間かかったとしてもね。」

俺はめげずに何度でも立ち上がった。マリアさんのスネに強烈な足払いローキックをお見舞いする。びくともしない。なおも同じところを狙って蹴る俺。マリアさんは軽く右足を上げて、俺の足払いをかわすと、ツバメ返しの要領で俺の左足を刈り払った。ダウンした俺の頭を強烈なマリア・ハロルドのストンピングが襲った。

すかさず横に寝転がってエスケープする。こんな時に「武器」でもあれば、一気に形勢逆転が出来るのにな。そんな思いがひた走る。気を取り直して、ハンドスプリングで俺は勢いよく立ち上がった。

「ダウンさせれば、いいんだろ。わかったよ、ブス。もう嫁に行けない顔にしてやるぜ。」

マリアは逆上することもなく、冷静な表情を保っている。

俺は全身の気を一気に左の掌に具現化すると、マリア・ハロルドに向けて、強烈な気弾を放った。そのままパワー全開で強引に押し切る。マリアの体が俺の蒼い気で包まれる。

そのまま、燃えてしまえ。

　背後に強烈な気の気配を感じた。次の瞬間、俺は水面蹴りでダウンを奪われていた。そのまま、喉元を踵で踏みつけられる。息をすることすら適わなかった。

「甘いわね。こっちは瞬間移動も出来るのよ。よくもこの天下一の美人さまをブスよばわりしたわね。そのまま落ちてもらうわ。」

　マリアさんは俺の喉に左膝をあてがい、ギロチンチョークの要領で一気に極めた。たまらず俺は落ちてしまった。

「全くお話にならないわね。今日はもう休んでいいわ。」

マリアさんは俺に活を入れると、そう言い残し、去っていった。

嵐のような一日がやっと終わった。

第 79 章 冥王拳

　マリアさんは、一向に格闘家としての一線を越えることが出来ない俺に、愛想を尽かしているようだ。まだまだ第四段階の気のレベルには到達できなかった。西郷との試合は数週間後に迫っていた。油断は出来ない。

「しょうがないわね。あなたには古武術の才能もプロレスの才能も、どうやら全くないみたいね。今までこの業界でやってこれたことがかえって疑問ね。前回のギャラクシーもワタシの足を引っ張っただけというのが実情みたいね。でも、そんなダメ人間のあなたにも向いている禁断の格闘術があるわ。私たちの一族の流派、ハロルド流とは明らかに異なるけどね。」

「何だ？　その格闘術ってのは？」

「あまり胸を張って勧められるようなものじゃないけど、冥王拳っていう強力な拳法、いや格闘術があるわ。自分の潜在能力以上の気を、一時的に引き出して闘うの。もちろん、そのツケは後になって全部自分の身体に返ってくるわ。この冥王拳の使い手は、今まで何人も自らの限界を越えた気を引き出した所為で、あの世行きになってきたわ。この禁断の拳法を編み出した創始者は死神みたいに危険な存在という謂れで、冥王拳と呼ばれているの。この冥王拳をマスターすれば、西郷詩郎に勝つことは出来なくても、決して負けることはないわ。今からその型をあなたに教えるわね。」

　マリアさんは右手で空を切った。その右腕の先には強烈な気の剣が具現化されていた。

「この気のオーラで作った剣は、死神が使うという伝説の冥王剣をモチーフにしているわ。この剣でワタシがあなたを攻撃するから、とりあえず全身の気を最大まで引き出して、避けるなり、防御するなりしてみて。きっと自然に冥王拳の型が身につくはずよ。」

　マリアさんは強大な気の剣で俺を切りつけてきた。俺は全身の気を最大限に引き出して、今の一撃をかわした。今度は脳天目掛けて剣が降ってきた。俺は真剣白羽取りで今の攻撃を捉えきった。マリアさんは気の剣にパワーを送り、巨大化させて俺の両手を振りほどいた。巨大化させた剣で強引に俺を切りつけてくる。全部スレスレでかわした。

　マリアさんの気の剣が巨大化するに伴い、俺の体の気も剣に合わせるように高まってゆく。相手のスピードは異常なまでに速い。剣の動きになれるにつれ、俺の体の動き自体も相手に合わせるように速まってゆく。

　マリアさんは右手に気の剣を持ったまま、今度は左手で逆水平チョップのように空を切った。今度は左手にも剣が握られている。二刀流だ。もはや俺も素手では相手に対応できなくなった。両の掌の先に、俺は気で作ったオーラを纏い、盾のように用いることにした。

「矛盾という諺があるわね。あなたの盾とワタシの剣、どちらが強いのかしら？」

　マリアさんは容赦なく２本の剣で俺に切りかかる。俺は両手の盾でガードする。マリアさんが全身の気を最大まで高めて、具現化した気を人間の身長くらいの長さまで拡張した。

　俺は相手の気に合わせて盾の大きさを倍増させた。

　ただ一方的に受けるだけでは、いずれ相手の力が勝つことはわかりきっていた。俺は両手の盾の形を、やはり剣の形に変えると、具現化した２本の剣でマリアさんを斬りつけた。マリアさんは片方の剣で俺の両方の剣を受けると、空いたもう一方の剣で俺の喉元を突き掛かった。俺はサイドステップで今の突きをかわすと、気を具現化して武器に変える事は止め、拳の先に全身のオーラを集めて強烈な右ストレートを放った。今の渾身の一撃で、ついにマリアさんは膝から崩れ落ちた。

「どうやら、あなたにも冥王拳は使えるみたいね。あなたは今、自分の潜在能力 1.5 倍の力で闘っていたわ。そのツケはたぶん、あと一週間寝込むとかそういうオチになると思うけど、あなたはこの冥王拳を応用してあの西郷に挑戦する以外ないわ。あなたが冥王拳を使っている時は、たぶん第四段階に到達していたと思うわ。自分の潜在能力を越えた力を引き出す禁断の拳法が冥王拳だからね。今のパンチは、確かに効いたわ。では、しばらくやすませてもらうわ。」

第 80 章 無言

運命の日がやってきた。銀河最強と謳われる伝説の格闘家西郷詩郎とパープルパンサーの試合が今日行われる。ルールはフォールありの３カウントルールだった。５秒だったら、どんな反則技を使っても許されるというプロレス独特の付帯条件もついていた。３カウント、ギブアップ、ＫＯ、レフリーストップのみで決着はつく。

完全決着ルールだ。

まず、若返り薬の副作用で老け込んでしまったミスター東郷が最大限の若作りの声を出してヒロシ少年に電話でこう呼びかけた。

「ヒロシ君、俺は絶対にあの西郷を倒す！ だから君も勇気を出して、手術を受ける決断をしてくれ。人は皆生きるために一生懸命闘ってゆくんだ。俺の今日の試合を見て、勇気を出してくれ！」

電話の声の主が替え玉を使って西郷詩郎に挑むという皮肉な事実を俺は思い出していた。

その替え玉がミスター東郷の弟子である俺だった。やっと半年の修行で俺の気も無事第四段階に到達し、パープルパンサーになることができた。ただ、西郷を倒すためには、寿命を削って相手を倒すという禁断の冥王拳のお世話になる可能性が高かった。いずれにせよ、かつて師匠に「お主は西郷に勝てる器ではない」と言われた汚名と屈辱を返上する最大のチャンスだった。

俺たち師弟、それにセコンドのマリアさんはここムーンアリーナがある月に数日前から入っていた。地球の月（ ルナ ）でミス・ワカマツと合流することが出来た。久しぶりに会った彼女は、また一段と魅力的に見えた。

だが、俺は生きるか死ぬかの格闘技の試合の前に、異性にうつつを抜かすほど、ヤワじゃなかった。冥王拳を使うことを考えている以上、死を覚悟する必要があった。

控え室入りすると俺はさっそく紫のパンタロン、紫のシューズ、オープンフィンガーを身に付け、最後にパープルパンサーのマスクを被った。真っ黒だった豹の仮面は、俺が身に付けた瞬間、見事に紫色に変化した。

前座の試合が始まった。一試合、一試合と進行し、徐々にメインイベントが近づいてくる。俺はだんだん緊張してきたが、控え室にミス・ワカマツがいる以上、己の弱さをさらけ出すことは出来なかった。男は自分が愛する女の前では、絶対に弱みをさらけ出したくないという願望を持っている。

ついにメインイベントがやってきた。まず前地球統一王者（ 返上済み ）としてパープルパンサーが赤コーナーにコールされる。入場テーマの「哀しみの孤豹」と共に、俺はダッシュで入場した。セコンドにはマリア・ハロルド、リングサイドにはミスター東郷とミス・ワカマツが陣取っていた。次に青コーナーに西郷詩郎がコールされる。一瞬、会場の照明が落とされ暗転すると、スモークと共に純白の柔道着に黒帯を締めた格闘家、西郷詩郎が入場する。入場テーマは「津軽三味線冬景色」だった。西郷らしい渋い選曲だ。

レフリーはボディチェックが終わると、観客にわからないように、右の人差し指と左の人差し指でチャンバラの合図をした。この試合は、脚本なしの真剣勝負（ シュート ）ということらしい。西郷の眼はいつになく真剣で、完全に獲物を狙う肉食獣の目をしていた。ゴングが鳴る！ 俺は一気に拳をアゴの元に構え、前後に軽くステップを踏む。西郷はゴングと同時に強烈なタックルに来た。迷わず両足を引いて、今のタックルを潰す。そのままスリーパーを狙った。西郷は軽く俺の腹にパンチをして、クリーンブレークをした。

両者は間合いを離して、警戒の構えを取っていた。西郷はふとリングサイドに眼をやると老け込んだミスター東郷の姿を発見した。また俺の方に視線を戻すと、いかにもそうだったのかという眼をしやがった。やはり奴は初代パープルパンサーの正体が若返ったミスター東郷であることを見抜き、かつては八百長と見下していたプロレスのリングでパープルパンサーに挑戦状を突きつけていたらしい。そして、今のファーストコンタクトで、二代目のパープルパンサーが東郷の弟子、つまり俺であることを見抜いていた。

俺はパープルパンサーとして、強烈なローリングソバットを西郷にお見舞いした。右のミドル、左のハイで、強引に西郷をダウンさせると、そのまま情け容赦なくダウンした西郷をストンピングで踏みつけた。西郷は下から俺の膝を狙って関節蹴りを放つと、間合いを開けた上で立ち上がった。

「今度はワタシから行かせてもらおう！」

西郷は掌底気味のパンチのコンビネーションで俺をコーナーまで追い詰めた。俺が押されたのを返そうとして前に出た瞬間、西郷はその力を利用して、十八番の一本背負い崩れの山嵐で俺を投げ放った。なおも逆十字でギブアップを狙う西郷。俺は投げられながら、相手の次の行動を読んで、必死に両手を組み合わせて逆十字をブロックすると、西郷が腕に絡みついたまま立ち上がり、パワーボムの体勢に入った。西郷は咄嗟に両足のクロスを解いて、後方に下がった。

今の攻防のレベルの高さに気付いた観客から一斉にどよめきがあがる。西郷も惜しみなく必殺の大技、山嵐を出していたし、俺も一切の手加減をしなかった。

こちらもそろそろ本気を出す番だった。このレベルの相手を倒すには腕の一本くらい諦めてかからねばなるまい。単に師匠からの依頼というだけでなく、俺のプライドから言っても、西郷相手にギブアップすることは許されなかった。

俺はジャブを打ちながら、右にステップした。西郷は足払い気味のスネを狙ったローキックを放つ。俺はすかさずツバメ返しにゆくと見せかけて、左ミドルを打ち込んだ。西郷はセオリーどおり、俺のミドルを右のスネを上げてブロックした。今度は引っ掛ける感じで右のフックを放ち、俺は右サイドに回った。西郷はカウンターの左の裏拳を放った。今の強烈な裏拳を読んでいた俺は、そのままかわして西郷のバックを取る。やや強引に相手の右腕をハーフネルソン、左腕をチキンウィングに捉えると、一気に西郷の上半身を気で制した。そのまま高角度アーチを描いて、必殺のタイガードラゴンスープレックスを決める。俺はここでホールドせずに、そのまま体を右に捻って西郷のマウントを取った。

情け容赦なくマウントポジションから、西郷の顔面に右の肘をしたたかに打ちつけ、連打した。西郷は目を見開いたまま、今の攻撃を食らっていた。次の瞬間、西郷は強烈なブリッジで俺のマウントを跳ね除けると、俺の右腕を完璧な逆十字に捕らえていた。何とか両足で踏ん張り、立ち上がろうとする俺。

西郷は容赦なく脚のクラッチを絞り上げている。俺はこの瞬間、マリアさんに習った禁断の冥王拳を使って、強引に体の潜在能力以上の力を使い一気に立ち上がった。なおも逆十字で俺の右腕を絞り続ける西郷詩郎。俺は片腕の力だけで西郷を真ッ逆さまに抱え上げると、そのままジャンピングパワーボムで西郷をマットに頭から叩きつけた。俺の右腕が嫌な音を立てて、折れてしまった。腕の痛みを我慢して、そのままフォールの体勢に入った。西郷は必死にフォールを返そうともがいたが、俺は残された最後の力を使って、完全に押さえきった。ワン・ツー・スリー。ついにスリーカウントが入った。

俺はダウンしている西郷に一礼すると、無言でリングを去った。

控え室に入るとミスター東郷が杖をつきながらよたよたと追いかけてきた。コールドスプレーで俺の右肘を冷やしながら、こう語りかけてきた。

「済まぬなポルゴ。これでワシの面子も立つ。お主もついにワシを完全に越えることに成功したのじゃな。」

俺は無言で今の話を聞いていた。自由な左手でヒョウの仮面を外した。控え室のドアの前で立ちすくんでいるミス・ワカマツに声を掛けると、俺はこう言った。

「悪い、ミス・ワカマツ、どうやら右肘を折っちまったらしい。応急処置を頼む。」

ルールに救われた形だった。スリーカウントフォールがなければ、俺は右腕を折られたまま、圧倒的に不利な状態で闘わねばならかった。もちろん、スリーカウントルールが前提で、右腕をエサにフォールをいただくという作戦を取ったのだが。

あの冥王拳を使ってしまった以上、引き換えに莫大な肉体的ダメージが後で俺の体に

降りかかるだろう。俺はミス・ワカマツの頬に軽くキスをすると、俺にはアンタしかいないと言って、返事も聞かずに控え室を後にした。

安い月のビジネスホテルのベッドで、一人で回復するまで潜伏するつもりだ。

数週間後、俺はひさしぶりに意識が回復して目覚めた。こうなることは予想して、前払いでムーンホテルを予約してあった。既に地球圏に帰っているミスター東郷に連絡を取ると、ヒロシ少年が手術を受け、無事成功した旨が伝えられた。それは良かったですと言って、俺は回線を切った。

まだ月に残っていたミス・ワカマツに俺は会いに行った。そろそろ返事が聞きたいと言うと、彼女は何の話と聞き返してきた。

「だから、プロポーズのだよ。ポルゴ夫人になってくれよ。」

「いいわ。その話をずっと待っていたわ。」

俺たちは地球圏に帰るとジパングにあるワカマツの墓に報告に行った。これで全部の決着が着いたのかもしれない。俺たちはクリスチャンではなかったが、東郷夫妻を仲人代わりにして、教会で式を挙げた。

サイバー探偵という職業は、あまり儲からないし、リスクは大きかった。火星人たちは相変わらず地球圏の完全支配を目論んでいるようだが、それを邪魔するのも俺たち地球のサイバー探偵の仕事だった。闇から闇に事件は葬られてゆく。名実共にユメミをパートナーに迎えた以上、俺は自分の信念に従いつつも、カネを稼いで探偵業を、そして家庭を営んでゆくしかなかった。

いつかは必ず終わるとわかっている人生も、生きてみればそれなりに楽しいこともあるのかもしれなかった。仕事上のパートナーを人生のパートナーに迎えてしまった手前、

24時間、私生活もビジネスも関係なく、俺たちは新婚さん状態だった。幸せは自分の力でつかむものかもしれない、そんなことを考えながら、俺は妻のユメミの手料理を食べていた。

　ある秋の夕暮れの出来事だ。

第九部　月世界教徒の反乱

第 81 章沈黙の月世界教徒

なぜ世の中で戦争が起こるのか、俺は未だにわからなかった。いや、本当はわかっている。それで儲かる奴らがいるからだ。あるいは、感情の問題か。だったらなぜ、それをなくす方法がない？

旧火星帝国は崩壊し、俺たちも無事結婚に漕ぎ着け、全てが上手くいゆく、はずだった。

地球圏は未曾有の繁栄を謳歌し、経済成長率も全地域で平均４％を超えていた。この好景気であれば、危ない仕事を引き受けずとも、ビジネスは成立する。確かに甘い読みだった。人類は地球を出てから、まず月に定住した。新しい世界を開拓・冒険の旅に出る。宇宙生活は、そんなロマンから始まったのではなかった。数世紀前、地球圏で貧困と飢餓の問題が解決せず、不平等を暴力で解決しようと訴える過激派テロリスト集団がいた。その生き残りや支持者達が地球を追い出される形で移住したのが、かつての月面人たちだ。

月面人たちは裏社会ビジネスや金融を一手に握り、地球圏の完全掌握を企てていた。月面人たちは赤い三日月を旗印として月世界教という宗教を興した。かつて地球圏で異教や邪教と呼ばれ、正統派から蔑まれてきたあらゆる異端派宗教の要素を取り込み、麻薬や人身売買で得た豊富な資金を元に、あくどいビジネスをしていたのが、月面人だ。月面人陰謀説が何度この地球圏を揺るがしたことか。

俺はこの月世界教の胡散臭さを痛いほどよく知っていた。俺が生まれた時には月世界（ ルナ ）は水爆ミサイルのおかげでもう廃墟となっていたが、カレッジの同級生が隠れ月世界教徒だった。彼女達は豚でも牛でも鶏でもなく、緑色の野菜を食べないということを信条にしていた。

いま地球圏のあちこちで自爆テロが行われていた。太陽系帝国が崩壊し、新秩序が叫ばれている今こそが、月世界復活をかけた独立戦争を仕掛ける最大のチャンスだ。

アイウォッチの画面で無残な焼け跡、廃墟の動画を眺めながら、俺は溜息をついていた。

―救えないな。

月面人たちの容姿は俺たち地球人と全く変わらなかった。いくら一部に過激なテロリストがいるとは言え、今は同じ地球上で生活する同じ人間である彼らを始末することも、これまた無理な話だった。それは考えただけでも人倫に反することだ。何も人種差別や宗教問題が根で連合政府は月世界を攻撃したのではない。むしろ、防衛上の要所である地球の月（ ルナ ）を火星人の侵略から守るために、ミサイルを放ったのだ。

いずれにせよ、月世界教徒の問題を放置したままでは、いずれ俺たちの子孫にまで災いが降り掛かることは火を見るよりも明らかだった。こうして家庭を持った今、俺も少し守りに入っているのかもしれない。相変わらず株の投機に熱中している妻を尻目に、俺はアイウォッチで奴らのネットワークに強制検索を掛け始めた。頭（ かしら ）を脅したところで根をあげるような連中ではないことはわかっていた。あるいはネットワークを分散させて、頭という存在を持たない連中なのかもしれなかった。そんなことを考えながら、地下の俺たちの居住スペースを出て、地表に立ってみた。

不気味なくらい赤く光る三日月が煌々と夜空を照らしていた。数千年いや数億年と人類を照らしてきたであろう三日月がそこにはあった。案外問題の根は深いのかもしれない。そんなことを思いつつ、俺はこれから始まるであろう闘いに備えて、シュッと拳で空を切ってみたのだ。

第 82 章最悪の将軍

アイウォッチの強制検索でヒットした月世界教徒の実力者リストには、思いがけない男の名前があった。ジェラール・ボルドーだった。彼は 400 戦無敗を自称する闇世界の格闘家だ。いや、彼の本業は雇われ軍人だったか...確かに正式なデータを検索しても彼は 400 戦無敗という実績を誇っていた。しかしこれは、どこにも破竹の 400 連勝とは書いてはいない。主戦場とする闇総合格闘技、闇ムエタイの世界で、彼は決して負けはしなかったが、必ずしも勝ってはいなかった。相手に勝てないとわかった試合では、レフリーに手を掛け無効試合をモノにする。あるいは凶器を使う。闇格闘技の数少ないルールすら打ち破り、相手の耳を噛み千切るといった反則すら常套手段にしていた。彼の攻撃で光を失った人間がかつて何人いただろう。この男が月世界教徒のテロリスト集団を束ねる頭、つまり将軍と呼ばれているのだ。

他にも麻薬王やマフィアのボスや武器商人といった闇世界の住人だけではなく、連合政府の高官の中にも月世界教徒がいることがわかってきた。

最初は俺もあんな荒地でよかったら、月面人の皆様方に国家復興および独立を承認して、さっさと地球から出て行ってもらえばいいと楽観していた。火星帝国およびそれに類する惑星間帝国主義がこの太陽系から駆逐された以上、かつての防衛上の要所であったルナにこだわる必要はもはやないはずだった。しかし、ボルドーをはじめとする月世界教徒の軍事組織の実態を知るにつれ、この問題の深刻さが明らかになってきた。どうやら月面人たちは独立して月世界を復興するには飽き足らず、地球圏の完全支配を目論み、かつての支配関係を逆転しようとしているようだ。

ただし、ボルドーを仕留めたところで、この問題が解決するとは到底思えなかった。宗教や民族を根とする対立は、おそらく人類が宗教や民族という概念を持つようになった時点で始まったのだろう。数千年、いやもしかすると数万年のレンジの問題かもしれない。肌の色、眼の色、話す言葉、共同体、それに崇拝の対象、あるいは人間が同じ人間でありながら、相互に違っているということ自体がこの対立の問題なのかもしれなかった。

人は皆違っている。そこから生まれてしまった対立に、利権という蜜、いや油を注ぐことで憎悪の炎は燃え盛っていた。一度始まった争いは、もはや個人のレベルを超えていた。しかし、争いの単位はやはり個人で、頭を潰したところで、また新しい頭が生えてくるなり、かつての手足が頭に役割を変えるであろうことは容易に想像できた。

いずれにせよ、単に独立したいという月面人たちの欲望と、それを扇動しているボルドーの私欲は異なっている可能性も大きかった。俺はやはり、ボルドーを叩くことにした。

第 83 章 蛇の穴

ジョー・ヨージ 12 世はぼろアパートの旧型ネットヴィジョンでニュース番組を見ていた。

月世界教徒による自爆テロで無残に破壊されたビルや街角の姿が映っていた。

―地球人は愚かな人種デース。なぜ地球人同士で殺しあうんデスカー？

そんなことを思いつつ、彼自身も同じ地球人であることが皮肉だった。パープルパンサーに惨敗を喫した今、さしあたって彼はリング界からも干されていた。法律の仕事もダメ。

雇用安定センターでも彼は、地球圏反逆者ブラックリストに載っているため、日雇いアルバイトの仕事すら紹介を断られる始末だった。パンサーとの試合で稼いだファイトマネーを食いつぶしては、ジパング地方のあるぼろアパートでごろごろと過ごしているのだ。

地球圏がダメなら宇宙（そら）に出れば、いい。しかし、今の彼にはそんな資金すら不足していた。法律家としても失敗し、格闘家としても失敗した彼は茫然自失の中で漠然とした将来の不安に襲われていた。

不意に彼は立ち上がると、かつての古巣、蛇の穴に向う決意をした。プロのファイターとしての信用を失ったのなら、トレーナーからやり直せばいいじゃないか。その内チャンスはきっとやってくる。自分の技術には確固たる自信があった。年齢的なことを除けば、まだまだやれる。そんなことを思いつつ、彼はぼろアパートを後にした。

蛇の穴ではリングやリングサイドで若手レスラーたちが練習をしていた。ヨージ 12 世は会長を見つけるとトレーナーでいいから雇ってくれと話を持ちかけた。

「オレはあんたの技術を高く評価している。しかし、伝統あるウチのジムも経営難なのだ。理由はわかっているだろ。出身者の何某とやらが、リング上で大失態をさらしたからだ。もちろん、あんたにはトレーナーでもジムの便所掃除でも何でもやってもらおう。ただし条件がある。ジムの借金を返すために、闇格闘技の試合に出てもらいたい。なーに、すぐにとは言わんよ。数ヶ月の猶予を与えよう。まあ、とりあえずスクワット 500 回からはじめてくれ。体が温まったところで、若手の指導を頼む。オレももう年だ。あとはまかせるぜ。」

白髪の老人、ビリー・ローレンス会長はこういい残すと、ジムの２階の事務所に帰っていった。

第 84 章崩壊の序曲

俺は相変わらずサイバー探偵の仕事を続けているふりをしながら、月世界教徒たちの動向を探っていた。どうやら奴ら、このトキオを次回のテロターゲットにしているようだ。

俺の隣で世間の混乱に乗じ、暴落したジパング系の企業の株に多額の買い注文を出している妻の姿があった。この株は上がるから、安くなった今のうちに買えるだけ買うという魂胆らしい。俺はちょっと出掛けてくると言い残すと、トキオの街に繰り出した。テロが始まる時間は２時間後、それまでにどうやって奴らの計画をぶちのめすかだ。

テロ予定地のジパング銀行本店ビルの周りを俺は様子を伺った。周囲には怪しい人影はなかった。ここまで来るのに、事務所から単車を飛ばして 30 分以上かかってしまった。なぜこんなどうでもいいところをターゲットにしたのか、俺にはわからなかった。どうせ中にいるのは銀行員とその関係者だけだった。ジパング銀行はグローバルリラを発券している連合銀行の一支店という位置付けで、個人は口座すら持ってはいなかった。

―読めないな。テロ攻撃をするのだったら、もっと人の集まるところでやらないと。俺だったら、ショーウィンドーかなにかを派手に壊すのだがな。何故にこんな人気のない官庁街を狙ったのだろう。

確かに一般市民が通る通りというよりは、ここは官公庁の集まるようなところだ。

かといって、政治の中枢とまではいかなかった。もちろん、リークした情報を元に警備員達が厳しい視線を光らせていた。俺は気付かぬ素振りでジパング銀行本店前を通り過ぎると、数百メートル離れた位置から様子をうかがうことにした。

ジパング銀行の通りの反対側に一台の軽リニアカーが止まった。中から出てきた老婆が何か訳のわからない声で呟いている。いっせいに彼女に群がる警備員。その時だ。

走ってきた大型トラックがエライ勢いでジパング銀行のビルに突っ込むと同時に、老婆はスイッチを押して自爆した。吹き飛ばされる警備員たち。一連の騒ぎに乗じて、突っ込んだトラックの中から黒い覆面をした男達がジパング銀行の内部に侵入すると、一気に地球圏の全金融システムをダウンさせた。奴らはジパング銀行のメインコンピュータを利用して、地球圏の電子貨幣取引システムを崩壊させたのだった。この影響で電子決済が行われなくなり、回復まで１週間以上かかってしまった。

その後、やはりあらかじめ仕込んでおいた発光弾を爆発させると、意気揚々と去って行った。

第 85 章将軍の陰謀

－ボルドー将軍、ジパング銀行本店襲撃作戦は成功です。

―フッフ、全て計画通りか。まあ、計画ほど当てにならんものはないのだがな。もう下がってよいぞ。

しかし、インチキ新興宗教の信者ほど哀れなものはないな。ボルドー将軍は内心そう考えていた。彼自身、月で生まれた正真正銘の月世界教徒だった。両親の勧めに従い、洗礼と血の誓いの儀式を済ませたのはたしか 14 歳の誕生日だっただろうか。彼が成人を迎える前に、連合政府の月面ミサイル襲撃計画が発表された。彼は両親を残して、地球圏の親戚の家に疎開させてもらった。疎開先のベランダから、彼は月面に水爆ミサイルが打ち込まれる光景を見てしまった。

満月の夜だ。それからというもの、彼は自分の力だけで這い上がってきた。人間の命すら守れない月世界教の教えに憎しみを抱きながらだ。もちろん、彼はサークル内では自分がまだ熱心な月世界教徒のふりをしていた。その方が都合が良かったからだ。闇格闘技の試合で名を上げたあとも、彼は毎週月曜日の夜の集会に欠かさず参加した。そして今、月世界教徒の軍事統括権を任されるに至ったのだ。

彼にとっては、月世界教こそがインチキ宗教だった。しかし、偽りを偽りと認めた上でそれを敢えて利用しない手はない。何しろ、権力というおいしい蜜がある。聖戦の名の下に、半ば合法的に狂信徒たちを利用することが可能だった。さっきの「部下」も自分のことを将軍様だと思っている。独裁、邪教、欺瞞。これらは自由と平等の旗の下に行われる。

―そろそろ次の手を打たないとな。あとで旧火星帝国親衛隊の艦隊を押さえておこう。

まだ、彼は地球圏に居た。月（ルナ）にあがるのは最終局面までとっておけば、いい。彼は地球人ジェラール・ボルドーとしての日常生活に戻った。バウンサー、そして腕利きの闇格闘家として、400 戦無敗の記録を延長するために、彼はアジトを出るとジョギングに繰り出した。

第 86 章偽りの招待状

たまにはこういうのを観るのもいいわね。マリア・ハロルドはリヴィングのソファで寛ぎつつ、闇格闘技のビデオアーカイブを観賞していた。プロジェクターで映し出された大画面ではジェラール・ボルドーがサミング攻撃を行っていた。法外な掛け金が飛び交うギャンブル、それが闇格闘技だった。マフィアの組織同士で対立が生まれた時、無駄な抗争で血を流す代わりに、組織で雇った人間に闇のリングで戦わせて決着を着ける。非常に合理的な話だった。ボルドーは光を失った相手に容赦なく逆十字を極める。タップする相手。

しかし、手を緩めずに一気に折る！ その後、すかさず呻き声を上げる相手にマウントを取りパンチの嵐だ。背中を向けてパンチから逃れようとした相手をチョークスリーパーで落とした。闇世界の勝ち方で彼は勝負を完璧に決めた。

―いずれにせよ、火星帝国に代わる宿敵として月世界教徒を考えることしか出来ない事態になったわね。私ほどの大物が出る幕でもないけど、やはり甘ちゃんのポルゴに任せることは出来ないわ。彼もせっかく念願の相手と結婚したわけだし。格闘能力が未熟な彼にボルドーと戦わせることは出来ないわ。

マリア・ハロルドはある組織のエージェントに月面人のニセ戸籍を用意させた。

―今日から私は、ヴァジーナ・イーグルね。

その偽名は人類が初めて月面に着陸した時の月着陸船から取られていた。いかにも月世界人に特徴的な名前だ。あらかじめ月世界教徒のネットワークにこのニセ戸籍を登録すると、「ヴァジーナ・イーグル」は月世界教の法皇から結婚式の招待状をメールで受け取ったのだった。月世界教徒の世界では、結婚は同じ宗教の信者間でしか認められなかった。

そのため、法皇がコンピュータで適齢期の男女をマッチングして、内輪で結婚式を挙げさせていた。マッチングコンピュータは、月面人の適性を熟慮した上で最適の相手を探し出す効率的なシステムであるとされる。その内情は優秀な男女を選別した上で、人為的に宗教エリートを再生産するためのシステムだった。

ニセ戸籍および薔薇色の架空経歴をコンピューターシステムに書き込んでおいたおかげで、ヴァジーナ・イーグルは彼女の戸籍上の年齢より２０歳も年上のある男との結婚が指定されていた。その男は、もちろんジェラール・ボルドーだった。月世界教は表面上、一夫一妻制を主張し、離婚すら全く認めなかった。しかし内情はエリートに関して、多夫一妻制、一夫多妻制が認められていた。ヴァジーナ・イーグルはボルドーの４人目の妻に加えられる予定になっていた。マリア・ハロルドは化粧を済ませ、指定された礼服を着込むとムーンパレスに向った。

第 87 章邪悪なる儀式

月世界教徒たちの共同結婚式が今日行われた。月に一度の満月の日だった。ムーンパレスの式、参列者達は月面人の正装である黒服に身を包んでいた。中央の法皇から見て右側には女性たち、左側には男性たちが黒服で整列していた。新婦と新郎の群れだ。

他人に自分の結婚相手を決めさせる。実に馬鹿げた行為をやっているとマリア・ハロルドは思っていた。しかし、こうでもしないと邪教の信者同士で相手を見つけて家庭を作ることは難しいのかもしれなかった。いずれにせよ、儀式が終わり、ジェラール・ボルドーとサシになった時点で、ヤツを仕留めて月世界独立戦争の陰謀をぶちのめす予定だった。参列者達は手元に月聖書を広げ、賛美歌を歌っている。

「聖書の勉強会に参加しませんか？」と街で邪教に勧誘する若者をマリアも見たことがあった。勉強という言葉を巧みに利用して、教会への寄進を増やすのが目的だ。マリアはマイナスイメージがついている月聖書を広げ、クチパクで歌っているふりを続けていた。黒い礼服のヴェールから色白のマスクが見え隠れしている。法皇は説教を終えると、一組ずつ男女の名前を読み上げていった。壇上に呼ばれたカップルは法皇の前でお互いの左手の小指を組み合わせ、誓いの儀式をした。その後、お互いのネックレスを交換すると宗教上の新しい夫婦が誕生することになる。

ボルドーとヴァジーナの名前が呼ばれた。壇上に上がったボルドーは黒を基調とした軍服を身にまとっていた。好色そうな中年男性だ。もちろん、職業上身体つきは引き締まってはいたが。マリアは気のレベルを必要最小限まで落とすと、ヴァジーナ・イーグルとしてボルドーと小指を組み合わせた。その後、誓いの言葉を言い終わると、月の紋章がついているネックレスを交換した。その後、壇上から降りて、二人は新婚者たちの席に移った。全ての儀式が終了した後、マリアははにかみの表情を浮かべながらボルドーと手を組んでムーンパレスを後にした。ボルドーは鼻を伸ばしながら、大型リニアカーを運転して、新居に向かった。彼はアジトの他に 3 軒地球に家を所有しており、それぞれの家に一人妻がいた。彼は今回の結婚を法皇から聞かされると喜び勇んで、新居を購入した。

今まで会って話したこともない男女が、宗教上の都合でいきなり結婚する。かなり馬鹿げた話だった。マリアは表面上、恥ずかしがっていたが、虎視眈々とボルドーを仕留める機会を伺っていた。ボルドーは何もこちらに話しかけてこなかった。これが月面人の結婚のルールだった。月面人は共同結婚式を終え、新居に入るまで口を交わさない約束だった。誓いのキスすら認められなかった。全ては寝室でということらしい。新居に着くと、ボルドーは嬉々とした表情を浮かべながら、無言で寝室に新妻を案内した。

―その前にシャワーを浴びてきてもいいかしら？

　ボルドーは余裕の表情で彼女をバスルームに案内する。

　バスルームにマリアは入ると、あらかじめ用意した爆弾をセットした。その後、バスローブに着替え、テキトーにシャワーを浴びるふりだけしたマリアは、間取りを確認しながら寝室に戻った。

　寝室では上半身裸のボルドーがベッドの上でタバコの煙をくゆらせていた。獲物に飛び掛る虎の刺青が背中に描かれていた。そして胸元には赤い三日月のマークの刺青があった。

―やさしくしてね。あなた。

　ボルドーがマリアを抱き寄せようとした瞬間、強烈な当て身を彼女は見舞った。

―悪いが、あなたには死んでもらうわ。

　不殺の誓いを立てていた彼女だったが、闇世界の最高実力者というボルドーを相手にする以上、甘さは許されなかった。

―貴様、やはりオレの命を狙い、月世界教の信者を装っていたのだな。

　その言葉が言い終わる前に、マリアは両手を弧のようにかき上げた。掌から強烈な気弾が発生し、ボルドーを襲う。ダブル痛風拳だ。

　ボルドーは両手を顔面の前に置き、今の攻撃をブロックした。

—気を使えるのか。その動きは...たぶんハロルド流だな。オレも何人か、ハロルド流の使い手を殺したことがある。皆、たいしたことのない奴だった。お前もすぐにその仲間にしてやるよ。それとも、奴隷として一生こき使ってやることにしようかな。

マリアは今の挑発を無表情でやりすごすと、タックルからバックに回り、強烈なチョークスリーパーでボルドーを締め上げた。ボルドーは締め上げられながら、容赦なく空いた右腕の指先でマリアの眼を狙って来る。ボルドーの右腕がマリアの眼に到達する前に、彼女はボルドーを落とした。実力の差が、あまりに開きすぎていた。

—ゴミみたいな弱さね。反則を使ってナンボの世界だったのね、やはり。私から見れば、ただの雑魚ね。

マリアはバスローブを脱ぎ捨て、不本意ながら月面人の正装である黒服を身に着けると、ボルドーの屋敷を去ろうとした。後は、仕掛けてある爆弾のスイッチを押せば、いい。月面人たちの将軍を仕留めれば、とりあえず急場の問題は凌げる。その先は、連合政府のお偉方に任せておこう。

玄関から屋敷を出ようとしたときだった。ドアが開かない。仕方なく窓を探して、ぶち割ろうとする。しかし、この屋敷の窓は全て鉄格子だった。冷静に出口を探す。どこかにあるはずだ。窓もドアも塞がっている以上、彼女は一番薄そうな壁を気で破壊することにした。

強烈な気を右の掌にこめると、弧を描くかのように気弾を放り投げた。しかし、壁はびくともしなかった。

—おかしいわね。この屋敷には何かが仕掛けられている。

マリアは全身のオーラを最大限まで高めると気でフィールドを作り、瞬間移動をしようとした。自分の意識が壁を越えたと思った瞬間、やはり彼女の身体は屋敷の中にあった。

　背後から気配を感じる。

―フッフ、気は済んだかね。

―ボルドー、私が完全に落としたはずでは。

―落とされたのは君自身だよ。どうやら、君は私の能力を知らないまま私に接近しようとしたようだな。

　ボルドーは右手を高く掲げると、マリアの設置した爆弾をちらつかせた。

―あなたの能力？ なぜ、私の行動まで把握しているの？ この屋敷にはなぜ気が通じないの？ いいわ、もう一回闘って、あなたを倒すまでよ。後は自力でどうにか脱出してみせるわ。

　マリアが右手で痛風拳を放とうとした瞬間だった。彼女の右腕は意思に反して、彼女の喉元に食らいついた。そのまま、マリアの右手は自分自身を絞め殺そうとしていた。

　もがくマリア。

―精神操作術だよ。気を使ったものだ。ハロルド流は気をコントロールすることには長けているが、それは物理的にオーラをコントロールすることに関してのみだ。私は形を持たない相手の精神すら気でコントロールできるのだよ。何を考えているかは、君と会った時に既にお見通しだったよ。ただのエロ男、反則格闘王、そんなイメージを私に持っていたのだね。あぁ、苦しいか。ほら、もう楽になっただろう？ 何かしゃべってみ

るかね？

—私をどうするつもり？

—君の考えていることは、言葉にしなくてもわかるよ。仲間のポルゴとかいう男に助けを乞おうとしているのだね。その男も、どうやら私の計画の邪魔になりそうだ。とりあえず、君を利用して、ポルゴとやらを公の舞台で消させてもらうことにするよ。

ボルドーは言い終わると、無言でマリアに近づく。後ずさりしようとするマリアだが、体が言うことを利かなかった。ボルドーは無理矢理マリアにキスを迫ろうとする。

—残念、私は月面人以外の女とは関係しないことにしているんだ。

　余裕の表情を浮かべるボルドー。なおもマリアは鋭い視線でボルドーを睨みつける。

—なぜ、さっきのスリーパーから私が起き上がってきたかと思っていたのだろ。私は、ジェラール・ボルドーだよ。狸寝入りは得意さ。私をチョークで落としたと思った直後に、後ろから私にトドメを刺された人間がこれまで何人いると思う。両手に余るな。君もその一人に仲間入りしだたけだよ。この屋敷？ ああ、これは私の気で完全にフィールドを作ってある。気の牢獄だよ。ここから自由に出入りできるのは、私だけだ。

　マリアは心を無にして、闘争本能だけでボルドーに挑もうとした。

—虎穴にはいらずんば、虎子を得ず、か。残念ながら、ここは虎の穴でも蛇の穴でもない。ただの牢獄だ。君はこの屋敷にいる限り、私に歯向かうことも出来ない。私を殴りたい。

さあ、どうぞ。

マリアは右のストレートを放った。ボルドーの直前で拳が止まる。すかさず、ボルドーは右手でマリアを平手打ちにした。膝から崩れたマリアの表情をアイウォッチで撮ると、ボルドーはポルゴのアドレスを割り出して、メールで送った。

—ポルゴ君、マリアという女は私が預かっている。2週間後の闇格闘技の試合で会おう。場所は、ムーンレイクの地下競技場だ。ジェラール・ボルドー

こうしてマリア・ハロルドはボルドー将軍に捕らえられてしまった。

第88章謎の実力

ポルゴはすぐにでもマリアを助けに行きたかった。しかし、彼女がボルドー将軍に捕らえられている以上、相手を刺激するような無理な真似は出来なかった。相手の指示通り、闇格闘技の試合でケリをつけねばならなかった。しかも、期限は2週間後。マリア・ハロルドほどの使い手を捕らえることが出来る相手とだ。どうしようもなく流行る気持ちを抑えながら、ポルゴはネットヴィジョンのチャンネルを有料の闇業界チャンネルに合わせた。

ゴールデンタイムの闇格闘技の生中継だ。

メインイベントはジェラール・ボルドー VS ジョー・ヨージ12世だった。今日はこのメインイベントの前までに試合で二人死傷者が出ていた。ゴングが鳴る。ジョー・ヨージ12世は一方的にボルドーに蹴りかかってゆく。これ以上、後がない者の気迫。まさにヨージ12世は背水の陣でボルドーに挑んでいた。コーナーまでボルドーを追い詰める

と、一気にフロントチョークに捉えた。ボルドーが膝から崩れ落ちた瞬間、ヨージは技を解いていた。ポルゴの眼には、今のスリーパーを金的蹴りで外したボルドーの素早い動きが見えていた。その後、うずくまるヨージの眼にサミングを仕掛けると、タックルからマウントを取り、一気にタコ殴りにした。完全に気を失っているヨージを無理矢理うつ伏せにしてスリーパーで絞め落とした。気絶したヨージをサッカーボールのように蹴りまくるボルドー。

ヨージのセコンド、ローレンス会長がついにタオルを投げた。ゴングが鳴る。なおも攻めを緩めないボルドー。白髪のローレンス会長が鬼神の表情でリングに乱入し、今の試合を止めに入った。興奮したボルドーは迷わずローレンス会長の右目にパンチを入れると、賞金を受け取ってリングを去っていった。

この試合だけでは、ボルドーがマリア・ハロルド以上の実力を兼ね備えているという実感はわかなかった。ただの、狂気を孕んだ危険な男だ。この番組放送中にも、月面人による自爆テロの臨時ニュースが流れていた。

ポルゴは、正体、いや真の実力が測れない男と勝負をしなければならなかった。

第 89 章 死闘

俺はあのマリアさんを倒すほどの実力者であるボルドーとの対戦の前に、妻に金星での新しい儲け話を提案して、宇宙に事実上、疎開させることにした。ボルドーとの戦いは負けることが許されなかった。同時に相手はどんな卑怯な手段を使ってくるかわからなかった。あっという間に対決の日がやってきた。ミスター東郷は既に老衰のため、寝たきり老人になっていた。今の俺にはセコンドすらいなかった。ムーンレイクの地下競技場に会場入りすると、俺は控え室で試合待ちしていた。前座の試合が終わると、若手レスラーがうめき声を上げながら担架で運ばれていくのが見えた。

―孤独か。しかし、それに耐えることが出来ない者は生きる価値すらないか...

寂しいことを考えていた俺の前に、長髪のアジア系の青年が現れた。かつて闘った相手、ジュン・バードだった。

―やあ、ポルゴさん。お久しぶりですね。実はボルドーは私の友人ヨージ君をコテンパに叩きのめしてくれていまして。敵の敵は味方です。良かったらワタシにあなたのセコンドを引き受けさせては貰えないでしょうか？

あまりに爽やかな笑顔で、こちらに好都合なおいしい話を持ちかけてくる相手。俺は相手の表情と気の様子から、相手に悪気がないことがわかったので、この提案を即座に引き受けることにした。

―あぁ、俺はアンタの実力をわかっているつもりだ。正直、アンタは頼りになるよ。あのパープルパンサーと互角にやりあったのだからな。

正直、若返った時のミスター東郷と互角に戦ったという表現は相手を持ち上げすぎだった。しかし、ここはワラにでもすがりたい気分だ。

闇格闘技の試合には、入場テーマなんてぬるいものはなかった。会場が真っ暗になり、松明の前で半裸の男が和太鼓を三回叩く、それが入場の合図だった。コールされることすらない。裏業界の顔役達が、トトのチケットを握りながら、冷たい視線で試合を見守っていた。

ドン、ドン、ドン！

俺の試合の番だ。

俺は無言でリングに上がると、コーナーにはジュン・バードがついてくれた。一方、ジェラール・ボルドーは空手着を着て、リングに上がってきた。上半身のジャケットを脱いだ瞬間、背中の虎と胸の赤い三日月の刺青が浮かび上がった。

レフリーの男から、この試合はノールール、反則なし、勝敗はKOのみと告げられた。ギブアップしたところで、試合は終わらなかった。レフリーストップすらない、もちろんTKOもないと告げると、レフリーはリングを下り、ゴングをかき鳴らした。

俺は一気に全身の気をマックスまで高めて構えた。相手の真の実力が未知数である以上、

最初から本気を出して秒殺することが最善だ。

ボルドーは胸の前で押忍の形に手を切ると、オーソドックスに構えている。

特大の衝撃波で相手を消滅させるか、それとも接近して発頸で吹っ飛ばすか？ 俺は後者を選んだ。一歩のステップで一気に間合いを詰めると、ボルドーの腹に強力な右ストレートをかました。ボルドーはそのまま倒れた。俺はタックルの要領でボルドーに追いかぶさると、一気にマウントからタコ殴りにした。

―ポルゴさん、気をつけて。ボルドーは何か狙っていますよ！ 絶対に。

セコンドから指示が飛ぶ。俺は無視してひたすら殴ると、得意のストラングルホールド・ネオで一気に相手の喉元を潰し、気絶させにかかった。終わったな。

不意に全身に電気が流れるような衝撃が走った。

俺は何が起こったかわからかったが、とりあえず技を解き、スタンドで間合いを広げてから、身体に異常がないか確認した。

ボルドーはゾンビのようにゆっくりと起き上がってくる。

―ポルゴさん、相手の気の流れを感じてください。ヤツは可視出来ない気で、ポルゴさんに攻撃していますよ。油断しないで。

そうだったか、だいぶ気のことも忘れてしまったな。俺も平和ボケしたのかな。

俺は一気に全身の気を周囲に解放した。見えない気で相手が俺を攻撃できるのなら、俺も自分の気で相手の気を打ち消せばいい。

―悪いが決めさせてもらうよ。

俺は覚悟を決めて踏み込むと左フックから右ストレートのコンビネーションでボルドーの顔面をぶち抜いた。左の前蹴りでボルドーを蹴飛ばすと、右のミドルでボルドーの左腹をなで斬るように蹴った。ボルドーが背を向けた時、俺はヤツの右腕をハーフネルソン、左腕をチキンウィングに捉えた。必殺のタイガードラゴンスープレックスの体勢に入る。その時だった。ボルドーは頭から無理矢理前方に突っ込んで行った。俺が両腕のクラッチを外した瞬間、前転の要領でボルドーは回りこむと、一気に俺の左足をつかみ、ヒールホールドを極めてきた。

―タイガードラゴンスープレックス、敗れたり！

俺は冷静に体を捻って、今の足関を外した。不意だったので、多少左足首を傷めたが、まだ致命傷ではなかった。しかし、何故、ボルドーが俺の技を見切れたというのか。タイガードラゴンスープレックスの技の名前すら知っていた。あれは、パープルパンサー

のオリジナル技じゃなかったのか？ パンサーの正体は不明のままにしておいたのに。

―ポルゴさん！ ボルドーはあなたの意思を読んでいます。ここはそれしか考えられません。ここは無心で相手に反応することに専念してください。

ジュンからの指示が飛ぶ。俺は自分の攻撃を超反応に切り替えることにした。

ボルドーは遅い右のローキックで俺を攻撃してきた。俺は今の攻撃を左足を上げてブロックした。ボルドーは迷わず俺の眼を狙って、右の掌を開いて指先で突いてきた。バックステップでかわす。右のストレートでカウンターを放とうと思った時だった。

身体の自由が利かない！

金縛りのように俺が硬直した時、ボルドーはこう言い放った。

―遊びは終わりだ！

凄まじい勢いの打撃のコンビネーションで俺を攻撃するボルドー、身体の自由が利かない俺はされるがままにやられていた。

妻の顔、ボルドーから送られてきたマリアさんの腫れた顔が脳裏に思い浮かぶ。しかし、両腕も両足も言うことを聞いてはくれなかった。

―ポルゴさん！ ボルドーは気でアナタの心の中に入り込んでいます！

俺もここで死ぬのかな。そんな思いが過ぎる。いっそのこと倒されて楽になりたかったが、身体は倒れる自由すら奪われていた。相手の操気術になすすべのない俺。その時だ。

―アルセーヌ・ポルゴっ、貴様はその程度の実力だったのか？！！

忘れもしない西郷詩郎の声が全会場に木魂する。その瞬間、俺の体の硬直が解けた。どうやら、試合のプレッシャーのスキをついて、ボルドーの精神操作術に俺の心と体が支配されていたらしい。

俺は後ろに引くことなく、全力で踏み込んだ。たまには、宿敵の技を使ってみるのも面白い。俺はこれ見よがしに右の拳を腰まで引いて、両膝を折り曲げ身体を沈め、一気にタメを作った。相手は俺の心を読めてはいるが、身体の動きについて来られないらしい。強引に右の拳でアッパーを放ち、ボルドーの鳩尾を打ち砕いた。そのまま、さらに真上に拳を突き上げ、ボルドーのアゴを射抜いた。最後は右肘で３段目のアッパーだ。すかさず、左のソバットで今の技のスキをフォローする。真・龍拳が決まった。崩れ落ちるようにダウンしたボルドーにマウントから肘打ちを連打した後、そのまま右腕でギロチンチョークを極めた。一気に喉元に右肘を押し付け、ボルドーを落とした。なおも鬼神の表情でボルドーにストンピングを決める俺。倒れたヤツを 50 回くらい踏みつけたところで、俺は間合いを取って拳の前に全身の気を集中した。このままギャラクシーウェーブを使って、奴の身体ごと消滅させるつもりだ。

―ポルゴさん！　もう勝負はついています。レフリーっ！　ダウンカウントをお願いします。

場外からレフリーがダウンカウントを告げる。俺はいつでも特大のギャラクシーウェーブが放てる体勢でダウンカウントを聞いていた。ついにテンカウントが告げられると、会場にいた月面人たちが担架でボルドーを運んでいった。

終わったな。俺はやっと余裕を持って、暗い闇格闘技の会場を見渡すことが出来た。セコンドにはジュン・バードだけではなく、試合中にリングサイドに駆け寄っていた西郷詩郎の姿があった。

俺はまだ全身が殺気立っていた。マリアさんのことを思い出すと、俺は担架で運ばれたボルドーをすぐさま追いかけていった。控え室ではリングドクターがボルドーに応急処置を施している。俺は控え室にいる月面人たちを押しのけて、ボルドーに問いただした。

―マリア、マリア・ハロルドはどこにいる？

―ボルドーはおぼろげな意識で、彼のアイウォッチを指差した。その画面にはボルドーの

第４邸宅の地図が写し出されていた。

―ここだな。もしマリアさんが無事じゃなかったら、お前らの命は無い物と思え！

自分の後方でジュン・バードがうろたえているのが見えた。何が起こったのかという表情だった。

俺はジュン・バードと西郷詩郎を連れ会場を後にすると、お気に入りの BAR で彼らに簡潔に事情を説明した。今回俺が闇格闘技に参戦した理由が、知り合いの女性を人質に取られたことだったとわかると、実直な西郷詩郎は憤怒の表情を浮かべた。ジュン・バードはやっと今回の事情が飲み込めたようだ。俺は現金を置いて、乾杯も済ませずに彼らを置いて BAR を後にした。マリアさんの無事を確かめに行くことが先決だった。

単車を飛ばして、ボルドーの第４邸宅に向う。ドアはオートロックで開かない。俺はポケットからピンセットを取り出すと、鍵をこじ開けた。玄関の前には憔悴しきったマリア・ハロルドが座り込んでいた。ろくなメシも食わされずに彼女はボルドーに捉えられていたのだった。

―ボルドーは俺が倒した。前もって相談してくれれば、こんな結果にはならなかった。無

事だったか？

俺が羽織っていたジャケットをマリアさんに被せると、マリアさんはやっと安心したのか眼にうっすらと涙を浮かべた。

グレート・アジア 13 世の失踪後、地球最強の女性と言っても過言ではないマリア・ハロルドをここまで精神的に追い込んだジェラール・ボルドーの汚いやり口を見るにつけ、俺は月世界教徒と全面的にケリをつけることを誓った。

第 90 章 混迷

俺はマリアさんを単車で信用のおける病院まで送った。医師の診察の結果、ただ衰弱しているだけで適度な休養を取れば、健康上の問題はないとのことだった。その後、彼女の実家まで送り届けてきた。回復したらすぐにでもボルドーを一発殴りに行きたいというマリアさんを俺は必死でなだめた。50 発も踏みつけたんだから、生きているほうが不思議だ。

ヤツも相当へこたれていると思うと言っておいた。

俺は帰宅すると、だらだらと焼酎をロックで飲んでいた。師匠の趣味が移ったのかもしれないな。チーズをつまみながら、そのままソファで休んでしまった。

翌日、ネットで三日月新聞をチェックすると、「”殺し屋”ミスター・ポルゴ、月世界教の敬虔な信者、ボルドー氏をリング上で暴行」と一方的な記事がスポーツ欄の見出しに踊っていた。三日月新聞には「月の教え」といった宗教関連の記事が満載されていた。月世界人の軍隊を仕切っている人間は、ボルドーだけではないこともわかった。しかし、一度でもボルドーを敵にまわしてしまった以上、もう穏やかな生活は営めなかった。ヤ

ツはどんなあくどい手を使っても、野望を達成させるはずだ。月世界の再独立、それだけがヤツの野望ではないだろう。あの手この手でテロや紛争を仕掛けてくる月世界教徒の方々に、「またですか？」と思いつつ、そうも流してはいられないのが日常だ。

確かに、単に宗教や民族が存在することを戦争の理由に挙げるのは馬鹿げているだろう。

人は無宗教といっても、神社に行って願い事を頼み、教会で結婚式を挙げるのがおしゃれだったり、墓はしょうがないから寺に作ったりする。無宗教というカテゴリーを含めて、ある意味、誰しも何かしらの宗教に属していると言えるかもしれなかった。邪教という概念も主観的な問題で、実はこちらの理解が足りないだけかもしれない。狭い世界に篭っているからわからないだけで、誰しも、何かしらの民族に該当していた。普段同じ民族の中にいるから、わからないだけだ。

そういったことは全てわかった上で、なおも俺が月世界教徒と彼らの独立戦争の野望を許せないとしたならば、それは彼らが俺の愛する身近な人間にとってプラスの存在ではないというエゴからかもしれない。

地球連合政府、そして太陽系連合政府の掲げる民主主義の概念には、もちろん信教の自由および基本的人権の尊重が含まれていた。

偽りの仮面の元ではなく、闇格闘技の舞台の場ではなく、アルセーヌ・ポルゴとして俺はライバル達と正々堂々勝負してみたくなった。

数日間、だらだらネットで月面人たちの情報を調べながら俺は過ごしていた。

ある日買い物に出かけた後、不意に自宅のポストを調べてみると、そこには一枚の封筒が入っていた。

拝啓、アルセーヌ・ポルゴ様

新世紀第４回キングオヴギャラクシー大会に貴殿を招待します。

期日は半年後の満月の夜、ムーンアリーナにて開催。

今回のルールは２対２のタッグマッチ形式です。莫大な賞金を用意してお待ちしております。

大会主催者 月世界教会法皇 ネオ・ルヴェルチュールより

　真の黒幕からの挑戦状を前に、俺は思わずファイターとしてほくそえんでいた。マリアさんに電話で同じ招待状が来ていることを確認すると、その場でタッグ結成を依頼した。マリアさんは、「私は今回、別に考えている人がいるの。ゴメン」と言って回線をシャットダウンした。実は俺にもタッグパートナーのアテはあった。その相手との交渉を済ませた後、俺は妻のユメミが滞在している金星首都ヴェヌスブルグに修行に向かった。

　金星は俺にとっては修行の聖地だ。今まで仕事が忙しく、ロクに新婚旅行を済ませていなかったことを思い出すと、俺はユメミに次回のギャラクシーの賞金でまた銀河一周旅行に行くことを提案した。かつて起業した製薬会社の経営に技術的に行き詰まっていることを悩んでいた彼女は、銀河帝国で新技術を手に入れることを思い描き、すぐにこの提案に賛成してくれた。

月世界教徒との戦いの渦の中で俺は自分の中の大切なものを失っていた。それに気付かされたのは、ずっと後になってからだった。誰もが心に抱える孤独、それはたとえ生涯のパートナーと心から愛し合っていたとしても、満たされるものではなかった。そんなことに気付く間もないまま、俺はひたすら過酷なトレーニングに打ち込んでいた。基本に戻って銀河ワニたちと俺は闘い、ワニ革でビジネスを行っている妻は喜んでいた。

月世界人にとって、長年の独立闘争の中で、最終的に独立を勝ち取った金星フロンティアは理想モデルであり、決して地球のような敵ではなかった。

ひたすら月世界人たちの無差別テロ攻撃の対象となっている地球の主要都市と比べ、この金星は野生の猛獣が多々いることを除けば、非常に快適だ。

どんな人間にも終わりがある。もちろん国家もだ。あらゆる生物種、そして惑星、あるいはこの宇宙にすら終わりがある。ただ生きている人はそのことを忙しさで忘れているだけなのかもしれない。

この世界に無限の未来は存在しない。世界にすら終わりがある。命を失った者とは二度と会えないという時点で、それは永遠の別れを意味する。この世に生あるものには永遠というものはない。全ては移ろいゆく。

そんなことをゆっくりと考える時間も無いまま、俺はひたすら銀河ワニや金星豹を相手に修行を積んでいた。不意に宵の明星の中で、頭上に大きな流れ星が尾を引きながら落ちるのを俺は見た。俺はとっさに、そろそろ子供が欲しいかなと願いを心で呟くと、またシャドーボクシングを開始した。ある金星の黄昏時の出来事だ。

第 91 章 欲望

この世界が欲しい。そう思っていた。月、地球、太陽系の完全支配。それだけでは己の尽きせぬ欲望は満たせやしないだろう。部屋の銀河儀をぐるりと廻すと、そこには銀

河帝国の版図が映し出されていた。この銀河帝国を仕切っている帝国議会議長、３代目の銀河の大王をわが手で倒せば、自分の欲望もきっと満たされることだろう。

「ネオ・ルヴェルチュールさま。次回のキングオヴギャラクシーの参加者リストを入手しました。」

「そうか、よくやった、ボルドー将軍。貴君には私と共に次のギャラクシーに参戦してもらおう。」

　ジェラール・ボルドーの考えていることは手に取るようにわかっていた。地球人類ではじめて宇宙に定住した一族である月世界人、その子孫達は遺伝子レベルで宇宙環境に適応したため、第６感とも言うべき、不思議な能力が備わっていた。人の心が読めるのだ。もちろん、これは同じ月世界人でも個人差がある。そして、月世界の中で宗教を司る者の位置にいる法皇には、気で人の心を操ることすら可能だった。ボルドーが同じことを出来ることはよく知っていたが、自分はそれ以上の能力を持っていた。それでいてなお、自分にはその能力が備わっていないかのように振舞ってきた。

「しかし法皇様。闇格闘家である自分と違い、聖職者の法皇様はキングオヴギャラクシーに参戦して大丈夫なのですか？　ファイトスタイルは何と公称しましょうか？」

「ファイトスタイルか？　そうだな極東流カラテでいいだろう。なーに、ギャラクシーはタッグマッチだ。ボルドー君に任せておけば、私の出る幕などないだろう。」

　心にもないことを話していた。だからこそ、相手は自分の意思を正確に読むことは出来ない。もちろん、言葉通り、かつてジパング地方、いや琉球ジパング地方で生まれた極東流カラテで黒帯は取っていたし、ボルドーにはギャラクシーのほぼ全戦を任せるつもりでいた。自分が戦う相手は、銀河帝国議会議長。ただ、アイツだけを倒せばいい。

　狂信徒どもを甘美な言葉で洗脳し、利用してきたのはボルドーだけではなかった。法皇という地位は、まさに狂信徒たちを利用して、銀河征服という野望を達成するためには最高の地位と言うしかなかった。今回莫大な賞金を懸けてキングオヴギャラクシーを開催するのは、銀河で最高の実力と権力を持つと言うあの男を公衆の面前で自ら倒して見せることだった。人をだますには奇跡とやらを目の前で見せてやることが必要らしい。

第 92 章 葛藤

マリア・ハロルドは今回のギャラクシーのパートナーを唯一自分に匹敵するジパング人の武道家に決めていた。合気柔術と柔道を極めた伝説の使い手、西郷詩郎だ。かなりの強硬作戦とはいえ、ボルドーに不覚を取った自分自身が許せなかった。あの時、ボルドーは既に何人かハロルド流の使い手を殺めていると豪語していた。ボルドーの精神支配術という小細工になどには決して折れない強い信念と心を持った男の中の男、西郷詩郎と組めば、もはや倒せない敵などいないはずだ。西郷はこの申し出を快く引き受けてくれた。

遥か彼方の銀河帝国では、帝国議会議長である３代目の銀河の大王が、しばらく地球圏で過ごしていた皇太子を首都惑星サルバトーレに呼び戻していた。

「ジュニアよ。ワシはある決断をすることにした。地球の月（ ルナ ）の法皇とやらの挑戦を受けることにしたのだ。ジュニアよ、お主は銀河帝国の皇太子としてワシの不在の間、この銀河帝国の平安を守るのじゃ。そしてもし、ワシが敵の拳の前で倒れ、帰らぬ人となった場合は、ワシの遺志を継ぐのじゃ。もちろん、帝国議会議長の地位は公選による。しかし、お主は銀河帝国の皇太子として、帝国の自由と独立の象徴である大王の座を継ぐことを運命付けられている。ワシはもうゆかねばなるまい。後は任せたぞ、ジュニア」

「パパ、いってらっしゃい。ボクが大王の地位を襲名した暁には、帝国議会で一夫多妻制を認めさせる法案を提出して強制可決するつもりだよ。やっぱり、生物は子孫をたくさん残さなきゃね。」

明らかに空気の読めない返事をした息子だった。息子がバカであるのは親である自分の責任でもあるが、そのバカ息子を成長させる舞台を用意してやるのも、父親である自分の務めだった。あまりに過剰な演出で留守を任す依頼をしてしまったが、これもバカ息子を成長させるためだ。ギャラクシーのパートナーは、ニコラス・トルーマンに任せ

る契約を結んである。後は銀河帝国の最新式量子移動機を飛ばして、ルナでおちあう約束だ。

金星フロンティアではポルゴが次回のギャラクシーのパートナーをわざわざ地球から呼び出し、合同練習を敢行していた。その相手はジュン・バードだった。ジュン・バードはかつてナンパと偽善趣味に燃えるメキシコ流空手の使い手だったが、今は一人の武道家として、ナンパも体面も忘れて、基礎から道を究めるための努力を怠らなかった。そして、次回のギャラクシーに、友人のヨージ 12 世を倒した月面人のジェラール・ボルドーのみならず、極東流カラテの使い手が参戦することを知り、ポルゴとの参加を決めた。

極東流カラテ、それはルチャと融合しプロ競技として見せ技の要素を多分に含んだメキシコ流空手と違い、真剣勝負、極限の追求、素手を合言葉にした真の武道だ。

かつて先祖のジュン・ハーンが起こしたメキシコ流空手と極東流カラテは壮絶な抗争を経て、地球圏の打撃系格闘技を二分する大勢力図を保っていた。極東流カラテの使い手をギャラクシーの大舞台で倒せば、今まで火星人に手を貸すという愚かな行いをしてきた自分も、先祖のジュン・ハーンに対して罪滅ぼしが出来るかもしれない。

極東流カラテはひたすら人体を苛め抜き、鍛え抜くことを主張する。正拳突きの一撃だけで銀河ワニを倒すことが出来ると豪語する流派だった。スピード、技の華麗さ、そして高度なテクニック、全てにおいてメキシコ流空手の方が極東流カラテを上回ることを主張するために、彼は今、壮絶な合同トレーニングを敢行していた。

３代目の銀河の大王の参戦の噂が広がるにつれ、銀河マフィアのブラックホールズ、そしてグレート・アジア 13 世、パープルパンサー不在の今、地球圏で勢力を伸ばしているプロレスラーのエリカ率いるビューティクイーンズ、それに国家滅亡の混乱を生き抜いた火星の科学者によって改良されたキラーラブマシンズといった数々のチームが今回のキングオヴギャラクシーに参加を表明していた。そして主催者である月世界教法皇ネオ・ルヴェルチュールと月世界将軍ジェラール・ボルドーのムーンルネッサンズが主催者権限でエントリーしていた。

さらにポルゴを倒すという悲願のために連合刑務所から刑期を終えて出所した自称探偵のオータニと部　下のゴトーのデンジャラスブラザーズ、ボルドーへの復讐とジムの復活を賭けたジョー・ヨージ 12 世とビリー・ローレンス会長のマムシファイターズまでも

参戦を表明していた。

　全ての参加者達の葛藤の中で銀河最強タッグの看板を手に入れるのは誰か？ 今の時点では誰もわからなかった。

第 93 章決戦開幕！

　月世界教法王ネオ・ルヴェルチュールが主催し、地球の月のムーンアリーナで開催される新世紀第４回キングオヴギャラクシーで予選を勝ち抜き本戦まで残ったチームは、ポルゴとジュン・バードのフェニックスエヴォリューションズ、西郷詩郎とマリア・ハロルドのネオ・オールドアーツ、エリカとブラッティー桜のビューティクイーンズ、３代目の銀河の大王とニコラス・トルーマンの銀河帝国チーム、ブラック・ホークとブラック・アニマルのブラックホールズ、キラーマシン・ゴリラとキラーマシン・モンキーのキラーラブマシンズ、オータニとゴトーのデンジャラスブラザーズ、ジョー・ヨージ 12 世とビリー・ローレンス会長のマムシファイターズ、ネオ・ルヴェルチュールとジェラール・ボルドーのムーンルネッサンズの９チームだ。

　今回のルールはダブルノックアウト制だ。相手チームを二人とも仕留めたチームが勝つ。どちらか一方のチームメイトが負けた場合、ローンバトルを強いられることになる。例によって全ての武器の使用が認められていた。なお、対戦相手を殺めた場合は、そのチームは自動的に失格となる。

ムーンアリーナでの開会式で９チームのトーナメント表が発表された。

第４回キングオヴギャラクシートーナメント表

初日

第一試合 フェニックスエヴォリューションズ VS デンジャラスブラザーズ

第二試合 ネオ・オールドアーツ VS キラーラブマシンズ

第三試合 ビューティクイーンズ VS マムシファイターズ

第四試合 銀河帝国チーム VS ブラックホールズ

第五試合 第４試合の勝者 VS ムーンルネッサンズ

二日目

第六試合 第一試合の勝者 VS 第二試合の勝者

第七試合 第三試合の勝者 VS 第五試合の勝者

第八試合 第六試合の勝者 VS 第七試合の勝者

ムーンルネッサンズは主催者権限でシード扱いだった。第一試合から第４試合までは全ての試合がライバル同士の因縁対決というふれこみで、大会チケットは記録的な売り上げだった。また今回も例にもれず主催者から銀河トトが発行されていた。地球圏、月世界、太陽系、銀河帝国、全ての世界の欲望を飲み込みつつ、今第４回キングオヴギャラクシーの本戦が開かれようとしていた。

第一試合、まずフェニックスエヴォリューションズがコールされた。赤コーナーにアルセーヌ・ポルゴとジュン・バードがリングインする。ジュンは翼をイメージさせる模様がデザインされた赤のパンタロンを着用していた。ポルゴはムエタイパンツを穿いていた。一方青コーナーにデンジャラスブラザーズがコールされるとまず大柄のゴトーがリングインした。ゴトーは黄色のレスリングタイツを着用しており、無精ヒゲとぼさぼさ頭だった。会場の女性達は一瞬、視線を背けていた。次にポルゴのライバルを自称するオータニがリングインする。彼は白いＴシャツに青のジーンズ、右手には鎖鎌を持っていた。

ゴングが鳴る。

まずリングに残ろうとするポルゴを押し止めて、ジュンが先鋒を買って出た。相手は大柄なゴトーだった。ゴトーは力任せのタックル、いや体当たりから一気にコーナーまでジュンを押し込む。その後、強烈な張り手でジュンを蜂の巣にする。ジュンが膝からガクっと崩れ落ちた。なおも強烈なストンピングでジュンを踏みつけるゴトー。一瞬、ジュンの両目が光ると、下からゴトーの足首を取って一気に捻った。足首固めだ。完全に決まった

アンクルホールドにゴトーはギブアップを余儀なくされた。

すかさずオータニがリングインする。起き上がりかけたジュンに向かい、オータニは口から炎を吐いた。強烈なビックファイヤーだ。すかさずジュンはサイドステップで今の火炎放射をかわすと、そのまま転がるように赤コーナーでポルゴとのタッチを成功させた。

「ポルゴよ。ワシは今までお主のせいで服役を余儀なくされてきた。ワシこそがジパング一、いや地球一のサイバー探偵じゃ。お主には死んでもらう。」

確かにギャラクシーで対戦相手を殺すことは反則で失格だったが、リング上の事故として法律上の責任は免れることが出来るという付帯条件がついていた。

オータニは遮二無二鎖鎌を振り回す。ポルゴは鎌の柄の部分を一瞬で摑むと、喉元への逆水平チョップ一発でオータニを失神に追いやった。両者のくぐってきた修羅場の差が出た一戦だった。

第一試合に決着がつくと、会場の興奮が冷めやらぬまま、すぐに第二試合がコールされた。赤コーナーに西郷詩郎とマリア・ハロルドのネオ・オールドアーツが入場する。ネオ・オールドアーツは両者共に柔道着で統一していた。新しい古武術、それが彼らの標榜するファイトスタイルだ。

一方、青コーナーにはキラーラブマシンズがコールされた。流行の女性ユニットのラブマシンサンバとともに、まずは小柄のキラーマシン・モンキー、次に大柄なキラーマシン・ゴリラがリングインする。キラーラブマシンズは今回、旧太陽系帝国の生き残りの科学者によって大幅にチューンナップされていた。黒光りするボディ。

キラーマシン・ゴリラがリングに残ると、真っ直ぐマリアを指差して対戦相手に指定した。

「懲りないヒトね。いや、ただのロボットか...」

マリアは挑発に乗った。

すかさずボディタックルでマリアに抱きつくキラーマシン・ゴリラ。マリアはされる

がままにコーナーまで追い詰められた。強引にマリアを抱えあげるゴリラ。高角度フロントスープレックスの体勢に入った瞬間、青コーナーからモンキーが奇跡的な跳躍力でマリアの首に抱きつく。そのままスィングＤＤＴとフロントスープレックスのツープラトン、ラブマシンフォールズが決まった。モンキーはそのまま袈裟固めにマリアを捕らえ、ゴリラはスープレックスからマウントポジションに移行していた。

赤コーナーの西郷は微動だにしなかった。

「これで気が済んだかしら...いやロボットに感情はないのよね。」

　マリアは下で囁くと、空いているほうの左腕でモンキーを吹き飛ばした。その後、柔軟な体のバネを生かしてブリッジすると、一気に上に載っていたゴリラを吹き飛ばした。

「...今回は雑魚と遊んでいるヒマは無いの。これでトドメよ。」

　まずバックハンドでモンキーのこめかみを打ち付けるとそのまま KO した。次にマリアは右腕を弧の軌道で後ろまで引くと、一気に前に突き出した。掌から小さい蒼い気の塊が見えた。野球の球のように小さな気弾がゴリラの鳩尾に当たった瞬間、会場全体が強烈な蒼い光に包まれた。次の瞬間、大の字で倒れているキラーマシン・ゴリラの姿があった。マリア・ハロルドの新必殺技、激風拳が決まった。あっさりネオ・オールドアーツが勝利を決めた瞬間だ。

第 94 章法皇の罠

　第二試合の興奮冷めやらぬまま、第三試合のビューティクイーンズ VS マムシファイターズが行われようとしていた。

リングアナがまずビューティクイーンズをコールする。重量級超実力派レスラーのエリカと愛弟子のペイントレスラー、ブラッティー桜がリングインする。エリカは素顔、ブラッティー桜は白塗りのペイントだ。ブラッティー桜はもはやお馴染みの馬の生肉を食べるパォーマンスを展開した上で、さらにリング上で赤の毒霧を吐いていた。リング下の子供が早くも泣き出していた。

一方、マムシファイターズがコールされると蛇の穴の正統派格闘レスラー、ジョー・ヨージ 12 世がリングインする。ヨージはリング上でロープとロープの間に隙間を作って、ビリー・ローレンス会長のリングインをサポートした。ビリー・ローレンスは白髪で、かつての正統派ランカシャースタイルを継承していた。もはや生きながら伝説と化しているビリー・ローレンスのリングインで、会場は一気に沸きあがる。

流行るブラッティー桜を無理矢理なだめると、まずエリカが先鋒を引き受けた。一方、ビリー・ローレンスは無言でリングに残ると、眼でヨージにコーナーで待機するよう指示を出していた。

ビリー・ローレンスが構える。既に引退後 10 年以上が経過しており、誰も彼がリングで再び戦うことを予想だにしていなかった。既に顔は老人そのものだが、全身の筋肉は生き生きと躍動している。一方、グレート・アジア 13 世の失踪後、事実上プロレス界の最高実力者の地位に目されているエリカは、冷静かつ情熱的にローレンスの首を狙っていた。

ゴングが鳴る！

すかさずタックルに来たローレンス。エリカは両足を引いて今のタックルを潰そうとした。だが、ローレンスは一瞬のスキを衝き、両足を引いたエリカに抱きつき、無理矢理寝技に引きずり込む。ガードポジションの体勢の相手に上から強引にパンチを出そうとするエリカ。だが、ローレンス会長は相手がパンチを出した一瞬のスキに相手の右腕を取ると、下からの逆十字であっさりとエリカから一本を奪ってしまった。

騒然とする会場。

退場したエリカと交代で、興奮したブラッティー桜がリングインする。桜の右腕には凶器のチェーンがしっかりと握られていた。コーナーから右腕を突き出し、タッチを要求するヨージ 12 世。だが、ローレンス会長は右手を振りタッチを拒んだ。ブラッティー桜はチェーンを右腕に巻いて、力任せにラリアットを放つ。誰もが今の一撃で老体のローレンスのＫＯを予期した瞬間、芸術的な脇固めでブラッティー桜を捕らえたローレンス会長の姿があった。何も出来ないまま、ブラッティー桜はギブアップを余儀なくされた。

この世界にまだミスター東郷や西郷詩郎に匹敵する使い手が生きていることをローレンス会長は我が身で誇示した。

休む間もなく、第四試合の銀河帝国チーム VS ブラックホールズが始まることがリングアナより告げられる。

まず、銀河帝国チームが赤コーナーにコールを受けていた。会場総立ちの元で、厳粛にオーケストラにより銀河帝国の国歌が演奏される。まず長身・黒髪の女性ニコラス・トルーマンがリングインした後、圧倒的な威厳で、３代目の銀河の大王がリングインした。もともとマラソンランナーの体型をしていた大王は、今回に備えてさらに身体を絞ってきていた。彼の身体にはもはや実用的な筋肉以外は全て削ぎ落とされていた。

会場の照明が一気に落とされると、ブラックホールズがコールされた。黒いマスクで顔を隠したブラック・アニマルとブラック・ホークがリングインする。リングインしたブラックホールズは一気にマスクを外した。ブラック・ホークの二本の短い角とブラック・アニマルの第三の眼が光っていた。

ブラック・アニマルがこう宣言した。

「悪いが、このギャラクシーの舞台で、お前らを合法的に血祭りにする。ルール上対戦相手を殺した場合は反則負けだが、法律上は試合中の事故には免責規定がある。悪いが、貴様らは今日が命日だ。」

ゴングが鳴るのを待たずに二人で銀河の大王に殴りかかるブラックホールズ。ブラック・アニマルは見えない打撃で大王を攻撃し、ブラック・ホークはラリアット気味のパンチで大王のこめかみを打ち付けていた。

「お主たち、本当にその程度の実力なのか？ 蚊より力が無い奴らよ。」

大王は言い終わると、右のパンチ一発でブラック・アニマルを吹き飛ばした。その後、ラリアットに来たブラック・ホークに強烈な左ローキックでダウンを奪った。

「チャンスをやろう。一発だけお主らの得意技を受けてやろう。」

大王はガードを完全に下ろしていた。ブラック・アニマルはよろよろと立ち上がると、大王のバックを取り、そのまま肩車に抱え上げた。その直後、コーナーからブラック・ホークが右肘を大きく曲げたまま、アックスボンバーの体勢で大王に殴りかかった。ツープラトン技のブラックインパクトだ。

大王はアックスボンバーが当たる瞬間、背中の翼で飛び上がって誤爆を誘う。ブラック・ホークはアックスボンバーをブラック・アニマルに同士討ちした。空から降りてきた大王は自由落下を利用して、ブラック・ホークの首に両足を掛け、フランケンシュタイナーで投げ飛ばした。その後、返す刀で片膝立ちのブラック・アニマルに跳び膝蹴りを見舞った。

変形シャイニング・ウィザードだ。大王１人の活躍により、ブラックホールズはＫＯ負けしてしまった。

余裕の表情で勝者のコールを受ける銀河の大王。しかし、次の瞬間、リングアナはこう告げだ。

「続きまして、本日のメインイベント、第４試合の勝者銀河帝国チーム VS ムーンルネッ

サンズを行います。それでは、ムーンルネッサンズの入場です。」

　月世界教のメインテーマ曲「赤い三日月」が演奏されると、まず月世界の将軍、ジェラール・ボルドーがリングインする。四肢が長いスキンヘッドの白人だ。ボルドーがリングで空手着を脱ぐと背中の虎の刺青と胸元の赤い三日月のマークが露出した。さらに「神秘の新月」が演奏されると月世界の法王、ネオ・ルヴェルチュールが入場する。ネオ・ルヴェルチュールは混血人種で黒い肌に青い眼をしていた。彼が法衣を脱ぎ捨てた瞬間、極東流カラテの胴着が姿を現した。胸元には赤い三日月のマークだ。

　銀河帝国チームの参謀ニコラス・トルーマンが場外レフリーに連続試合に対する抗議を行った。ボルドーが場外レフリーに一瞥した瞬間、レフリーはこう答えた。

「試合の円滑な進行上、休憩なしの連続試合は止むを得ません。レフリーにこれ以上意見がある場合は、失格とします。」

　大王はニコラスに目で合図をすると、彼女は抗議を止め、連続試合を引き受けることにした。まず、リングにはボルドーとニコラスが残った。

　ゴングが鳴った。

　凄まじい勢いで長身のニコラスがボルドーに蹴りかかる。ボルドーは今の右ミドルを間一髪でかわした。大振りの左フックもボルドーは眼前でかわしていた。ニコラスが右の前蹴りで間合いを取ろうとした瞬間だった。ボルドーは右へサイドステップを行い、一瞬ネコだましの要領で左手の指をパチリと叩いた。すかさず、ボルドーは右のボディブローを放つとバックステップで間合いを取った。

　ニコラスはボルドーが下がったことに気付かず、そのままの間合いでパンチを連打していた。様子がおかしい。ボルドーが右手を一瞬上に上げ、サインのような動作をした。次の瞬間、ニコラスは自分で自分の顔を殴っていた。そのまま涙を流してうずくまるニコラス。

ボルドーの気を応用した精神攻撃が完全に決まっていた。ニコラスは脳裏で目の前にいるもう1人の自分の身体に炎が移り、燃え盛っている幻影を見せられていた。自らの眼で自らの死を目撃すると言う恐怖を、幻覚とは言え味わっていた。

ボルドーは両手を動かしながら、さらにニコラスの脳裏に直接気で幻影を見せていた。

「許さんっ！」

強烈な掛け声と共に、銀河の大王がコーナーからミサイルキックでボルドーを直撃した。

ボルドーは今の攻撃を不意に食らい、リングアウトした。リング外でボルドーは気絶していたが、直もニコラスは長い黒髪を震わせながら、泣き止むことはなかった。

「月世界人よ。貴様らはどこまで汚い手を使うのじゃ。ヒトの心を直接攻撃するとは。月世界の法王、ワシと勝負せい！」

待っていましたとばかりに青い目のネオ・ルヴェルチュールがリングインする。法皇は目の前で両手をクロスすると、一気に構える。銀河の大王は凄まじい速さのステップで一気に間合いを詰めると、強烈な右のボディアッパーを放った。

だが、今の一撃は法皇の身体に届くことはなかった。間一髪でパンチは止まっていた。

体が硬直した大王に向かって、法皇は右の拳をゆっくりと腰まで引いて溜めた。いわゆる騎馬立ちという実戦ではもっともありえない状態から、正拳突きを放った。さらに、右の拳と入れ違いに左の拳を放つ。的確に大王の鳩尾を打ち抜いていた。大王は今のパンチで倒れることすら許されなかった。ネオ・ルヴェルチュールは気で大王の精神と身体に入り込むと、まずはその動きを完全に中から封じ込んでいた。騎馬立ちの体勢のまま10発以上正拳突きを放った法皇は、左の拳を右肩まで持ってくると、一気に斜め前に

振り下ろした。

今の下段払いの動作と共に、大王は膝から崩れ落ちたのだった。

ゴングが鳴った。法皇は月世界教徒に向かいマイクアピールを行った。

「親愛なる月世界の諸君。私は今、君たちを代表して、わが手で銀河帝国のトップを打ち倒した。つまり、月世界が銀河帝国に勝利したといっても過言ではない。月世界人は神から選ばれた存在だ。例え銀河の大王と云えども、唯一正しい月世界の法を司る私の敵ではない。我らが月世界に栄光あれ！！」

強烈なアピールと共に、会場の月世界人から大歓声が起こっている。会場の月世界人は、彼らがコントロールされているのと同じ手法で銀河の大王が倒されたことに気付かなかった。

目前の「奇跡」の前に、月世界の教えが最高かつ最善の美であることを信じきっていたのだった。月世界人たちは己が正統性と顕示された力と甘美な言葉に酔いしれていたのだ。いつかこのツケを支払う時が来るとは知らずに。

第 95 章 妖術

新世紀第４回キングオヴギャラクシー準決勝が幕を切ろうとしていた。まず青コーナーにポルゴとジュン・バードのフェニックスエヴォリューションズが入場する。ポルゴ、ジュンともに白のパンタロンに赤の鳳凰の羽の刺繍をしていた。

和太鼓のドン、ドンという音共に、不朽の名曲「津軽三味線冬景色」が会場に鳴り響く。西郷詩郎とマリア・ハロルドのネオ・オールドアーツが入場する。両者共に白い柔道着に黒帯で統一している。柔道着はグラウンド仕様になっており、下穿きは膝まで、ジャケットは肘までの長さで、相手に摑まれにくくかつ動きやすいという実用的なものだった。ポルゴの表情に緊張が走る。地球圏最高の使い手二人を同時に相手にしなければならない。緊張したポルゴに気付いたジュンが先鋒を買って出る。

一方の相手はマリア・ハロルドだ。

ジュンはこのレベルの相手に見せ技のフェニックスライジングやフェニックスアンジャスティスが通用しないことをよく悟っていた。鶴足立ちの構えから、右足で前蹴りを上中下段に打ち分けてマリアを攻撃する。マリアは寸前で全てをブロックしていた。マリアが一歩踏み込んで右のミドルを蹴ろうとした瞬間だ。

ジュンは左腕を下げて今のキックを受ける準備をしながら、一瞬のスキをついてマリアのバックを奪った。そのまま抱きつくようにバックドロップを決めると、マウントから肘打ちで、容赦なく女性のマリアの顔面を打ちつけていた。

マ　リアは目をつぶる事もなく、左手をジュンの喉元に押し当ててブリッジすることで今のマウントを外した。一瞬の逆エビでマウントを抜けるマリア。

ジュンはグラウンドの攻防を捨てるとスタンドを相手に要求した。

マリアは左右の掌で弧を描くと、気弾が二発ジュン・バードに向けて放たれた。ジュンは今の気弾をジャンプで飛び跳ねると、ケリでラッシュを掛けた。マリアがケリをキャッチして投げで返そうとした瞬間、ジュンは自分を掴んできたマリアの左腕を両足で挟み込み、一気に飛び付き逆十字固めを掛けてきた。マリア・ハロルドは冷静に今の攻撃に対処し、ポイントを外しながら相手を引き上げて、一気に頭上まで持ち上げた。

そのままパワーボムの体勢にマリアは入った。

　ジュンはマリアに抱えあげられたまま、両足でマリアの頭を挟み込むと、反動を利用して後方に回転した。強烈なフランケンシュタイナーが決まる。そのまま回転を続けて、マリアを道連れにジュンはリングアウトした。リングから落ちる瞬間、ジュンはマリアの頭がリング下に突き刺さるよう計算して膝を絞った。マリアは落ちながら、ジュンにもダメージが分散する様に上手く体重移動を行った。

　両者ノックアウトの裁定が下される。

　残るポルゴと西郷詩郎がリングインする。

「パープルパンサーよ。いつぞやの借りはここで返させてもらうぞ。」

　西郷は一足跳びでステップを踏む。ポルゴが反射的に右のジャブを打った瞬間、西郷はポルゴの右腕を掴むと、一本背負い崩れの山嵐でポルゴを頭から投げ落とした。マットに突き刺さったポルゴを見ると、西郷詩郎はリングを後にした。

　ダウンカウントが続けられたが、ポルゴが起き上がることはなかった。西郷がマリアを抱いて控え室に戻った時には、ノックアウト勝ちがコールされていた。ギャラクシーにはリングアウトのルールはなかった。

　準決勝第二試合が始まる。マムシファイターズがコールされると、ビリー・ローレンス会長とジョー・ヨージ 12 世がリングインする。次に月世界交響曲とともにムーンルネッサンズが入場する。月世界の将軍ジェラール・ボルドーがまず入場した後、会場の月世界教徒たちが総立ちの状態で、法皇ネオ・ルヴェルチュールがリングインした。

　白髪のローレンス会長がリングに残ると、対戦相手にボルドーを指名した。

「いつぞやの借りは返させてもらうぞ。卑怯な月兎め。」

ローレンス会長はクラシックレスリングスタイルに腰を落として構えた。キックのような相手の打撃にはもっとも無謀な構えだったが、瞬間の見切りからすぐにタックルが狙えるという玄人好みの構えだった。一方のボルドーは左のローを空振った後、一気に片足タックルでローレンス会長の懐に飛び込んだ。ボルドーは今の動作の最中に気でローレンスの心のスキを突こうとした。しかし、ローレンスの心には微塵の邪心も弱点もなかった。反射的な動作でタックルを潰したローレンスは相手のバックを取ると、一気に左腕をボルドーの首に廻し、右腕でボルドーの右腕を制して、チキンウィングチョークスリーパーホールドの体勢に入った。ボルドーは一気に白目を向いて倒れてしまった。

すかさず法皇がリングインする。法皇は今の攻防でローレンスの実力を見抜くと、ヨージ 12 世の方へ眼を向けた。一瞬のスキでヨージの心をコントロールすることに成功した法皇。ヨージはリングインすると、一気に白目を向いてローレンスに襲い掛かる。

愛弟子から攻撃を受けたローレンス会長は、反撃をするということが出来なかった。うすうす法皇が妖術を使って弟子の心を支配していることはわかったが、法皇はコーナーギリギリまで下がって、ヨージの攻撃を見守っていた。

法皇が右目を軽く瞑り指示を送った瞬間、強烈な右のフックをヨージは放ち、ローレンスはノックダウンした。

法皇はさらに強力な気を送り、ヨージの脳裏に悪夢を見させていた。経営していた法律事務所が倒産した時の記憶をヨージは思い出すと、そのまま魂が抜けたかのようにリングに座り込んだ。

法皇はさらに月世界の呪文を唱えると、ヨージ 12 世はリングに大の字になってしまった。人の心を支配し、対戦相手に同士討ちをさせる。圧倒的なムーンルネッサンズの特殊能力だ。

第 96 章 逆襲

ついにギャラクシーの決勝が始まろうとしていた。ポルゴ、銀河の大王といった実力者は既に脱落しており、決勝まで残ったのは西郷詩郎とマリア・ハロルドのネオ・オールドアーツと月世界の将軍ジェラール・ボルドーと法皇ネオ・ルヴェルチュールのムーンルネッサンズだ。

リングが暗転して和太鼓の轟音が響くと津軽三味線冬景色とともに西郷詩郎とマリア・ハロルドが入場する。彼らが青コーナーに着くと、次に会場の月面人総立ちの下、月世界交響曲とともにジェラール・ボルドーとネオ・ルヴェルチュールが入場した。西郷は無言で先陣を買って出るという意思表示をした。しかし、マリアは西郷の身体をコーナーまで押し戻すと、対戦相手にボルドーを指名したのだった。

ボルドーのハゲ頭が会場のライトを反射して妖しく輝いていた。一方、マリアはウェーブががった銀髪をたなびかせながら、アップライトに構えていた。

ゴングが鳴る。

ボルドーは得意の精神操作術をマリアに試みた。一瞬、マリアの眼付きが変わったかに思える。ボルドーは気のオーラでマリアの脳に幻影を見せようとした。ボルドーはリング上でうろたえはじめた。

マリア・ハロルドは試合開始前から気で見えないバリアを張ると、ボルドーが精神攻撃の技を使った瞬間、ボルドーのオーラを彼自身に跳ね返したのだった。ボルドーは、自らの技で自らを苦しめていた。彼の脳裏には三人の妻から同時に離婚届にサインすることを要求され、おまけに一生働いても支払うことは不可能な額の慰謝料を請求されるという幻影を見ていた。

「トドメよ。とっておきをプレゼントしてあげる。」

マリア・ハロルドは右手の先に全身のオーラを集中するとボールを放り投げるように気弾を放った。完全に幻影に惑わされていたボルドーは今の気弾の直撃を受けると、そのままロープまで追いやられた。次の瞬間、会場全体が輝くほどの爆発が起こり、ボルドーは完全にダウンした。激風拳が決まった。

マリアは西郷とタッチを成功すると、ムーンルネッサンズは法皇ネオ・ルヴェルチュールがリングに残っていた。

法皇は両手をクロスしてサインを出すと、呪文を唱えながら西郷の精神を支配しようとした。

無言で間合いを詰める西郷詩郎。法皇は尚も声を張り上げて呪文を唱えていた。西郷の右ストレートが法皇のアゴにヒットした。尚も西郷は踏み込み、左フックを放つ。法皇はこめかみを打たれ、よろめいた。西郷はルヴェルチュールを軽く摑むと、左の出足払いで法皇を投げ飛ばした。

倒れた法皇の頭の近くで西郷はズドンと足をマットに叩き落した。今の足が頭に当たれば、勝負はついている。それが全てということらしい。西郷は倒れている法皇の頭上から彼を見下ろしていた。ギブアップするなら今と眼で無言の合図を行っている。法皇は下からチャンスを探っていた。自分にトドメを刺そうとすらしない相手。西郷に妖術による精神支配が通用しないなら...

法皇は自分の持てる気のオーラと能力を全てコーナーに入るマリア・ハロルドに向けて放った。もはや勝つためには同士討ちを誘うしかない。

例によって強力なバリアを張っていたマリアは法皇の気のオーラを跳ね返すと、自分のオーラも加えて法皇に送り返した。

法皇は自らの技で、狂信徒達に反乱を起され、焼き討ちにされる幻影を見せられていた。ダウンカウントが始まった。

もういいだろうと西郷は言い残すと、カウントが終わる前にリングを後にした。ムーンルネッサンズのＫＯ負けで試合は決着がついた。

第 97 章 雲隠

上には上がいるという事実と、月世界教の支配者達の権威の失墜を目にした俺は、再び地球圏に戻った。久しぶりに手土産の焼酎を持って、ミスター東郷の自宅を訪ねてみることにした。

俺は東郷師範が既に老衰で歩くことすらままならないことを知ってはいたが、酒と女と煙草をこよなく愛するジイサンのことだ。とっておきの金星焼酎を見せれば、少しくらいは元気を取り戻すはずだ。

電話もせずに駆けつけたミスター東郷の自宅はひっそりと静まり返っていた。和風の屋敷の玄関の扉を開けて、ポルゴです、お邪魔しますと言って中に入る。

人の気配がない、そんな気がした。

俺は迷わず東郷師範がいるはずの寝室の前まで行くとドアをノックした。

―はい。

迷わず扉を開けて師範の寝室の中に入ると、そこにはベッドに横たわっている東郷師範と、周りでイスに座って泣いている東郷夫人とレイナの姿があった。

―パパは死んじゃったのよ。ちょっと前に。ポルゴさんの名前をひたすら呼んでいたわ。私たちがポルゴさんはいま月にいるからといっても聞かなくて。肝臓ガンと肺ガンが全身に転移して、息も出来ないまま苦しんで死んでいったわ。

俺は東郷師範の亡骸をじっと見詰めた。嘘だろっ！ そう叫びたかったが、東郷夫人とレイナの顔がこの現実を雄弁に語っていた。俺は両目から涙があふれそうだったが、必死にこらえた。ここで俺が泣き叫べば、東郷夫人とレイナも一緒につられて際限なく泣き叫び続けるだろう。

胸元で組まれている東郷師範の手に眼をやった。指先の爪は真っ黒でもう、血が通っていないことがよくわかった。

顔だけ見ればまだ生きているような感じだ。今にも俺に返事をしてくれそうだ。でも、もう動かない彼の指先が全てを語っていた。

―葬儀の手配は俺が引き受けます。ちょっと外で煙草でも吸ってきます。

俺はそう言い終えると、東郷師範の寝室を出て、そのまま廊下を通り玄関から外に出た。俺は今まで煙草を吸った事もなければ、吸いたいとも思わなかった。ただ、口実が必要だった。

猛烈に 1 人になりたかったが、俺ははじめから 1 人だったのかもしれない。

青春時代からの東郷師範との思い出が脳裏を過ぎる。辛かった修行時代。初めて師範から手渡された黒帯。一緒に参加したキングオヴギャラクシー。結局、レイナと俺が結

ばれることはなかったな、そんなことを考えていた。

　玄関から誰か出てきた。

―ポルゴさん、どうしたの？ 眼がちょっと充血しているわよ。

　レイナが俺の様子を心配して声を掛けてくれた。本来、気を遣うのは俺の方のはずだ。

―いや、今日は徹夜明けでね。目薬でも点そうかな。

　俺は胸のポケットから目薬を取り出すと、眼に点すふりをした。そんなものを点さなくても、もう俺の瞳は濡れていた。

　俺はアイウォッチで葬儀屋や東郷師範の友人・知人に連絡を取ると、師範が逝去した旨と葬儀の段取り、および告知を行った。

　数日後の仏滅の日を選んで、通夜と告別式を行った。先代の師範の娘である源夫人と孫のヒロシ少年も葬儀に駆けつけてくれた。俺はパープルパンサーのレプリカのマスクを懐から取り出すと、ヒロシ少年にこう告げた。パープルパンサーの正体は、東郷のじいちゃんだったんだぜ。不思議な魔法を使って若返り、君の命を救うために闘っていたんだ。このマスクはじいちゃんの形見だ。大事に取って置いてくれよな。

　ヒロシ少年は仏になってしまった東郷師範の死に顔と、圧倒的な強さを見せてくれたパープルパンサーのマスクを心の中で見比べながら、うんとうなずいた。

　死んだ東郷師範の顔には、若さはないが、断固たる強さと信念が浮かんでいるように見えた。

第 98 章 講和

地球連合政府と月世界は講和条約を締結し、月世界の独立を承認した。これで晴れて月世界は地球の植民地の地位から、太陽系連合を構成する一独立政府の地位を獲得した。

マインドコントロールによる支配が問題になった月世界法皇ネオ・ルヴェルチュールは退位し、次世代に法皇の地位を譲った。月世界軍の将軍ジェラール・ボルドーはギャラクシーでの敗北により月世界軍を追放され、今はただのバウンサー兼闇格闘家だ。

相変わらず月世界教徒による自爆テロは減少する気配がなかったが、月世界教徒の背後に根深く残っている貧困問題・民族差別問題に気付いた地球連合政府は、月世界への復興技術支援と文化教育政策の重視を主要政策に掲げた。

暴力には暴力を、ではなく、地球連合政府議会が出した結論は、対話による相互理解と共生への道、というキャッチフレーズだった。どこかで聞いたことのある言い回しだが、一番これが確実な方法かもしれないと俺は思っていた。

今回のキングオヴギャラクシーでは、目ぼしい活躍すら出来なかった。さらに月から地球へ戻ってきた俺には、東郷師範の死という悲しい出来事が待っていた。せめてあと数日早く月から地球圏に戻ることが出来たなら、師範にお別れの言葉を言うことが出来たかもしれなかった。

最近ユメミは株の運用や金星での銀河ワニの養殖事業の経営だけではなく、太陽系各地に学校法人を作る準備をしていた。地球人類は宇宙で生活するようになってから、月、火星、金星、はるか冥王星にまで生活圏を広げてきた。惑星間戦争という最悪の結果を避け、戦災孤児をこれ以上生み出さないためには、まずは文化教育による相互理解を進めると同時に貧困撲滅のために誰にでも学校に行ける環境を整えるべきという結論に彼女は達した。

株の運用と金星での事業による豊富な資金で、出身惑星、民族、言語を問わず、誰もが学べる民間の学校システムを作りたいと彼女は決意したのだ。

反火星パルチザン闘争を経て、サイバー探偵として日の当たらない裏の世界を生きてきた俺は、人様に学校教育を受けるための手助けをするという大反れたことを出来る顔ではなかった。

かつて兄ワカマツが残した遺産を元に、ワカマツ商会を立ち上げたユメミは、もう戦争で家族を失う人を作りたくないと願い、自分の出来るところから実行に移すことにした。

第 99 章 再び

西郷詩郎は東郷師範の訃報を聞いて、居ても立ってもいられずにわざわざ東北地方からこのトキオまで葬儀に駆けつけていた。彼はかつて東郷師範の師匠である先代の源師範を直接試合とは言え、殺めたのだ。それは試合中の事故として処理されたし、どちらかが生きるか死ぬかというレベルの試合だった。彼が倒され、命を奪われていたとしてもおかしくはなかった。そして、東郷師範の葬儀に源師範の親族が駆けつけることもよくわかっていた。

源師範、そして東郷師範共に、彼にとっての最強のライバルだった。そして、彼らの業と魂を唯一受け継ぐ男、アルセーヌ・ポルゴ。人の命は有限ではあるが、その心と熱い思いは人から人へと受け継がれてゆく。それは魂といってもいいだろう。両目を揺るがせながら、涙を必死にこらえるポルゴ。もう、東郷師範の遺志を継ぐものはここにしかいない。

トキオはジパング地方の首都であり、東郷師範はジパング地方特有のやり方で見送られようとしていた。焼香を済ませ、東郷師範の遺族に頭を下げると、彼は東郷師範の自宅を後にした。

帰り様に制服姿のマリア・ハロルドとすれ違う。高校生にしておそらく銀河最強の座にもっとも近いといって過言ではない女だった。彼はマリアに軽く眼で合図をすると、また無言で歩き始めた。

源師範、東郷師範という高名な武道家が死すべき定めを逃れられなかったように、自分にもいつかは死ぬべき時が来る。それはいつかもわからなかった。時はこうして流れているわけだし、常にカウントダウンの針は止むことはない。果たして私は彼らを越えられる時が来るのだろうか？

時　の流れと同じように、ただ進むしかなかった。たとえ目標がはるか遠くで見えず、自分が歩んでいる道が正しいかすらわからなかったとしても。

そんな思いを秘めつつ、西郷詩郎はトキオを後にした。彼の胸には重い喪失感が残っていた。

第 100 章 命

俺は東郷師範が亡くなってから、ふと考え込むことが多くなった。妻のユメミは今まで肉親との辛い別れを全て経験してきたせいか、東郷師範の死に対しても前向きに捉えて、気持ちを切り替えることが出来たようだ。

もし、東郷師範の死の前に少しでも俺に時間と余裕があったら、いろいろ東郷師範から聞きたかった。この年になって、人から教わりたいというのはおかしかったが、まだ俺は東郷師範から教わっていないことがたくさんあるような気がした。もちろん、東郷師範の死そのものが、俺にとっては彼から受けることが出来た最後の教えなのだろう。俺は火星人との戦争で両親を失ったが、東郷師範の死は、父親が死んだことのように辛く感じられた。

　いっそのこと、一晩中飲み明かしてこの辛さを忘れたいと思いつつ、酒に頼って悲しみを和らげるということも、なぜか許せない気がしていた。もっと深い哀しみだ。

　何となく生活の全てに張りが持てなくなっていた。ギャラクシーでも敗北したし、何もいいことはなかった。今の状態だったら、街のチンピラや不良にすら負けそうな気力と体力だ。

　今さら勤め人になることは出来なかったが、孤独と自由が付き物の探偵業を生業にしている自分に少し嫌気がさしていた。決まった時間にどこかに出勤して、決まった時間に退社する。それだったら、自分とひたすらに向き合い続けるストィックな作業からも解放されるのだろう。

　金星への短期出張から今帰ってきたユメミは、いつになく嬉しそうだった。彼女は俺と話す時はいつもニコニコしているが、今日は何か特別なことがあったようだ。

「何だよ。何かいいことでもあったのかい？」

「そう。当ててみて。」

「ワニ革のハンドバックが売れたとか？　予想外の株のキャピタルゲインとか？」

「違うわ。もっと嬉しいこと。おカネの話じゃないわ。」

「何か顔の血色がいいな。それと関係あるのか？」

「実は出来たのよ。私のお腹の中に。」

「出来たって？」

「ベイビーよ。今、２ヶ月目。」

失うものもあれば、かならず得るものもある。あと半年もすれば、一度は天涯孤独となった彼女に血の繋がった肉親が増える。

俺はひさしぶりの朗報に眼を輝かせ、やる気を一気に取り戻すとユメミにこう答えた。

「あぁ、やっと俺も人の親になるのか。ただ自分の子供というだけでなく、最愛の女（ ひと ）との子供だから、より嬉しいものだ。ひさびさに一丁危ない仕事で荒稼ぎでもするかな...今日は俺がご馳走を用意するよ。」

いつもはメシを作るのは妻の担当で、俺は掃除と洗濯の担当だったが、ひさしぶりに俺は妻にとっておきの手料理を作ることにした。単車を飛ばしてマーケットでドデカい魚を仕入れると一気に下ろして刺身にした。得意の豚汁と大根の味噌煮を手際よく用意した。テーブルにあふれんばかりのご馳走を用意した俺は、ユメミと俺のグラスに赤のワインを注ぐとこう言った。

「新しい命に乾杯！」

全ては移ろいゆくが、哀しみだけが人生ではないさ。そんなことを思い出した俺は、新たな一歩を踏み出すことを固く心に誓った。ある春の夕暮れのことだ。

エピローグ

エピローグ

－マスター、ネコサシ頼む。

－俺も、マタタビ大盛りで。

カウンターの男たちが、しきりに尻尾を満足そうに揺らしながら、カツオの刺身のマタタビ掛け、通称ネコサシを食べていた。ハシもフォークも使わず、素手で食べていた。両手の肉球が愛らしい。

－マスター、こっちもお子様ランチ２つ。

－すいません、お子様ランチはお子様専用です。奥さんは、ダメですよ。

－ウチの息子元気だから、一度に二人前は食べますの。

ネコ族のマスターは、軽くミルクシェイクをシェイクしながら、ポルゴ夫人にこう言った。

－じゃあ、特別サービスってことで、お子様ランチ二つ。チャーハンの国旗はもちろん銀河帝国のマーク入りです。ハイっ。お待たせ。

－案外、早いのね。

－当店は、お客様第一をモットーにしております。お客様をお待たせすることは決して致しません。

ジュニアが産まれてから２年後、ポルゴたちは３人で銀河帝国に旅行に来ていた。ここは銀河帝国の版図、ネコ族の惑星だ。バール兼レストランでは、仕事帰りのネコ族の男たちがスーツに尻尾という出で立ちで、ここの名物ネコサシを食べに来ていた。

－マスター、〆のダシ汁を頼む！

－ハイよ。熱いんで気をつけて。

ネコ族の男が、カツオ節ご飯にダシ汁を掛けて食べている。ネコ飯だ。

ポルゴは銀河の大王に会いに惑星サルバトーレに行っており、今日は別行動だった。

－やっと私も身内が出来て、天涯孤独を卒業ね。この惑星はネコばかりだけど、そこが妙な安心感があるわ。

マスターが話しかけて来た。

－お客さん達、見慣れない顔だね。モンキー族かい？

－いや、私は生粋のジパング人よ。モンキー族じゃないわ。失礼ね。ホモ・サピエンスよ。太陽系第３惑星、地球出身よ。

－あー、そうなんだ。道理で見慣れない顔だね。俺たちと違って、体に毛が生えていないし、顔にヒゲもない。おまけに尻尾もないと来ている。顔も俺たちみたいに三角じゃなくて、丸だしね。世界は広いんだね。

－アンタ達が特殊なんじゃないの？

一瞬、店中のネコ族全員がポルゴ夫人を見つめた。ポルゴ夫人はコホンと咳をつくと、周囲を見返してこう言った。

－じょ、冗談よ。進化の経路によって様々な種族の人間が共生している。それが、この銀河帝国でしょ。私も泡盛貰おうかしら。

ネコ族の惑星の特産物は泡盛だ。ポルゴ夫人はグラスの泡盛を一気に飲み干すと、息子に向かってこう言った。

－さぁ、ジュニアも早くジュース飲んで。そろそろホテルに帰るわよ。

火星人との抗争が終わり、月面人の反乱も終わった。全ての争いに終止符が打たれた太陽系。ポルゴ夫人は２度目の銀河帝国への旅行だった。昔、ポルゴに「兄貴の人生の責任取って」と言ったことを、夫人は今思い起こしていた。

－本当は兄貴じゃなくて、私の人生の責任取って、と言いたかったのかもしれない。

ひとは誰でも翼を持った鳥になることは出来ない。自分の与えられた環境でベストを尽

くすこと、それが最善だ。一度は全てを失ったかに見えた私も、また息子や夫という家族を手に入れることが出来た。

本当の自分の人生、自分で自分の責任を取れる人生は、実は今はじまったばかりだった。銀河のフロンティアで私は今自分の道を行こうとしている。もちろん頼りがいのある伴走者がいる。アイウォッチでポルゴを呼び出すと、夫人はこう言った。

－いつも有り難う。そしてこれからもよろしく。謝謝汝。いや、シェシェニン。

FINE.

あとがき

この作品は 2002 年から 2016 年以降までブログで連載していたものです。最初の作品名は『太陽系帝国危機一髪』でした。その後、『CYBER 探偵物語』というタイトルとの間で揺れた後、現在の『アルセーヌ・ポルゴ』というタイトルに決定しました。

主人公ポルゴの名前はデスマッチの帝王と呼ばれたあの方のリングネームにあやかって命名しました。最初はポルゴも「武器」を使ったファイトスタイルでしたが、徐々に素手で闘うスタイル、流派は源流古武術で、マスクを付けて闘う時は、U スタイルというファイトスタイルに変わってゆきました。後半に差し掛かるにつれて、パンサーの物語にストーリーはシフトしてゆきます。でも、物語の中心はいつもポルゴです。そして、ミス・ワカマツとポルゴの間には子供が出来て、成長をしてゆきます。

もともとシティー・ハンターや探偵物語といった探偵を主人公にしたニヒルな漫画や小説の影響やロバート・ハインラインの小説の影響を受けて書き始めたものです。

登場人物がプロレスラーをリスペクトして命名され、基本的に格闘（ キングオヴギャラクシー ）を通じて物語が進行するといった特徴があります。

どこが SF 小説なの、ぜんぶフィクションじゃんと突っ込まれることもあります。でもこの小説は 2002 年のスタート当時に「アイウォッチ」なる商品を登場させました。そして、同じコンセプトの商品は 2018 年には、筆者の腕時計型コンピュータとして左腕に巻き付いております。

ご一読、ありがとうございます。

今回紙媒体での出版を見据えて、100 章までで一旦内容をまとめ、残りの 30 章と特別読切は『アルセーヌ・ポルゴ II』と『アルセーヌ・ポルゴ特別篇』として独立させました。『アルセーヌ・ポルゴ特別篇』はついに紙媒体の本が amazon で大好評販売中です。

2024 年 5 月 15 日 夏木康志より

アルセーヌ・ポルゴ

著　　夏木康志

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社